真・恋姫無双～正義の味方～

山隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双～正義の味方～

【Ｎコード】
Ｎ７３５２Ｋ

【作者名】
山隼

【あらすじ】
封印指定を受け、世界と契約してもなお正義の味方を目指す士郎・・・
士郎を救う為に凛は宝石爺に平行世界への転送を頼むが、宝石爺は送る代わりに、正義の味方である士郎に依頼を出す。
亡くなったイリヤとの約束を守る為に、士郎の新しい戦いが始まる。

プロローグ（前書き）

今回が初投稿になります、山隼です。
他の方々の投稿を見て、自分も書いてみたくなり、投稿しました。
仕事の休憩時間に携帯でちまちま書いているので、遅筆になりますがよろしくお願いします。
内容は真・恋姫無双とＦａｔｅのクロスオーバーになります。
独自解釈、設定がありますので、苦手な方は回避するのをオススメします。

プロローグ

「はぁ・・・はぁ・・・」
荒い呼吸をしているのは衛宮士郎。封印指定になったお陰でここ数ヶ月ずっと逃走を続けてきた。ろくに食事も採らず、休まずに。

「何とか撹乱出来たけど、見つかるのも時間の問題か・・・」

そう呟いて、今体を休めさせている洞窟の入り口に目を向ける。
そこには静かに雪が降っていた。

「・・・イリヤが逝ったのもこんな雪の日だったな・・・」

イリヤが逝ったのはこんな雪が降る夜。封印指定を受ける前だった。

あの時と同じように、縁側に士郎とイリヤと並んで座っていた。
お互いに分かっている。イリヤがもう逝ってしまう事を。
ふとイリヤがシロウに話しかける。
「ねぇ・・・シロウ」

「どうした?」

「私まだキリツグに怨んでる事があるんだ。」

「・・それって、置いて行かれた事か？」

「ううん。それは死んであの世で会った時に、たっぷり文句言ってやるからいいんだ。私が怨んでるのはシロウの事。」

「俺？」

「うん。キリツグはシロウに正義の味方になる。ってゆう呪いをかけたから・・・」

「っ！・・・でもそれは！」

そう言って、士郎は少し怒った感じでイリヤの方を見ると、

「分かってる。その想いがシロウを支えてて、キリツグとの大事な約束だっていう事も。でも、そのせいでシロウは人を助ける為に、自分自身を犠牲にしてしまう。」

「・・・・・」

「だからね、私と約束して。キリツグと同じように。」

「どんな？」

「シロウの周りにいる人達の、シロウに対する想い。シロウに傷ついてほしくない。一緒にいてほしい。そういう想いを守って欲しいんだ。キリツグと約束した、正義の味方としていろんな人を助けるのは大事だよ。けど、私との約束も守ってね。シロウが傷つくと私が悲しいから。」

「分かった。絶対守るよ。イリヤとの約束、俺がカタチにしてみせるから。」

そういうと、イリヤの体がこっちに倒れてきてシロウの膝の上に頭を乗せる。
そのまま雪を見つめながら・・・イリヤは静かに目を閉じて、

「うん。じゃあ覚えてて。誰かを助ける時、士郎が死んじゃったりしたらダメなんだからね。」

そう言って士郎に頭を撫でられながら、
静かに息を引き取った・・・

意識を戻し、ふと見上げるとそこには見知った顔があった。

「遠坂か・・・」

「久しぶりね士郎。」
少し怒った感じで、しかし哀しそうな目をした凛が立っていた。

「イリヤとの話は聞いたわよ。約束を守って世界と契約しなかったのは良かったけど、封印指定されてるじゃない！」
後半少しヒートアップしながら凛は士郎に詰め寄る。

「ごめん遠坂。あんなに心配かけといて。」
士郎の魔術が協会にばれるのを防ごうと、凛はいろいろ手をまわしていたが、結局無駄になってしまった。
「仕方ないわよ、士郎の性格考えたらいつかはばれると思ってたし。」
「ふぅ・・・それで俺はどうなるんだ?」
そう言うと凛は
「協会の奴らなんかに士郎を渡すわけないでしょ!あんたには並行世界に行ってもらうわ。」
「並行世界って第2魔法の!?たどり着いたのか?」
「それはまだよ。師父に士郎の事をお願いしたら士郎に興味をもってね、少し頼み事があるって。」
「師父って!?まさか・・・」
すると凛の後から人が姿を現す。
「お前が切嗣の息子の士郎か。」
「そうですけど、あなたはまさか・・・」
驚いている士郎に凛が答える。
「そうよ。宝石翁キシュア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。」
なるほど確かにそれならば並行世界に行く事が出来る。
だが・・・

「頼み事とは一体？」

「うむ。今から行ってもらう世界に知り合いがおっての、少々厄介な事になっているようじゃから、手助けをして貰いたいんじゃ。」

「手助けですか。」

「うむ。このままだとその並行世界が無くなってしまうかもしれん。」

「っ！・・・」

士郎はかなり驚愕する。

それもそうだ。世界が丸々一つ無くなるなんて事、正義の味方として見過ごす訳にはいかない。

「分かりました。」

「よし。まずはこの銅鏡を持て。」

そう言ってゼルレッチは古びた銅鏡を士郎に渡す。

「わしの宝石剣で並行世界への道を開ける。そして目的の世界までは、その鏡が案内してくれるじゃろう。」

「ありがとうございます。」

士郎が礼を述べ、準備を始めると、

「士郎！」

「どうした、遠坂？」

涙を堪えている凛に呼びかけられ・・・

「イリヤと約束したんだから私ともしなさい！絶対あんた自身が幸せになるのよ！分かった！」

「ああ。心得た。俺も頑張るから、行ってきます」

そう言って綺麗な笑い顔を見せて宝石剣の、光の奔流に消えていく・・・

最後、全て消える前に凛が

「行ってらっしゃい・・・私が好きになった男なんだから、幸せにならなかったら酷いんだからね！」

と、ただ涙を流しながら見送った・・・

士郎の新しい物語が始まる。

大事な人達との約束を抱いて・・・

プロローグ（後書き）

とりあえずセイバールート後の士郎になります。

アーチャーの事は、自分が固有結界を発動させた時に気付きました。

外見は身長はアーチャーと同じ位で、髪と肌の色は高校の時と変わっていません。

とりあえず、士郎に戦争に参加してもらうのが大変ですね・・・

まぁその為にオリ化してもらいますが・・・

多少の矛盾は無視して下さるとありがたいです。

１－１　襄陽での出会い　（前書き）

予想以上に難しい・・・

士郎の所属する国はこの話で分かります。
でも殆どオリキャラになるから、真名決めたり、外見とか口調とかいろいろ大変・・・

1－1　襄陽での出会い

目が光に焼かれ、視界が真っ白になる。

「・・・っ」

目を閉じ、しばらくの間光を耐え、ゆっくりと目を開けると・・・

「ここは・・・？」

周りにはところどころに草が生えた茶色の荒野が広がり、遠くには縦に長い中国の古い絵にでてくるような山々が見えた。

「中国・・・になるのか？一応中国語はできるけど。」

正義の味方として世界中を飛び回っていた時に、言語が通じなければ守るべき人達に誤解される事があるので、一通りの言語はマスターしていた。

「とりあえずは人がいる所を探すか。宝石翁が言っていた協力者も気になるけど・・・」

士郎が転移してきた時に自分の持ち物を確認すると、幾つかの宝石と共に手紙がはいっており、手紙には

『お前を転移するのは連絡しておるから、向こうからアクセスが無い間は好きにするといい。後、トオサカからの宝石も渡しておく。魔力が入っているのもあるから、好きに使うとええ』

と言う内容のだった為、

「まずは情報収集と生活基盤の確保の方が先決だな。」

そう言って、視力を「強化」する。

すると遠くの方に建造物らしきものが見えたので、脚を「強化」して移動を始めた。

「ふぅ・・・」

軽く息をつき、目の前にある門を見上げる。

その門の上にはこう書かれていた。

「襄陽」

「襄陽って事はここは中国で間違いなさそうだな。でもこの城壁の作りからすると大分過去みたいだな。」

そう言って軽く城壁を触る。

材質は石。しかし所々隙間があったりして、お世辞にも技術が高いとは言えない。

「とりあえず入ってみるか。」

門兵に怪しまれないように城壁のチェックをきりあげ、町の中に入っていった。

中に入り少し歩けばすぐに大きな通りに出る。

「凄いな・・・」

中はまさに人、人、人ばかり。この街がいかに栄えているのかが一目で解る光景が広がっていた。

（襄陽といえば昔から交通の拠点として有名だからな。　三国時代も三国が交錯する点は襄陽あたりだったしな）

と、考えながら歩いていくとちょうど昼時なのだろう、あちこちから美味しそうな匂いが漂ってきた。

（そういえばまともな食事をここ最近とっていなかったな。いくつか魔力が無い宝石もあるし、さっき貴金属店を覗いた感じでは、ここでも宝石それなりの価値がありそうだし）

「よし、どうせなら一番人気の店に行ってみよう。」

と、内心では「この時代での料理のレベルはどれくらいなんだ」と、料理人としての好奇心が抑え切れないまま店捜しを始めた。

長い列を待ち、店に入り、いくつかの料理を頼む。

「ふむ・・・」

確かに美味しい。しかし・・・

（俺の方が上だなぁ）

それもそうだ。
料理の調理方も時代がたつにつれ、様々な手法が発見される。
未来からきた士郎の方が上手いのは当然であった。

（それでも、これだけのレベルの物を出せるのは流石だな）

などと一人で料理の事を考えていると・・・

「食い逃げだっ！」

一人の人相が悪い男が士郎の側を駆け抜けようとした。

「ふっ！」

静かに立ち上がった士郎は、走って来た男の脚を引っ掛け、そのまま左手を臍の下、右手を後頭部に乗せてつんのめった男を空中で回転させる。
そして背中から埃がたたないよう静かに降ろし、そのまま仰向けになった男を上から拘束する。

「すげえ・・・」
「なに！なんなの今の！」
周りにいる他の客達が騒ぐ中、怒りと羞恥に顔を真っ赤にした男は、
「ちくしょう、はなせっ！」
と、もがき暴れる男。
それを見ている士郎は、
「静かにしたまえ。貴様が暴れるせいで埃がたち、料理が台なしになる。それに食い逃げなど料理人として許されざる行為だ。神妙に縄につくがいい。」
と、少しアーチャーっぽい感じで言い放った。
まぁ料理人というわけでも無いし、士郎も大分暴れている気がするが、他の客達は皆士郎に拍手を贈っていた。
兵士が来て男が連行されていき、士郎が店主から感謝されていると、一人の女性が近づいて来る。

背は士郎より低く、少し青みがかかった、肩と腰の間まで伸ばした真っ直ぐな髪をさらさら揺らしながら。

「旅人さん、さっきのどーやったんですか？凄いですねー」

と、穏やかな。しかし力強い意思を持っている目で士郎を見ながら話しかけてくる。

「君は・・・？」

「あっ、名前を言ってませんでしたね。私は劉表（りゅうひょう）　景升（けいしょう）と言います。ここの大守をしています。」

（劉表が大守ということは漢後期で間違いなさそうだな）

「大守様でしたか。私は衛宮　士郎といいます。」

「たいしたことじゃ無いですよ。突っ込んでくる勢いを利用して倒しただけですから。」

「でも、私は見たことありませんよー」

「この国には無い武術ですからね。此処では珍しいと思いますよ。」

先程士郎が使ったのは合気道による体制崩しの後、柔術の拘束。どちらも日本で発展した武術である為、中国の人が見た事が無いのは当然である。

「と、言う事は外国の方なんですか？」

「ここより更に東にある海を越えた国が故郷ですね。まぁ今まで様々な国を旅してきましたから。」

すると劉表は目を輝かせながら、

「そうなんですか！外国ってどんな所なんですか？私が行った事ある所って益州や洛陽位しかありませんから、凄く興味があるんです。」

と、興味津々に聞いてくる。

「それでもこの街ほど栄えている所は早々ないですよ。」

「そう言って貰えると嬉しいですねー」

話が段々盛り上がってきて、士郎にも興味をもった劉表は、

「そうだ！今から宮城に来ませんか？いろいろ聞いてみたいんです。」

と、士郎を誘おうとするが、一人の女性が近づきながら話かけてくる。

怒りのオーラを撒き散らしながら・・・

「劉表様～～～何をしているんですか～～」

ぎろりと、少し怒った目で問い掛ける。

その目に少し怯みながら、

「うっ・・・水蓮ちゃん・・・」

と、少し後ずさる。

「昼休みはとっくの前に終わりましたよ！さぁ政務に戻っていただきます！」

「実は～～この人と宮城でお話したいな～なんて・・・」

「駄目です！ただでさえ最近、黄巾党とか言う連中が暴れ始めてて物騒になってきてるのに！何かあったらどうするんですか！さぁ、行きますよ！」

そう言って引き連られて行き、

「あ～ん、士郎さ～ん」

士郎の視界からフェードアウトしていった。

「・・・頑張れ。」

何故か疲れた士郎は、そう呟いて途中だった食事を再開した。

いろいろあったが食事を終え、勘定を払いに行く。

宝石を机の上に置き、

「これで大丈夫か？」

「宝石じゃねえか！十分過ぎな位だよ。」

と驚かれてしまった。

「兄ちゃん、下手にこういうモン見せたら、ろくでもない奴らに狙われるから気をつけろよ。」

「お気遣い感謝します。」

と返事ついでに、先程の女性について聞いてみる。

「そういえば、先程来ていた女性ですが、あの人は？」

「ああ、劉表様と蔡瑁様か。時々劉表様が飯食べに来て、のんびりしている所を探しに来た蔡瑁様に連行されるんだよ。」

店主は笑いながら答える。

ふと、気になった事があるので、更に質問をする。

「蔡瑁様って劉表様に水蓮って呼ばれていた人ですよね？」

その言葉を聞いた店主は慌てて、

「おいおい、本人がいないからって、真名を呼んだら駄目だろう。」

しかし、怒られた士郎は？マークを浮かべてながら、

「真名って言うのは？」

「もしかして兄ちゃん外国の人だから、真名って知らないのかい、それじゃ仕方ねぇな。

真名って言うのはその人の本当の名前さ。自分自身が認めた人以外

に教えたり、呼んでもらったりしたらいけない言葉なのさ。」

「そうなんですか・・・いや、助かりました。間違いなくその事を知らなかったら、呼んでしまってました。」

おそらく蔡瑁となると将軍クラスの人物。
その人に無礼を働いたとなると、最悪殺されそうになるかもしれない。

「いろいろありがとうございます。料理、美味しかったです。」

「おう、兄ちゃんもありがとな。最近、黄巾党とか言う連中が暴れてるから気をつけて旅を続けなよ。」

そう言って店主に別れを告げ、店を後にする。

士郎は歩きながら、今までの事を整理する。
（とりあえず今いる国と時代は分かったな。
中原の方が栄えているとは思うけど、この街も荊州では最大の街だから此処を拠点にして動くか。
そういえば黄巾党の党首張角は太平要術の書を持っていたな。）

士郎の知っている三国志では、張角は太平要術の書を使い、符水という水を病人に与え助けたという。
しかし、そのせいで信者が増え、黄巾党として官軍と戦い始めたら、書を使い風雨を呼び、官軍を苦しめたらしい。

（宝石翁が言っていた、この世界の危機って言うのは、間違いなく

太平要術の書が関係してくるだろうな。
・・・最悪、黄巾党と戦う必要もあるか。）

士郎はまた人を殺す事を考え、少し暗くなる。

（オヤジなら割り切って殺せるんだろうな）

前に聞いた「魔術使い」衛宮切嗣の戦い。
小を殺し、大を救う。マシーンの要にその作業を行ってきたオヤジなら、この世界を守る為に黄巾党を鏖殺しにする事も厭わないだろう。

士郎自身も分かっている。誰も死なずに事を片付けるなど無理だと言う事は。

けれど・・・

（この世界を救う為に殺す。けど、極力その数は減らすように戦おう。）

そう考えて、直ぐに来るであろう戦いに向けて準備を開始した。

１－１　襄陽での出会い　（後書き）

劉表（りゅうひょうけいしょう）　景升

真名　聖（ひじり）

襄陽大守

劉の名がついている為、同じ王の血筋である劉備と雰囲気、口調等がよく似ている。

文官としてはかなり優秀。補佐のカイ良、カイ越姉妹の三人が襄陽の政治を仕切っている。

また戦争は苦手だが、海戦でこちらが守備側ならば、倍近い人数で攻めて来た孫堅の攻撃を凌ぎきった事があった。

自分から攻めて行く事は、余程の理由が無い限りはしないが、攻めて来た場合はかなり容赦ない防撃を行う。

１－２　戦の足音（前書き）

今回は士郎は出てきません。
劉表サイドのお話です。

士郎には次話で活躍してもらう予定です。
後書きにキャラ紹介を書いているので見て下さいねー

後、演義では董卓戦後→孫堅玉璽発見→袁紹追求→孫堅否定→袁紹、劉表に追撃命令→孫堅軍大ダメージ→あとで復讐開始→江夏ｇｅｔ→襄陽包囲→？良の策で孫堅死亡。
の流れなんですが、原作では最初から孫堅が死亡しているので、今回の話みたいになってます。

1－2　戦の足音

～　聖　ｓｉｄｅ　～

「ふぅ・・・」

溜まっていた政務を片付けため息をつく。

中原の方で黄巾党とか言う人達が暴れているらしく、その騒ぎに便乗して騒ぎを起こしている人が増えて来ており、そのせいで陳情が増え、政務が溜まりがちになっている。

「疲れた～・・・」

そう言って机の上にだらける。

そのまま今日の昼に会った旅人の事を思い出す。

（仕事柄様々な人と会ったりして来たけど、初めてみる感じの人だったなぁ。
確か士郎くんだったよね。）

そうしていると部屋のドアが開く。

「お茶入れて来たから休憩にしましょう、聖。」

「ありがとう～水蓮ちゃん～」

そう言いながらお茶を持った水蓮ちゃんが入ってくる。

「あ！ありがと～」

お茶の他にも、私の好物の月餅もあり、急に元気になる。

「はいはい。先ずは机の上を片付けましょう。」

「りょーかい。あ、だったら蓬梅、鈴梅ちゃんも呼びに・・・」

と、言いながら立ち上がると、

バタン！

急にドアが開き、二人の少女が入ってくる。

「私達も疲れたのです。一緒に休憩したいのです。」

「そうよ。二人だけでこそこそ休憩するのは駄目なんだからね！」

そう言いながら席に着く。

「ごめんね～　ちょうど呼びに行こうとしたんだけど～」

「聖さまはいいのです。どうせそこの大根女が忘れてただけなのです。」

水蓮ちゃんって水軍を率いて戦うから、波のせいで下半身が鍛えられて腕や脚が太い事を気にしてるんだよねぇ・・・

「誰が大根女だ！私は静かに聖といたかっただけだ！」

「要するに抜け駆けね。油断も隙もない。」

「大根は狡いです。」

・・・私からしたら水蓮ちゃんってスレンダーで背も高いし、羨ましい位なんだけどなぁ・・・

「こっ・・・こ・の・ロリ白髪姉妹が。」

「ロリじゃないです！ちゃんと成人してます！」

「ふん！何処からどう見ても子供だっ！」

「うるさいわね、この大根はっ！」

「なんだとっ！」

「なんですかっ！」

「「「うぬぬぬぬぬぬっ」」」

ああっ、また喧嘩が始まった・・・

何時もの事なんだけどなぁ。

「ほらほら！とりあえず休憩しに来たんだから、喧嘩は辞めてお茶飲もうよ！」

「そうだな・・・なんかどっと疲れたよ・・・」

「私もです。月餅を下さいです。」

「はい、姉様。」

（いろいろ言いあったりするけど、ずっと四人でやってきたからね・・・

私が大守を引き継いだ時、幼なじみだった水蓮ちゃんが助けてくれて、政治とかが不慣れで苦労してた私達を名士として有名だった蓬梅ちゃんと鈴梅ちゃんが助けてくれて・・・）

そうやって昔の事を思い出していると、水蓮ちゃんがこっちに目を向ける。

「そう言えば聖。さっき私が入ってくる時、何か考え事してたの？なんかボーッとしてたけど？」

「えっ！ぼーっとしてたの私？」

「聖様ってたまに口開けてぼーっとしてるわよね？」

「今もしてましたです。」

「ううっ」

顔が赤くなるのが分かる・・・

無茶苦茶恥ずかしい・・・

「ほら、赤くなってないで、なんかあったの？」

「えっとね・・・」

「大根に言いたくないんですか?だったら私達だけでもいいです?」

「ま・た・あんたは・・・」

また始まったよう・・・

もう話始めよう・・・

「ほら!昼に会った男の「「男ぉ?」」うわ・・・」

なんか反応が変だよ・・・

「ああ。あの変な服着た奴か。」

「変・・・異国の人みたいだったよ。
見たこと無い武術使ってたし。」

「そんな何処の馬の骨か分からないような奴に、聖様を渡すわけにはいかないわね。」

「そんな悪い人じゃないよ～　食い逃げした人捕まえてくれたし。」

「見たことが無い武術で、ですか?」

「うん!なんか走ってきた人がくるっと回って地面に拘束されてた!」

「・・・ごめん、全く分からない。」

「だって見たこと無いから説明出来ないんだよ～」

「多分寝ぼけて幻覚を・・・」

「蓬梅ちゃんひどい～っ」

「あはははははっ。」

そう言って休憩時間が過ぎていく。

でも、私が気になったのはその服や武術以上に「目」だった。

とても強い目。大守になっていろんな人を見てきたけど、あんなに意思が強い目は始めてみた。

どんな事があったんだろう？

どんな夢を持ってるんだろう？

いろいろ話をしてみたかったんだけど、大丈夫。

また会える気がする。

休憩が終わり、皆が作業に戻ろうとして立ち上がる。

「さあ！今日も後少しだけ頑張ろー」

そう言った瞬間、ドアが開き一人の兵士さんが慌て入って来る。

「何事だっ！」

「はっ。新野城の北に賊の集結を確認。数はおよそ五千。恐らく数刻後に闇に紛れて襲撃を行う模様です。」

「っ！・・・黄巾とか言う連中か！」

「まだ確認は出来ていませんが、物見によると黄色の布を巻いた者もちらほら見られるそうです。」

「とうとう此処まで来たのか・・・
蓬梅、江夏の兵は間に合うか？」

「うーん、まだ隊も再編中です、城壁とかも修理中です。
袁術さんもいるですし、孫策さんも身を寄せているです。
あいつらは何するか分からないですから無理です。」

ちょっと前に孫堅さんが江夏を攻めて来て、何とか皆のお陰で勝利できたんだけど、その時孫堅さんが死んじゃったんだよね・・・

「そうなると私が一軍を率いて援軍に向かうか。江夏には八千の兵がいるから五千の兵を集めて向かう。
準備せよ。」

「はっ。了解しました。」

そうして部屋に静寂が訪れる。

「すまんな蓬梅、鈴梅。また政務を任せてしまう。」

「別にいいです。さっさと帰って来て手伝うです。」

「そうよ。怪我して皆の手を煩わすんじゃ無いわよ。」

そうして皆が出て行こうとする。

「待って！水蓮ちゃん、私も連れてって！」

「聖・・・だけど・・・」

「うん。危ないのは分かってる。
でも皆が戦うのに自分だけが後ろで見てるのは嫌なの。」

江夏での戦いも蓬梅ちゃんの作戦が成功したとは言え、江夏城で待機していた私は緊張で胸がいっぱいだった。

「それに、私がいたほうが軍の士気もあがるよね。」

「はぁ・・・分かったわよ。
ただし前には出過ぎないように制限するからね。」

「えへへっ。ありがとうっ。
だから水蓮ちゃん好きー」

「っ・・・ほらいろいろ準備があるんでしょうっ！

早くするのよ！」

「は～い」

なんか蓬梅ちゃんと鈴梅ちゃんが羨ましそうに見てるけど、準備しなきゃ。

でも私が行きたいって思ったのは、またあの人に会えるかなって思いもあるみたい。

ちょっと期待しながら慌ただしく一日が過ぎていった・・・

1－2　戦の足音（後書き）

蔡瑁（さいぼう）　徳珪（とくけい）

真名　水蓮（すいれん）

聖とは幼なじみ。お姉さん的な立場。
外では「劉表様」と敬語を使用するが、仲が良い人達だけなら普通に喋る。

顔立ちは少しきびしめな感じで、美人。
黒髪で髪はショートヘアであちこちに跳ねていて、髪がかたい為、本人も諦めてる。

体はスレンダー体型。
胸も聖程は無いが、まあまあある方。

武器振り回したり、船によく乗る為、腕や脚が太くなるのが悩みの種。

軍司、政治をそつなくこなし、特に海戦においては孫一族と対等に渡り会う実力を有する。

武器は海軍用船上槍（フリウリ・スピア）
名は波及（はきゅう）
突けば槍、薙げば薙刀、引かば鎌の十文字槍とよく似ており、同じ感じで使用する。

十文字槍との違いは、横についてるのが刃ではなく、鉤爪のように

なっている所。

?:良（かいりょう）　子柔（しじゅう）

真名　蓬梅（ほうめい）

?:越の姉

荊州の名士として有名だった為、大守になったばかりの聖達に頼まれ仲間になった。

～です口調で喋り、毒舌。

成人はしているが身長がかなり低い。（原作　董卓位）

髪は銀髪で（白髪と言うと怒る）肩位までの長さ。毛先が内にカールしている。

政治官としての才能はずば抜けるが、軍師としての才能もある。（孫堅を過去に撃破している）

?:越（かいえつ）　異度（いど）

真名　鈴梅（りんめい）

?:良の妹

士官については姉と同じ

ツンデレキャラと考えておけば問題無し。

外見は姉と同じ。

髪も同じで、毛先が外に跳ねている。

姉よりも政治手腕は上（曹操に荊州よりも価値があると評価された）

ちなみに三人とも聖が大好きです。

水蓮と姉妹でよく言い合いをしている。
何時もの事なのでまわりも「また始まった・・・」位にしか思ってません。

1ー3　新野騒乱（1）（前書き）

投稿が遅れましたー
申し訳ございませんｍ（＿）ｍ

風邪ひいたり、仕事中に余り時間が取れなかったりと色々ありまして・・・

のんびりですが、完結させますのでよろしくお願いします。

今回は新屋の話になります。
初めて戦闘描写を書きましたが、難しい・・・
何回も書き直ししました・・・
戦闘時に士郎の口調がアーチャーになるのは仕様です。
と、いうよりアーチャー口調の方が書きやすいですね。

後、誤字等があれば指摘の方よろしくお願いします。

1ー3　新野騒乱（1）

襄陽にいた時、新野に賊が攻め入る準備をしていると聞いた士郎は、直ぐに移動を開始した。

士郎の知っている技術（製剣、料理など）を提供する代わりにいくらかの金を得、目立たない用に馬を買い移動をしていたが（掘り出し物の駿馬）、移動し始めたのが夕方だった為、新屋についたのは翌日の昼前位になっていた。

「これは・・・」

新野に着いた士郎が見たのはおびただしい数の死体や怪我人だった。

「くっ・・・」

思い出すのは幼き時の記憶。

苦しむ人々の怨嗟の声の中、必死に歩き続けた地獄・・・

規模こそ違えど、あの日の記憶を思い出すには充分な光景だった。

（落ち着けっ・・・まずは情報収集と治療の手伝いだっ！）

治療をしながら話を聞くと昨晩に一度、賊による夜襲があったらしい。

守備兵達が迎撃に出たらしいが、兵自体は訓練はしているが中原と比べ、余り陸戦には参加してなく、相手もたかが賊と侮った為予想以上に被害を被った。

（まぁ数も自分達より少ないし、江夏の一戦を終えて気が抜けてる兵と、自分達が生きる為に戦う兵じゃ士気が違うよな・・・）

しかも敵の大将は黄巾党の人物が勤めており、こちらの将軍が一人討ち取られたらしい。

（黄巾党ってそんなに強い将軍いたのか？
中原の方ならともかく、ここらへんではそういなかった筈だけど・・・）

疑問を抱きつつ、士郎は臨時徴兵を行っている話しを聞いたので、広場に向かっていった。

広場では幾人かの兵が、兵を募っていた。

「我こそはと思う者は、武器を手に取り、戦に参列するのだっ！」

「共にこの街を守ろう！」

と、募兵は行っているのだがイマイチ集まってはいない。

ふと将軍の方に目を向けると一人の女性がいた

（多分昨晩の戦いで死んだ将軍の代わりなんだろうな）

確かに臨時。しかも女性だから兵の集まりが悪いのも納得できる。
しかしどう見ても非常に若い人に見える。

（人手不足なのか？）

人手不足と言うよりは、将軍の方も江夏や襄陽の方にいるせいなのだが。

戦があった時は自分が戦に参加して、極力早めに戦を終わらせるようにしてきた。

それに・・・

（どんな理由があっても、自分とは無関係な人を傷つけていい理由にはならないしな・・・）

そう考えた士郎は、将軍であろう女性に話かけにいった。

「すいません。」

「はっ、はいっ。なんでしょうっ。」

少し緊張気味な返事が帰ってくる。

「募兵しているみたいなので、参加したいんですが。」

「あっ、ありがとうございますっ。
中々集まらないから困ってたんですっ。
でもいいんですか？私女ですし、将軍なりたてですし・・・」

（大分緊張しているな・・・
おそらく急になったから、まだ心の準備が出来てないんだな。）

そう考えながら士郎は、

「大丈夫ですよ。何処の将軍の下だろうと私のする事は変わりませんし、戦の経験も多々ありますから。」

「はあ～そうなんですか。
私なんかより全然頼りになりますっ。」

「そんな事無いですよ。
私もその歳で将軍になるっている人は見た事が無いですから、よっぽど凄い方なんでしょう。」

どう見積もってもこの女性は士郎より年下だ。
と、言ってもそんなに差はなく、大体２０前後位であろう。

「やっぱり早いですよねっ・・・」

そう言って苦笑いしていた。

ふと、士郎の服に気付いた将軍は、

「そういえば外国の人なんですよね?
なんで参加してくれたんでしょう?」

と言う当たり前の疑問を投げかけた。

すると、士郎は笑いながら、

「まだこの国に来て一日位しかたっていません。
それでも分かるんです。この国の人々は私みたいなよそ者でも、と
てもよくしてくれました。」

元来戦が起きにくく、他の地域の住民が戦火を逃れて、劉表の下に
沢山の民が集まってきた。

そのおかげで、街の人々はよそ者だろうと特に気にせずに、普通に
対応するようになっていた。

まぁ旅人やよそ者からしたら、その「当たり前」の対応がありがた
いのだか。

「それに・・・」

「それに?」

すると士郎はとても綺麗な笑い顔を見せ、

「なりたいものがあるんだ・・・
だから・・見て見ぬふりなんて・・・できない。」

そう言い放って少し苦笑していた。

「・・・・・」

はっとした後、ぽーっと少し赤くなった顔を士郎に向けていた将軍
は、

「うん・・・決めたっ！」

そう言って、

「・・・名前教えて貰えますか？
私、李厳　正方って言います。
真名は玖遠。」

士郎は真名を教えてくれた事に少し驚きながら。

「私は衛宮　士郎。真名はありません。
えっと李厳様で言いんですか？」

すると玖遠は少しむっとした顔を見せ、

「士郎さんっ。真名を教えるって言う事は真名で呼んでも言いって事なんですよっ。
あと、敬語も要りません。士郎さんの方が年上ですし、お願いしたい事があるんですっ。」

「分かった、玖遠。
で、お願いしたい事って。」

玖遠は少し赤くなっている顔を士郎に近づけて、

「私の軍の副将になって下さいっ。誰にしようかずっと考えてたんですっ。
とりあえず軍に所属してないので、客将としてになっちゃいますけど、お願いしますっ。」

ぺこっと士郎に向かって頭を下げてきた。

「な、なんでさ・・・
俺みたいな何処の者かも分からないし、実力だって全然分からない
相手を?」

まさかの展開に大分ついていけない士郎。

「はいっ!元々急な昇格でしたから余り期待されて無くて、そこら
辺は私に一任されてますしっ。」

そして、両腰につけている剣を軽く叩きながら、

「それに私だってそこそこ武には自信がありますっ。
でも士郎さんを見れば分かります。多分、私なんか足元にも及びま
せんっ。」

聖杯戦争時のアーチャーと同等位の強さを持つ今の士郎なら、そこ
らの人では相手にならないだろう。

「だけど、俺が賊の密偵かも知れない。本当にいいのか?」

玖遠はくすくす笑いながら、

「本当に密偵ならそんな事いいませんっ。
後は勘ですねっ。」

きょとんとしている士郎を見て、

「私、勘だけはずば抜けてるんです。今までそれを信じて来てハズレは無いですからっ。
前回でも命は助かりましたし、将軍になれましたし、それに・・・
今日士郎さんに会えましたっ。」

臨時寡兵を募る際、将軍がついて来るなんて事はまずありえない。
玖遠も何となく今日ついて来ただけである。

（それだけでも無いんだろうな。
彼女自身の才能と実力もかなりのものだし。）

士郎は彼女の双剣を解析した情報をみながら、そう判断した。

李厳といえば、かの諸葛亮に「武は黄忠と引き分け、知は陸遜に匹敵する」と言われ、まさしく才能の固まりと評価してもいい位の人物である。

「はぁ・・・どうしようか・・・」

士郎が悩んでいると、玖遠が、

「じゃあっ！私と一度試合してもらえませんかっ？」

と、士郎との試合をお願いする。

「俺は大丈夫だけど・・・
そんな時間はあるのか？」

「はい。私の隊の軍師さんが副将選ぶなら、出来るだけ強い人にしてくれって。

その人の力量で、立てる作戦が変わってきますからっ。」

「俺はまだ副将になるって・・・」

「それに、私も武人です。
話すより剣を合わせる事で、わかる事もあるんですよっ。」

そう言われた士郎は、「分かった」と玖遠に答え、訓練場へと案内され、玖遠との模擬戦を開始した。

まわりの兵士達が見守る中、お互いに刃を潰してある得物を持ち対峙する。

士郎は両手に持った干将・莫耶をだらりと下げて構える。

それに対し、玖遠は干将・莫耶と同じ程の長さの両刃の直刀を両手に持っている。

ただ、

（みょうに持ち手が長いな・・・
それに後ろ腰に挿している棒も気になる・・・）

そんな風に士郎が疑問に思っていると、玖遠の方から仕掛けて来た。

真っ直ぐ距離を詰めそのまま――

――ヒュオンッ！！

と、振るう者の力量を示すような音をたてながら、右手の剣を右上から袈裟切りに振り下ろす。

士郎は、それを後ろに下がりながら回避する。

（スピードと威力は中々。だけど中途半端な袈裟切りだな）

士郎がそう思ったのは玖遠が踏み込んだ足が『左足』だった為だからだ。

玖遠が行ったのは『右上』からの袈裟切り。

踏み込んだのは『左足』。

これでは自分自身の足を切ってしまう恐れがある。

（玖遠程の力量を持つ人がそんなミスをする訳が無いよな・・・

と、すれば・・・）

再度士郎は回避に移る。

すると玖遠は残した右足で踏み込みながら、右手を捻り、切り下ろした勢いのまま逆袈裟をくり出した。

その射程は先程の倍近く。

後ろに下がったら一撃貰っていたが、士郎は直ぐに気付き、玖遠の左前に回避していた。

（この距離ならっ）

目の前には玖遠の横顔。

士郎が攻撃に移ろうとすると、

（そうだ、左の剣っ）

玖遠は左手の剣を逆手に持ち直しており、逆袈裟の勢いを利用して追撃に入っている。

（ふっ！！）

士郎はしゃがみ込んで回避を行うが、玖遠も空振りした後、くるりと一回転しながら士郎との距離を空ける。

「凄いですっ。まさか初見で避けるなんて。」

逆手に持っている左の剣を、順手に持ち直しながら士郎に話しかける。

「言っただろう。場数はそれなりに踏んでいると。それとなく全体を見ていれば分かる。」

「なんか口調変わってますねっ？」

「ああ、戦闘時はこうなるんだ。私としても直したいのだが、いかんせんこの方が効率がいい。」

と、苦々しい顔をしながら士郎は答えた。

かつて聖杯戦争時に出会ったアーチャー。
何故かアイツとはあわなかったが、そのアーチャーと段々似てくる自分を見ていれば、自ずとアイツの正体は分かってきているが、いい気分はしない。これが衛宮士郎の最良の戦闘方法の為、こうなるのは仕方がないのだが・・・

「ふっ――」

浅く息を吐き、再度士郎との距離を詰める玖遠。

士郎は変わらずに防御に徹し、相手の剣筋を見極める。

「やあっ!!」

舞うように士郎に連撃を叩き込む。

突き、薙ぎ、払い、横に意識を向けさせた後に唐竹割り。

上下左右のコンビネーション。竜巻のような連撃は見る者を圧倒する。

「おおっ!」

「流石李厳将軍だなっ。」

いつしか周りの兵士達も二人の戦いに魅入っていた。

だが――

（ぜんぜんっ・・・入りませんっ・・・）

額に汗を浮かべながら玖遠は思う。

見た目には玖遠が推しているように見えるが、息を荒くして切り込んでいる玖遠と比べて、士郎は全く疲労していない。

（こんなにも差があるなんてっ・・・）

武にはかなりの自信がある為、こうもいなされるとは思ってはいなかった。

（予想以上ですっ・・・
ですけどっ！）

連撃を一旦止め、左手を後ろの腰に挿している棒に持って行き、右手は素早く突きを繰り出して幕をはる。

士郎はぎりぎり玖遠の突きが届かない所まで下がり、攻撃を捌く。

瞬間ーーー左手に持っている『短槍』で突く！

ヒュンッーーー

射程のぎりぎり外にいる士郎に楽に届く一撃。

しかし・・・士郎はそれを最初から分かっていたように、斜め下に移動しながら回避し、玖遠の眼前に移動していた。

「ええっ！」

咄嗟に右手の剣で攻撃しようとするが、既に士郎の左手で掴まれ、止められており、そのまま首筋に剣を当てられる。

「私の負け・・ですねっ。」

玖遠の敗北宣言により、二人の試合は士郎の勝ちで終わった。

試合が終わった後、士郎が軽く息を吐くと、

「あれが李厳将軍が任命した副将殿か。」

「まさかあの連撃を捌ききるなんて、ただ者じゃ無いな。」

「あれ程の実力者ならば、今回の戦も大丈夫かもしれぬな。」

などと、周りの兵士達から歓声や拍手が送られる。

「玖遠・・・」

「えへへ・・・これで士郎さんも私の部隊の人に認められましたねっ。」

と、いたずらが成功したような、可愛い笑みを浮かべながら答えた。

玖遠は、前もって副将が見つかったら此処で試合をすると伝達をしており、その為に自分の部隊の隊長格の人を訓練場に集めておいたのだ。

「全く、しょうがないな。
よろしく玖遠。」

「はいっ。士郎さん。」

お互いに顔を合わせて笑っていると、横から声を掛けられる。

「えっと・・・すみません玖遠さま、副将の方が決まったって伺ったんですけど・・・」

「あっ！そうだよ援理ちゃんっ。この人っ。」

と、少しおどおどしながら少女が玖遠に話しかける。

そう言うと援理と呼ばれた子が士郎に視線を向ける。

「えっと・・・徐庶　元直真名は援理(えんり)です。
よろしくお願いします。」

「あ・・・ああ。俺は衛宮　士郎、真名は無いんだ。
よろしく。」

士郎はこんな少女も戦に参加する事に驚きながら返事を返した。

「？えっと・・・その、私がどうかしましたか？」

士郎の視線に気付いた援理が失礼すると、

「いや・・・君みたいな子も戦に参加するんだなって思ってね・・・

」

すると援理は少し怒って、

「えっと・・・私も・・一応・・成人してます。
大丈夫です。」

「そうか・・・ごめん。
君も覚悟をもって参加していると思うんだけど、どうしても抵抗があってね・・・・」

「いえ・・・心配してくれているんですよね。
だったら・・・別に大丈夫です。」

「士郎さんっ！私だって女の子なんですけどっ！」

「玖遠は・・・なぁ？」

すると援理はくすくす笑いながら、

「えっと・・・まぁ、玖遠さんですから。」

「二人とも酷いよーっ。」

そう言いながら玖遠は崩れ落ちる。
なんか変なリズムと勘で行動している玖遠は、士郎と援理から見れば、十分ネタになってしまうのだった。

「その・・・士郎さん。
改めてよろしくお願いしますね。

勉強は沢山してきましたけど、実戦は今回が始めてなんです。」

「ああ。俺も色々戦場を経験して来たから、何か参考になれるかもしれないしな。
よろしく、援理。」

「じゃあ・・・作戦の確認とかしてほしいので・・・行きましょう。」

「ああ。」

二人並んで歩きだすと、

「待ってよーっ、私も参加しますーっ。」

崩れ落ちていた玖遠が慌てて追いかけていった。

1ー3　新野騒乱（1）（後書き）

李厳（りげん）　正方（せいほう）

真名　玖遠（くおん）

演義では劉璋配下だか、元は荊州出身の人。
水蓮に才を見出だされ、若いながらも、将軍に抜擢される。

外見は腰まで届く紺色の髪をポニーテールにしている。

スタイルは恋姫の呂蒙が1番近い。

武器は雲雀（ヒバリ）
二本の剣と、一本の棒を組み合わせ、双剣、短槍、上下両刃の槍と武器の形状を変更しながら戦う。

立場的には士郎より上なのだが、本人は士郎に頼りきっており、実際は立場が逆転している。

徐庶（じょしょ）　元直（げんちょく）

真名　援理（えんり）

演義では劉備軍最初の軍師だが、曹操に母を人質にとられ、魏に行った人。
しかし魏に行ってからは一度も献策を行わなかったという。

外見は桃色の髪でショート。ベレー帽を頭にのせている。
体型は恋姫の諸葛亮や鳳統と同じ。

一応武器はそれなりに使用出来るので、指揮をとる際にも使用する、麒扇（きせん）と言う鉄扇を隠し持っている。

水鏡先生から朱理や雛理と一緒に学んでいたが、自分でも戦乱の世で何かが出来ると思い、二人より先に士官した。

演義で魏の程イクが「自分では全く及ばない」と評価する程の才能を見せる。

会話によく…が入る。朱理や雛理程では無いが他人に怯える所がある。（玖遠に対しては馴れている）

1－4　新野騒乱（2）（前書き）

のんびり執筆中。

話も非常にゆっくりと進んでいきます。

シリアスとギャグの書き分けが難しい・・・

1ー4　新野騒乱（2）

玖遠、援里と共に作戦会議室に入った士郎は、二人から今現在の状況から、主な作戦内容、役割などの説明を聞いていた。

「賊軍は、新野から少し北に行った所で陣地を作ってますねっ。数の方は情報によると約七千。
どうやら先の戦いをみた黄巾党の援軍が合流したようですっ。」

「近くに黄巾党の本隊が来てるのか？」

「えっと・・・今、新野より北にある宛が黄巾党に占拠されてますから、そこからの援軍かと。」

士郎の質問に援里が答える。

（バックに黄巾党の拠点があるなら、外にいる賊は早めに叩いた方がいいよな。）

「こちらの方はどうなってるんだ？」

「えっと・・・こちらは総勢で七千五百ですね・・・
その兵を両翼に二千ずつ・・真ん中に三千五百の鶴翼陣で攻める予定です・・・」

「私達の軍は一千五百の兵で、真ん中の最前列に配置されてますっ。」

「最前列か・・・」

「はい・・・私達の軍は殆どが寡兵で集めた兵ですから・・・
・・・臨時の将軍に臨時の兵・・・私達が敗走しても、後ろには二千の本隊があります・・・
寡兵ですから、士気はまあまあ高いですし、こちらの両翼が包囲するまで持てばいいと、考えてるみたいです・・・」

援里が、苦虫を噛み潰したような顔をしながら話す。

だが、士郎からしたら最前列に配置されるのはラッキーだった。

後ろの方に配置されたりしたら、戦闘が始まった際に士郎が突っ込みかねないからだ。

「どうしましょうかっ？」

「うーん・・・玖遠、敵はどうでると思う。」

「そうですねっ・・先の戦いでは賊の大将を先頭にして、いきなり突っ込んで決ましたからっ、今回も一緒だと思いますっ。」

「と、いうより、相手は黄巾党が賊を寄せ集めただけですから・・・
細かい指示は出せないんでしょうね・・・
それに・・・一度その方法でこちらの将を一人倒してますから・・・
」

「だったら・・・俺と玖遠で、その賊の大将を倒すか。」

「え、えええっ！わ、私がっ！」

「はい・・・私もそれを考えてました・・・」

「え、ええっ！援里ちゃんもっ！
二人だけは危ないよっ！」

玖遠が二人の会話に驚き、抗議するが、

「だったら俺よりも、玖遠が倒した方がいいのか？」

「はい・・・その方が私達の名前が知られますから・・・」

「そうか。なら俺は周りの敵を倒して、玖遠が戦い易いようにするよ。」

「はい・・・宜しくお願いします・・・」

「あのーっ。もしもーしっ。
しかも私一人なんですかーっ。」

「ということだ。
玖遠、頼んだぞ。」

「あのっ、それってもう・・・」

「はい・・・決定です。
上手くいけば・・玖遠さんの名前も広まりますし・・こちらの軍も勢いづきますから・・・」

「で、でもっ・・・」

「大丈夫だ。俺も一緒に行くから。
何かあったら直ぐに助ける。」

（とは言っても、玖遠自身もかなりの使い手だし、武器の射程を偽る、あの変則二刀を初見で勝つのは、かなり厳しいだろうしな。）

その、玖遠の二刀に初見で勝った士郎は、一体なんなんだと言う疑問が、部隊内に広がっているのだが、

「ううっ・・・お願いしますっ、士郎さんっ。」

まだ将になりたてで、自信が無い玖遠は、士郎にお願いするのだった・・・

「とりあえず、こんな所ですねっ。」

作戦が決まった後、兵の細かい配置や武器、兵糧の支給量、その他色々な事を決め、それらの作業がようやく終わったのだ。

尤も士郎はそうゆう作業はした事が無いので、二人の作業を勉強の為に見学していたのだが。

「お腹が空いたねー」

「はい・・・もう夕食の時間位かと・・・」

窓の外を見れば、そこにはオレンジ色の空が広がっていた。

「何か食べますかっ。食べたい物ってありますっ？」

「うーん・・・私は・・特には・・」

「俺も無いよ。」

「そうですかっ。何にしましょうか？」

玖遠が考えていると、ふと士郎が思い付く。

「だったら俺が作ろうか？」

「「・・・・・」」

二人の沈黙が場を支配し・・・

「料理っ、出来るんですかっ？」

「料理・・・作れるんですか？」

二人から疑問文で返事が帰ってきて、士郎はそんな二人の反応を見て、

「なんでさ・・・」

と呟くのだった。

「お待たせ。」

扉を開けながら、士郎が料理を運んでくる。

メニューは炒飯、麻婆豆腐、野菜炒め、卵スープ、それに焼き餃子。

「美味しそうですっ。」

「はい・・・」

見たからに美味しそうな匂いを放つ料理を前に、二人はそわそわしている。

「さぁ食べようか。」

そうして夕食が始まった。

「この炒飯、卵しか入ってないですねっ？
うわっ！でも凄い美味しいですっ！
こんなに美味しい炒飯は始めてですっ！」

「もぐ・・・もぐ・・・もぐ・・・」

士郎が作った炒飯は卵と調味料だけの黄金炒飯。

シンプルなだけに、料理人の腕が分かる料理だ。

麻婆豆腐も豆腐が崩れないように、先に豆腐を塩湯でしていたり、野菜炒めも油通しを行い、うま味を閉じ込めたりと、とても丁寧に料理を作っている。

それに、

「これは・・・餃子を焼いてるんですかっ！
始めてみましたっ。」

中国での餃子は水餃子が基本。
この時代にはまだ、焼き餃子は出回って無いのである。

「美味しい・・・です。」

士郎はそんな二人の光景を見て、

（これだけ美味しそうに食べてくれると、やっぱり嬉しいな。）

と、思いながら自分も料理を食べ始めた。

「「ごちそうさまでした。」」

「はい。どうぞ。」

士郎は二人が食べ終わった後、食後のお茶を出す。

「・・・なんか、お茶もいつものと全然違いますっ。」

「ああ。茶葉は同じだけど、きちんと煎れてるからな。」

「武術で負けて、料理も負けて・・・なんか色々と駄目な気がします・・・」

「はい・・・」

落ち込む二人を見て、士郎は？マークを顔に浮かべながら、のんびりとお茶を飲んでいた。

「二人はいつから知り合いなんだ？」

ふと、気になったので、士郎は聞いてみる。

すると玖遠が、

「つい最近ですよっ。

私が将になった時に、父の知り合いだった水鏡先生に、だれか軍師さんを紹介してもらったら、援里ちゃんを推薦されたんですっ。」

そうだったのかと、士郎が援里に目を向けると、

「はい・・・私も、水鏡先生にずっと、この戦乱を無くす為に何かしたいって、相談してましたから・・・」

「そうだったのか。
だったら援里は明日の戦が初陣になるのか？」

「そうですね・・・遠目に見た事は何回かありましたけど・・・参加するのは始めてです・・・」

すると士郎は援里の目をしっかり見ながら、

「そうか・・・なら、出来るだけ俺の側にいてくれ。
何があっても、絶対に護るから。」

士郎からすれば、援里を護るのは元より、自分自信が突っ込むのを止める為の枷をつけるつもりもあるのだが・・・

援里は顔を赤くして、

「あの・・えっと・・はい・・お願いします・・・」

と、弱々しく返事をした。
まぁ、ろくに異性と話をした事も無い援理にとっては破壊力は十分だったのである。

そんな二人の様子を玖遠はジト目で見ながら、

「援里ちゃん・・・ずるいですっ・・・」

と呟き、それを見た援里は、

「はっ・・・さ、さぁ、明日は戦ですから、今日は早く休みましょう。」

と、赤くなった顔を振り回し、いつもより早口になりながら、寝室に移動して行った・・・

1－4　新野騒乱（2）（後書き）

次が戦になります。

やっぱりこういうのは、執筆して馴れていかなきゃいけませんねー

作戦内容については、作者が無い頭を必死に動かして考えてますので、余り突っ込まないで頂けると幸いです。

1ー5　新野騒乱（3）（前書き）

約二ヶ月ぶりの投稿・・・

たいへんお待たせいたしました。m（＿）m

やっぱり戦争の描写は難しいですね。
動きの表現や、誰が何を喋っているのか等を分かりやすくするのにとても苦労しました・・・

また誤字、脱字等があれば知らせて貰えば有り難いです。

これからも応援宜しくお願いしますm（＿）m

1ー5　新野騒乱（3）

進軍する。

隊列を組み、賊がいる地点に近付くと、賊軍がいるのが見える。

およそ七千の敵。

（やっぱり多いな・・）

士郎がそう思っていたら、こちらの軍の総大将が声を張り上げる。

「卑劣な手段で我らの仲間を傷つけた奴らにっ！
我らの武を見せつけろっ！」

ーーオオオオッ！！ーーー

最前列にいる士郎達はその咆哮を背に受け、ギュッと干将・莫耶を握りしめる。

そしてふと、回りを見渡すと、おもいっきり緊張してフリーズしかかっている玖遠と援里がいたので、

「玖遠、弓の準備を。
援里は賊の弓に構えてくれ。」

軽く肩を叩きながら話す。

「っ！・・・弓兵隊、構えて下さいっ！」

直ぐに復帰した玖遠は、迫り来る賊に向かって弓の一撃の準備に入り、援里は鉄扇を広げ、敵からの弓に備える。

そして、こちらの弓が届くギリギリの所を判断して――

「放てえっ！！」

合図と共に、数千本もの矢が空を覆い尽くし、賊軍に降り注いだ。

士郎が、賊の方からもパラパラと降ってくる矢を捌いていると、玖遠が指示を出す。

「弓兵隊は下がりながら賊軍の後続に打ち続けて下さい。歩兵隊は前にっ！迎撃しますっ！」

そうして後ろに下がる弓兵隊を見ながら士郎は、

「援里は弓兵の指揮を頼む。」

「はい・・・分かりました・・・気をつけてくださいね。」

士郎自身は援里がいる弓兵の所に賊が行かないように戦っているので、余り前に出ないようにし、一定範囲の中に入った賊を相手にしていた。

「おらっ！！」

叫びながら薙ぎ払うように切り掛かってきた剣を避け、その腕を切り付ける。

そして、そのまま水月に肘鉄を当て横に払いのけて、急に士郎が現れて一瞬パニックになっている後ろの賊の顎を蹴り飛ばす。

横から慌てて賊が切り掛かってくるが、剣を持つ腕を取り、そのまま背負うようにしてへし折る。

本来、士郎は相手の攻撃を捌きながら攻撃を挟んでいくのが基本なのだが、相手の方が数が多い為、守備にまわったら単純に手数の差で押し切られる可能性があるので、自分から攻めるようにしていた。

それに、他の兵なら賊を殺してしまう事があるが、士郎は極力死なないように戦闘不能にしているので、自分で攻撃を行うという理由もあった。

その為、士郎がいる回りには呻き声を上げる賊が増え続け、その真ん中にいる士郎は敵からは恐怖、味方からは尊敬と畏怖の目でみられ始めていた。

「っ・・・早く、士郎さんの周りの賊を・・・片付けて下さい・・・」

援里がすぐに周りの兵に命じ、士郎が動き易いように賊をこちらの陣の奥に引きずっていった。

「ふう・・・」

軽く息を吐く。

（援里に感謝しなきゃな・・・）

呻き声に囲まれると、あの地獄を思い出す。

援理が賊を片付けるように言ったのは、士郎の異変に気付いたというのもあったのだ。

「どうした？掛かってこないのか。」

士郎はいつしか周りに出来た賊の群れに声をかける。

賊の方も、先程まで戦っていた士郎の尋常ではない戦いぶりへの恐怖で、前に進めないでいる。

それに恐怖は伝染する。

少しだが確実に、士郎の活躍は賊の進行スピードを落としていたのだった。

そのまま賊が二の足を踏んでいると、賊の中から、べっとりと血がつき、所々刃が欠けた、肉厚の大きな蛮刀を肩に担いだ一人の男が出て来る。

「ずいぶん暴れてるみてぇだな。」

「ふむ・・・キミが賊の大将か？」

「ああ。そうだぜ。
テメエがこの隊の大将か？」

「残念ながら私は副将だ。」

「なんだ副将かよ・・・
まぁいいや・・・天和ちゃんの為に死ねよっ！！」

そう叫んだ男は、蛮刀を両手で振りかぶり、力任せに士郎に叩きつける。

ーーギィンッ！！

士郎は干将・莫耶を振るい、斜め下に受け流す。

「おらおらおらっ！！」

そのままストレスを晴らすような勢いで、蛮刀を士郎に叩き続ける。

ガガガガガガッーーー

「いけえっ！！」

「ぶっ殺せえっ！！」

周りの賊達もヒートアップしていく。

しかしーー

「ちいっ、さっさと死ねえっ！」

士郎は自分からは攻め込まず、全て受け流す。

何かを待っているように。

「どうしたっ！俺の強さに恐れてんのかっ！！」

「・・・なかなかの力だな。
成る程。将軍を一人倒したと言うのも頷ける。」

「へっ！出会った瞬間に奴の剣ごとたたっ切ってやったんだよ！
天和ちゃん達が持ってた本のおかげだぜっ！」

（・・・本？太平要術の書の事を言っているのか？
ならば天和と言うのはもしかして・・・）

「天和と言うのは張角の事を言っているのか？」

「へっ、そうだよ。数え役萬☆姉妹の天和ちゃんの事に決まってる
だろうが。」

「・・・数え役萬しすたーず？」

「おう。天和ちゃん達の旅芸人の事さ。
俺らは天和ちゃんの為に天下とってんだよ！」

（もしかして黄巾の乱ってアイドルファンの暴走なのか・・・）

「なんでさ・・・・」

この世界に来てから最大級の疲れが士郎を襲った・・・

だって理由がなあ・・・

「・・・その力を得たのは本のおかげと言っていたな。」

「おう。天和ちゃん達に会いに行ったら本があってよ、その本読んだら力を得る方法が書いてあったんだよ。」

（旅芸人の張角が力を欲するか？
歴史では妖術や符水の作り方が書いてあったはず。
多分、読んだ人によって内容が変わるんだろうな。益々調べる必要性が出て来たな。）

「成る程。ならば尚更張角を止めなければならないな。」

「けっ、この俺がさせるかよっ！
来いやあっ！」

そう叫んで蛮刀を再度構える。

「ふむ・・・私がこのまま戦ってもいいんだが、どうやら貴様の相手が到着したようだ。」

「？何言って・・・」

賊の大将が喋っている途中に、

「見つけましたっ！
貴方が大将ですねっ。」

短槍を左手、短剣を右手に装備した玖遠が入って来た。

「新手かっ！」

「心配せずとも、私は戦わんさ。
貴様など玖遠一人でも勿体ない位だがね。」

「ぐっ・・・コイツを殺ったら次はオマエだっ！」

そう言って賊の大将と玖遠が対峙し、士郎は下がり、二人の様子を見る。

「この隊の将、李厳　正方っ。
一騎打ちを所望しますっ！」

「ふん！テメエみてえなガキが大将かよっ。
俺は張曼成！いくぜえええっ！」

叫びながら玖遠に向かって蛮刀を振りかぶり突進していく。

「だあああああっ！」

そのまま勢いに任せて振り下ろすが、玖遠は体格差を生かして相手の懐に移動して回避する。

下手に受けたら干将・莫耶ならともかく、玖遠の雲雀なら破壊される可能性がある為だ。

そのまま玖遠は張曼成の足に攻撃をする。

「つあっ！！」

張曼成は咄嗟に後ろに下がるが、軽く自身の右足を切られる。

「少し浅いですねっ。」

「チッ・・・」

玖遠はそのままの位置で、左の短槍の柄尻を持って突く。

短槍の方が蛮刀より長い為、張曼成は攻撃出来ない。

「きかねえっ！！」

そう叫んだ張曼成は強引に玖遠との距離を詰める。

「ふっ！！」

浅く息を吐き、玖遠からも距離を詰め、右の短剣で切り掛かる。

急に距離が近づき、慌てた張曼成は右から左に水平切りをするが、スピードでは玖遠の方に分がある為、張曼成の左側をすり抜け様に左足を切る。

「ぐあああああっ！！」

張曼成の両足にダメージを与えた玖遠は、両手に持っている短槍と短剣を繋げ、上下に刃がついた一本の槍にする。

そしてその槍の中頃を持ち、左手に近い方の刃で張曼成の右から切りつける。

「チョロチョロしやがってええっ！！
おらあああっ！」

両足を切られた為、満足に移動出来ない張曼成は自分の右から迫ってくる刃におもいっきり蛮刀を叩きつけるが・・・

（軽いっ！あのガキ全然力入れてねえっ！）

玖遠が殆ど力を入れてなかった為、逆に槍を蛮刀で押してしまう形になってしまう。

玖遠は自分を中心に、その勢いを利用して、右手側の刃で最初に切り掛かかったのとは反対側に切り掛かかり、そのまま張曼成の左腕を切る。

「・・・ぐううううっ・・」

「ここまでですっ。貰いますっ！」

玖遠が左腕を失い、呻いている張曼成にトドメを刺そうとすると、それを見た張曼成が味方に声を掛ける。

「ぐっ・・・野郎共っ！何してやがるっ！
早くこのガキを殺せえっ！！」

「お、おおおおおっ！」

周りを囲んでいた賊の四、五人が張曼成の声に慌てて玖遠に切り掛かる。

が――――

ドドドドッ！！――

「させると思うかね。」

自身を弓と為した士郎が放った黒鍵にみな貫かれ、吹き飛ばされる。

「行け玖遠！」

「はいっ！やあああああっ！」

右下から左上に切り上げるように左手側の刃を放つ。

「チイイイイッ！！」

ギャリイイイイン

張曼成は咄嗟に右手に持った蛮刀で防ぐが、片手だけでしか持っていなかった為、弾かれる。

「ふっ！！」

玖遠はそのまま槍を半回転させ、右手側の刃で同じラインを切る。

ザシュッ――――

張曼成の体を斜めに裂き、そのまま崩れ落ちる。

「賊将張曼成っ！李厳が討ち取りましたっ！」

ウオオオオオッ――

味方の咆哮が響き、その中心で玖遠が剣を高く振り上げていた。

「おっ、おい、どうする？
大将がやられちまったっ。」

「くそっ、これじゃ逃げた方がいいぜっ！」

張曼成が討たれたという事は賊軍に動揺を走らせ、逃走する者も出始めた。

「やったっ。これで一気に・・・」

その光景を見た玖遠が突撃の命令を下そうとすると、不意に袖を引かれる。

「うん？」

振り返ると士郎に守られた湲里がいた。

「・・・少し・・軍を下げて下さい・・」

「??このまま突撃したらいけないのっ?」

?マークを浮かべながら玖遠が聞くと、

「まだ・・・賊の方には数が残っています・・・ここで突撃すれば・・残った賊は宛にいる本隊と合流しますから・・・後々厄介です・・・

ここは一旦軍を下げ・・・賊の兵力を削りましょう・・・」

玖遠が賊軍の方を見ると、前方の敵は先程の戦いで混乱しているが、後ろからの賊がドンドン押して来てるので、結局押し進んで来る姿が見えた。

「了解した。玖遠。」

「はいっ。後退の合図をお願いしますっ。」

「はい・・・それに・・・そろそろ来るかと・・・」

「来るって・・・」

玖遠が「何が?」と言おうとする瞬間に地響きが聞こえて来た。

「これは・・・馬かっ!」

士郎達の後方から聖が率いる歩兵二千、水蓮が率いる騎兵三千の援軍が到着した。

「我らはこのまま賊の後方に回り込んで退路を絶つ。進めえっ！」

水蓮は槍を振りかざしながらUに囲んでいる自軍の後ろを塞ぐように移動していた。

「私達は中央の部隊の後ろにつきますっ。」

このまま水蓮の包囲を完成させて、ゆっくりと賊を倒しながら降伏勧告を行って成功すれば終わりだが、

（水蓮ちゃんは絶対に前に出たら駄目って言ってたけど・・・）

聖は前方に自分の街を守って戦ってくれてる人がいるのに、それをただ見ているだけなのは我慢できなかった。

「うん。決めたっ。

前に出ようっ！」

「劉表様っ！いけませんっ、蔡瑁様が前に出ないように話して・・・」

側近の兵が慌てて止めようとするが、

「お願いっ！せめて手当てだけでもしたいのっ。」

「・・・分かりました。」

「ありがとうっ！」

そう言って聖は前線に進んで行く。

聖の性格上じっと後方待機するのは中々難しいのだが・・・

「大分減らしたか・・・」

「はいっ。援軍も来ましたし、あと少しですねっ。」

途中から干将・莫耶に持ち替えた士郎は、玖遠と一緒に戦っていた。

湲里は何かあった時の為に、少し後ろに下がっていた。

「ふぅっ・・・」

士郎と並んで立っている玖遠が、少し荒くなった息を吐く。

「どうした?」

「いえっ、その、何とかなったなあってっ!
最初は緊張してて、ちゃんと出来るか心配でしょうがなかったんですけどっ、士郎さんが居てくれると思ったらすっごく楽になってたんですよっ。」

少し顔を赤くし、玖遠は少し早口気味に話す。

「そうか・・・期待には答えられたかな。」

それを聞いた士郎は軽い笑みを浮かべながら答えた。

「そう言えば士郎さんって、わざと殺さないようにしてるんですかっ？」

ふと、戦いながら疑問に思った事を聞いてみる。

「ああ。極力人は殺さないようにしてるんだ・・・戦だから、死人がでるのは当たり前だけど、ね・・・」

士郎は少し辛そうな顔をしながら答えた。

二人が軽く話をしていると、伝令の兵が玖遠に近づいて来た。

「どうしましたかっ？」

「はっ！軍師様の近くに、援軍で来た劉表様の部隊が合流したそうです。」

「劉表さまがですかっ！」

「なんで一国の主が前線近くにいるのさ・・・」

玖遠は驚き、士郎は頭を悩ませる。

湲里が率いている弓兵達は湲理の指示の下、二人が倒した賊の死傷者を片付けさせており、聖は怪我人の治療などをするつもりで前線近くに出て来たので、怪我人も沢山いる湲理の近くにくるのは仕方がない事だった。

「どうしましょうっ？」

「そうだな・・・一度話をする必要があるよなぁ・・」

流石に前線近くに出てこられたら、死んだり怪我をする確率が増えて非常に危ない。

「了解ですっ。」

玖遠と士郎は前線を他の兵に任せて、近くに来ているであろう聖に会いに行った。

「湲里ちゃんは水鏡先生のお弟子さんなんだね～
あっ、その薬取ってくれるかな?」

「はい・・どうぞ・・
学んだ事を・・・少しでも生かせる事が出来ればいいなと・・・」

「ありがと～。
そうだ!この戦いが終わったら私達に力を貸してくれないかな?」

「はい・・・よろしくお願いします・・・」

先程会ったばかりの湲里と聖が、怪我人の治療をしながら話をしていると・・・

「「劉表さまっ！」」

「あれっ・・・玖遠ちゃんと・・・士郎さん？」

玖遠と士郎が到着する。

「劉表さまっ。なんでこんな所にいるんですかっ？」

「水蓮ちゃんにお願いして・・・」

玖遠は以前、水蓮に「才能がある」と見込まれ聖と会って、紹介された事があった。

「蔡瑁さまがっ？でもっ、流石に此処は危ないですよっ。せめてもう少し下がってもらったほうがっ。」

「ううっ・・・ごめんね。」

そんな聖を見て士郎が、

「まぁ戦ももうすぐ終わるだろうし、俺が護衛につくよ。」

と、提案した。

「いいんですかっ？」

「ああ。劉表様の気持ちも分かるから・・・」

聖杯戦争の時、セイバーを助けようとしてバーサーカーの前に出た

りした事がある士郎からすれば、聖の気持ちも理解出来る所があるのだろう。

「士郎さん・・・」

聖が士郎の方を見ていると、急に前線の方が騒がしくなり、数人の賊が士郎達の直ぐ近くまで迫って来た。

「いたぞっ！敵の大将だっ！」

「死ねぇっ！！」

すでに瀕死の傷を負っている賊達は、手持ちの剣や斧を士郎達に向かって投げて来た。

「強化開始（トレースオン）」

自信が纏っている聖骸布を強化し、片方の手で聖を抱え込み、もう片方の手でそれを振るい武器を弾きとばした。

「弓兵構えて下さい・・・てっ！！」

玖遠は湲里を庇うように武器を弾き、湲理は直ぐに弓兵に射撃の準備に入らせ、鉄扇を振り下ろしながら射撃を開始させる。

「ぐっ！！」

「があっ！」

元々瀕死だった賊はその一撃で倒れていった。

「ふうっ・・・危なかったですっ・・」

「はい・・・玖遠さん・・・ありがとうございます・・・」

「渡里ちゃんも命令が早かったよっ。ありがとっ。」

「いえ・・・」

渡里は少し恥ずかしそうにしており、玖遠はそのまま士郎達の方に目を向けるが、

「士郎さんもっ・・・・て・・・何してるんですかあっ！」

玖遠が見たのは聖を抱き抱え、外套で囲んでいる士郎の姿だった。

「？何って・・・何がさ？」

キョトンとしている士郎に対して、士郎の腕の中にいる聖は顔を真っ赤にして大人しくしていた。

「うぁ・・・・」

士郎は自分が抱えている聖が顔を真っ赤にして大人しくしているのを見て、慌てて地面に降ろした。

「だ・・大丈夫ですか！」

どこか怪我をしたのかと思って慌てて聖の無事を確認するが、聖は「う・・うん・・大丈夫です・・」と、弱々しく答えていた。

（奇襲より、士郎さんに抱き寄せられた方がびっくりしたよう・・・
まだドキドキしてる・・・）

聖の無事を確認した士郎はよかったと笑顔を見せていた。

「むーっ！」

「玖遠さん・・・早く・・前線に戻らないと・・・」

むすっとしている玖遠を見て、湲里は前線に戻るように促す。

「はっ、そ、そうですねっ！
士郎さんっ、劉表さまに変な事したら駄目ですよっ！」

「変な事・・・」

「あ、ああ。」

再び顔を赤くする聖とよく分かってない士郎を置いたまま、玖遠は
前線に戻っていった。

「蔡瑁さまっ、配置完了しましたっ。」

「よし、突撃準備に入れっ！」

水蓮は騎兵を率いて賊の背後への移動を完了していた。

「張允、文聘、ちゃんと着いて来いっ！
突撃いっ！！」

――ウオオオオッ――

咆哮を叫びながら突っ込んでくる騎兵は、賊からすれば彼らの戦意を叩き折られるのは当然の光景だった。

しかも――

「げえっ！蔡瑁じゃねえかっ！」

「なんでここにいんだよっ！」

賊の中には荊州で暴れている江賊も混じっている。

彼らからの間では水蓮は「出会ったら逃げろ」とまで言われており、実際に戦っ事があるものもいた。

水上と陸上の差はあるのだが、彼らからすればただの恐怖にしか感じなかった。

「はあっ！！」

手に持っている十字槍「波及」を薙ぎ払い二、三人を纏めて吹き飛ばし、それをかい潜り、近寄ってきた賊は脚甲を付けた脚で馬の勢

いを利用して蹴り飛ばす。

水蓮はそんなに馬術は得意では無いのだが、生まれた時から船上で過ごし、戦でも重いフリウリスピアを船上で振り回して来たので、かなりの平行感覚と腕力、脚力を持っている為、不安定で不慣れな馬上でも槍を振り回す事が出来ていた。

「うおっ！押すな押すなっ！」

「後ろから蔡瑁が来てんだよっ！」

「ホントかよっ！もう逃げた方がいいんじゃねえか？」

「どこに逃げんだよ！周り囲まれてるじゃねえかっ！」

賊軍はもはや完全に混乱しており、それを見た水蓮は降伏勧告を促した。

「賊どもっ！武器を捨て、降伏するのなら命までは取らんぞっ！」

水蓮の言葉に我先にと降伏して行く。

まだ抵抗する者もいたが、勢いを失った賊軍はそのまま押され、新野での戦いは士郎達の勝利で終結した。

1ー5　新野騒乱（3）（後書き）

張曼成（チョウマンセイ）

武器　蛮刀

数え役萬☆姉妹の熱烈なファン。

もともと黄巾党の中でもかなりの力持ちで、さらに大平要術の書でパワーアップ、その力を認められて荊州方面を任されている。

でも力馬鹿なので総大将なのに突っ込んでくる。

そこを士郎達に狙いうちされ・・・

誰か大平要術の書を士郎に知らせる必要があったから、こいつに喋らせました。

戦闘中なのに説明してるので、戦闘の緊張感が台なしになってる感がありますが、作者の力不足です・・・

１－６　仲間（前書き）

なかなか執筆が進まない・・・

後半ＰＣを使ってみたら修正や確認もしやすいし、文章もかなり打ちやすかった・・・

これからＰＣで投稿していったほうがよさそうですね。

その方がモチベーションが高いうちに一気に書ききれる・・・

1－6　仲間

「ふうっ・・・まぁこんなものかな・・・」

水蓮は戦の事後処理を終わらせ、後の事を部下に任せて、休憩を取りに移動していた。

「お帰り水蓮ちゃん。」
「お帰りなさい蔡瑁さまっ。」

「ただいま聖、玖遠。」

休憩場所に行くと椅子に座っていた聖と玖遠、湲里が出迎えてくれた。

「玖遠、水蓮でいいわよ。」

「はいっ、わかりましたっ。」

水蓮が椅子に座ると湲理がいるのに気付く。

「この子は？」

「水鏡先生の所で軍師の勉強してた湲理ちゃんですっ。
この戦で軍師をやってもらってたんですよっ。」

玖遠から紹介されて、湲里が椅子から立ち上がる。

「はじめまして・・・軍師をさせてもらった・・徐庶・・元直・・

真名は湲里です・・・」

「そうなんだ・・・うん、よろしくね。私は水軍都督の蔡瑁　徳珪
　真名は水蓮よ。
今回はありがとうね。」

「いえ・・私でも・・力になりたかったですから・・」

「そう・・・私達は軍師が少ないの、ぜひこれからも力を貸して欲
しいんだけど・・・」

「はい・・・よろしくお願いします・・・水蓮さま・・・」

「よろしくね、湲里。」

二人の話がちょうど終わった所に、士郎がやって来て、水蓮にお茶
を差し出す。

「どうぞ。」

「・・・お前はあの時のっ、
どうしてここにっ！」

「士郎さんは客将として、私に手を貸してくれたんですよっ。」

水蓮は驚き、士郎を警戒するが、直ぐに玖遠がフォローを入れる。

「そうなの？」

「はいっ。私よりも強いですし、戦の経験もあるみたいですっ。」

「それに・・・軍略の方も・・・知識があります・・・」

「そうなのか・・・」

「はじめまして蔡瑁さま。今回客将として参加した衛宮　士郎です。」

「よろしく・・・

ああ、客将なら敬語は要らないぞ。こっちがお願いして手を貸して貰っている事になるからね。

それにお前の敬語はなんか違和感があるから。」

「なんでさ・・・」

水蓮に言われ少し落ち込む士郎。

「よろしくねー。

私は聖でいいよっ。その代わりに私も士郎くんって呼ぶねっ。」

「ああ。よろしく聖。」

「うん。

あのねっ、出来ればこれからも私達に手を貸して欲しいんだけど・・・」

聖にお願いされ、士郎は考える。

「明日まで待ってもらってもいいか？」

「うん。だったら部屋を用意するね。
水蓮ちゃん、空いてる部屋に案内してあげてくれる？」

「分かったわ聖。
士郎、着いて来て。」

そう言って水蓮は立ち上がり、士郎と一緒に出ていく。

士郎と水蓮が並んで歩いていると、水蓮が喋り出した。

「私は余りお前を信用していない。」

「・・・・・」

水蓮がこの国を聖達と一緒に引き継いだ際に、いろいろな苦労があった。

特に善意があるふりをしながら近づいて来て、自分の事しか考えてないような奴らが非常に多く、人を極力信用しようとする聖を守る為に頑張ってきたのだ。

「だけど私達にはまだまだ力が必要だ。
お前は私が勝てなかった玖遠に勝ち、軍師としても知識があるようだ。

他国の武将とまともに戦えるのが玖遠と私だけの今、お前のような人材が欲しいのも事実。」

水蓮は足を止め、士郎の方を向く。

「だが、もし聖達を裏切ったりしてみろ。
その時は絶対に許さんからなっ！」

そのまま水蓮は、士郎に指を突き付けながら言いきった。

「って、まだ協力するとは言ってないだろ・・・」

士郎が慌てて反論するが、

「なにっ！まさか聖のお願いを断るつもりなのかっ！」

と、水蓮が士郎に近寄ってくる。

「ち、近いって！」

「いいかっ。私は嫌だか聖が手を貸して欲しいと言ってるんだ！
それを断って聖を裏切るんなら・・・」

と、水蓮がどんどん士郎に近づいていき、お互いの目と鼻の先にまで近づいて・・・

「あ、水蓮ちゃん。
後の事なんだけど・・・・・」

水蓮に言い忘れた事があった聖が追いかけてきた。

だが今の二人は知らない人が見たら、どう見ても水蓮が士郎にキスを迫っているようにしか見えない状態だった・・・

「す、水蓮ちゃんに先越されたーっ！」

そう叫んで聖が逃げていく。

「ああっ、聖っ！違うわよっ！」

慌てて士郎から離れ、言い訳をするが、既に聖はいなくなっており、怒りの矛先が士郎に向かうのは仕方がない事だった。

「・・・・しーろーうーっ」

「なんで何もしてないのに、一気にややこしくなるのさ・・・」

そう言いながら水蓮との距離を開け、（そう言えば始めて名前で呼んでくれたな）と考えながら逃走を開始した。

「逃げるなーっ！」

「俺が何をしたーっ！」

逃げるのはいいが、士郎が知っている所で周りに迷惑がかからない所と言えば玖遠と戦った訓練場しかなく、　そこに逃げ込んだ士郎はなし崩し的に水蓮と一戦交えることになった・・・

もちろん士郎が勝利したが。

その後、落ち着いた水蓮に空いてる部屋に案内してもらった。

夜ーー

水蓮　ｓｉｄｅ

「疲れた・・・」

寝具の上に転がり、そう呟く。

ここ数日は戦の準備と移動等で、ろくに睡眠がとれなかった為、ゆっくり眠れるのは久しぶりだったのだ。

「衛宮　士郎か・・・」

昼間に一戦交えた、あの士郎の事を思い出す。

「流石に玖遠に勝ったらしいから私は勝てないと思ってたけど、あれは強すぎね・・・」

ちょっと冷静じゃなかったとはいえ、そこらの武将より強い自信はあった。

だが私の刃は士郎にはとどかなかった。

突く時と引く時に攻撃できる十字槍の特性を生かし、距離をとり、圧倒しようとしたが全て避けられた。

平突きの後、士郎の後ろにある穂先を９０度回し縦にし、見えない所で攻撃の位置も変えたりしたが、するりと半身ずらして回避された。

結局、攻撃が届かず焦った私の隙をつかれて接近され、慌てて槍の石突きの部分で迎撃しようとしたが、それすらも読まれ、動き始めをあいつが持っていた短剣に止められ、もう片手にある短剣を突き付けられて敗北した。

「でも、あれだけの武ならば孫策や甘寧と十分過ぎる位に戦える。」

前に孫堅と戦った際、水軍の指揮ではほぼ互角だった。

だが敵軍の中にいた孫策や甘寧を見た時、個人の武では敵わないと言う事が嫌と言う程分かってしまった。

とてつもない才能の差・・・

「あれは反則よね・・・
努力して追い付こうとも思わない位・・・」

だが、士郎は違った。

カンや才能じゃない、磨きあげた技術と、鍛え上げた力の結晶。

「士郎に鍛えて貰えば、私も孫策や甘寧達と互角以上に戦えるようになる。」

だったらやっぱり仲間になって貰った方がいいのよね・・・

ちょっと嫌だけど・・・

いろいろ葛藤しながら水蓮は、そのまま眠っていった・・・

兵舎の上に、士郎の姿があった。

そこには物見用の高台があり、そこからは月に照らされる新野の街が一望できた。

川沿いからの風を浴びながら、昼間、聖に仲間に誘われた事を考えていた。

（宝石翁が言っていた協力者を見つけないといけないけど、この広大な中国を捜し回るよりは、人の出入りが多いこの軍にいた方が情報を集めやすい。

それに張曼成が言っていた書も気になる・・・）

書を調べるのなら、戦のドサクサに紛れて入手するのが1番犯人がばれにくく、士郎の実力なら簡単で確実。

その事を考えても、既に繋がりがある、この軍に参加して黄巾党と戦うのが一番ベストなのだが・・・・

（ここは参加した方が良さそうだよなぁ）

軍に参加して戦うとなれば、少なくない数の人を殺してしまう事になるが、もう既に黄巾の乱は始まってしまっている。

このまま何もしないよりかは、自分も参加し、戦の終結に手を貸した方が良いだろう。

そうやって考えていると、背後から声をかけられた。

「こんばんわ。あんまり風を浴びると体に悪いですよ?」

「聖・・・」

そのまま聖は士郎の横に歩いて来た。

「眠れないんですか?」

心配そうに、聖が士郎の方に目を向ける。

それをみた士郎は、苦笑いを浮かべながら答えた。

「昼間の事をちょっとね・・・」

すると聖は顔を赤くして話し出した。

「あっ！あれですか・・・
士郎くん何時の間に、水蓮ちゃんとあんなに仲良くなったんですか・・・」

「？追いかけ回されたりはしてたけど・・・」

仲良く見えたのか？と、士郎が考えていると、

「お、追いかられたっ！
確かに水蓮ちゃんの方から、士郎くんにせまってましたけど・・・」

「せまる？何をさ？」

「えっ・・・そ、その・・・接吻を・・・」

士郎がフリーズする。

聖は何かモジモジしている。

「な、なんでさっ！」

慌てて士郎は否定して、事情を話した・・・

「士郎くん水蓮ちゃんに勝ったんですかー」

「まあ、なんとかね。」

何とか誤解が解けた士郎は、そのまま聖と話し続けていた。

「じゃあ昼間の事っていうのは・・・仲間になる話ですか？」

「ああ。その事で聞きたい事があったから、ちょうど良かったよ。」

「聞きたい事？」

少し間を開けてから、士郎は聞いた。

「聖、キミが大守をしている理由。」

「理由・・・」

しばらく考えた後、聖は話しだした。

「恩返しですね。」

「恩返し？」

聖は軽く頷き、

「名前で分かるとは思うけど、私は漢王朝の血を引いているんですよぅっ。
それで私がちっちゃい頃に、此処の太守に任命されたお母さんと一緒に来たんです。
その前は確か西涼の方にいましたねー」

西涼は中国大陸の一番左上の位置にあるが、それに対して襄陽は真ん中より少し下にある。

「かなり遠いよな・・・」

「そうなんですっ！もう大変だったんですよぅっ！」

当時を思い出し、聖は目に見えて落ち込んでいった・・・

「でもですね、この国の人達がとても良くしてくれたんですよ！」

（ほぼ中国の中心にあるし、旅人やよそ者がおおいから、そういう風な人が多いんだろうな。）

急に元気になった聖にびっくりしながらも、士郎はそう結論づけた。

「来たばかりの時に水蓮ちゃんとも仲良くなれましたし、とっても楽しかったんですよ。」

すると聖は少し悲しそうな顔をして、

「でも、お母さんが病気で亡くなったんです・・・」

「・・・・・」

士郎も親が亡くなるという似たような経験がある為、聖の悲しみは痛いほど理解できた。

「それで急遽、私が大守に選ばれたんです。」

「そうだったのか・・・」

聖はそのまま月に照らされる新野の町並みに目を向ける。

「最初は分からない事ばかりでした・・・
それでも水蓮ちゃんや、蓬梅ちゃんや鈴梅ちゃん、この国の人たちに支えて貰って何とかやってきました。」

「・・・でもここ最近はずっと戦ばかり起こっています・・・
この国も土地柄、よく狙われます・・・」

「交通の便の良さと豊富な食料・・・」

聖は士郎の指摘にうなづき、

「最初は流されるまま太守になっちゃいました。
でも、そんな私を優しく支えてくれたこの国の人たちを戦火から守りたいんです。
戦なんて無い方がいいに決まってます。でも私には力が無くて・・・
けれど私一人じゃ無理でも、水連ちゃんや士郎くんがいればもっと沢山の人が救えるんです！
士郎くん、私に力を貸してくださいっ！」

聖は目に涙を浮かべながら士郎に頭を下げる。

「聖・・・俺はなりたいものがあるんだ。」

「なりたいもの・・・？」

「すべてを救う　正義の味方。
親父と約束したんだ。」

「お父さんとですか・・・」

士郎は軽く頷く。

「ああ、そのために力や知識をつけて戦い続けてきた・・・
けれど一人では無理だったんだ。
どうしても犠牲がなくならなかった・・・」

「士郎くん・・・・」

悲しそうな目で士郎を見つめる

「だけど聖達と力を合わせれば一人では無理だった事もきっとできるようになる。
だから・・・これからよろしく聖。」

聖は花が咲いたような笑みを浮かべ、

「うんっ、ふつつかものですが、よろしくお願いします。」

と危険な台詞を口にして、青い髪を士郎の胸元におしつけながら抱きつく。

「それはいろいろと違うっっっ！」

「なんかお母さんが男の人にはこれが一番利くっていってたんだけど・・・」

（確かに破壊力は中々だった・・・）

新野の夜は過ぎていく・・・

（いいよな・・・親父、イリヤ・・・）

１－６　仲間（後書き）

次は本格的な黄巾党との戦いになっていきます。

ここまでがおおきな流れではプロローグになりますね。

ここまで執筆するのにだいぶ時間がかかりましたけど・・・

どの作家さんにも言えることなのですが、応援してくれる人がいれば、かなりやる気になります。

私もがんばって精進していきますので、よろしくお願いします。

誤字等ありましたら教えてもらえるとうれしいです・・・

2－1　黄巾の乱（前書き）

前回の投稿から約一ヶ月・・・

一週間に一話位のペースで投稿していきたいですけど、
なかなか難しいです・・・

とりあえずスピードを上げていけるように頑張りたいですねぇ・・・

2－1　黄巾の乱

「客将だけど、士郎くんが仲間になってくれましたーっ。」

朝、全員が集まって食事を取る前に聖が昨日の報告をした。

「とりあえずよろしく頼む。」

士郎が深々と頭を下げながらあいさつをする。

「よかったですっ！
やっぱり心強いですねっ！」

「はい・・・私としても・・非常に嬉しいです・・・」

「ふう・・・とりあえずよろしく頼む。」

どうやらここにいる全員は賛成のようだ。

まあ太守である聖たってのお願いなので、配下になる水蓮たちは強く反対するわけにもいかないし、
今更の事である。

「だけど聖、蓬梅や鈴梅に言わなくても大丈夫なの？」

「・・・たいじょうぶだよー・・・多分・・・」

聖は一瞬「うっ・・」という顔を浮かべるが、強引に納得した。

「えっと・・・たしかカイ良さまとカイ越さまでしたよねっ？」

「そうよ。この国の内政を仕切っているのよ。」

玖遠の質問に水蓮が答える。

「なにか・・・問題でも・・・？」

「ああ・・・あいつら姉妹は聖が大好きだから・・・
玖遠や援里みたいに女ならともかく、士郎みたいに男が近づくのを
嫌がるんのよね・・・」

援理の質問に、水蓮が頭を悩ませながら答える。

「聖が大好きでしょうが無いのは水蓮も一緒じゃ・・・」

「な・・・なな・・・・何のことだっ！
私にはそんな覚えは無いぞっ！」

士郎の指摘に水蓮は顔を真っ赤にして否定する。

すると、

「そうなんだ・・・水蓮ちゃん、私のこと好きじゃないんだ・・・」

そこには落ち込んだ聖がいた。

「え・・ええっ！聖ちがうわよっ、そんなことないからっ！
・・・・・しーろーうーっー」

「ええっ、なんでさっ！」

「とりあえずお前がわるいーっ！」

水蓮が士郎を追いかける。

昨日の再現である。

「・・・賑やか・・・」

「あははは・・・まあいい事ですよっ・・・」

巻き込まれないように二人から距離をとった玖遠と援里は、

のんびりと士郎お手製の朝食を食べることにした。

「このお汁っておいしいですねっ！」

「・・・じゃがいもを・・・磨り潰して作ってました・・・」

「なんか、ぽたーじゅって言うんだって。」

いつの間にか聖も加わってのんびりと朝食を食べる。

「お前がいると調子が狂うっ！何をしたーっ！」

「何もしてないって！」

「・・・やっぱり士郎さんのお料理はおいしいですっ。」

「・・・ですね・・・」

今日もいつも通りの朝になりそうだ。―（二人を除く）

「黄巾の乱・・・・ですか・・・・」

「うん、張角っていう人を中心にして、頭に黄色い布を巻いて反乱を起こしているから、
それを討伐せよ！
だって。」

今日の朝送られてきた「勅命」を読みながら聖が答えた。

「そういえば、先の戦でもそれらしいひとが大将でしたねっ。」

「そうだったな。」

先の戦で張曼成と対峙した玖遠と士郎が答える。

「それで・・・他には何か・・・？」

援里が、他に何か書いてあるのかを聞く。

「うん・・・まずは一週間後に、宛に居る黄巾党を西涼の董卓さんが討伐するから、私達もそれに参戦しろっていう指令になってるよ。」

「官軍はなにをしてるのよ・・・」

「宛を占拠されている時点で、もうまともには機能していないと思う。」

呆れながら話す水蓮に士郎が答える。

「それもそうね・・・
で、どうするの聖？」

水連の問いに、聖は一瞬考え、

「さすがに勅命だから・・・参加しないと、不敬罪に問われるからね・・・」

「分かったわ。とりあえずそれまで兵を休ませておくわね。」

「私も・・・宛に斥候を出しておきます・・・」

「うん。お願い水蓮ちゃん、援里ちゃん。」

「あのー私はどうすれば・・・」

皆の話に、途中からついていけなくなった玖遠があわあわしながら質問する。

「とりあえず私について来なさい。
兵への指示とか編成、いろいろ教える事があるから。」

「あのーーー、私そういうの苦手なんですけどっ・・・」

玖遠がかなり渋い顔をしながら答えるが、

「だめですっ！将軍になったんだから覚えてもらわないと！」

そのままズルズルと引きずられていく・・・

「うーーっ、士郎さーん」

「とりあえず俺もついて行くか。」

水蓮達に士郎が合流し、

「士郎も来るの？」

「ああ。兵の訓練とかなら手伝えると思うし、
どうせ勉強するなら一緒のほうがいいだろ。」

「助かるわ。
あ、終わったら手合わせをお願いしてもいい？鍛えなおしたいのよ。」

「了解した。」

「じゃあ私は街の偵察でも・・・」
と聖が街に行こうとすると、
「聖・・・・」
「な、なにかな水蓮ちゃん・・・」
右手に玖遠、左手に波及を持った水蓮に、じと目で睨まれ、
「せ・い・む・を・し・な・さ・い！」
「ううっ・・・」
「援里、見張りお願いできる？」
「はい・・・偵察を出したら・・・私もしますね・・・・」
「士郎くーん・・・」
水蓮と援里に逃げ道を塞がれた聖は士郎に助けを求めるが、
「し・ろ・う？」
「ごめん無理。」
水蓮のプレッシャーにあっけなく降参した。
「士郎さんは貰っていきますねっ。」

「次は私の番だからね！」

玖遠と聖がよく分からないバトルを始めている・・・

「？俺がどうかしたのか」

「気にしないほうが・・・いいかと・・・」

どたばたしたまま各々は自分の作業に移っていった。

「人の数が凄いな・・・」

水蓮たちとの訓練が終わった士郎は新野の街を歩いていた。

本格的に黄巾党の反乱が始まり、戦火を逃れる為に荊州に大量の人が流れて来ているせいだった。

（これは街の拡張工事をする必要があるな・・・

それに工事を行えば仕事を増えるだろうし。）

いろいろ考え事をしながら歩いていると、本屋に積まれた本の隙間から、ベレー帽が見える。

「あれは・・・援里？」

近づいて見てみると大量に積まれた本の塔に囲まれている援里がいた。

士郎が呆気にとられていると、援里の方から声をかけてきた。

「士郎・・・さん・・？・・・どうか・・したんですか？」

「あ、ああ。ちょっとびっくりしただけだよ。
これ、全部読むのか？」

「一回は・・・・全部・・・・読んでますよ・・・・」

「この量をか・・・・」

士郎は積まれた本の山を見て絶句した・・・

「いまは何を読んでいるんだ」

士郎に聞かれた援里は本を差し出す。

それにはこう書いていた。

「悪の戦争教本ボリューム１」

「・・・・・・なんなのさ・・・これ・・・」

「太公望さんが・・・書いた兵法書です・・・・すごい勉強になります・・・」

（三略・六韜じゃないのかそれは？
しかもボリューム１って、なんでそこは英語表記なんだ・・・・）

本当に今の時代が後漢なのか自信がもてなくなった士郎だった・・・

「そういえば政務の方・・・というより聖は大丈夫だったのか？」

朝に繰り広げられた事を思い出して、士郎が尋ねる。

「聖様は・・・・江夏の八俊と呼ばれているくらいの文化人ですから・・・
私は・・・昼からは・・・自由にしてもいいって・・・言われました。
士郎さんは・・・・何をしてたんですか？」

「ああ、俺も一段落ついたから、街を見て回ってたんだ。
俺も混ぜて貰ってもいいかな？」

士郎に聞かれた援里は少し困った顔を浮かべて、

「え・・・でも・・・本を読んでるだけですし・・
そんな私と一緒にいても・・面白くないですよ・・・」

「俺も、本を読む時はのんびりと静かに読むのが好きだしね。
それに、いい本があったら紹介してもらいたいし、援理と一緒にい

るのは好きだぞ？」

そう言うと、少し赤くなった援里は横にずれ士郎の座るスペースを空けた。

士郎が「そういえば営業妨害になるんじゃ」と思って、店主の方を見ると

「ごゆっくりー」という返事が返ってきた。

「大丈夫なのか・・・」

とりあえず、援里の横に座った士郎はお勧めの本を受け取り、そのまま読み始めた。

「ん？」

ふと、周りを見渡す。

日が大分傾き、空は茜色に染まっていた。

「もうこんな時間か・・・」

沢山いた街の人も大分減っていた。

「そろそろ帰るか。」

そういって援里の方を見ると、そこには士郎にもたれ掛かって眠っている援理がいた。

「寝ちゃったのか・・・・
まあここ数日は特に急がしかったからな・・・援里もこの前の戦が初陣だったな。」

士郎は援里を起こさないように背負って、いくつか気に入った本の会計を済まし
そのまま聖たちがいる兵舎に歩いて行った。

援里　ｓｉｄｅ

ゆらゆらと揺れる。

あれ・・・私・・・どうなってるんだろ・・・・

頭がうまく回らない。

秋に季節が移りつつあり、長江からの風も冷たく、
私は目の前にある「暖かいもの」にぎゅっとしがみつく。

暖かい・・・それに、不思議な匂いがする。

決して不快なものではなく、私を落ち着かせる匂い。

本能で理解する。お父さんはいないけど、きっとこういうものなんだろうと。

士郎さんに背負われているというのは理解している。

いつもの私なら、すぐに降り、謝っている。

けど、今は、このぬくもりに甘えていたい・・・

いいですよね・・・士郎さん・・・

2－1　黄巾の乱（後書き）

いよいよ本格的な黄巾の乱に入っていきます。

黄巾の乱の間は、董卓軍との共同戦線になります。

これで、やっと次話から原作キャラとの絡みに入っていきますね。

といっても戦ばかりだし、
キャラが増えると執筆が大変になりますが・・・

頑張っていきますので、応援よろしくです。

後、「悪の戦争教本ボリューム1」についてですが・・・・

私が一番好きな漫画のネタです（笑）

2－2　宛攻略戦（1）（前書き）

おまたせしました。
一ヶ月ぶりの投降になります。

ゆっくりとですが進んでいきますので、
これからもよろしくお願いします。

また誤字、脱字等ありましたら教えてもらえるとありがたいです・・・

あと名前の方で援理の「理」を「里」に修正しています。

2－2　宛攻略戦（1）

「それでは軍議を始めますねー」

全員が集まった所で、今日まで集めた
宛にいる黄巾党の情報確認と軍議が聖の声で始まった。

「じゃあ援里ちゃん、敵軍の詳しい情報をお願い。」

「はい・・・敵軍の大将は趙弘・・・副将は韓忠と孫夏・・・・兵の数は三万ほどです・・・」

聖に促された援里が、今日まで密偵を使って集めた情報を話し出す。

「それと・・・張曼成がやられたせいで・・・士気がかなり下がっています・・・
けど・・・兵糧はそこそこあるみたいなので・・・篭城されると厄介です。」

「うん、ありがとっ。
水蓮ちゃんこっちの方はどうなってるの？」

「こちらは投降した兵や、新たに補充したのを合わせて約二万。
董卓の所は二万五千の兵で攻め込むみたいね。」

「董卓と合わせて四万五千か・・・
攻城戦を行う際は、攻め手は守りの倍の兵数を準備するのが基本だし、
多い方がいいんじゃないか？」

「はい・・・少ない位ですけど・・・・水蓮さん、玖遠さん、士郎さんがいますし・・・
こちらの方が士気もたかいですし・・・数の不利はどうにかなるかと・・・・」

士郎の意見に援里が答える。

「あの～私達が出たら、誰がこの街の守備につくんですかっ？」

「大丈夫よ玖遠。霍峻がいるし、私が連れてきた張允、文聘もいるから
陸や海からきても、そうやすやすとは負けないわ。」

霍峻は守戦がうまく、張允、文聘は水蓮直属の部下。

そこらの江賊では相手にもならないだろう。

仮に袁術が攻めて来たとしても、まずは江夏だろうし、そもそもあっちも黄巾党の相手で、それどころではないだろう。

「うん。じゃあこれで軍議は終了するね。
準備が出来たら出陣しよう。」

聖の号令で軍議が終わり、各々は出陣の準備に取り掛かっていった。

新野を出てから数日、士郎達は宛城を朧げながら目視出来る所まで来ていた。

「あれが宛・・・・
なんか高い所にあるねー」

聖が宛を見て呆気に取られる。

宛は、北は長安、洛陽、陳留といった大都市があり、
東にも許昌という長安と同じクラスの大都市がある。

他にも、南に新野、南西に上庸があり、非常に戦が起きやすい都市だ。

その為、宛は小高い丘の上にあり、道も東西南北に一本ずつしかない為、攻め難く、守りやすい。

しかも、西には武関という門があり、長安から攻めるとなると、
そこも突破しなければならない。

と、士郎が玖遠に説明しながら進んでいると、そこから西の方に軍があるのが見えた。

「確か董卓さんは上庸から来た筈だから・・・
あれが董卓さんの軍だね。行ってみようっ。」

聖の合図で董卓軍と思われる所に移動を開始し、
もし間違えて黄巾党だったら危ないので、士郎と水蓮が先行して近づいていった。

「なあ・・・ふと思ったんだけど・・・」

「なによ？」

士郎が自分の服装を指差しながら、

「さすがに怪しまれたりしないよな？これ？」

今、士郎の装備は毎度おなじみのアーチャー装備。

水蓮はそれを見ながら、

「・・・さすがにいきなり攻撃してくるような奴はいないと思うけど・・・」

そう、いくら怪しいからといっても、たった二騎でせめる馬鹿はいないし、
仮に敵だとしても、こういう場合なら普通、何らかの交渉の使者と考えるのが当たり前である。

・・・・そう普通の将なら・・・・

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！

「誰か近づいてくるな。」

士郎が董卓軍の方を見てみると、一騎の武将が近づいてくる。
なぜか大斧を構えながら・・・・

「まずいっ！！」

先に注意していた士郎はそれに気が付くが、水蓮はまだ意識が完全にそっちに向いていない。

「はあああああああっ！！」

近づいてきた武将の咆哮が聞こえる距離になった時、水連も気が付くが、
もう既に目の前まで近づいており、敵?は反応が遅かった水蓮を最初の目標にしたようだ。

「えっ？」

一瞬、水連の思考が停止するーーーー
その時水蓮の目に写ったのは、
武器を振り上げ、
突撃の勢いのそのまま、
振り下ろされた一撃が、
水蓮の身に迫ってくる光景だった。

～　水蓮　ｓｉｄｅ　～

すべての動きが遅く感じる。

（これが走馬灯っていうやつかしら）

上から迫る斧を見るが、今からでは防御は間に合わないし、、
仮に間に合ったとしても、この勢いでは武器ごとやられるだろう。

（はぁ・・・・しゃくだけど、士郎・・・聖の事、任せたわよ）

目を瞑り構えるがーーーー

グイッ！

（えっ？）

横から引っ張られ、何か暖かいものの上に着地した。

「大丈夫かっ！水蓮！」

ぎりぎりのタイミングで水蓮を抱き抱えるようにして助けた士郎は、
その体制のまま水蓮の怪我の確認をする。

「う、うん。」

急な展開に頭が真っ白になっているようだ。

（どうやら傷は無いみたいだな）

士郎が簡単に身体のチェックをし、そのまま抱き抱えて移動する。

全力の攻撃を空ぶったせいで大きくバランスを崩し、少し距離が出来たので
水連を移動させ、干将・莫耶を構える。

「はあーーーっ」

「くっ！」

ギインッ！！

再度、突っ込んできた斧の一撃を下に流す。

さっき水蓮を助ける為に、馬から落馬しているので位置関係で見れば不利になる。

（さすがに重いな・・・）

そのまま斧の刃を士郎の方に向け、振るってくる。

士郎はバックステップ距離をとり、そのまま再度相手の方に跳び、馬に跳び蹴りを放つ。

「なにいっ！！」

強引に斧を振るっていたせいもあり、そのまま相手の馬が倒れる。

「ちっ！」

軽く舌打ちをして相手は地面に降り立ち、大斧を構え士郎を睨みつける。

薄紫の髪で、キツメの目付きをしている。

「いきなり何をする？」

「黄巾党の癖に何を言うか！
この華雄が居る限り月には指一本触れさせん！」

「なにか誤解をしているようだが、
私達は劉表軍の者だ。」

すると華雄は士郎の服装に目を向け、

「ふん、そんな変な服の奴が劉表軍のわけがないだろうっ！」

ブンッ！

横薙ぎに振るって来た斧を、士郎は下がってかわす。

「どうやら話し合いでは解決しないようだな。」

士郎が両手をだらりと下げながら答える。

「いくぞっ！！」

そう叫びながら華雄は斧を振り回してくる。

ヒュゴッ！

斧の重さも相俟って凄まじい音をたてながら、かわした士郎のすぐ傍を通過する。

しかしーーー

（膂力は中々だが、まだ武器に振り回されているな・・・）

攻撃せずに回避しつづける士郎。

「くっ・・・その武器は飾りかっ！」

「ふっ。当ててから言うんだな。」

（このまま避けていれば体力が無くなるだろうな・・・
そこを貰うか。）

そう考えながら何回か避けていると、だれか馬に乗って近づいて来ている。

（新手か？

だが少女もいるからそれは無いか・・・）

近づいてくるのは三人。

援理と同じくらいの身長で薄紫色の、セミロングで毛先に軽いウェーブがかかっている娘と
腰まである緑の髪を三つ網にして、眼鏡をかけている娘の二人と、
華雄と同じくらいの身長で紫の髪で胸にサラシを巻き、薙刀を持っている三人だ。

その中の薙刀を持っている娘が叫ぶ。

「このアホッ！！何勝手に戦いよるんや！！」

すると華雄の動きが止まり、

「霞っ！」

「一昨日の軍議で言うとったやろ！
もう少しで劉表のとこが来るって。」

すると華雄はシュンと落ち込み、

「だけどこんな怪しい奴はそうそう居ないだろうっ！」

するとそれをみていた眼鏡の娘が、

「あのね、どこに二万以上の軍勢に二人で突っ込む馬鹿がいるのよ。」

「うっ・・・・」

士郎が、三人が言い合いしているのを見ていると、声をかけられる。

「あの・・・・」

「ん、きみは・・・？」

声をかけてきたのは小柄な薄紫の髪の娘だ。

「今回は私の部下が迷惑をかけてしまってすいません・・・・」

非常に申し訳なさそうな顔をしながら誤ってくる。

「私の軍と言う事は・・・あなたが董卓さまですか？」

「あっ・・・はい。」

（これが後に暴君とまで言われた董卓なのか？
まったく繋がらないな・・・）

そうしていると、座っていた水蓮も近寄って来たので、士郎が声をかける。

「大丈夫なのか？」

「ええ・・・その・・・ありがとうね、士郎。」

「あ、ああ。」

（なんかいつもと反応が違う・・・）

「で、士郎は大丈夫・・・って怪我してるじゃない！」

少し赤くなった顔をごまかしながら、水蓮が士郎の後ろに回り込んで見てみると
手や首すじのあたりに血が滲んでいた。

「ああ、馬上から落ちたからな・・・・
まぁただのかすり傷だし大丈夫だろ。」

「まったく・・・・・？どうしたんですか董卓さま？」

水蓮が傷を見ていると、董卓が近づいてきた。

「あの・・・しゃがんで貰えますか？」

「あ、ああ。」

士郎がしゃがむと、董卓は自分の服の袖で士郎の傷口を拭き始める。

「と、董卓さまっ！私がしますからっ！
服が汚れます！」

それを見た水蓮が慌てて止めに入るが、

「いえ、私達のせいですから・・・・」

「ですが・・・・」

三人がそのまま会話していると、眼鏡の娘が近づいてくる。

「ちょっと！そこのアンタ、月に何させてるのよ！！」

「君は・・・？」

「ああっ！もう、月っ！服が汚れてるじゃないっ！」

そのまま董卓を止めに入ろうとするが、

「だめだよ詠ちゃん・・・私達のせいで怪我させちゃったんだから。」

「う・・・それはそうだけど・・・」

なぜか士郎を睨みつけたあと視線を逸らす。

「ほら・・・藍さんも・・・・」

すると、落ち込んでいる華雄が士郎と水蓮に近づいてきて、

「その・・・・すまんっ！」

「まあこっちも紛らわしい服装だったからな。」

「そうね・・・これから一緒に戦うんだし、水に流すわ。」

「そうか・・・ありがとう・・・」

「じゃあ・・・私達の駐屯地に行きましょう。」

董卓がそう促したので、士郎は聖達を呼び、駐屯地に向かっていった。

「災難だったねー」
「他に怪我は無いんですよねっ？」

聖達に心配されながら軍議の席に着く。

「とりあえず自己紹介からですね・・・私は董卓　仲穎　真名は月です。」

董卓の発言に周りがざわめく。

「月！真名をなんで真名を・・」

眼鏡の娘が慌てて止めに入るが、

「いいんの詠ちゃん・・・・これから一緒に戦うんだし、
あんまり壁を作りたくないから・・・」

「はぁ・・・分かったわよ・・・ボクは賈駆　文和　真名は詠よ。」

「次はウチやな。ウチは張遼　文遠　真名は霞や。」

「私は華雄　真名は藍だ。」

「よろしくお願いしますね。私達は・・・・」

そのまま聖達も自己紹介を終わらせ、宛の攻略について話始めた。

「とりあえず・・・今はどうなっているのかな?」

聖が現状を聞くと

「一度、ボク達で当たって見たんだけど・・・
あいつら城からまったく出てこなかったのよね・・・」

「あれはアカンわ。怯えてしもうとる。」

「ふん大方私の武に恐れを・・・「多分先の新野の戦いで奴らの大
将が死んだからだな」
っておい士郎!私の話を遮るなっ!」

なんか怒ってる藍を無視して話を進める。

「このまま・・・強引に押し通す事も出来ますけど・・・・
損害を考えるとあまりしたくありませんね・・・・」

宛を攻略しても戦いはまだ続くだろう。
援里の言葉に全員が頷く。

「じゃあどうするんですかっ？」

「攻城兵器を持って行くにも、あの坂を登ってたら
「的にしてください」って言ってるみたいなものだしね・・・」

玖遠と水蓮が頭を悩ます。

「ここはやっぱり埋伏させて城門を開けさせたほうがいいわね・・・
援里、密偵は何人位潜ませてるの？」

「だいたい・・・３０人位ですね・・・」

「それならボクの所と合わせて５０人位か・・・・
あとは誰か忍びこんで貰って指揮して貰えばいけるわね・・・・」

詠が回りを見回す。

「こっちは・・・・霞ね。頼んだわよ。」

「えーっ、ウチなん？
出来れば外で動きまわりたいんやけどーー」

「あのね・・・アンタ以外になると、あとは藍だけよ。
無理に決まってるじゃない。」

するとその話を聞いていた藍が、

「ちょっとまて！どういう意味だ！」

「アンタが忍び込めるわけ無いでしょうが！」

「なにっ・・・・・」

「ほら・・・あの・・・・藍さんは最初に戦った時に威嚇してたから、
敵軍に顔がよく知られてるからだよ。」

藍が更に噛み付こうとすると、月がフォローする。

「詠ちゃんも喧嘩しちゃダメだよ・・・」

「ごめん月・・・・
それで、そっちの方は誰が出るの？」

援里は少し考えながら、

「軍のことを考えたら・・・・水蓮さんは残って貰いたいので・・・・
士郎さん、お願いできますか？」

「了解した。」

「えーーーっ、私も士郎さんと一緒がいいんですけどっ？」

玖遠が抗議するが、

「新野の戦いで張曼成を倒したのはキミだろう・・・」

「あ・・・そうでしたね・・・・」

士郎につっこまれる。

「それで・・・・いいですか・・・・聖さま・・・・」

「うん、大丈夫だよ。月ちゃんは?」

「はい・・・皆さんよろしくお願いしますね。」

そのまま軍議は終了し、

「あ・・・・士郎さんと・・・・霞さんは黄巾党の服を渡しますから・・・・後で来てください。」

援里にそう言われたので、士郎と霞は一緒に援里の部屋に向かって行く。

「明日はよろしくな。」

「よろしく頼むでー。確か士郎やったな。頼りにしとるでー」

士郎は苦笑を浮かべながら、

「まあ期待に答えれるようには頑張るさ。」

「いやーー藍との戦いはちょっとしか見れへんかったけど、かなり出来るやろ。」

「そういう霞もだろ。」

「分かるんか？
また時間が出来たらウチと戦ろうで！」

「なるほど。少し戦闘狂なんだな。」

「やっぱし強い奴と戦うんはゾクゾクして楽しいやろ？
恋の相手するんは、ウチじゃちょっと力不足やったからなぁ・・・」

士郎は初めて聞く名前が出てきたので聞いてみる。

「その人は？」

「ああ、呂布って言う奴なんやけど、これが無茶苦茶強いんや。
今は涼州の韓遂って言う奴が反乱起こしてなぁ。
陳宮って言う軍師と、徐晃って言うウチと同じくらい強い奴と一緒に鎮圧にむかっとんや。
終わったらまたと合流するみたいやで。」

「そうなのか・・・・」

（三国志最強の武将呂布・・・どれ位の強さか気にはなるな・・・）

士郎が考えていると、

「ほら、ぼけーっとせんではよ行こうで！」

霞に手を引っ張られる。

「うわっと、あ、ああ。」

そのまま援里の部屋に行ったが、そこには援里に手をつないでいるのを見られ

「もう・・・そんなに仲良くなったんですか・・・」と、じと目で見られた士郎がいた・・・

2－2　宛攻略戦（1）（後書き）

次は宛城への潜入→攻略になります。

地形や都市の位置関係は三国志１１をベースにしています。

あと、華雄の真名ですが、董卓軍は陳宮以外は
全員一文字の漢字で二文字読みなので
それを考慮してイメージ「らん」→藍にしてみました。

2－3　宛攻略戦（2）（前書き）

目標は二週間に一話位かな・・・

2－3　宛攻略戦（2）

「この陣は捨てるっ！
引けーっ！」

董卓軍の駐屯地から宛城の間位に五千人程で陣を作っていると、
さすがに宛にいる黄巾党も迎撃しに出て来た。

やはり近くに陣を作られると、精神的に良くないものがあるのだろう。

陣が完成する前だった為、幾つかの食料や武具も黄巾党に持っていかれたが、
作戦通りの事なので、撤退する水蓮は別の事を心配していた。

「後は頼むわよ士郎、霞・・・」

そう呟いていると前方に董卓の軍が見える。

撤退の支援に来たのだろう。

その最前列にいる藍に向かって、

「適当な所で引き上げてよっ。」

「任せろっ。我が武を黄巾の奴らに見せつけてやるっ！」

そう言いながら得物の金剛爆斧を振りあげる藍。

その様子を見ながら、

（・・・大丈夫かしら・・・）

と思いながら本陣に引き上げていった。

宛城の中を黄巾党の服を着た士郎と霞が歩いている。

「うまく紛れ込めたな。」

「そやなー
けどなんか拍子抜けするわ。」

それを聞いた士郎は軽く笑いながら、

「運が良かったよ。ちょうど密偵で忍び込んでた奴に会えたしな。」

士郎達が黄巾党の服に着替えて、黄巾党に紛れ込む時、
ちょうど密偵で忍び込んでいた奴が伍長を務める部隊に合えた為、
スムーズに紛れる事が出来た。

「はぁ・・・出来ればウチの武器持って来たかったんやけどなぁ・・
・」

「流石にあれは目立つだろ・・・」

士郎の干将・莫耶は服の中に隠せるので今も持っているが、霞の飛龍偃月刀は流石に大きすぎるし、ただの兵士が持つには違和感がありすぎる。

「そやけど・・・これじゃ調子が出えへんわ。」

そう言って腰に差している長剣を触る。

「一応手は打ってるから、うまくいったらまた後で渡すよ。」

「？まあええわ。頼むでー」

そう言いながら、他の密偵や黄巾党の人たちが集まっている広場に移動する。

そこには酒を飲みながら大騒ぎしている奴ばかりいた。

ずっと宛城に引きこもっていた黄巾党からすれば、酒を飲むのはかなり久しぶりになる。

案の定、陣を奪われる際に大量の酒と食料を置いていったら、さっそく宴会騒ぎである。

「ここまで計画通りだと逆に不安になるな・・・」

「なあ士郎・・・ウチも飲んで・・・「ダメ」えーーっ！

でもほら全員飲んでるし、ウチらだけ飲んでないのも不自然やん。」

「これが終わったら好きなだけ飲ましてやるから・・・・」

「ほんまに！約束やでー」

士郎たちが広場の真ん中に目を向けると、
そこでは大将と思われる奴が真っ赤な顔で熱弁を振るっている。

「官軍がどうしたっ！我等がちょっと出てきた位で逃げ出しおって！
奴らが飲むはずだった酒を、奪って飲むのはまた格別にうまいわ」

「「「「「わはははははははっ！！」」」」」

「そら飲め飲め！まだまだ沢山あるからなっ！」

「「「「「「おーーーーっ」」」」」」

それを見ながら、

「で、どうするん？やっぱり宴会に参加するん？」

「・・・とりあえず１００人程捕虜になった兵がいたから、場所を
確認しておこう。
人数は多いほうが撹乱出来るしな。」

「そやね、じゃあ行こか。」

士郎達は密偵の案内に従って捕虜を収容している所の確認や、
城門の開閉の仕方を確認していった。

夜ーーー月が照らす闇のなかを動く者たちがいた

士郎はすぐ横を走る霞に声をかける。

「じゃあ騒ぐ方は任せる。」

「士郎こそ城門開けるん失敗すんやないで！」

霞を見て、酒が飲めず大分フラストレーションが溜まってるなと思った士郎は、

街中で騒ぐ方は霞に任せ、自分は城門の開閉に向かう事にしていた。

「騒ぐのは、とりあえず捕虜を解放してからだぞ。」

「わかってるって。藍とは違うんやから。」

「俺も城門を開けてたら直ぐ合流する。」

「まってるでっ。ほなな。」

軽く手を上げながら霞は捕虜収容所に向かって行く。

「じゃあ俺達は城門の方に向かうか。」

「「「はいっ！」」」

士郎もそのまま２０人ほどを連れて移動を開始した。

「よし、これで全員やね。」

霞は解放した捕虜達を見ながら話す。

「はいっ。」

「よしっ。じゃあ時間もあんま無いし、簡単に説明するで。」

そう言って、霞がこれからの事を話そうとすると、

「おっ、おいっ！見張りが殺られてるぞっ！
捕虜が逃げてるかもしれん！」

「見つかってしもうたか・・・」

見張りを殺した際に、見つかりにくい所に死体を移動させたが、どうやら気づかれたようだ。

「ウチらはこのまま方円陣を敷いて南門へ向かうで。
密偵達は一度戻って、ウチらが南門に逃げてるって情報伝えてな！」

「「「はい」」」

皆が答えると、ドアが開く。

様子を見に来た黄巾党の奴らが顔を見せるが、
彼らが見たのは、銀色に輝く霞が振るう長剣の輝きだった。

――――ヒュンッ――――

左右に一度ずつ剣を振るい、前にいた二人を切り倒す。

「えっ？」

その後ろにいた、状況を直ぐに理解できていないもう一人に
突っ込んだ勢いのまま喉元に剣を突き立てる。

「ふっ！」

浅く息を吐きながら剣を抜き、血糊を振り払う。

「はぁっ・・・やっぱりこれじゃ調子出えへんな・・・
まぁ、とりあえず行こか。」

そう言って、霞は自ら先導しながら黄巾党を切り倒しながら南門に
進んでいった。

「うまくいってるみたいだな。」

西門近くに隠れている士郎は、城壁の上にいる兵士の動きを見ながらそう呟いた。

上手く南門へ敵兵が陽動されている。
その証拠に西門の上にいた敵兵も南門に移動を開始していた。

「あとは時間との勝負かな・・・」

それを聞いた兵士が士郎に質問する。

「？張遼さまでしたらそう簡単にはやられないと思うのですが・・・」

「ああ。それも有るけど、今北門の兵士が西門に移動して来てるからな・・・」

それを聞いた兵士は北門の方へ目を向けるが、時間が夜のせいも有り、まったく見えない。

「見えるんですか・・・・」

「普通の人より目は良いからな。」

視力を強化することで、最大四？まで視認できる士郎にとって、北門の上を移動している、敵兵の松明を確認するのは容易いことである。

「そろそろ良いか。周りの兵は私が片付ける。皆は門の閂を外して、味方に合図してくれ。」

「「「はい！」」」

士郎達はそのまま城門回りの兵を片付け、開門させた。

「聖っ！成功したわよっ。」

水蓮から報告を受けた聖は、隣にいる月に目配せをしながら、

「うん。士郎達も待ってるし、行こう。」

「はい。詠ちゃん。」

「ええ。じゃあ確認するわ。
月と聖様は北門をよろしくお願いします。玖遠と援里は東門を封鎖して。
水蓮はこのまま西門から、藍は南門に移動してる霞と合流して・・・」

詠が担当場所の確認をしていると、兵が駆け込んでくる。

「華雄様が西門に攻め込んで行きましたっ！！」

「・・・あ・の・猪は～っ！！」

「はぁ・・・詠、私が霞の方に行くわ。」

「ありがと・・・お願いするわ。
はぁ・・・とりあえず私も西門に行くわ・・・藍を止めなくちゃいけないし・・・」

詠は、水蓮の提案に溜息をつきながら答える。

「じ、じゃあ行きますかっ！私達は東門の封鎖だねっ。」

「はい・・・おそらく敵は・・・許昌に居る黄巾党と合流しようとしますから・・・
責任重大です・・・・」

「そうなんだ・・・なんかあっちこっちにいるんだね・・・」

少し予定が変更になったが、聖と月達は宛に進軍していった。

西門を開け、味方に合図を送った後、士郎は南門に移動していた。
霞たちが南門から逃げる前に、黄巾党に包囲されたらしい。

「霞なら多少は大丈夫だとは思うけど・・・数が数だしな・・・」

もともと宛には約三万の黄巾党がいる。
けれど全員が直ぐに戦える訳ではなく、兵は基本交代で休ませるものだし、
酒で酔い潰れていたり、夜なので熟睡している者も沢山いる。
それらを加味して考えたら、今まともに戦える黄巾党は大体一万程だろう。

「だとしたら霞を包囲している兵は三～五千位かな・・・」

捕虜を解放しているが霞達は約百人位。
戦の勝敗において、数の差は最も大事な要素だ。

「っ・・・・・」

強化した脚で強く踏み込む。

士郎は月に照らされた宛の城内を、風のような速さで疾駆していった・・・

「囲めっ！包囲して、矢を討って弱らせろっ！
絶対に突出するなよ！」

黄巾党、韓忠の声が南門に響く。

詳しい数は分からないが、四、五千ほどの黄巾党が霞達を包囲している。

「こっちの城門が開く前にきてしもうたな・・・・」

霞は南門の方を見ながら答える。

南門に移動し、開門させ、そのまま本陣と合流するつもりだったのだが、

敵に見つかるのが早く、予想以上に情報の伝達が早かった為、開門させる前に追いつかれてしまっていた。

霞は韓忠の方に目を向け、

「男やったら後ろに隠れんと前に出てこんかいっ！情けないわ～」

「ふん。貴様のような化け物と戦って、張曼成のように死ぬのはごめんだからな。」

「化け物て・・・こんなかよわい女の子にそれはないやろ。」

「どこがだ！かよわい女が、ここに来るまでに何十人も殺すわけないだろうが！」

嘘泣きの演技を始めた霞に韓忠が突っ込む。

（流石に乗って来おへんな・・・一気に切り込んでアイツ倒したら早いんやけど・・・武器がなぁ・・・）

愛用の飛龍偃月刀があれば容易いのだが、長剣では確実に仕留められるとは言い切れない。

（さて・・・どうしようかな・・・）

そう霞が悩んでいると・・・・

「うわあっ！」

「なんだ、こいつっ！」

包囲している黄巾党の一角が騒がしくなり、

「霞っ！！」

「士郎！来てくれたんかっ！」

「ああ、それと・・・ほら、使えっ。」

そう言いながら横に来た士郎は、霞に何かを渡す。

「これは・・・偃月刀っ？」

「眉尖刀。戦闘に特化した偃月刀だよ。」

霞はそのまま軽く振り回す。

「重さも丁度ええし・・・これならいけるやん。
ありがとな士郎。」

霞が士郎に感謝をしていると、黄巾党の方から声が上がる。

「ふん・・たった一人の増援で何が出来るっ！
野郎どもっ！このまま射殺せっ！」

周りの黄巾党が再度弓に矢を番える。

そうして両者の緊張が高まっていると、

「韓忠さまっ！大変です！西門が敵に突破された用です！！」

「なにいっ！！」

黄巾党に動揺が走る。おそらく、先に突っ込んだ藍の部隊だろう。

無論、その隙を逃す二人では無かった。

「はあっ！！」

一気に攻め込む霞。

韓忠との間にいた黄巾党を横薙ぎで払い倒し、韓忠との距離を詰める。

一度薙ぐ度に三～四人を打ち倒し、そのまま韓忠に下から切りつける。

「うおっっ！！」

咄嗟に下がった為、浅く切られる。

「ひいいいっ。」

更に距離を離すが、攻撃範囲の広い眉尖刀からは逃れられず、上に上がった刃を返し、そのまま長く持った眉尖刀の上段からの打ち下ろしをその身に受け、

「ぐふっっっっ・・」

「韓忠っ！討ち取ったでっ！」

そして、霞が突っ込んでいった道を、士郎が広げるように兵を展開していく。

「この隙を逃がすなっ！」

「数は此方の方が上だっ！押しつぶせえっ！」

黄巾党の誰かが声を上げるが、西門から入って来た藍の部隊もそこまで迫っており、
黄巾党は混沌としていく。

その中で士郎と霞は背中合わせで立ち、戦っていた。

使用している武器は眉尖刀と双剣でまったく違うが、それを利用し、位置を入れ替わりながら、距離がある者は眉尖刀に、強引に突っ込んで来た者は双剣に切られ、
まるで竜巻にように黄巾党を打ち倒していき、ここにいる黄巾党を恐怖に陥れる。

「お・・・おい・・・もう逃げた方が・・・・・」

「ぐっ・・・まだ、俺達は負けてない・・・・・ぐはぁっ！！」

弱気になっている敵兵を、他の敵兵が鼓舞しているとその兵が吹き飛ぶ。

「やっと城門が開いたわね・・・士郎、霞大丈夫？」

黄巾党が士郎達に気をとられている隙に、他の兵が南門を開け、外にいた水蓮の軍が入って来た。

「あれ・・・確か南門は藍じゃなかったのか？」

士郎が作戦内容を思い出しながら水蓮に聞くが、

「・・・西門が開いた途端に突っ込んで行ったわよ・・・」

「あの馬鹿は・・・」

水蓮の答えに霞が頭を抱える。

「まあええわ・・・士郎、このまま一気に落とすで！どっちが先に着くか競争な！」

そう言って霞は眉尖刀を肩に担ぎ走り出す。

おそらく中心にある宛の本陣に向かったのだろう。

そこの上に架かってある黄巾党の旗を降ろし、董卓と劉表軍の旗を揚げればこの戦の勝ちが決まる。

「なっ・・・はぁ・・・とりあえず行ってくる。」

水蓮に後を任して士郎も駆け出す。

「別に後は私達に任してくれればいいんだけど・・・・」

そう言いながらフリウリスピアを構えながら兵に指示を出す。

「私達はこの城門を塞ぎながら押し上げる！総員、奮起せよっ！勝ちはもうすぐだっ！」

ウオオオオオッ！！！

こちらの兵の士気に押され、黄巾党はジリジリと後退していった・・・

「ふぅ・・・・やっと着きましたっ。」

本陣から一番遠い東門を任された玖遠は、軽く汗を拭いながら話す。

「騎兵を率いるのも・・・・・初めてですからね・・・・・・」

その直ぐ傍に一緒にに着いてきた援里が答える。

「私たちはここで待ってればいいんだよねっ？」

「はい・・・その内・・・許昌に逃げようとする・・・黄巾党の人たちが・・・・
勝手に開けてくれますから・・・・・」

「・・・やっぱり私達の軍が多いのもその為たよねっ・・・・」

玖遠が後ろに控える自軍の兵士を見ながら言う。

「もし・・・私達がやられたら・・・後々の・・・許昌攻略が大変になりますから・・・・」

「ううっ・・・責任が・・・・」

玖遠がプレッシャーに押しつぶされていると、城門が騒がしくなる。

「そろそろだねっ・・・・」

「はい・・・・・」

「・・・って!援里ちゃん、危ないよっ!後ろに下がった方がっ・・・・」

「大丈夫です・・・黄巾党の人たち・・・錬度は対したこと・・・ありませんから・・・・」

そうこうしていると城門が開門される。

「急げえっ!許昌はすぐに・・・・・って、敵だあっ!!」

先頭にいた黄巾党が声を上げる。

「ぐっ・・・邪魔だあっ！！」

「押し返しますっ！はあっ！！」

慌てて攻撃してくる黄巾党を迎撃する玖遠。

するとーーーー

「ぐほおおおっ！！」

いきなり目の前にいた敵兵が吹き飛ぶ。

「えっ？」

わけが分からなくなっている玖遠をよそに、吹っ飛ばした奴が話し出す。

「なんだこいつは？じゃまな奴だな。」

「・・・なんで此処にいるんですかっ・・・藍さん・・・」

藍は頭に？マークを浮かべながら、

「玖遠？とゆうことは此処は東門か？
おかしいな・・・ついさっき西門から入ったはずだが・・・」

「・・・中を・・・突っ切って来たんですか・・・」

それを聞いていた援里も呆れていると、周りの黄巾党がざわめいて

いる。

「そっ・・孫夏さまがやられたっ・・・」

「なんか知らないうちに敵将倒してますねっ・・・」

「アイツがそうだったのか？じゃあ残るは二人か？
よしっ！戻るぞっ！」

そう言いながら藍は再び宛城内に戻っていく。

「・・・なんか・・・凄いねっ・・」

「・・・とりあえず・・・楽に・・・なりました？・・・・」

士郎と霞は本陣へ向かって駆けている。

士郎は最小限の動きで敵をかわしているのに対し、霞は薙ぎ払いながら進んでいる。

「くっ・・・ウチより早いっ・・・中々やるやんっ・・・」

それを聞いた士郎は、後ろに居る霞に顔だけ振り向き、

「ふっ・・・着いて来れるか――――」

「っ！・・・・上等やあっ！」

そのまま宛城の本陣になだれ込む。

「っあ・・・負けたぁっ！！」

どさりと霞が座り込む。

士郎はそのまま奥のほうを軽く見回すが、そこには誰もいなかった。

「逃げたか・・・・」

そう言いながら宛の街の方を見る。

そこは街の声が良く聞こえた。

「はあああああっ！！どけどけぇっ！！敵将はどこだあっ！」

「藍！なにしてるのよ！」

「？なんで詠が此処にいるんだ？」

「・・・あんたを止めに来たからに決まってるでしょうがっ！！！」

「・・・早く旗を降ろすか・・・」

宛城の夜が明ける。

宛城に掲げられた董卓と劉表軍の軍旗を見て、最後まで抵抗していた黄巾党も諦め

宛城の戦いは終結し、南陽黄巾賊はほぼ壊滅した。

2－3　宛攻略戦（2）（後書き）

眉尖刀

眉に似ている刃の形をしているからそう呼ばれる。
実践用に作られた薙刀。
刃の下に鍔がついてある。

ちなみに宝具ではありません。

２－４　一時休憩（前書き）

ちょっと遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。

年末は色々と忙しかったので、執筆の時間が取れませんでした・・・

・

これからは、またペースを上げていきたいですね・・・・

2－4　一時休憩

宛を攻略した士郎たち。

次は許昌の攻略になるのだが、荒れている宛をほっといて行くわけにはいかず、

別に動いている呂布たちも、洛陽の方から許昌に移動中なので、

暫しの間、宛に居る事になった。

訓練場にて対峙しているのは士郎と霞。

互いに得物の双剣と偃月刀を構えている。

緊迫した空気の中、それ痺れを切らしたように霞が距離を詰める。

「はあっ！！」

神速の突きを繰り出すが、士郎は後ろに下がって避ける。

「まだまだやでっ！！」

そのまま突きを繰り出し、士郎が攻撃出来ない距離から攻撃を繰り出す。

（中々鋭い・・・だがこれならっ！）

そう考えた士郎は、干将・莫耶を振るい捌いていく。

「どうした霞っ！！全然当たってないだろうっ！！早く私に代われっ！」

そう叫んでいるのは、この戦いを見ている藍。なぜか柱に縛り付けられているが・・・・

「士郎さんっ！頑張ってくださーいっ！」

その横で玖遠が座ったまま士郎に声援を送っていた。

「分かっ・・・とるわっ！！」

藍に答えながら攻撃を続ける霞。

「もっと距離を詰めろっ！！
このままじゃ埒があかんぞっ！！」

「・・・玖遠っ。そいつ黙らしといてっ。」

藍のヤジに痺れを切らした霞が玖遠にお願いする。

「はーいっ。了解ですっ。」

玖遠は柱に縛り付けられて居る藍に近付き、口に布を巻き始める。

「おいっ・・なにをっ・・・・むぐ・・むぐーーーっ!!」

藍がむぐむぐ言っているが、それを無視して攻撃を続ける霞。

（確かにこのままじゃ埒があかん・・・・
けど・・・不用意に近付けへん・・・）

宛の戦い等で一緒に戦った霞は、士郎が自分より強いと判断している。

（恋とやったらどっちが勝つんやろ・・・
見てみたいけど・・・今はウチが勝たな!）

気合を入れ直した霞は、そのまま攻撃を続ける。

そうしていると、霞は士郎の裁き方に違和感を感じた。

（一瞬・・・やけど、隙ができとる。）

それは微かなタイミング。

（ここ狙ったら・・・いけるっ!!）

突いた後、そのまま流れるように士郎の右脇腹を薙ぎはらう。

――――瞬間――――霞に悪寒が走った。

それは霞の直感、強者としての感。

「くっ！！」

咄嗟に攻撃を止めようとするが、既に遅い。

士郎は右手の莫耶で防御しながら距離を詰める。

「まだやっ！！」

完全に攻撃に移る前だった為、ぎりぎり回避が間に合う。

そのまま霞は後方に跳躍しようとするが、

ブンッ！！

士郎は左手の干将を霞に投げつける。

「ええっ！！」

慌てて跳躍を止め、偃月刀の柄で弾くが、

その時既に、士郎は霞の首筋に莫耶を突きつけていた。

「まだ続けるか？」

「はあ・・・ウチの完敗や・・・」

そう言って霞は倒れこむ。

「さすが士郎さんですっ。」

「むぐぐぐっ！むぐーーーっ！」

玖遠が士郎に拍手しながら近付いて来る。

藍は相変わらず何か言っているが、むぐむぐとしか分からないので無視されていた。

「なんか今まで戦った事ないわ。あんなん。
罠仕掛けるし、剣も投げるし。」

「あれはびっくりしますよね・・・」

霞と玖遠が感想を述べる。

「一瞬でも思考を停止させれば、十分隙ができるしな。
力や技だけを競うものじゃないだろ。」

士郎の返事に呆気に取られる二人。

「いろんな奴がおるんやなぁ・・・・
ウチんとこの恋は本能で戦いよるから、士郎とは全然違うなぁ。」

「その人って呂布さんですかっ？」

「そやで。あんま話さへんし、いっつもぼけーっとしとるけど、
無茶苦茶強いんや。
士郎やったらええ勝負できるかもしれんわ。」

そう言って霞は立ち上がる。

「よしっ！じゃあ士郎もう一回「あの・・・士郎さんは・・・・・」ってどうしたんや？」

霞が士郎に再戦をお願いしようとすると、訓練場の入り口から援里が顔を出していた。

「士郎さんを・・・・呼びに・・・来ました・・・」

「？何かあったのか。」

「はい・・・黄巾党の・・・本陣が判明したので・・・・」

すると、それを聞いた霞は、

「えーーっ、もう一回やろうとおもとったのに・・・」

やるき満々の霞はすごく嫌そうな顔をする。

「まあええわ。玖遠。ウチとやろうで。」

「お、お手柔らかにおねがいしますねっ・・・・」

霞に呼ばれた玖遠は、苦笑いを浮かべながら返事をする。

二人が話している間に、援里が士郎の所までやって来る。

「行きますか・・・・・」

「ああ。」

援里と士郎が一緒に入り口に向かって歩いていると、途中、縛られている藍の所を通過する。

「あの・・・士郎さん・・・如何したんですか・・・・これ・・・・？」

それを見た援里がおずおずと問いかける。

「ああ、玖遠は帰って来るのが遅かったからな。これは・・・・・」

士郎が宛城を攻略した直後の話を始める。

宛城を攻略した後、士郎と霞が本陣に帰ってくると。そこでは藍と詠のバトルが繰り広げられていた。

「あんなに作戦説明したのにっ！なんで勝手に突っ込んでいったのよっ！」

「敵がいたら、戦うのは武人の性だ！」

「命令違反していい理由にはならないわよっ！」

「敵将一人倒してるだろう！」

「その後後詰めできたボクの軍に、あんたが突っ込んで来てるでしょ！
どれだけ被害が出たと思ってんのよ！」

・・・大分ヒートアップしてるな・・・

士郎は口論している二人を見てそう思っていた。

「え、詠ちゃん・・・少し落ち着いて・・・」

「藍も。一度座りなさい。」

一応、月と水蓮が二人を宥めているが焼け石に水だ。

「・・・とりあえず、命令違反した以上、何らかの罰を与えないと
軍紀が乱れるだろ。」

それを見かねた士郎が口を出す。

「ぐっ・・・」

「ほら見なさい！」

それを聞いて、藍は静かになり、詠は勝ち誇る。

「でも、罰って何をするんだ？」

「そうね・・・」

士郎の質問に、詠は考え込む。

「え、詠ちゃん・・・あんまり厳しいのは・・・・」

その様子を見て、月が心配そうにしている。

「これからの藍の予定はどうなってるの？」

「訓練場で武官同士で手合せする予定になってるけど・・・どうかしたのか？」

それを聞いた詠は、何かに閃いたような顔をし、

「だったら藍を、その訓練場の柱に縛りつけといて！この戦馬鹿にはそうしたほうが効果がでるわ！」

なるほど。

目の前で強者同士が戦っているのに、それに参加できないのが藍にとっては一番きついか。

そう理解した士郎は、暴れる藍を、

強化した縄で柱にぐるぐる巻きにしたのだった。

「そ・・・そうだったんですか・・・」

援里はなんとも言えない顔をしている。

「・・・個性的な人が多いよな・・・・・」

「はい・・・・・」

士郎の呟きに援里も頷いた後、
お互いにため息をはき、
そのまま聖たちの所に移動していった。

「おかえり援里ちゃんっ！」

扉を開けると聖の元気な声に出迎えられる。

その声に少し元気を貰った二人は、そのまま席に着いた。

「士郎くんもおかえりー
お茶入れてーっ。」

「ただいま。ってまさかその為に呼ばれたのか、俺？」

「い、一応作戦の方も説明するよ？」

「一応・・・とりあえず待っててくれ。」

そう言って士郎はお茶を入れに行く。

「で、黄巾党の本拠地が分かったって？」

士郎はお茶を全員に配りながら質問する。

「ええ。冀州や徐州にいた黄巾党は敗走して濮陽に集結してるみたいね。
もっとも最初から本拠地だったみたいだけど。」

士郎の質問に詠が答える。

「大体人数はどれ位になるんだ？」

「・・・３０万くらいね・・・」

士郎は驚き、

「そんなにいるのか・・・」

「この国全体で乱が起きてたからね・・・

それが一箇所に集まってるから。」

「これは他の官軍と連携しないと話にならないな。」

「ええ。」

援里が地図を広げる。

「冀州方面は・・・・今・・・平原に兵を集めているみたいです・・・

揚州は・・・寿春を攻略中です・・・・」

援里が地図を指差しながら説明していく。

「官軍の・・・・本隊は・・・陳留に・・・移動中ですね・・・・」

「ということは、まだ準備には時間がかかるのか。」

「はい・・・」

すると、水蓮が士郎の方を向く。

「その間に私達は許昌を攻略する予定よ。」

「許昌には約2万位の黄巾党がいるけど、
私達の方は今大体4万位の兵がいるから大丈夫でしょう。」

「それに、途中から恋さんの軍も合流しますから。」

水蓮と月がこちらの軍の状況を話す。

「今回は大分優勢に戦えそうだから良かったよ～」

聖が安心した顔を浮かべている。

「まぁ恋も合流すると武将も増えるからね。
余裕は出来てくると思うわ。」

詠の言葉に月も頷く。

「あとは作戦なんだけど・・・・」

そのまま詠と援里を中心に作戦等を打ち合わせ、軍議は終了した。

「じゃあ俺は霞達に話て来る。」

そう言って士郎が立ち上がる。

「まって士郎、私も行くわ。
軍の編成とか話しておきたいし、訓練もしておかないといけないし。」

「ボクも行くわよ。藍の様子が見たいし。」

水蓮と詠も立ち上がり、士郎と一緒に訓練場に移動する。

「やっぱり気になってるんだな・・・」

「きちんと罰になってるか見ておかないといけないからね。」

士郎に詠が答え、そのまま移動していった。

訓練場の入り口に着く。

「訓練が終わってるの？それらしき音がしないんだけど？」

水蓮が首をかしげている。

「そうかもね。霞が訓練してたらもっと騒がしいし。」

詠もそれに頷く。

「とりあえず入れば分かるだろ。」

そう言って士郎はドアを開け、中に入る。

そこには、体育座りで落ち込んでる藍と、必死にそれを慰めている玖遠と霞がいた。

「あっ！士郎さんっ！」

士郎を見つけた玖遠が近付いてくる。

「如何したんだ一体？」

「それはですねっ・・・」

玖遠が説明しようとすると、詠が少し怒り気味に話し出す。

「ちょっと、藍を解いたら罰にならないじゃない！」

「実はそれなんですっ、ずっと縛っていたんですけどっ！
途中で訓練の邪魔になるからって口も塞いでたんですよっ・・・」

そこまでは士郎も見ている。
士郎はそれに頷いて話を聞いていた。

「それで・・・ずーっと縛ってたまま、声も出せなかったですからっ。
漏ｒ「わーーーーーーっ！！言うなーーーっ」
び、びっくりしましたっ！」

急に藍が叫ぶ。
が、既に遅く、全員が理解していた。

そのまま藍は、キッと霞を睨み、

「大体っ！霞が口を塞がせたからだっ！！」

「まぁ・・・うん・・・そやな・・・・」

「哀れむなーーっ！！」

霞も多少の罪悪感があるようで、藍の方を見ようとしていない。

「なんか・・・凄い事になってるわね・・・・」

そうとしか言いようが無い水蓮は、苦笑いを浮かべて立ち尽くしている。

「詠、罰はこれ位でいいんじゃないのか？」

「そ、そうね・・・」

詠もまさかの事態に苦笑いを浮かべており、士郎に賛成した。

「打ち合わせの話するの、遅れそうね・・・」

軽くため息を吐いた水蓮は、
何とか藍に機嫌を直して貰えるように、士郎達と一緒に宥めに行く。

その後何と藍の機嫌を直してもらい話をし、
その日は終わっていった・・・・

2－5　許昌攻略戦（前書き）

二週間に一話のペースがいい感じですね。

黄巾党のストーリーは後1、2話で終わる予定です。

2－5　許昌攻略戦

「なんですってっ！？」

朝、士郎達が食後のんびりしていると、伝令からの報告に詠が驚いていた。

「詠ちゃん・・・何があったの？」

月が心配そうに問いかける。

「ええ、恋が許昌に向かってるみたいなのよ。音々音の奴、何やってるのよ・・・・」

「確か・・・私達と・・・・合流する・・・予定でしたけど・・・」

「そうよ。確か、恋は一万五千位の兵を連れてるんだけど・・・」

「少し・・・厳しい・・・ですね・・・」

詠と援里が頭を悩ませる。

それとは対照的に、霞は平然としている。

「恋がおるなら大丈夫やろ。それに、弧白もついとるし。」

「でもね、軍師は音々音よ。恋と一緒にいるんだから、まともな指揮するわけないじゃない！」

詠の発言に霞は飲み物を噴出す。

「げほ、げほっ・・・だ、だったらなんでいかせたんや・・・」

「反乱の規模が小さかったからよっ。
私達と合流した後だったら、手綱も握れたのにっ！」

「じゃあどうすんや？」

「・・・・・・」

詠が悩んでいると、聖が話し出す。

「水蓮ちゃん、今、騎馬兵ってどの位いるのかな？」

「確か両軍合わせて約一万って所ね・・・どうするの聖？」

「うん。じゃあとりあえず、それで先行したらどうかな？」

そのまま聖は月の方に目を向ける。

「それがいいですよね。詠ちゃん。」

「そうね・・・それだけいれば大丈夫だと思うし・・・・
こっちは霞に先行してもらうわ」

「じゃあ・・・こちらは・・・玖遠さんと・・士郎さんに・・・お
願いします・・・」

詠と援里に頼まれ、士郎たちは頷く。

「ウチの本領発揮やん、いくでっ士郎！」

ズルズルと士郎を引きずっていく霞。

「ちょっ・・・これは（引きずられる）玖遠の役目だろうっ！」

「どういう意味ですかっ。」

それについて行く玖遠。

「私も編成に向かうかしら。手伝ってくれる藍・・・・って大丈夫？」

「そうだな・・・」

水蓮が声をかけると、なぜか元気が無い藍。

「と・・・とりあえず行きましょうか・・・・」

そのまま出て行く二人。

それを見送った後、詠と援里が作戦を話し合う。

「作戦・・・どうします・・・・？」

「恋なら下手に策使うより、勢いのまま突っ込むでしょうね・・・・」

それに急な出陣なので、こちらも策を仕込む時間も無い。
兵は神速を尊ぶである。

「なら・・・私達も・・・一緒に・・・
鋒矢陣組んで・・・突っ込んだ方が・・・良いですね・・・」

「多分私達が着く頃には城門破ってそうね。それでいいかしら、月、聖様」

「うん。」

「私もいいよ～」

二人の賛成を得た詠は立ち上がり、

「じゃあ。先行部隊と本軍の兵糧の準備しましょう。」

そう言って残った四人も出て行く。

慌しく士郎たちは出陣していく。

「平穏って一瞬だよな・・・」

そう呟いて許昌に向かっていった。

「今、呂布の軍ってどういう編成になってるんだ？」

横を並走している霞に士郎が問いかける。

「兵の数はさっき話しに出たけど一万五千や。
武将は恋と音々音と弧白が率いとるで。」

「どんな人たちなんですかねっ？」

途中から玖遠も霞に問いかける。

「そやな・・・恋は呂布って名前でむっちゃ強いで。
けど無口やけん、会話しづらいわ。
音々音は陳宮っていうんやけど、恋の事が大好きな奴やわ。
軍師見習いって所やな。
弧白は除晃って言うて、ウチと同じ位の強さやわ。
やけど流される性格しとるけん、恋達と一緒に許昌攻めにいっとるやろなあ・・・」

「なんか・・・個性的な人が多いですねっ。」

「そっちも一緒やろっ。」

会話を交わしながら走り続ける三人。

「・・・ちょっと気になっとったんやけど、士郎、その馬どこで入手したん？」

「ああ、襄陽で買ったんだけど・・・どうかしたのか?」

「額に白い模様があるし・・・もしかしたら的盧かもしれんなぁと思てな。」

「的盧って、あの凶馬ですかっ!」

霞の言葉に玖遠が驚く。

「そうなのか?まぁ、元々運はいいほうじゃないし、大丈夫だろ。」

(解析したときは、かなりの駿馬だったんだけどな・・・)

「まぁ気いつけぇや。」

そうしていると許昌の姿が見えてくる。

「もう始まってるみたいだな・・・」

視力を強化した士郎が呟く。

「見えるん?」

「目は良いんだ。急ごうっ!」

「そやねっ!」

士郎と霞が馬を加速させる。

「は・・・はやいですよーーっ！」

二人に置いていていかれそうになった、玖遠が慌てて加速させ、その後ろに続く一万の騎馬兵もスピードを上げていった。

「城門が破られてますっ・・・・・」

玖遠が許昌の様子を見て呟く。

「さすが恋やな・・・」

許昌の外には生きている黄巾党の姿は少ない。
おそらく生きてる兵は殆ど許昌城内にいるのだろう。

「士郎さんっ、霞さんっ！私が周りの黄巾党の相手をしますからっ、二人は中をお願いしていいですかっ？」

「そうやな・・・もし恋に勘違いされたら、士郎はともかく、玖遠は危ないで。」

玖遠の提案に賛成する霞。

「じゃあ、とりあえず三千の兵を預けるから任せる。・・・無理はするなよ。」

心配そうに話しかける士郎に、

「はいっ！頑張りますっ！」

玖遠は元気な返事を返して、移動していった。

「じゃあウチらも行こか！」

「ああ。」

それを見届けた二人は、残った七千の騎馬兵を連れて城内に入っていった。

「これは・・・」

城内で霞と別れた士郎が見たのは、竜巻が通った後のような光景だった。

道に沿って移動したようで、黄巾党らしき者達が、薙ぎ払われ、両

側の民家に吹き飛ばされていた。
酷い者になると、家の上にまで飛んでいっている。
「呂布がやったんだろうな・・・
だったらこの道を辿れば着くな。」
士郎は自分の連れて来た兵達に片付けを命じ、自分はその道を進んでいった。
そのまま進んで行くと、何人かの兵が見えた。
ちっちゃい女の子が馬上で周りの兵に指揮をとっている。
「あれは・・・呂布・・・じゃないな・・・
としたら陳宮か?」
とりあえず話をしてみないと分からない為、近付いていってみる。
「むっ!怪しい奴がいるのです!」
陳宮の声に反応し、彼女の周りの兵が守備を固め、槍を士郎に向けて来る。
「待ってくれ、敵じゃない。」

士郎が両手を挙げて、武器を持ってない事をアピールするが、

「そんな怪しい服着てるから、黄巾党に決まってるのです！」

「劉表軍の者なんだよ。呂布を捜してるんだが・・・」

「恋殿に危害を加えるつもりなのですかっ！
全員こいつを倒すのですっ！」

どうやら人の話をちゃんと聞いてないらしい。
もしくは、呂布の事で頭が一杯になってるせいかもしれないが・・・

「なんでさっ！」

士郎は迫って来る陳宮達から逃げながら、呂布がいる方へ馬を走らせた。

ギィンッ

武器を振るう音が聞こえる。

ギィンッ、ぐうっ

その後に誰かの苦悶の声。

ギィンッ、ぐうっ、ドコオッ！！
最後は何が壊れる音。

士郎がそこに辿りついた時見たのは、数百の黄巾党の群れと、
その中心に方天画戟を持って立つ一人の少女だった。

剣や槍を持って殺気を放つ黄巾党とは対称的に、
少女は、まるで周りに誰もいないかのように自然体で立っている。

「ふっ！」

少女は浅く息を吐ながら一気に加速し、距離を詰め戟を振るう。

ギィンッ！！

黄巾党達が構えている武器や鎧に当たった戟が、激しい音をたてる。

「ぐうっ！！」

思わず苦悶の声をあげた黄巾党が吹き飛ばされ、

ドコオッ！！

激しい音をたてて、周りの建物に突っ込む。

「・・・何処からあれだけの膂力が出てるのさ・・・」

余りの光景に思わず呟く士郎。

後は同じシーンを見てるかのように、吹き飛ばされていく黄巾党。

自然現象に対して人間が無力であるように、

呂布と言う竜巻は、すべての敵兵を薙ぎ払っていった。

「・・・・・・」

息も切らさずそこに佇む呂布。

それを見た士郎は声を掛ける。

「呂布殿とお見受けするが？」

「・・・・・うん。」

士郎の問いに頷く呂布。

「私は劉「恋殿ーーーーーー」っ、来たか・・・・・」

士郎の話を途中で陳宮が遮る。

「どうしたの・・・・音々音？」

「恋殿っ！そんな怪しい奴の話を聞いては駄目なのです！」

それを聞いた恋は士郎の方を警戒しだす。

「だから違うと言ってるだろ・・・」

慌てて士郎が音々音の発言を否定するが、

「・・・・・・」

恋は無言で武器を構える。

これは仕方が無いことだった。
自分の軍師の意見と、初めてみる奴の話では、前者の方を信じるのは当然である。

「やっぱりこうなるのか・・・・」

士郎も干将・莫耶を構える。

「ふっ！」

丁度そのタイミングで切りかかってくる恋。
力任せに方天画戟を切り下ろす。

「ちっ！」

寸前避けるが、威力が桁違いだ。

（流石は呂布と言ったところか。）

まともに受ければ腕が使い物にならなくなるので、回避に徹する。
幸い呂布の攻撃は直線的なので、受け流すのはまだ容易であった。

（霞に誤解を解いてもらわないと不味いな・・・）

二人の周りは音々音が兵に命じて囲っているため、
士郎も簡単には逃げれないようになっている。

そのまま数合打ち合わせると、

「・・・・強いね。」

呂布がポツリと漏らす。

「だけど・・・・避けてばかりじゃ勝てない・・・・・・」

士郎もそんな事は当然分かっている。

「・・・・ならば本気で戦らせてもらおう。」

（強化（トレース）・・・・開始（オン）っ）

全身の筋肉に魔力を行き巡らせ、強化する。

今までは極めた二流の剣技のみで勝つ事が出来ていたが、
この相手に勝つには其れではきつい。
そう判断した士郎は、全力で恋を迎え撃つことにした。

「ふっ！！」

再度上から襲ってくる刃。
先程は回避したが――――

ギイィィィン！！

士郎がの頭の上で交差された干将・莫耶が其れを防ぐ。

「止められた・・・・・・・やる。」

並みの武器なら叩き折られるが、干将・莫耶ならその心配も無い。

そのまま恋が再度、攻撃しようと振りかぶるが――――――

ガキンッ!!

振りかぶった状態の方点画戟を、後ろから来た人が止める。

「恋さん、ちょっと待って下さいね～」

「・・・・弧白・・・どうしたの・・・・」

「そうですっ!弧白殿も一緒に戦うのです!」

弧白と呼ばれた女性は、そのまま恋の方点画戟を降ろさせながら話し出す。

「ですけど～どうやらその人、劉表軍の人みたいです～」

それを聞いた音々音は焦った顔を浮かべ、

「そ、そんなの嘘かもしれないのです!」

「途中で霞さんとも会いましたし～間違いないですよ～」

「な、なんでさっきそれを言わなかったのですか！」
音々音は士郎の方に視線を向け、士郎を非難してくる。
「俺が話す前にそっちが早とちりしたんだろ・・・」
すると、武器を下げた恋が士郎に近付いて来て謝る。
「ごめん・・・・」
「恋殿っ！そんな奴に謝る必要は無いのです！」
「・・・・音々音も謝る。」
恋が強引に音々音の頭を下げさせる。
「別に気にしてないから大丈夫だ。
紛らわしい服装してたこっちも悪いしな。」
「ん・・・・ありがと。」
そうしていると、左手に錨のような形をした、
長柄の斧を持った女性が近付いて来る。
「一件落着したようですねぇ～」
「ああ。おかげで助かったよ。」
「いえいえ～
私は徐晃　公明　真名は弧白と言います～

お兄さんの名前は？」

「衛宮　士郎だ。自由に呼んでくれ。」

「分かりました～よろしくお願いしますね、士郎さん～」

握手を交わす二人。

「ほら、二人も自己紹介してくださいよ～」

「真名・・・預けて大丈夫？・・・・」

「霞に聞いたら、月様達も真名を預けてるみたいですし～」

「そう・・・・私は呂布・・・奉先・・・・真名は恋・・・」

恋は自己紹介した後、音々音を前に押し出す。

「わ、分かっているのです！！
私は陳宮　公台　真名は音々音です！」

そのままぷいと士郎から視線を逸らす。

「素直じゃないですねぇ～」

「違うのです！こんな奴どうでもいいのです！」

「音々音・・・・静かにする・・・・」

「れ、恋殿！やめるのです～」

なにか音々音がひどい目に遭っているが、気にしないでおこう。

「それにしても全員無事で良かったよ。」

「そうですね～
城門を破るまでは大変でしたけど、後は楽でしたよ～」

士郎は軽く回りを見回し、

「ここの黄巾党の大将はもう倒してるのか？」

「確か、恋さんが倒したはずですけど～」

話を振られた恋はこっちに目を向ける。

「なんか・・・そんなのがいたような気がする・・・」

「大丈夫みたいですね～」

「そうなのか・・・
とりあえず、今本陣の部隊もこっちに向かって来てるから、陣の構築始めるか。」

「そうですね～
あ！今霞さん達が着ましたよ～」

弧白が指差した方を見ると、霞と玖遠が此方に向かってきているのが分かる。

「士郎ーーー生きとるかーーーー」

「士郎さーーーんっ！！」

その後、士郎は霞と玖遠に揉みくちゃにされ、
聖達が合流した時、皆に白い目で見られていた・・・・

2－5　許昌攻略戦（後書き）

徐晃（じょこう）　公明（こうめい）

真名は弧白（こはく）

他人の意見に流されやすい性格をしているが、
武人としての誇りは高い。
緊急時でも落ち着いているので、部下からの信頼は厚い。

髪は琥珀色のセミロングで、
普段は白いウィンプルを頭に被っている。

服はゆったりとした白いローブを着ている。

武器は湖氷牙断（こひょうがだん）
錨のような形をした、長柄の斧。

恋の攻撃を止める際は、錨の内側に引っ掛けた。

２－６　許昌での一日（前書き）

ちょっと遅くなりましたができましたー

今回の内容はたいとる通りです。
やっぱり日常会話の練習もしないといけませんね。

2－6　許昌での一日

「朝か・・・・」

基本的に士郎の朝は早い。

士郎たちが今居る許昌を攻略した後、
後から来た聖達に事情説明していたせいで、まともに睡眠時間が取れていないが、
相変わらず早起きだった。

そのまま着替え、顔を洗った後厨房に立つ。

「大分人数が増えたから量を作らないとな・・・」

新しく恋、音々音、弧白が増えた為、いつもより量が多い。

「・・・・・・」

黙々と料理を作っていると、誰かが横の食事場に入ってくる。

「おはよう・・・・あら、士郎はやいわね。」

「おはよう御座います～」

「水蓮に弧白か。お茶が入ってるけど・・・飲むか？」

「貰うわ。悔しいけれど士郎のお茶はおいしいからね・・・」

「そうなんですか・・・・では私も～」

二人も一緒に座って飲み始める。

「他の皆はまだ寝てるのか？」

「みたいね・・・・とりあえず聖は、見ため通り弱いわよ。」

「こっちは基本的に恋さんが遅いですね～」

「最近戦が続いてるから疲れてるんだろうな。
・・・・二人はなんか元気だけど。」

士郎が二人の方に目を向けて話す。

「そうね・・・まぁ海戦と比べたら楽な方よ。」

「恋さんと音々音さんに振り回されてますからね～」

「・・・・苦労してるんだな・・・」

そのまま士郎は料理を続けていく。

「ずっと気になってたんだけど・・・・・・
士郎も大分変わった服装してるけど、弧白も変わった服着てるわね。
」

「ああ。ここらでは見かけないな。」

ふと水蓮が玖白に話しかける。

「この服ですか。
ほら、私達って西涼の方が本拠地じゃないですか～
それでたま～に大秦・羅馬の方から商人が来るんですよ～」

「と言うことはそっちの方の服装なの？」

「はい。
意外と着心地いいんですよ～」

ひらひらとしているローブの裾を掴んで弧白が答える。
そのまま三人は他愛もない会話を続けていくのだった。

「遅いわね・・・・」

水蓮の呟きに他の二人も頷く。

「朝食の準備も出来てしまったしな。」

「士郎さんのお茶、美味しいですから、
このままじゃお茶だけでお腹一杯になっちゃいますね～」

「仕方ないわね・・・ここは手分けして起しに行きましょうか。」

水連の提案に賛成する二人。

「じゃあ私は聖のとこに行くわ。」

「それなら私は恋さんと音々音さんから行きましょうか～」

「なら俺は玖遠と援里を見てくるか・・・
起したら他の奴の所に行ったらいいんだよな。」

「ええ。よろしくね。」

そのまま三人は立ち上がり部屋を出て行った。

こんこん。

「玖遠、援里、朝だぞっ。」

二人がいる部屋の扉越しに、士郎が声をかけるが中からの反応はない。

「仕方ない・・・入るか。」

扉を開け中に入る。
カーテンを閉め切っており中は薄暗い。
壁際に大きなベットが置かれており、そこに二人が寝ていた。

「凄い寝相だな・・・・」

援里は大人しく寝ているが、玖遠は中々に酷い。
掛け布団が援里の方にすべて移動しており、服も捲れている。

「玖遠、起きろ。朝だ。」

玖遠を軽く揺する。

「・・・ん・・・・ふぇ?・・・・・」

どうやら頭が回ってないらしい。
ぼーっとした目を士郎に向けている。

「ん・・・・ん?・・・・・」

そのまま自分の服を見て、再度士郎の方を見る。
するとだんだん玖遠の顔が赤くなっていく。

「し・・士郎さんっ・・・
さ・・流石に横に援里ちゃんがいるのは恥ずかしいですようっ・・・
」

そのままあたふたしだす。

「まぁ流石にそ体勢は恥ずかしいと思うけど・・・」

「そ・・それにまずはお互いの確認をとってから・・・・」

「・・・・なにがさ・・・・」

何か重大な勘違いが発生している。
流石に士郎も気がついた。

「え・・だって夜這いに来たんじゃ？」

「なんでさ・・・・」

そのまま士郎が崩れ落ちる。

「ん・・・あれ・・・・」

大分騒がしくなっているので、流石に援里も目が覚める。

「もう・・・朝ですか・・・・・」

目を擦りながら援里が上半身を持ち上げる。

「え・・・・朝？」

それを聞いてキョトンとしている玖遠。

「そうだよ・・・・ほら。」

そう言いながら士郎がカーテンを明ると、明るい光が差し込んできた。

「士郎さんっ・・・遅いですよっ・・・・」

「だから違うって・・・・」

なぜか士郎が攻められている。

「と・・・とりあえず、朝食出来てるから起きてくれ。」

士郎が立ち上がって出て行こうとすると、援里に服の裾を引っ張られる。

「ん、どうしたんだ?」

「・・・・しゃがんで・・・・ください・・・・・」

言われた通りに士郎がしゃがむと、援里が背中に乗ってくる。

「ん・・・いいです・・・・」

「・・・・・了解。」

そのまま援里を背負う。

「いいなあ・・・それ・・・」

玖遠が羨ましそうな目を向けているが、

「とりあえず服を直した方がいいと思うぞ。」

士郎に指摘され慌てて布団で体を隠していた。

援里を送り、玖遠の分も一緒に新しくお茶を入れた後、
士郎は霞の部屋に向かっていた。

「おはよー士郎くんっ。」

「おはよう。起きたんだな聖。」

途中で聖と出会う。

「うん。水蓮ちゃんに起されたよ。
まだちょっと眠いけどね・・・」

寝起きの聖は欠伸をしながら答える。

「まだお茶が余ってたはずだから、飲んでくるといい。」

「うん、ありがと。
じゃあ待ってるね。」

そのまま聖と別れ霞の部屋の前に立つ。

「霞っ、朝だぞっ。」

士郎がノックしながら声を掛けるが反応がない。

「霞が寝坊するのも珍しいな・・・入るぞ。」

士郎が入ると、其処には・・・

「・・・・・・・」

「・・・・なんで服着てないのさ・・・」

着替えの途中で下着姿の霞が立っていた・・・・・・

「キャーーーーッ」

「ご、ごめんっ！」

霞がわざとらしく叫び、士郎が慌てて出て行こうとすると、

「何があったの霞っ！」

ドアが開いて詠が入ってくる。

「「「・・・・・・・・・・」」」

一瞬三人の行動が止まり・・・

「し～ろ～う～っ！！」

「ちゃ、ちゃんと確認して入ったっ！」

「男にしてはまともな奴だと思ってたのにっ！」

詠に誤解され、責められる士郎。
士郎は詠の誤解を解くのに大分時間を費やした・・・・・・

「あはははははっ！ほんま面白いわー」

霞が二人に士郎を吃驚させる為にやったと、笑いながら説明する。

「士郎、霞は朝食抜きにしといていいわよ。」

「ええっ！それはアカン！
ごめんな士郎ー」

「まったく・・・心臓が止まるかと思ったよ・・・・」

「まぁまぁ。士郎もええもん見れたやろ♪」

「うっ・・・・・」

思わず思い出しそうになる。

「し～ろ～う～っ」

「そ、そうだ朝食できてるから早く来てくれよ。
ついでに月さまを起しておいてくれっ！」

詠の生暖かい視線に耐えかねた士郎は、慌てて部屋を出て行く。

「全くっ、これだから男はっ！」

「まぁまぁええやん。別に減るもんちゃうし。」

「精神的に疲れるのよっ！
と言うか元々貴女のせいじゃないっ！」

二人は士郎が部屋を出た後も、元気?に言い合いを続けていた。

霞の部屋を出た士郎が藍の部屋に向かっていると、なにか音が聞こえてきた。

「これは・・・何か振り回してる音だな。
行ってみるか。」

中庭の方に行ってみると、其処には素振りをしている藍がいた。

「朝から頑張ってるんだな。」

「ん?・・士郎か。」

士郎が声を掛けると一旦手を休める。

「次の戦は大きくなりそうだからな。
気は抜いていられん。」

軽く汗を拭きながら答える。

「うん。調子は戻ったみたいだな。」

藍の動きが停止する。

「な・・なにがだ？」

士郎の問い掛けに口篭る。

「いや、許昌（ここ）を攻略するときは、
なんか元気が無かったって聞いてたからな。
けどもう元気そうだし、あの事件を引きずって無いように見えたからよ・・・・」

「よかった。」と士郎が言おうとすると、
急に近寄って来た藍に両肩を押さえられる。

「あ・・あの事件とは何のことだっ！
私は何もしらんぞっ！」

どうやら無かった事にするらしい。

「・・・すまん。俺の勘違いだ。
朝食出来てるから早く来いよ。」

「ああ、解った。」

おそらく全員呼んだので一度食事場に戻る。
すると・・・・

「あっ！士郎くんっ、水蓮ちゃんがまだ来てないんだけど・・・・・・

どこかで見なかった？」

「他の人でも起こしに行ったのじゃないのか？」

「もう士郎くんと水蓮ちゃん以外全員そろってるよっ。」

士郎は少し考え、

「じゃあ俺が探してくるから、聖は朝食の準備でもしていてくれ。暖めるだけで十分だと思うから。」

「うん。よろしくねっ。」

戻っていく聖を見届けた後、水蓮を探し始める士郎。

「どこに行ったんだろうな。・」

一度来た通路を戻っていく。

「そういえば、聖や月さまがいた方はまだ行って無かったな・・・」

士郎がそこに近付くと、何か怪しい音が聞こえてくる。

「？聖の部屋から聞こえてくるな・・・・・」

不審者かもしれないので、注意を払いながら、そっとドアを開ける。

そこには・・・・・・・・・・

「ふうっ・・・・・聖の匂いがする♪」

聖の布団に顔を埋めている水蓮だった・・・・・

「・・・・・・・・・・」

また思考が停止する士郎。

「♪～～～～～～」

しかし等の本人は満足そうにしている。

そうこうしていると、士郎のおかしな気配を感じ取ったのか、振り向いてくる。

「ん？」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

なんともいえない沈黙が場を支配する。

そして・・・・

「！いや・・・・・これは・・・・・そのっ・・・・・」

水蓮は急に顔を真っ赤にして慌てだす。

「・・・・まぁ・・・・その・・・・朝食出来てるからな・・・・・・」

士郎はそう言い残してさっと部屋を出て行く。

「ちょ・・・待てぇっ！！」

慌てて士郎を追いかける水蓮。

「なんで追い駆けてくるのさっ！」

「逃～げ～る～な～っ！！」

「たまには平穏な朝を迎えさせてくれっ！！」

士郎はそう叫びながら逃げ続ける。

相変わらず女難の相が続く士郎だった・・・・・・・

昼過ぎ、特にする事が無くなった士郎は城内を当ても無く歩いていた。

「手が空いたしな・・・何か差し入れでも作るか。」

陽も頂点を過ぎ、時刻で言えば大体三時位である。

兵の再編をしている水蓮や霞、弧白達に何か差し入れでも作ろうと思った士郎が
厨房に行くと、そこには先客がいた。

「あれっ、援里と詠に月さま?」

士郎の声に三人が振り向く。

「士郎さん?・・・・どうしたんですか・・・・・」

「手が空いたからな。差し入れでも作ろうかと思って。」

援里の問いに答える士郎。

「皆はいったい何をしてるんだ?」

「士郎さんと一緒ですね。援里さんがお菓子作りが得意って聞いたので・・・・
教えてもらうついでに、差し入れでも作ろうってなったんです。」

「私は止めたんだけどね・・・太守がする事じゃないって。」

どうやら援里と月が乗り気で、詠が監視やくのようだ。

「あの・・・だったら・・・・士郎さんも・・・・一緒に作りますか・・・・?」

「そういえば朝食、とっても美味しかったですね~
料理得意なんですね。」

「こいつも入るのっ!?・・・士郎・・・月に変なことしたら殺すからねっ!」

援里と月は友好的なのに、詠はなぜか敵意がむき出しである。

「するわけないだろ・・・」

「だって霞の着替え覗いてたじゃないっ!」

「「え・・・・・・」」

(まずい、二人が引いてる・・・・・)

慌てて士郎が弁解する。

「霞が説明しただろ。
わざとやって、俺の反応を見て楽しんでただけだって！」

それを聞いて月が「ああ・・・霞さんならやりそう・・・」と呟く。

「とにかくっ！変なことするんじゃないわよ！」

ドタバタしながら作業を開始する。

「なんか今日は朝から疲れるな・・・・
で、何を作る気なんだ？」

「月餅を作ろうと思ったんですけど、あれって太りやすいんですよね・・・・・」

「それで・・・・如何しようかと・・・・・」

援里と月が頭を悩ませている。

「西涼の方にしかないような物は無いのか？」

「う～ん・・・羅馬の方には違う物があるらしんだけど・・・・」

詠の発言を聞いて士郎が材料を見回す。

「うん・・・・この材料ならクッキーとマドレーヌあたりなら作れるな・・・・」

士郎がそう呟くと、

「それってどんな物なんですかっ？」

月が興味津々に聞いてくる。

「とりあえず作った方が早いな。」

そう言って四人は料理を始めた。

「中々美味しいわね。」

「はい・・・・」

四人は完成したものを試食している。

「月さま、どうぞ。」

士郎が空になっている月のコップにお茶を注ぐ。

「あっ、有難う御座います・・・・
なんか士郎さんに「月さま」って言われると落ち着きませんね・・・・」

月が士郎に礼を言いながら答える。

「そういえば士郎がさまって呼んでるの月だけよね。」

「聖からは呼び捨てで良いって言われてるしな。」

「あ、でしたら私も呼び捨ての方がいいです・・・・
あと敬語もです。なんか壁があるみたいで嫌ですから・・・・」

「俺は構わないけど・・・いいのか?」

士郎は詠の方を見ながら問いかける。

「はぁ・・・私は反対だけど、月って結構頑固な所があるからね・・
・・・」

「そうなのか・・・・・解った。じゃあ・・・そう呼ばせてもらう
よ。月。」

「はい。」

そうして平和な一日は過ぎていく・・・・・

２－６　許昌での一日（後書き）

次は濮陽攻略戦になります。

中々の量になるかもしれませんので、二話に分けるかもしれません・・・・

2－7　黄巾大乱（1）（前書き）

調子が良かったので投稿できましたー

2－7　黄巾大乱（1）

――――――濮陽城――――――

城内奥の部屋で、三人の少女が話し合っていた。

「大分追い詰められたね・・・・」

声の主は黄巾の乱の原因となった一人、長女張角、真名は天和。

「官軍はどれ位いるのっ？」

少し荒い口調で話しているのは次女張宝、真名は地和。

「今、陳留から１０万，許昌は５万，平原が５万で
寿春の方はまだ粘っているけど、おそらく負けるわ。
それも合わさると考えると・・・・大体２５万って所ね。」

最後に冷静な口調なのは末妹張梁、真名は人和。

「こっちの方が数が上なら勝てるんじゃないのっ！？」

「こっちはもともと農民の寄せ集めよ、率いているのだって元農民だし、
質が違いすぎるわ。」

「そんな・・・・」

人和に言われ、落ち込む地和。

「・・・なんでこうなっちゃったんだろ・・・・・
ただ、皆に私達の歌を聞いてほしかっただけだったのに・・・」

天和が悲しそうに呟く。

「お姉ちゃん・・・・・」

「姉さん・・・・・・」

そんな姉を見て思わず呟く二人。

「これから如何するの人和？」

「・・・逃げましょう。今はそれしかないと思う。
天和姉さんもそれで良い？」

人和の提案に頷く二人。

「そうと決まったら早速準備しようよっ。」

慌しく準備し始める地和。

「官軍が濮陽に入って来て、混乱している時が良いと思うわ。
それまで機を待ちましょう。
あと・・・・姉さん、その本どうする？」

人和が見つめる先には、天和が持っている一冊の書があった。

「・・・・この本を他の人に渡したら、また同じ事が起きそうな気

がするんだ。
だから持っていく。」

「わかったわ。天和姉さんも準備しておいてね。」

三人がそのまま話していると、誰かが部屋に近付いてくる。

「趙弘じゃない。どうしたの？」

「はっ。張角さまっ、そろそろ激励の方、出番ですっ！」

今から出陣する黄巾党の軍を激励する為に、ライブを行うのだ。

「うんっ。じゃあ行こうっ。地和ちゃん、人和ちゃん。」

三人は進んで行く。

自分達のステージに向かって。

――――――深夜、濮陽城、とある一室。――――――

「――さま、どうやらあの三人、逃げるようです。」

蝋燭の光だけが灯る部屋の中で、誰かがしゃがんで報告をしている。

その報告を別の男が椅子に座ったまま、報告する男を見下ろしなが

ら聞いている。

「ふん、まあ其れしかないだろうな。
お前はあいつらが逃げる時、道案内をしてそのまま俺の所に連れて来い。
そろそろ回収する所だったしな。」

「はっ。その後は如何すれば?」

「あの三人には用は無い。後はお前の好きにしろ。
ついでにお前にも少し力を与えてやろう。しくじるなよ。」

しゃがんだままの男は、その言葉を聞いた瞬間げひた笑みを顔に浮かべる。

「有難う御座います――――」

礼を述べた後、しゃがんでいた男は立ち上がり、部屋から出て行く。

残されたのは椅子に座ったままの男一人。

「異国の服装をした男か・・・・・」

報告された敵将の特徴を呟く。

「確証は無いが、可能性が大きいな・・・・」

そのまま立ち上がり、椅子に強く拳を叩きつける。

「だがっ！こちらも準備はしたっ！
今回は俺達が勝つっ！！」

決意を秘めた目を暗闇に向け、男はそう叫んだ・・・・・・・

バシャ、バシャ、バシャ・・・・・

「うわわわわっ！倒れますっ！」

「落ち着きい玖遠。ゆっくり体勢戻すんや。」

馬の上で慌てている玖遠を見て、霞が声を掛ける。

今、董卓、劉表連合軍は許昌から北東に進軍し、
そこから陳留に向かって渡河している最中である。

「無茶苦茶ぐらぐらしますっ・・・」

馬の脚が河底の岩や苔に脚を取られそうになり、
騎乗している玖遠はふらふらしていた。

「武器を地面につけて、体制を立て直せばどう～」

弧白に指摘され、急いで短剣二本と棒を組み合わせ、両刃槍を作り体勢を立て直す。

「ふうっ・・・なんとかなりましたっ・・・ありがとですっ！」

「慣れないと・・・危ない・・・ですね・・・・・」

その光景を見ていた援里が呟く。

「まだ馬に慣れていないから大変だな・・・・水蓮達は慣れているのか？」

その光景を見ていた士郎は、隣に居る水蓮に話しかける。

「水は慣れてるしね。
それに士郎も大丈夫そうじゃない。」

玖遠と比べると士郎はまだまだ余裕がありそうだ。

「馬が良いからな。
かなり乗り心地はいいんだ。」

「まぁ士郎の場合足腰も鍛えてるしね・・・・
でもほら、聖も大丈夫でしょう。」

士郎が目を向けると、周りをキョロキョロ見回している聖がいた。
始めてみる風景を楽しんでいるのだろう。

「水蓮ちゃーん、士郎くーんっ、見てあれ変な山があるっ！」

こっちの視線に気づいた聖が、こっちに手を振りながら話しかけてくる。

「あんまりはしゃいで落ちても知らないわよーーっ！
・・・・とりあえず心配だから行ってくるわ。」

そう行って聖の所に行く水蓮。

「皆さん・・・賑やかですね。」

「と言うより緊張感が全くないわね。」

するといつの間にか近くに来ていた月と詠が士郎に話しかけてくる。

「十分休んだからな。変に緊張しているよりはよっぽどマシだと思うぞ。」

「まぁ・・・・それもそうだけど。」

どこか納得してない顔を浮かべる詠。

軍を率いて集団行動をする時に、皆が皆、賑やかなままではいざという時に困る。
誰かが、嫌われるのを覚悟で戒める人が必要なのだ。
本人が嫌われるのを望むかどうかは関係なく――――――――――

「・・・・・・・・・・」

士郎は詠の頭に手を置く。

「俺も目を光らせてるから大丈夫だ。皆も多分分かってるさ。
詠も、これから忙しくなるから今くらいは気を休ませると良い。」

そのまま士郎は、詠の頭をやさしく撫でながら話す。

先に恋の部隊が渡河しており、周りを警戒している。
後ろも黄巾党はもうおらず。
もしもの為に一応殿には藍がついている。

「うん・・・・・」

そのまま撫でられている詠。

じ――――――――

その光景を横に居る月が見ている。

「・・・・・はっ！な、なに触ってんのよっ！」

その視線に気づいた詠が慌てて士郎の手を払いのける。

（あ、危なかったわ・・・・・
こいつ、まったく邪気が無いから、知らない内に受け入れちゃいそうになるのよね・・・・・）

心の中で呟く詠。

「詠ちゃん・・・・なんか楽しそう・・・・キャアッ！」

二人の様子に注意が向いていたせいで、月がバランスを崩し、落馬しそうになる。

下は岩が露出している水場。小柄な月は落馬しただけでも大怪我に繋がる。

「月っ！！」

詠が叫んだ瞬間、士郎が月を掴み、そのまま自分の前に抱き寄せる。

「――――っと。大丈夫か月。」

「っ――――――――」

月は一瞬思考が停止する。

「あっ！はい・・・大丈夫です。」

「そうか・・・・怪我する前で良かった・・・・」

士郎は安堵のため息を吐く。

「月っ！大丈夫っ！」

「詠ちゃん・・・・大丈夫だよ。

だけど、馬が怪我しちゃった・・・・・」

月が乗っていた馬を見ると、脚を怪我しており、
おそらくもう乗れない。

予備の馬も後方にいる為、直ぐには準備できない。

「だったら私と一緒に・・・・・・」

「乗ればいいじゃない。」と詠が言おうとすると、

「ここで乗り降りするのは危険だろう。
幸い私の馬は大人しいし、このまま乗ってるといい。」

士郎の提案に詠と月が驚いた顔をする。

「ダメに決まってるじゃないっ！」

「あの・・・迷惑になりませんか？」

詠は反対しているが、月はそんなことも無いようだ。

「ああ。大丈夫だ。」

「月っ！？」

「じゃあ・・・・よろしくお願いします。」

そのまま月はちょこんと士郎の前に座る。

「う～～～～っ！！
士郎っ！月に変なことしたら許さないからねっ！！」

「詠ちゃん・・・・・」

そのまま三人は恋達が待機している対岸に進んでいった・・・・・・

「お疲れ・・・・・・」

士郎達が岩の横で座っている恋の横に近付くと、恋が声を掛けてきた。

「お疲れ。」

士郎が挨拶すると、恋は士郎の前に座っている月をじっと見つめだす。

「どうしたんですか・・・・？」

月がよく解らない顔を浮かべ聞くと、

「・・・・兄妹？」

「ちっ、違いますっ！

私の馬が怪我したから、一緒に乗せて貰ってるんです・・・・・・」

真っ赤な顔をした月が、慌てて否定する。

「そうなの？・・・・・・・そう見えた・・・・・」

恋が首を傾げながら答える。

「まぁ俺も月くらいかわいい妹がいれば嬉しいけどな。
恋、新しい馬ってあるのか？」

「「えっ！？」」

それを聞いた月と詠は思わず声をだす。

「わかった・・・・・・・」

そんな二人とは裏腹に、恋はのんびりと馬を持ってくる。

「はい・・・・・・・」

「ありがとう。」

恋から馬を渡され、それに移る士郎。

「あれ・・・私が乗り換えるんじゃないんですか？」

「ああ。その馬大人しいし乗りやすいから、月が乗ってた方が安全だろ。
的盧（その馬）もそれでいいみたいだし。」

そう言って士郎は馬首の向きを変える。

「またこの戦が終わったら、返してくれれば良いから。俺は聖達の所へ行ってくる。」

士郎はそのまま新しい馬で移動して行った。

「ありがとうございますーーー」

月は精一杯の声で礼を言う。

「行ったわね・・・・・・」

「うん・・・」

詠と月がポツリと呟く。

「ほんとに変わった奴よね・・・・・」

「あはは。でも私・・・士郎さんみたいな人がお兄ちゃんならいいな・・・・」

「月っ!?」

おもわず驚く詠。

「詠ちゃんもそう思わない?」

「まぁ・・・良い奴だってのは認めるけど・・・・」

すると横で聞いていた恋が話しだす。

「・・・・士郎は・・・・・・強い・・・・・・」

「どのくらいなの？」

「最初は私と同じくらい・・・・・・けど・・・・・・途中から強くなった・・・・・・」

おそらく許昌で戦った時を言っているのだろう。

「と言う事は・・・・・恋さんより強いんですか？」

月の質問に対してフルフルと首を振る恋。

「やってみないと・・・・・・分からない・・・・・・・」

「にしても霞には勝ったらしいからね・・・・・・頭も良いし。男だけど、あれだけの将は貴重ね・・・・」

「確か・・・客将で聖さんの軍に参加してるみたいだよ。」

「・・・・・・・」

月の言葉に考え込む詠。

「とりあえずはこの戦いが終わってからね・・・・」

そう言って気持ちを新たに進んで三人は進んで行った。

濮陽から南に進むと、陳留に繋がる道がある。
その途中、丁度二つの街の中ほどの所に、山と川に挟まれた狭い道があり
士郎達はそこに陣を張っていた官軍と合流する。
ここなら道が狭い為大軍で攻め込めず、自軍と黄巾党の数の差が無くなる。
同等の兵なら兵や将、装備のすべてで自軍の方が上な為、黄巾党も攻め込めないのだ。

聖は官軍に合流した為、総大将に挨拶をしに行っていた。

「ご苦労！濮陽では前線で戦ってもらうゆえ、しっかりと休んでおくように！」

聖の前で話している男の名は何進、今の官軍の大将軍である。

「はい、有難う御座います。」

聖は頭を下げながら答える。

「そう言えば董卓殿の姿が見えんが、どうされた？
ワシや他の者達も会った事が無く、楽しみにしておったんだが・・・

・・・」

「少し体調を崩しておりますので、天幕にて休んでおります。」

「そうか。まぁワシもここまでの進軍で疲れておるゆえ休ませてもらう。
また追って伝令を伝える。」

そう言い残して何進は去っていく。

何進が去った後、聖はため息をつきながら頭を戻す。

「なんかあの人と話すと疲れるよ～～
早く皆の所に戻ろうっと。」

そう言って足早に去っていく。

「ただいま～～～・・・・・・」

疲れた様子の聖が帰ってくる。
そのまま椅子に座り、士郎が入れたお茶を飲む。

「ふう～～～～っ・・・・・生き返る～～～」

「なにかあったの？」

「何進さんと所に行ってたんだけど・・・・・・・・
「ワシは疲れておるから戻る。」ってさっさと引っ込んで行った・・・・・・」

「なに言ってるのよあのジジイは。
あいつ等がしたのって陳留での迎撃と、ここまでの進軍だけでしょうが。」

聖の話を聞いて怒る水蓮。

「確か・・・陳留で戦ったのも・・・・・袁紹さんと・・・・・皇甫嵩さんだったようです・・・・・」

援里の話を聞いて全員ため息をつく。

そうしていると、誰かが天幕に入ってくる。

「聖さんはいますのっ！！」

「麗羽さまっ、勝手に入るのは不味いですよう・・・・」

「大丈夫だって斗詩。劉表さまは優しいからっ。」

ワイワイと言いながら入ってきたのは、
高めの声を出しなている、金髪縦ロールの女性と、
斗詩と呼ばれていたボブカットの青い髪をした女性、
そして活発そうな短い水色の髪の三人の女性だった。

「麗羽ちゃんっ、久しぶり～
どうしたの？」

聖が仲よさそうに話しかける。

「お久しぶりですわ聖さん。何進の奴に伝令を頼まれたんですのよ。
まぁ貴女にも一応顔を見せておこうと思いましたからね。」

「お久しぶりです麗羽さん。それで、伝令の内容は？」

「お久しぶりですわ水蓮さん。
斗詩さんっ、説明してくれます？」

麗羽に呼ばれた斗詩が話し出す。

「まず濮陽に居る黄巾党約３０万。
それに対してまず平原方面の盧植さんと公孫？さん、
寿春から小沛に移動した朱儁さんと袁術さんがまず攻め込みます。
それを迎撃して数が減った所を、この陣に居る１５万で一気に攻め込むようになってます。」

「成る程。要するに良いとこ取りをするつもりか・・・」

「そうですわ。
自分が率いる軍の消耗を最小限に抑えて手柄は独り占め・・・・
全く、あんなのが大将とは・・・情けないですわっ。」

士郎の呟きに答える麗羽。

「まぁあんな俗物はこの名門、袁家からすれば大した事ない人ですわ。
おーっほっほっほっ！」

麗羽の高笑いが天幕内に響く・・・・・・

初対面の士郎、玖遠、援里の三人は麗羽のテンションに呆気にとられていた・・・・・・

「と、とりあえず作戦の内容は理解したよ・・・
麗羽ちゃんも疲れてるだろうし、はいどうぞ。」

聖も若干引きつつも、麗羽を落ち着かせるために士郎が淹れたお茶を勧める。

「あら、有難う御座います。頂きますわ。」

そう言って飲み始める。

「・・・これはっ・・・聖さんっ、このお茶はどこの物なんですのっ！？」

「支給された物だから葉は一緒だよ。
多分士郎くんが淹れたから美味しいんだと思うよっ。」

「士郎と言うのは？」

麗羽は周りを見回す。
それを見た士郎は一歩前に進み、

「始めまして、客将として劉表軍に参加している衛宮士郎と言います。」

士郎はお辞儀をしながら名乗りでる。

「貴方ですのね。私は四代にわたって三公を輩出した名門、袁家党首　袁紹本初ですわっ。
この二人は私が華麗な軍の将、文醜さんに顔良さんですわ。」

「よろしくっ！」

「よろしくお願いします。」

軽いノリの文醜に対して、礼儀正しい顔良。
この二人と居ると苦労しているんだろうなと、士郎は顔良に親近感を持てた。

「それで士郎さん、礼儀正しいし、お茶も美味しい・・・・・
あなたが望むのでしたら、私の側近にしても宜しいですわよ。」

「えええええっ！！ダメだようっ！」

麗羽の爆弾発言に思わず驚く聖。
周りの皆もポカンとしているが、

「ありがたい話ですが、私は聖さまの考えに賛同しているので・・・・」

士郎はやんわりと断る。

「そうですか。まぁ気が変わったら何時でもいいですわよ。」

そして麗羽達は踵を返し、

「それでは聖さん、次の戦ではよろしくお願いしますね。」

そのまま去っていった。

「・・・・・・・なんか色々凄い人だったな・・・・・・・」

士郎は思わず呟き気を抜くが、

「・・・・・・行ったりしないですよねっ！？」

玖遠や聖から先程の質問を心配され、最後まで落ち着かない士郎だった。

２－７　黄巾大乱（１）（後書き）

三国志では劉表と袁紹は同盟を結んでいたので、
このＳＳでは同盟はしていませんが、
お互いに真名で呼ぶ位は仲が良いです。

袁紹も基本バカですが、少しはマシにしてます。
流石に原作のままだと太守は無理すぎる・・・・

２－８　黄巾大乱（２）（前書き）

この話で黄巾党の話が終わる予定でしたが・・・・
予想以上に書く事が多くあと一話ほどかかりそうです・・・

けどペースを上げながら書いているので、直ぐに投稿出来ると思います。

2－8　黄巾大乱（2）

「北の盧植、公孫?軍、
東の朱儁、袁術軍の攻撃を受けて、黄巾党が迎撃に出ましたっ！」

戦が始まって数刻、戦況が動き出す。

「よしっ！ここが攻め時だっ！
劉表、董卓軍っ行けえっ！」

その様子を見て何進が号令を下す。

『オオオオオオオオオッ！！』

咆哮を上げ攻め込んでいく両軍。

その直ぐ後ろに袁紹、皇甫嵩軍が備えており、
何進の軍勢はその更に後ろに配置されていた。

「行く・・・・・・・」

先頭を走るのは恋、手にもつのは方点画戟

「・・・・・邪魔。」

横薙ぎに払われた一撃は、前方にいた黄巾の兵をまとめて薙ぐ。

「・・・ふっ！」

そのまま流れるように、その後ろにいた敵兵を袈裟に切り付け、
吹き飛ばされた兵が後ろの兵を巻き込み、恋の前に道が出来る。

「はぁーーーっ」

「ふっ！！！」

その直ぐ横を、左右に分かれた藍と弧白が続き、
斧を振るい強引に道を広げていく。

まさにモーゼの如く、強引に道を開いていく。

「やっぱり鋒矢陣（このじん）の先頭はあの三人やな。」

「力ありすぎですっ・・・」

それを後ろで見ていた霞と玖遠が呟く。

二人の部隊は鋒矢陣のい中央、恋達の後ろに控えていた。

「ぐうっっっ！！怯むなあっ！奴らを分断させろっ！」

それを見ていた黄巾党の大将が命令を下す。

鋒矢陣の弱点は横からの攻撃。
セオリー通りにそれを狙ってくる。

だが、

「霞、玖遠っ、敵が寄せてきてるわっ！任せたわよっ！」

鋒矢陣の最後方で、全体を把握していた水蓮はそれにいち早く気づき、
霞と玖遠に止めるように指示する。

「よっしゃっ、ウチらの出番やっ。
行くでっ、玖遠っ！」

「はいっ、了解ですっ！」

それを聞いた二人は一気に進んでいく。
先に着いた霞は、その勢いを殺さずに攻撃を開始する。

「ウチについて来てみいっ！」

閃光のような突きで敵兵を倒していく。

が、スピード重視の為、何人か生き残っているものがいた。

「囲めえっ！！」

その敵兵たちが叫び、霞を包囲しようとする。

がーーーーー

「やぁっ！」

玖遠が双刃槍を振り回して、それを阻止する。

槍を振るうたびに玖遠の左右に居る敵兵が倒れていく。

それを止めようと強引に切りかかって来る者もいたが、
玖遠は咄嗟に槍をばらし、短槍と短剣に変えて切り倒す。
霞が速さで圧倒し、その隙を玖遠が臨機応変に合わせていく。
全体の様子を水蓮が判断し、進軍する。
この勢いを止められる者はいなかった。
「これなら・・・何とか・・・なりそうです・・・・」
水蓮の傍にいた援里が呟くと、後ろから誰かが出てくる。
「そうだね。一気に終わらせちゃおう。」
「聖っ!?また前に出てきてっ・・・・・」
水蓮が聖を嗜めようとすると、
「うおおおおおおっ!!」
剣を振りかぶる敵兵が直ぐ傍まで近付いていた。
体は正に満身創痍。一兵だけなのを見ると、恐らく強引に突破してきたのだろう。
「っ!?敵かっ!」
それを見た水蓮が慌てて止めようとすると、援里が水蓮と敵兵の間

に割り込んでくる。

「援里っ！？」

驚く水蓮をよそに、援里は敵兵の一撃を袖口から出した鉄扇を防ぐ。

「なっ！！」

そのまま体格差を生かして、敵の懐に滑り込むように移動し
折り畳んだ鉄扇で剣を持った右腕の脇下を突き上げる。

「がっ！！」

敵兵は苦悶の表情を浮かべた後、剣を落とし肩を抑えてうずくまる。

「い、急いでこいつを捕縛しろっ！
劉表さまの周りを固めるのも忘れるなっ！」

咄嗟に自軍に指示を出す水蓮。

その様子を聖はにこにこしながら見ていた。

「ねっ。大丈夫でしょっ。」

「・・・・・・・・・」

ゴン！！

「痛いよ～～～っ！！」

水蓮に頭を叩かれる聖。

「何かあってからじゃ遅いでしょっ！全く・・・・」

「私だってそこ等の兵士位は戦えるよ～っ・・・・」

聖が何か抗議をしているが其れを無視している水蓮。

「に、しても強かったのね。」

鉄扇を広げ、歪みをチェックしている援里に声を掛ける。

「・・・・そこそこは・・・・戦えます・・・・・」

その様子を見て苦笑を浮かべる水蓮。

「ふふっ。とりあえず聖は任せたわよ。私も出来るだけ近づけないように指揮するから。」

そう言って戦線の方に目を向ける。

「数に恐れるなっ！！質は此方の方が上！将軍らが居る限り敗北は無いっ、押し込めぇッ！」

号令によりいっそう奮起する自軍。

「士郎くん・・・大丈夫かなぁ・・・・・」

聖はそんな自軍の様子を見て、別行動をとっている士郎の事を心配していた・・・・

―――――戦前―――――

「聖、次の戦いは別行動をとりたいんだが・・・・・」

戦に向けて、聖が軍の報告書に目を向けていると、士郎に話しかけられる。

「え?・・・・っと・・・・・どうしたの?」

ぽかんとした表情を浮かべたまま聖は聞き返す。

「少し気になる事があってね・・・・張角達と私一人で会う必要があるんだ・・・・・
だから、頼むっ。」

そう言って士郎は頭を下げる。

「うん、分かったよっ。皆は私が説得しておくね。」

「いいのか?」

聖の反応に驚く士郎。

「うん。士郎くんが客将でいるのはこう言う事があるからでしょ。
軍の方も皆が居るから大丈夫だよ。
それに・・・・」

一旦言葉を置き、士郎の目を見つめる聖。

「それに・・・その目。
とっても強い目をしてる。きっと士郎くんにとって、大事な用があるんだよねっ。」

「・・・・ああ。」

「うん。じゃあ大丈夫っ。
私達も頑張るから、士郎くんも頑張って！」

聖はにこにことしながら答える。

「ああ。ありがとう。」

～　聖　ｓｉｄｅ　～

聖は士郎を送り出した。
しかし、聖も送り出したとは言え、自分達と一緒に戦って欲しいという思いは勿論あった。

だが――――――

（何時までも士郎くんに甘えっぱなしじゃいけないよねっ！）

聖が前線に出てきたのも、その思いがあったからだった。

しかし士郎が行ったのは黄巾党の本陣。いかに士郎と言えどもただ

では済まない。

（急がなきゃ・・・）

「皆頑張ってっ！！この戦いを終わらせる為にっ！！」

聖の鼓舞で士気が上がる。

まるで聖の気持ちに答えるかのように進軍速度は上がっていく。

士郎がいるであろう濮陽へ向かって聖達は進んで行った・・・・・

ガタガタガタガタガタ・・・・・

士郎は今、東門から潜入している。

ガタガタガタガタガタ・・・・・

「うわぁッ！なんだこの衝車はっ！！」

「止まれっ！止まれ・・・・・うわあああああっ！！」

東門は今、混乱の極みに達していた。

城門をあっという間に打ち破った衝車が、何故かそのまま城内にも攻め入り、
敵兵を轢き、なぎ倒すと大暴れをしているせいだった。

「さあっ、ドンドンやっちゃって下さいね～」

衝車部隊の指揮をとっているのはショートヘアの女性。
海軍の服装みたいな服を着ている。

「たしかあの軍旗は袁術軍の筈だけど・・・誰なのさ、あれ・・・・」

士郎は立てられている軍旗を見ながら呟く。

「・・・巻き込まれる前に行くか・・・・・」

士郎は張角達を探し、濮陽城の更に奥に進んでいった。

濮陽城北門はまだ破られていない。

東は既に破られており、南もつい先程、官軍が門を突破し進行してきた。

その為、濮陽から逃げようとする者は皆北門に集まっている。
西門もまだ破られていないが、出ても川しかない為、逃げるのには不向きだった。
その北門に張角姉妹の姿があった。
「どう言うつもりなのっ、趙弘っ」
姉妹の目の前には黄巾党の仲間だった趙弘と、若い男の姿があった。
「左慈さま、どうぞ。」
非難する地和の声を無視して、趙弘は本を左慈と呼んだ男に渡す。
「ふん・・・・どうやら大分溜まったみたいだな・・・・・・」
左慈は本を見ながら呟く。
「その本・・・・どうする気なの？」
「貴様らが気にする必要は無い。」
人和の質問に答えない左慈。
「趙弘、後は好きにしろ。
俺の用は済んだ。」
「くくくくっ・・・これでお前らは俺の物・・・・・」

そう言って近付いて来る趙弘。

「地和ちゃん、人和ちゃんっ！逃げようっ！」

急いで三人は逃げ、趙弘はそれを追う。

四人が去った直後に北門が破られ、盧植、公孫?の軍がなだれ込んで来る。

「他の軍も来たのか・・・・ここで何人か殺してもいいな。」

そう言って左慈は北門の方に進んでいった・・・・・

「どうやら此処までだなあ・・・・」

途中で天和が脚を挫き、趙弘に追いつかれてしまう。

「くっ・・・・・」

趙弘を睨みつける地和。

すると、誰かの声が聞こえてくる。

「張角さまーーっ！！」

その声を聞いた天和は直ぐに顔を上げ助けを呼ぶ。

「ここよーーっ！助けてーーっ！」

張角を探していたのは黄巾党副将馬元義と厳政。

「ご無事でしたかっ・・・・何をしているのだ趙弘っ！」

事態を把握し趙弘を問い詰める馬元義。

「なに。今からこいつ等を俺の物にする所だ。」

「何いっ・・・おのれ・・・裏切ったなっ！！」

其れを聞いた二人は激怒し、剣を振りかぶって襲い掛かる。

が――――――

「「なっ！」」

二人はすれ違いざま、一瞬で趙弘に切られる。

「強い・・・・・」

思わず呟く人和。

「くくくくくっ。これが張曼成が得ていた力か・・・・・

これならば貴様らなど相手にならんわっ！」

そう言いすて、再度天和達に近付いて来る。

「さあ・・・今度こそ・・・・」

と近付いた瞬間――――――

ドゴオッ！！！！！

「なッ！これは・・・・剣？」

シンプルなデザインの剣が天和達との間に割り込んでくる。

「誰だぁッ！！」

趙弘が剣を飛んできた方向を見ると、一人の男が近付いて来ていた。

「オマエは・・・確か劉表軍の！」

「そこの三人に用があるんでな。退いてもらおう！」

近付いてきた男、士郎は干将・莫耶を構えながら言い放った。

「ふん、俺は張曼成の様にはいかないわっ！」

そう言いながら士郎との距離を詰めて、斬りかかって来る。

「張曼成？・・・成る程。宛城で逃げた敵将はお前だったのか。」

その一撃を受けながら士郎は答える。

「あの時の俺とは違うッ！うおおおおおッ！」

再度、袈裟に斬りつけてくるが、

士郎は左の干将でそれを流し、右の莫耶で浅く斬りつける。

「ぐううううっっ・・・・・」

苦悶の表情を浮かべて座り込む趙弘。

「膂力は中々だが技術が全くだな。」

そう言って剣を突きつける。

「さあ、貴様にの後ろに居る人物を答えてもらうッ！」

すると、突然趙弘の体が震えだす。

「？どうした・・・・・」

心配した士郎が声を掛けた瞬間、

「ぐふうッ！」

血を吐いて倒れる。

「なっ・・・・・・」

士郎が呆気にとられていると、誰かが近付いてきた。

「多分左慈に口封じされたのよん。」

そう言いながら近付いてきたのはビキニパンツ一枚しか来ていない、ムキムキマッチョの男だった。

「「「へ、変態っ！」」」

余りのインパクトに張角三姉妹が怯えてしまっている。

「だぁれが、ムキムキマッチョの変態ですってぇ！？」

謎の変態の迫力に気絶する三姉妹。
きっとこれまでの疲労もあったのだろう。

に、しても、

（自覚あるのかよ・・・・・）

士郎はそう思いながら話しかける。

「え・・・っと・・・だれ？」

「うふ。わたしの名前は貂蝉よん。」

「俺は衛宮士郎。
それで・・・貂蝉って・・・・・あの・・・・・？」

士郎が知っているのは、三国志でも絶世の美女と呼ばれている人物

の事だ。

「なんでさ・・・・・」

落ち込んでる士郎を置いて貂蝉が話を続ける。

「貴方がお爺ちゃんが送ってくれた人かしらん♪」

「・・・宝石翁に送って貰ったのは俺だけど・・・・・」

（宝石翁の知り合いってこいつなのか？）

「新しいご主人様が、男前で良かったわん。」

クネクネしながら喜んでいる。

（こんなのと知り合いでいいのか、宝石翁？）

「なんでご主人様なのさ・・・・・」

士郎は気持ちを切り替えつつ、話を続ける。

「説明すればわかるわん。

宝石翁が平行世界を放浪しているのは知っているかしらん？」

「ああ。」

第二魔法「並行世界の運営」の事だろう。

宝石剣ゼルレッチを使って放浪しているらしいが・・・・

「その時、偶然この世界に来てしまったのよん。」

「この世界って・・・・平行世界じゃないのか？」

「似ているんだけどちょっと違うのねん。
この世界は外史といわれる世界なのん。」

「どう違うんだ？」

「外史は人々が「想像した世界」なのよん。
三国志の武将は女だったとか、曹操と夏侯惇は百合だったとかん。」

「な・・・・・」

そんな事で世界が増えるのかと絶句する士郎。

「で、その外史を滅ぼそうとしている者達が居るのよん。

「数が増え過ぎるからか？」

士郎の言葉に頷く貂蝉。

「そうよん。このまま増え続けるのなら、幾つか消してしまおうとしているのよん。」

貂蝉は一度言葉を切る。

「でもご主人様はこの世界で過ごしてみてどう思ったかしらん？」

「・・・・・・・」

士郎が思い出したのは今までの事。

自分の民を守るために必死に頑張っていた聖や水蓮。

この戦乱を終わらせようと、まだ幼いのに戦っている玖遠や援里。

そして共に戦ってきた董卓軍の皆。

彼女達の思いがそんな理由で消してしまわれるのは、納得が出来なかった。

「多分ご主人様は私と同じ事を考えているわねん♪
其れを防ごうとしているのが私なのよん。」

「今までも何回か阻止してきたんだけど、今回は大分力をつけてきてるみたいなのん。
それで、知り合いになったお爺ちゃんに相談したって訳よん。」

「そうだったのか・・・・ってなんで俺がご主人様なのさっ!?」

危うく最初の疑問を無かった事にされそうだった士郎は、慌ててつっこんだ。

「以前来た人をそう呼んでたから、癖になってるのよん。」

「ああ・・・そうなのか・・・・
って、俺のほかにも来た奴がいるのか!?」

士郎が気にしているのは、自身が元の世界で追われていたからだ。
もし別の方法で来られるのならば、士郎だけではなく、この世界自体が危なくなる。

「大丈夫よん。この世界に来るためには銅鏡が必要になってくるのよん。
よっぽど特別な方法じゃ無ければそう簡単に来れないわん。
お爺ちゃんもこの世界に来るときは銅鏡を使ってるし、
その銅鏡もお爺ちゃんが管理しているからだいじょうぶよん。」

貂蝉の言葉にほっとする士郎。

「とりあえず事情は分かった。
で、これからどうすれば良いんだ?」

すると、貂蝉は少し困ったような顔をし、

「今さっき話した消そうとしているのは左慈と于吉って言う導師なんだけどん、
その左慈って言うのが太平要術の書を使って何かしようとしているみたいなのん。」

「やっぱり魔術書の類だったのか・・・・」

士郎は張曼成の言葉を思い出していた。

「今北門の方にいるみたいだからいきましょう♪」

貂蝉が行こうとすると、士郎が其れを止める。

「ちょっと待ってくれ、張角達をこのままにしておけない。」

士郎は気絶している三姉妹の方を見る。

「大丈夫よん。直ぐそこまでご主人様の軍が近付いてきているからん。」

貂蝉が言った瞬間、馬の蹄の音が近付いて来る。

「士郎くーーーんっ！」

「聖っ！私が先行するから下がりなさいっ！」

「聖っ、水蓮っ！」

来たのは南門から進軍していた聖と水蓮。

「士郎くんっ！大丈夫だった！？」

心配しながら、まるで抱きつくように士郎の体をチェックし始める聖。

「ちょっ・・・近いっ・・・・」

「聖っ、はしたないからやめなさい・・・・ってきゃあああああっ！！」

水蓮が貂蝉に気づいて驚く。

「ううっ、そんなに驚くなんて酷いわ酷いわ。」

またクネクネしている・・・・

「し、士郎いったい何なのこいつはっ！？」

水蓮が波及を貂蝉に向けながら質問してくる。

「あ、ああ・・・どうやら踊り子みたいで、この街の道案内をしてもらってたんだ・・・」

苦し紛れの嘘を言い放つ。

「こんな踊り子見たことないわよ・・・」

水蓮は呆れながら槍を下ろす。

「うん・・・怪我はないみたいだね・・・・・」

そうこうしている内に聖が士郎から離れる。

ちょっとほっとしていると、水蓮から睨まれたので気を引き締める。

「そ、そうだ聖。

俺は此れから用があるから、この娘達を預かっていて欲しいんだ」

士郎が張角達に目を向けながら話す。

すると、丁度張角達が目を覚ます。

「う・・・・・ん・・・」

「あれ・・ちぃ達は・・・？」

「ねえさん・・・大丈夫・・・・・」

寝ぼけ眼を擦りながら、周りをキョロキョロしているが、直ぐに自分達の状況に気付く。

「彼女たちは？」

「彼女たちが黄巾党首領の張角だよ。」

「「えええええっ！」」

聖と水蓮がかなり驚いている。まぁ無理も無いだろう。

「だったらここで保護してもいずれは殺されるわよ？」

「う～～ん・・・・」

水蓮の言葉に否定できずに悩む聖。

すると――――――

「待ってくれっ！天和ちゃん達は悪く無いんだっ！」

「そうだ。俺達が勝手に暴走してただけなんだよっ！」

慌てて声を掛けてきたのは、倒れていた馬元義と厳政。

二人とも致命傷を受けており、死ぬ間際だと言うのに声を張り上げてきた。

「どう言う事なの？」

水蓮が二人に問いただす。
彼らが言うには、公演中に彼女たちが『このまま天下取っちゃう～？』と
言った事を真に受けて、それが何時しかこの様な騒ぎになったという。

「・・・・・・・・」

水蓮が余りの真実に口を開けている。

「恐らく今この国の皇帝にも不満があったんだろう。
遅かれ早かれ、其れが爆発していたさ。」

士郎がフォローを入れる。

「そ、そうなんだよっ！その責任を天和ちゃん達に押し付けるなんて
俺には出来ねぇッ！」

「それに言い訳になるけどっ、反乱起している時は何か変な感じだ
ったんだよっ！
反乱を起すのが正しいって言う考えが、頭ん中一杯でさ・・・・」

「貂蝉、それってもしかして・・・・」

「ええ、多分太平要術の書の影響ねん。」

士郎は周りに聞こえないように貂蝉と話す。

「太平要術の書は持ち主の願いを叶える力があるのよん。」

「それってまるで・・・・」

聖杯じゃないか――――――

士郎がそう考えていると、水蓮が話し出す。

「とは言っても、黄巾党の首領の首を取らないと、この戦いは終わらないのよ・・・・」

「だったら、俺達の首を使ってくれっ！」

馬元義の発言に厳政も頷く。

「なっ！！」

水蓮が驚いているが、構わず話し続ける。

「俺達はこの傷じゃもう助からねぇ・・・・
俺達とそこの趙弘を合わせたら丁度三人だ。」

「だけどっ・・・・・」

「いざって言う時は、俺達が身代わりになるつもりだったのさ・・・・」

「っ・・・・・・」

水蓮は言葉を失う。

「分かったよ。」

そこで話し出したのは聖だった。

「いいの聖？」

「うん。理由があっても、この罪は償わないといけないと思う。だからってすぐ殺してしまうのも違うと思う・・・一度彼女たちと話て決めたいの。もし、この彼女達が罪を償いたいのか、逃げたいだけなのかを・・・・」

聖は強い目を天和たちに向けながら話す。

「分かったわ。とりあえずこの場は、貴方達の首で決着をつけるわ。いいわね。」

水蓮の発言に頷く馬元義と厳政。

「あっ・・・士郎くんも用事があるんだよねっ。・・・ちゃんと無事に帰って来てね・・・・」

「ああ。行こう貂蝉。」

「了解よん。ご主人様♪」

そうして走り去っていく二人。

「「・・・・ご主人さま？？？」」

新たな問題を残しつつ、乱は終結を迎えていく・・・・・・

2－8　黄巾大乱（2）（後書き）

貂蝉と宝石翁の関係は大分フランクな感じです。
そもそもあの爺さん自体が大分フランクな性格ですし・・・・・・
『宝石翁があんな変態と同等に話しているのは納得出来ん！！』
って言う人もいるかもしれませんが、許してください・・・・

太平要術の書に関しては、私の自己解釈です。

アニメは見ていないんですが、ｗｉｋｉで設定を見ていると、
どうしても聖杯と似たような物としか思えなかったですから・・・・
（聖杯ほど力は無いです。あくまで方向性が同じだけ）

批判等があるかもしれませんが、とりあえずは
この設定で進んで行きたいと思いますので、
ご了承の程、よろしくお願いします。

けっこう駆け足で執筆したので、誤字脱字、
おかしい文法等がありましたら教えてもらうと有難いです。

2－9　黄巾大乱（3）（前書き）

長かった黄巾の乱が終わった・・・・

2－9　黄巾大乱（3）

――――――濮陽城　北門――――――

北門を破ってきたのは盧植、公孫?軍。
その公孫?軍の中に、劉備達の姿があった。

「よし。どうやら西門以外はこれで全部突破したな。」

白馬の上で周りを見回しながら公孫?―白蓮が話していた。

「そうだね。後はどうするの?」

すぐ横にいた劉備―桃香が話しかける。

「とりあえずは残党の対処と民の保護だな。」

「うん。わかったよっ。」

そう言って二人は進んでいく。

すると・・・

「ん・・・誰か居るな・・・・・」

前方に白装束の服を来た男が居る。

「おい!どうしたんだーっ!」

白蓮が声を掛けると、男と目が合う。

瞬間・・・にやりと、その男は笑みを浮かべた――――

「っ！！愛紗ちゃんっ、鈴々ちゃんっ！！」

何か不吉なものを感じた桃香は義理の妹達を呼ぶ。

「ふっ。」

その隙に浅く笑いながら近付いて来る。

「護衛兵っ！！奴を近づけるなっ！！」

白蓮が直ぐに直属の騎馬兵を前に出す。

「はあっ！！」

叫び声と共に跳んだ男は、先頭にいた二人を叩き落す。

「ぐうっ！！」

顎を下から蹴り上げられたのと、

その後の馬上からの落下の衝撃も相俟って動けない。

「くっ・・・囲めぇっ！！」

急いで包囲しようとするが、

「遅いっ！！」

先に接近してくる。

その後、小回りが利かない騎馬兵を尻目に、間を縫うように移動し落馬させていく。

ある者は延髄を蹴られ倒れ伏し。

ある者は顔面を蹴り飛ばされる。

下馬をしようとしても、そんな隙が在る筈も無く、

あっという間に十数人の兵が倒れる。

「引くぞっ、桃香っ！」

「で、でもっ！皆を見捨てて行けないよっ！」

桃香は倒れている騎馬兵達に目を向ける。

「馬鹿っ！モタモタしてると私達までやられるぞっ！」

そうこうしている内に男が近付いて来て、

「はっ！！」

「きゃあああっ！！」

桃香が騎乗していた馬が蹴り飛ばされ、落馬する。

「桃香っ！！・・・・きゃあああっ！！」

そのまま白蓮も落とされ、倒れている二人に近付いて来る。

「ふん、異物はさっさと消すか。」

そう言い放ち、体勢を沈め、跳び蹴りの体勢になった時、

「貴様あっ！！桃香さまに何をしているっ！！」

「お姉ちゃんっ！大丈夫なのだ？」

横から関羽と張飛が飛び込んでくる。

「愛紗っ、鈴々っ、気をつけろっ！そいつ只者じゃ無いっ！」

白蓮の言葉に頷く。

「はい・・・・」

愛紗は緊張した顔をしたまま男を見つめている。

「私は中山靖王劉勝の末裔、劉玄徳一の家臣関雲長っ！」

「同じく張益徳なのだっ。」

「ふん・・・俺は左慈。」

そう言いながら手甲と脚甲を装備する。

「足掻いて見せろッッッ！！」

「剣戟の音がするな・・・・」

「そうねん。どうやら誰かが左慈と戦ってるみたいなのねん。」

士郎達が北門近くまで来ると、戦っているのが見える。

着いた時に見たのは膝をついている二人の少女とそれを見下ろす男。

そしてその様子を心配そうに見ている二人の少女だった。

「愛紗ちゃんっ！鈴々ちゃんっ！」

「駄目です桃香さまっ！」

助けに来ようとした桃香を止める愛紗。

「よそ見をしている暇はあるのかっ！！」

その瞬間、鋭い蹴りが愛紗を襲う。

「ぐうっ！！」

咄嗟に青龍偃月刀の柄で防ぐが、スピードがのっており、
脚甲の威力も相俟っており吹き飛ばされる。

「うにゃ～っ！！」

その隙に鈴々が蛇矛を構え、左慈の横から突くが、

「なっ！！」

左慈は蛇矛の上に立っていた。

「うにゃにゃにゃにゃにゃ～っ！！」

左慈を振るい飛ばし、蛇矛を振るい、
上下左右から襲い掛かるが、

左慈は手甲でそれを受け流す。

「関羽と二人がかりでも勝てなかったのに、
一人で勝つつもりかッ！」

そのまま距離を詰め
急にしゃがみ、水面蹴りを放つ。

「うにゃあっ！！」

いきなり視界から消えた為、左慈を見逃した鈴々はそれをまともに受けてしまう。

地面に尻餅をつき、座り込んでいる鈴々に左慈が近付く。

「これで終わりだっ！！」

鈴々の顔面目掛けて、鋭い蹴りが放たれる。

が――――――

「させないわよん♪」

「なっ！？・・・貴様は・・・・貂蝉ッ！！」

そのまま戦う二人。

「た、助かったのだ・・・・？」

一旦離れる鈴々。

「ちぃッ！」

舌打ちをし、攻撃し続ける左慈。

「あの娘たちに用があるのなら私を倒してからにするのねん。」

「ふん！貴様など、今の俺からすれば敵にならんわッ！！」

じりじりと、しかし確実に圧倒していく。

「このまま死ねっ・・・・・・・」

左慈が一気に押し込もうとすると、横から誰かが攻撃してくる。

「チイッ！」

咄嗟に下がってそれをかわす。

「悪い。遅くなった。」

「危なかったのねん、ご主人様♪」

そのまま貂蝉の横に立つ士郎。

「あの娘は大丈夫なのかしら？」

貂蝉は、左慈に吹き飛ばされた愛紗の事を聞いてくる。

「ああ。とりあえず応急処置はしたから大丈夫だと思う。」

「良かったのねん♪
じゃあ後は左慈から書を回収するだけねん。」

そう言って二人は左慈の方に目を向ける。

「舐めるなッッッ！」

二人の言葉を聞いた左慈は激怒し、一気に跳躍してくる。

「ふっ！！」

士郎は空中で身動きがとれない所を狙い、右の莫耶で突くが、
左慈の左手甲に弾かれる。

「おおおおッ！！」

そのまま着地と同時に繰り出してきた、
左慈の攻撃を左の干将で防ぐ。

鋼と鋼が擦れる、甲高い音を響かせて静止する二人。

「はッ、やるじゃないか！」

右手をそのままに、空いた左手を地面に着けて鋭い蹴りを放つ。

士郎はそれを半身ずらして避けるが、
左慈は一旦蹴った脚を戻し、右手も地面に着け、下から突き上げる
ような蹴りを放つ。

「くッ！！」

士郎の頬を掠めるが、そのまま下にいる左慈に斬りつける。

左慈はそれを蹴っていない方の脚の脚甲で受け止め、弾き飛ばし、
その反動で後ろに跳ぶ。

「もらったわよん。」

その体勢が崩れた隙を、狙っていたかのように貂蝉が蹴りかかる。

「舐めるなッッ！」

腕を交差させてそれを防ぐ。

貂蝉と数合殴りあった時、左慈の後ろから士郎が攻めかかる。

「ちぃッ！！」

さすがに二人同時は厳しいらしく、離れる左慈。

「すごい・・・・・」

それを見ていた桃香が思わず呟く。

劉備たち三人は戦いをじっと見ており、
口には出さないが、愛紗と鈴々も同じ感想を抱いていた。

「どうしたのん？まだまだこれからじゃないのん♪」

「くっ・・・・」

貂蝉の挑発に歯噛みする左慈。

「まぁいい、既に書は回収した。
貴様らの事は後で片付ければ良いだけだ。」

そう言って懐から呪布らしきものを取り出す。

「不味いわん、逃げる気よん。」

「させるかっ！！」

士郎が干将・莫耶を投擲するが、

「間に合わなかったわねん・・・・」

左慈の方が早かった。

「・・・・・・・・」

士郎が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていると、

『ウオオオオオオオオオッッッッッ』

まるで地響きのような歓声が、遠くの方から上がってくる。

「どうやら戦いが終わったみたいなのねん。」

袁紹軍が偽者の張角の死体を見つけ、
それにて黄巾の乱は終焉を迎えた・・・・・

まだ抗う者もいてもおかしくないのだが、
残った黄巾兵達は、まるで憑物が落ちたかのような表情を浮かべており、
戦後の処理は非常にスムーズに進んでいった・・・・・・・・・

「以前より大分強くなっていたのねん・・・」

士郎が貂蝉に今後の方針を聞いていると、そう呟いた。

「そうなのか？」

「ええ。以前は私と同じくらいだったのねん。」

貂蝉は困ったような顔を浮かべている。

「とりあえずは一対一でやるのは避けた方がよさそうだな・・・・」

「そうねん。」

士郎の提案に貂蝉も同意する。

「それで、これからどうすればいいんだ？」

「確かご主人様は劉表さんの所にいたのよねん？」

「そうだけど・・・・」

貂蝉は少し考えて、

「多分あいつらは歴史通りに進めていって、その裏で何かしてくると思うわん。
あんまり介入しすぎるとまずいからねん。」

「修正力の事か。」

士郎の発言に頷く貂蝉。

「結局あいつらも私もこの「世界」に作られた存在なのねん。
あんまり無茶しすぎると消されちゃうのねん。」

「俺が来たのは大丈夫なのか？」

「以前別の外史で同じような事があったから大丈夫よん♪
それに、修正の条件も結構曖昧だし、奴らも下手に歴史を変えるより、
それを有効利用したほうがらくなのよん♪」

「そうなのか・・・・・」

クネクネしている貂蝉に若干引きつつ、話を進める。

「それで、恐らく次は反董卓連合の流れになると思うわん。
だからご主人様はこのまま劉表さんの所でいるといいわん。」

「それは良かったよ。」

まだ会ってからそんなに経ってはいないが、
聖達と一緒に居ると楽しく感じている士郎からすれば、嬉しいことだった。

「ほんとは、ご主人様みたいないい男とは、一緒にいたいんだけどん・・・・」

貂蝉はクネクネしている。

「ま・・まぁ、二人一緒に行動してたら怪しまれるからな・・・・・」

「そうよねん・・・・」

貂蝉はとても残念そうだ。

「まぁいいわん。私は洛陽で情報を集めておくからん、
何かあったら連絡するわん。」

「ああ。よろしく頼む。」

「じゃあご主人様。気をつけてねん♪」

そう言って貂蝉は去って行った。

士郎はそれを見送った後、木の下に居る桃香達の所へ行く。
愛紗の様子を診るためだ。

「大丈夫か？」

「あっ・・はい。愛紗ちゃん。」

桃香の声に目を開ける愛紗。

「みっともない所を見せてしまって・・・・・
まだグラグラしますが・・・体の方は大丈夫です。」

「そうか。」

「お姉ちゃんは助かったのかっ？」

その様子を見て、鈴々が身を乗り出して聞いてくる。

「ああ。倒れた時に頭を強く打ったせいだろう。
寝てれば直に良くなる。」

「良かったのだ・・・・」

鈴々は安心したのか、少し涙ぐんでいる。

「とりあえずキミは腕を出せ。」

そう言って士郎は鈴々の腕を引く。

そこには大小さまざまな傷がついていた。

「鈴々ちゃん・・・・・」

「にゃはははは・・・こんなん大丈夫なのだ！」

「とりあえず傷口は拭いておこう。」

そう言って桃香の方に目を向ける。

「え～～と・・・キミは・・・・」

「そう言えば自己紹介してませんでしたね。
私は劉備　玄徳って言います。
寝ているのが関羽　雲長で、」

「鈴々は張飛　益徳なのだっ！」

「私は劉表軍客将の衛宮　士郎だ。
早速だが清潔な布と水を貰えるか？」

「あっ、はい。どうぞ。」

士郎に言われたものを手渡す。

「ありがとう・・・・動くなよ・・・・」

「にゃっ・・・冷たいのだ～～・・・・」

目立つ所の傷をあらかた拭いた士郎は、

「よし、後は劉備、キミに任せる。」

「はい。分かりました。」

士郎が回りを見回すと、遠くに砂煙が見える。

「誰か近付いてきているな・・・・あれは・・・・・白馬か？」

「あっ、たぶん白蓮ちゃんかな。
私たちの知り合いです。」

「ならば大丈夫だな。」

士郎は軽く土を払い落としながら立ち上がる。

「もう行っちゃうのだ～？」

「ああ。仲間が心配してるといけないからな。」

士郎は鈴々の頭を撫でながら話す。

「本当に有難う御座いました・・・・・・
士郎さんがいなかったら・・・私達・・・・どうなってたか・・・・・
」

桃香は軽く身震いする。

士郎は桃香の肩に手を置き、

「これから先、戦い続けるのならもっと悲しい事や、苦しい事が沢山出来てくる。」

士郎の言葉に頷く桃香。

「けど、無理にそれを一人で抱え込む必要はない。人間一人で出来る事なんてたかが知れてる。
今回俺達がキミを助けたように、困ったら皆の力を借りるといい。
・・・その時俺が近くにいたら、俺も力になるから。」

三国志での、劉備の事を知っている士郎しか言えない言葉だった。

「・・・・・はいっ！」

「よし。じゃあ俺は行くよ。」

そう言って士郎が立ち上がる。

「・・・・あのっ！」

桃香に呼ばれ振り向く士郎。

「・・・桃香です。」

「鈴々も鈴々って呼んで良いのだ！」

「・・・・・ああ。またな桃香、鈴々。」

そう言って士郎はその場を後にした。

――――――濮陽城　劉表陣営――――――

「ちぃたちを如何するつもりなのよっ！！」

士郎が聖達の所に帰ってくると、誰かの声が聞こえる。

「あっ！お帰りー士郎君。」

陣内に入ってきた士郎を、見つけた聖が声を掛ける。

「ただいま。何かあったのか？」

「丁度あの三人が目覚めてね・・・・・
暴れてるんだよ・・・・約一名だけど・・・・」

今、聖と話している間も声が聞こえてくる。

「とりあえず事情を説明するか。」

士郎は聖と一緒に三人の所へ向かう。

「だれよアンタっ！
・・・・ま、まさかちぃ達に変なことするつもりじゃ・・・・・」
その発言を受けて三人はともかく、
何故かその場にいる聖や水蓮、玖遠、援里から冷たい目で見られる。
「なんでさ・・・・・・」
士郎は軽く落ち込みながら事情を説明していった。
「そんな・・・・・馬元義さんたちが犠牲になったなんて・・・・・」
天和たちは目に見えるほど落ち込んでいる。
無理もないだろう。皆を見捨てて逃げるつもりだったのに、
その人に助けられたのだから。
恩を返そうと思っても、もう死んでしまっている。
「ちぃたち・・・・どうすれば・・・・・・・・」
「・・・・自殺するつもりじゃないでしょうね・・・・・・」
余りの落ち込みぶりに、水蓮が心配して声を掛ける。

「・・・・どうしろ・・・言うの・・・」

それまで黙っていた末妹、人和が喋り出す。

「こんなに・・・・騒ぎになって・・・どう償えば・・・・・・・」

「そこで死んだら、あの二人の思いを踏みにじる事になるぞ。」

士郎の発言にビクッと反応する。

「彼らはキミ達に生きて欲しいから、あんなことをした。
・・・・・償いをしたいんなら、違う方法がある筈だろ。」

「「「・・・・・・・・・・」」」

天和たちは口ごもり、重い空気が流れる。

すると、その空気を払うように聖が話しかける。

「あなた達は何で歌っていたの?」

「えっ・・・・・」

聖の質問に驚く天和。

「あなたたちが旅芸人として、歌を歌っていた理由を知りたいの。」

「・・・朝廷の人たちが好き勝手して、皆の気持ちが廃れていってたから・・・・

私達の歌で・・・・元気になって貰おうと思って・・・」

天和がぽつぽつと話し出す。

「それにっ、ちぃたちが人気になって呼びかけたら、争いに参加する人たちも減るじゃない。」

それに地和が続く。

それを聞いた士郎は、

「なら、それをまたすれば良いだろ。」

「えっ？」

「確かに今回の騒ぎは問題だ。
けど、キミ達のその思いは、決して間違ってはいない。」

正義の味方を目指す、士郎しか言えない言葉。

「今度はそんなことないように、私たちも協力するよ～
だから、一緒に来ないっ？」

士郎の言葉に、聖が続ける。

「いいのっ！？」

「うん、太守だしね。場所は提供するよっ。
大丈夫っ！私達の街は来る人は拒まないから。」

聖が自信満々に答える。

「聖・・・また勝手に決めて・・・」

「よくあるんですかっ、こういうのっ？」

「ええ・・・たまに頑固な所があるのよね・・・」

その様子を見て水蓮と玖遠が話している。

「いいよねっ、水蓮ちゃんっ！」

「言っても聞かないでしょう・・・・
あの双子には私からも言っておくわよ。」

「ありがとうっ、水蓮ちゃん。
じゃあ・・・よろしくねっ！私は劉表　景升。真名は聖だよ。」

「衛宮　士郎だ。真名は無い。」

「蔡瑁　徳珪。真名は水蓮よ。」

「私は李厳　正方っ。真名は玖遠ですっ！」

「徐庶・・・元直・・・真名は・・・援里です・・・・・・」

「真名を預けてくれるんですか！？」

真名を預けるのに驚く天和。

「うん。だって仲間になるんだもん。」

「っ・・・はいっ！私は張角。真名は天和です。」

「ちぃは張宝っ。真名は地和よっ！」

「私は張梁。真名は人和よ。よろしくね。」

新しく仲間が増えた士郎たち。

黄巾の乱は、この日終結したのだった・・・・・・

２－９　黄巾大乱（３）（後書き）

キャラの性格で、
おかしい所があったら指摘の方よろしくお願いします。

原作Ｐｌａｙしたの大分前ですから、
どこかおかしい所があるかも・・・・・

アニメの方は見てないので、
そこら辺はｗｉｋｉと自己解釈を織り交ぜています。

で、今回の話ですが、

左慈は大分強くしています。恋姫の呂布以上。

これくらいしないと暗躍出来ませんからね・・・・

次は幕間という名の３章が入ります。
ここはそんなに長くならない予定・・・・

3－1　帰路（前書き）

ちょっと遅くなりましたが投稿します。

少し仕事が忙しくなって来ましたが、
頑張って執筆していきますので、宜しくです。

3－1　帰路

「おーい！！誰かいないか～」

戦が終わり、士郎が帰りの準備をしていると、誰か来たようだ。
陣の外から声が聞こえる。

「劉表さまは今留守ですが・・・・・」

士郎が出迎えると、そこには女性が立っていた。
髪は赤く、ポニーテールにしている。
服装も赤を基調とした軽装のものだ。

「いや、士郎って奴に用があったんだ。
今居るのかな？」

「俺に？何かありましたか・・・・？」

士郎は何かしたのかと考えながら答える。

「ああ。ウチの桃香たちが世話になったみたいだからな。
礼を言いに来たんだ。」

「ああ。桃香たちの知り合いの人ですか。」

士郎は納得がいったような顔を浮かべた。

「自己紹介がまだだったな。

私は公孫？　伯珪。よろしくなっ。」

「私は衛宮　士郎。劉表軍で客将をしています。
よろしくお願いします。」

士郎が礼を返すと、公孫？は何か変な顔をしている。

「なんか敬語に違和感があるな・・・
別に普通に話してくれてもいいぞ？
そっちの方が私としても気楽だし。」

「・・・ああ。そうさせてもらえると助かる。」

お互いにクスリと笑いあう。

「それで、桃香たちは元気にしているのか？」

「ああ。怪我も殆ど治ってるよ。
士郎たちがそろそろ引き上げるって聞いてたから、
今日、私に着いて来るのを止めるのに大変だったんだぞ。」

公孫？は笑いながら話す。

「それ程元気なら、もう大丈夫そうだな。」

士郎の言葉に頷き、

「士郎もあの男に会ったんだろう。」

公孫？が神妙な顔をして話し出す。

「・・・ああ。」

「あの時、私の側近の兵が一瞬でやられてな・・・・・
私達は直ぐに下がろうとしたんだが、
私の部下を助けようとした桃香が逃げ遅れたんだ・・・・」

公孫?は困ったような笑みを浮かべている。

「幸い、直ぐに愛紗たちが駆けつけてくれたから、何とかなったけど・・・・・
あいつは優しすぎるんだよなぁ・・・・・」

公孫?は空を見上げながら話していた。

「・・・それが桃香の良さだろう。
だから、愛紗や鈴々が主と仰いでいるんだろう。」

「・・・そうだよな。」

「それに、キミもそんな桃香だから心配してくれているんだろう?
なら大丈夫さ。」

「な、何で私の名前がでてくるんだっ!?」

急に名前が出てきて吃驚している公孫?。

「だから、わざわざ俺に礼を言いに来てくれてるんだろう?
一介の太守が、わざわざ俺みたいな流れの将に礼をする事なんて少ないだろ。」

「まぁ・・・桃香は私にとっちゃあ・・・・・・・」
手の掛かる妹って感じだからな・・・・・」

「成る程。」

照れくさそうに話す公孫?を、微笑を浮かべながら見ている士郎。

「と、とりあえず用件はこんな所さ。
次会うまで元気でな!」

「ああ。またな。
桃香にもよろしく言っておいてくれ。」

士郎は去っていく公孫?を見送り、
再度帰りの荷造りに取り掛かっていった。

「ただいま~」

数刻後、士郎たちが休憩を取っていると聖と水蓮が帰って来た。

「お帰り。ほら座って飲むといい。」

「あっ、ありがとう。士郎くん。」

士郎が淹れていたお茶を受け取り、座って飲み始める二人。

「それで、どうだったんですかっ？」

「はい・・・・気になります・・・・」

聖達は今回の乱の報酬を受け取りに行っていたのだ。

流石に客将の士郎や、日が浅い玖遠や援里は着いて行けなかったので、

興味津々である。

「うん。とりあえず、お城は要らなかったから辞退したよ。

それで宛は月ちゃんの所の張済さん。

許昌は月ちゃんの推薦で孔？さんが統治することになったよ。」

「私達は何を貰ったんですかっ？」

玖遠が身を乗り出して聞いてくる。

「代わりにお金と兵糧を沢山貰ったよ～

この乱で、荊州に人が沢山流れて来てるから、

増築しないといけないからね。」

「そうなんですか・・・・

これから忙しくなるんですねっ・・・・」

「そうね。
荊州に帰ったら忙しくなるわね。」

玖遠も言葉に、水蓮も困ったような顔を浮かべて話す。

「とりあえず帰る準備からだな。」

「うん。
途中までは月ちゃん達と一緒だから、急いで準備しよう！」

パンパンと、聖は手を叩いて帰る準備を急ぐように促した。

「さて、これで準備は出来たな。」

士郎が、自分の荷物を馬車に乗せ、
ロープで固定しながら呟く。

「ちょっとっ！乱暴にしないでよねっ！」

縛っている荷台には、荷物しか載せてない筈なのに、何故か声が聞こえる。

「姉さん、喋っちゃ駄目。」

「けど、あの馬鹿士郎が・・・・・・」

「駄目だよそんな事言っちゃ。私達の為にしてくれてるんだから。」

「そうだけどぉ・・・・・・」

士郎が固定している荷台の中から、賑やかな三姉妹の声が聞こえてきており、
三姉妹は、荷物同士の隙間に寄り添うように座っていた。

「この扱いは酷いわよ！」

地和の意見も最もだが、まだ黄巾党は完全には収まった訳ではない。
もし、この三人が見つかって、下手な騒ぎになったら危ないので、
こうして荷台に隠れてもらっているのだった。

「荊州まではちょっと遠いけど、我慢してくれ。」

「はい。よろしくね～」

士郎に返事を返す天和。

すると、玖遠が近付いてきた。

「士郎さんっ、もうそろそろ出発みたいですっ。
準備の方は大丈夫ですかっ？」

「ああ。こっちはもう終わったよ。」

「じゃあ聖様の所へいきましょうっ。」

そう言って士郎たちは聖達の所へ移動する。

士郎たちが聖の所へ来ると、
其処には、麗羽たちが来ていた。

「あら・・・貴方は・・・・
確かお茶を入れるのが旨い人ですわね。」

変な覚えられ方をしている士郎。

「士郎さんですよ。
名前で呼びましょうよ麗羽さま・・・・」

「相変わらず斗詩は固いなあ斗詩は。
・・・胸はこんなに柔らかいのに。」

そう言って、斗詩の胸を後ろから鷲掴みにする猪々子。

「きゃあああっ！！
文ちゃんっ！なにするのよう！？」

顔を真っ赤に染め、しゃがみ込む斗詩。

「あはははははっ。やっぱり斗詩は可愛いなあ。しろーもそう思うだろ。」

「まぁ、可愛いけど・・・・
やってる事はあれだな・・・・・」

急に猪々子に話しかけられた士郎が答える。

「もうっ！なに言ってるのよ文ちゃんっ！！」

立ち上がって、猪々子をポコポコと叩き始める斗詩。

「に、賑やかだね・・・・」

聖は苦笑いを浮かべながら、その様子を見ている。

「ちょっと、猪々子さん、斗詩さん、静かにしてくださいな！お話が出来ないじゃありませんかっ。」

「すみません・・・・」

「ごめんなー姫。」

麗羽に怒られ静かになる二人。

「それで、聖さんはこれから如何するのかしら？」

「結構無理言って進んできたからね、
荊州に帰るよ～。
麗羽ちゃんは確か、司隷校尉だったよね？」

「ええ。そうですけど、もう飽きましたわ。
十常侍があれこれ五月蝿いんですもの。」

怒りながら話す麗羽。

「まぁ、この戦での華麗な戦いで功をあげましたから、
冀州の方で太守を努める事になりましたわ。」

急に態度が変わり、自信満々に話す麗羽。

「それって、左遷されたんじゃ・・・・・・」

「残念な・・・・性格してます・・・・・」

「しっ！言っちゃ駄目よ！本人気づいてないんだから。」

その様子を見て、ヒソヒソと話す士郎、援里、水蓮の三人。

「そっか・・・大分離れるんだね・・・
寂しくなるね。」

少し悲しそうにしている聖。

「おーっほっほっほっ。大丈夫ですわよ聖さん。
荊州にもこのわ・た・く・しの名が響く位は活躍しますわよ！」

「そうそう。姫ならそれ位朝飯まえだって。」

「はぁ・・・また私の苦労が増えるよう・・・・」

斗詩は困った顔をしているが、それに気づいてない二人。

「さぁ。そうと決まれば急いで冀州に向かいますわよ。聖さん、わたくしはこれで失礼しますわ。」

クルリと聖に背を向ける麗羽。

「猪々子さん、斗詩さんっ、行きますわよ。」

「はーーいっ」

「はい。」

そうして去っていく麗羽たち。

「なんていうか・・・前向きだな・・・」

「悪い人じゃないんだよ?」

思わず呟いた士郎に答える聖。

「さあっ、私たちも出発しようっ。」

聖の声を合図に士郎たちも月たちと合流し、濮陽を出発した。

「不謹慎やけどな、今回の戦はむっちゃ楽しかったわ。」

馬車を引く士郎の横にいた霞が呟く。

「士郎たちと一緒におったんはそんなに長ないんやけど・・・・・なんかそんな気がせえへんわ。」

「ああ。俺も長年の相棒みたいな感じがしてたよ。」

笑いながら話す霞に、士郎も笑みを浮かべて答える。

「う・・・その顔はズルイわ・・・・・」

「なにがさ?」

急にしおらしくなる霞。

「あ～あ。士郎はほんまにずるいわ。」

「だからなにがさ・・・・」

よく分かってない士郎は困った顔を浮かべている。

そうしていると誰かが近付いて来る。

「あの・・・・如何したんですか？」

「月やん。如何したん？」

「月が士郎に話があるって言ってたのよ。」

近付いてきたのは月と詠の二人だった。

「俺に？」

士郎の方に目を向ける月。

「はい。確か、士郎さんは聖さんの客将でしたよね？」

「ああ。そうだけど。」

すると、月は少し間を置き・・・・・

「あのっ・・・でしたら・・・・・

私たちと一緒に来ませんかっ！」

月の爆弾発言に一瞬フリーズする。

「だ、だめよっ！月に何するか分からないじゃないっ！」

「ええやんっ。ウチ士郎に負けっぱなしやし、
それならこれからも競い合えるやん。」

「お、俺が？」

士郎の言葉にコクリと頷く月。

「はい・・・・士郎さんって強くて、頭も良いですし・・・・
・・・・それに、士郎さんといると、とっても安心出来るんですっ・
・・・」

顔を赤く染めながら、ゆっくりと、しかしはっきりと理由を話す月。

「俺はそんなに強くは・・・・・・」

無いと言おうとすると、

「大丈夫・・・・・・士郎は・・・・・強い・・・・・」

横から恋が話に入ってきた。

「・・・・あそこまで・・・・・戦ったのは・・・・・初めて。」

「そやで。士郎が弱かったら、ウチはどないなんねん。」

恋の言葉に賛同する霞。

「どう・・・・ですか・・・・・？」

恐る恐る聞いてくる月。

士郎は、笑みを浮かべて月の頭に手を乗せる。

「そう言ってもらえるのは、とても嬉しい。」

士郎の言葉に笑みを浮かべる月。

「・・・だけど、俺は聖が目指す国を見てみたいんだ・・・・・・
だから・・・・一緒には・・・行けない・・・・」

「・・・・そう・・・ですか・・・・・・」

悲しそうに呟く月。

「その代わりだけど・・・・これを持っていて欲しい。」

士郎が差し出したのは、小さい剣が付いたネックレス。

「これって、士郎が持っとる剣の片方やん。」

付いてる剣は陰剣・莫耶を小さくしたもの。

「綺麗・・・・」

ネックレスを見て、思わず呟く月。

「お守り代わりに持っていて欲しい。」

「・・・・はい・・・・・士郎さんに断られたのは残念ですけど・・

・・・
有難う御座います。大事にしますね。」
そう言ってつけようとするが、うまく行かない。
士郎が作ったのは現代と同じ造りの為、
この時代の人たちでは、構造が分からないのでうまく付けられないのだ。
「ちょっといいか。」
月の後ろに周り、首筋に手を触れる。
「ひゃんっ!?」
思わず声が漏れる月。
「アンタっ!なにしてるのよっ!!」
「し、しょうないだろっ。どうしても手が当たるんだよっ。」
「あ・・・あの・・・・あ、あんまり動かされると・・・・・・」
騒ぐ二人に困る月。
四苦八苦したが、何とか付けることが出来た。
月の胸元には綺麗な陰剣・莫耶が光る。
「ええなぁ～～～士郎～～～ウチにも無いん?」

「これ一つしか準備出来なかったんだよ・・・・
また何処かで埋め合わせするから。」

士郎がそう言うと。

「ほんまに！約束やでっ！」

その言葉を聞いて喜ぶ霞。

士郎は苦笑いを浮かべながら、陳留を越え、南下して行く。

本当なら、そのまま南下せずに洛陽へ向かった方が月たちは近いのだが、
新しく宛を統治する張済を配属させる為に、一緒に南下していった。

その宛で、月たちとは別れる事になる。

「皆さんのお蔭で、この乱を乗り越えることが出来ました・・・・
本当に有難う御座います。」

ペコリとお辞儀をしながら聖たちに挨拶する月。

「そんな事ないですよっ。
私たちこそ、色々迷惑掛けましたし。」

慌てて答える聖。

「いやいや、そんな事無いわ。
こっちなんか訓練場で漏らした奴がおるんやし・・・・」

霞がそう答えると、いきなり大斧が襲い掛かってくる。

「うわっ！！」

「だ・ま・れ・っ！！誰のせいだと思ってるんだっ！」

「ちょっ・・・元々自分のせいやったやろ。」

ブンブンと振り回し続ける藍。

「はいはい。このままじゃ、お話が続きませんよ～？」

見かねた弧白が止めに入る。

「と、とりあえず、これでお別れですが、
交易なんかは続けていきたいと思っていますので・・・宜しくお願いします。」

「うん。こっちからお願いしたい位だよ。
じゃあ、そろそろ行くね。」

そう言って聖たちは出発して行く。

「お元気でーーー」

「次は負けへんでーーー」

背中に月たちの声を浴びながら、聖たちは新野に向かって行った・・・・

「ドナドナド～ナ、子牛を乗せて～」

士郎が運んでいる、荷馬車の荷台の中から不吉な歌が聞こえる。

「ドナドナド～ナ、荷馬車がゆれる～」

「・・・・その歌を何処で知ったんだ・・・・」

思わず荷台の中に居る天和に話しかける士郎。

「今作ったんだよ～～～
なんか頭の中に浮かんできたんだ～。」

すごくいたたまれない気持ちになりながら士郎は進んでいく。

「早く行こう・・・・」

新野はもう目前にある。

兵士達も、自然と進むスピードが上がっていった。

3－1　帰路（後書き）

少し急ぎ足ですが、聖たちが帰還しました。

ここからは襄陽でのお話が少し続いてから、次の章に移りたいと思います。

3－2　？姉妹（前書き）

黄巾党～次の話までの幕間中です。

足場固めといったとこですねぇ。

3－2　？姉妹

聖たちが新野に着くと、民衆から盛大な歓迎を受ける。

「お帰りなさいーーー劉表さまーーーー」

「蔡瑁さまーーーこっち向いてくださーーーーーい」

聖は男女共に人気があるが、水蓮は女性からの人気が凄い。

にこやかに手を振っている聖と違い、
水蓮は恥ずかしそうにしながら声援に答えていた。

「李厳ちゃんーーーお疲れーーーーー」

中には、時々玖遠にも呼びかけがあり
ニコニコしながら手を振っている。

「ふわーーーすごい人気だねーーーー」

「うん・・・ちぃたちでも、
こんなに盛り上がるのは中々ないよ・・・・」

「一国の太守なのに・・・・こんなに人気なの・・・・・」

天和たち三姉妹はその人気に呆気に取られている。

「いつもこんな感じなのか？」

士郎は傍にいた援里に聞いてみる。

「そうですね・・・・遠征から・・・・・帰った時は・・・・・
いつも・・・・こんな感じです・・・・」

士郎はもう一度民衆を見渡す。

皆満面の笑みを浮かべており、心の底から喜んでいる様子が見て分かった。

「・・・愛されてるんだな。」

「はい・・・この国は・・・よそ者でも・・・気にせず受け入れますし・・・・・
戦いも・・・専守防衛に徹してますから・・・・民からの・・・・・
人気があるんです・・・・・」

「それに、聖の性格もあるんだろうな。」

士郎の言葉にコクリと頷く援里。

士郎たちは、そのまま聖たちを見続ける。

聖たちはそのまま民と交流した後、新野の城に入って行った・・・・

「みんな元気そうで良かったよ～」

「ええ。戦続きだったから心配してたんだけど・・・」

士郎たちはすでに卓に着いており、
後からきた聖たちも、話ながら座る。

新野には黄巾の乱から逃げてきた人たちが沢山来ており、
居住場所や、仕事などが全く足りていない状況である。

聖たちはそんな街の様子を心配していたのだが、
街の皆の様子を見て少し安堵していた。

「でも・・・このままじゃ不味いですよねっ。」

玖遠の言葉に全員が頷く。

「でも、お金なら沢山貰ってきたから大丈夫だよ！」

その様子を見て、自信満々に答える聖。

「この為に・・・沢山貰ってましたからね・・・・・」

「うんっ。じゃあ早速・・・・」

「駄目よ！先ずは蓬梅たちと相談してから。」

仕事の依頼書を出そうとした聖を、水蓮が止める。

「それに、天和たちが歌う場所も考えなきゃいけないからな。」

士郎の発言に水蓮が頷く。

「じゃあ一旦襄陽に移動しますかっ？」

「分かったよう・・・・・

じゃあ兵士を此処に何人か置いて、治安維持に努めて貰うね。」

渋々聖は納得し、再度士郎たちは襄陽に向かって移動していった。

士郎たちは襄陽に到着し、新野の時と同じように民衆の中を進み、城に向かう。

「帰ってきたのは久しぶりだよ～」

聖がそう言いながら門を開けると、誰かが飛び出してきた。

「お帰りなさいです。」

「お帰り～～～～っ！」

白い髪をした少女二人が、聖に抱きついている。

「遅かったから心配してたんだからっ！」

「そうです。罰として一緒に寝るです。」

怒涛の勢いで聖に話しかけている。

「この姉妹は・・・聖は疲れてるんだから早く離れなさいっ！」

水蓮が見かねて、その二人を注意するが、

「うっさいわね大根。
ずっと一緒にいたから良いでしょっ！」

「そうです。
それに疲れてるんなら、早く一緒に寝るです。」

聞く耳持たないと言った感じの二人。

その様子を見ていた他のメンバーは呆気に取られている。

「個性的な人だねぇ～～～」

「姉さんが言っちゃダメでしょ・・・」

天和に突っ込む地和。

「ほ、蓬梅ちゃん、鈴梅ちゃんっ、
とりあえず新しく仲間になった人も居るから、
中に入って自己紹介しようよう。」

「それもそうね。じゃあ行きましょう聖さまっ！」

「そうです。」

姉妹が聖の手を片手ずつ手に取り引っ張って行く。

「わ、わ、わっ・・・引っ張らないでぇ～～～」

「・・・私達も・・・・行きますか？・・・・・」

「そうだよな・・・・」

援里の言葉に頷いた士郎たちは、
聖たちを追うようにして城内に入っていった・・・・・・

「私は嫌よっ！」

室内に響くのは鈴梅の声。

全員が自己紹介をし、士郎も仲間に居ることを知った鈴梅が反対していたのだった。

「私もいやです。」

姉の蓬梅もそれに反対していた。

「水蓮は反対じゃないのっ!?」

鈴梅が水蓮を問い詰める。

「まぁ、聖に悪影響が出たら困るけど・・・・・聖が自分から勧誘したし、士郎自信も強いし、私も学ぶ事が沢山あったからね。」

「むーーーっ!!!」

それを聞いてむすっとしている鈴梅。

「今まで私たち四人でやってきたです。玖遠は前から知ってますし、援里も水鏡先生からの推薦があるんなら別にいいです。けど、男が入るのはいやです。」

士郎に言い放つ蓬梅、

今まで四人でやって来れた自信もあるのだろう。

沈黙する皆。

その空気を振り払うかのように聖が話し出す。

「うん。今までは大丈夫だったよね・・・・
けど、これからもっと忙しくなって来ると思うんだ。」

「「・・・・・・・・・」」

聖の言葉を聞いて沈黙する二人。

「今新野には沢山の人が流れてきてるし、
朝廷も宦官たちが専横してる・・・・・」

「袁紹さんも、そんな事言ってましたねっ。」

玖遠の言葉に頷く聖。

「私は皆を守りたい。
全員は無理でも、せめてこの国に居る人たちだけは絶対に。」

そのまま士郎に目を向ける。

「でも、私に力を貸してくれる人が増えたら、
もっと沢山の人たちを助ける事が出来るんと思うんだ。
だから、お願いっ！」

深々と頭を下げる聖。

「けど・・・・・」

それでも何か言おうとする鈴梅だったが・・・・・

「蓬梅、鈴梅っ！！」

急に倒れる二人。
慌てて水蓮が抱きとめる。

「これは・・・すごい熱・・・・・・」

二人に添えた手から伝わってくる熱を感じ、思わず呟く。

「っ・・・急いで医務室へ連れて言った方がいい。」

士郎の言葉にはっと顔を上げた水蓮と聖は、二人を担いで急いで医務室に連れて行った。

医務室から聖が出てくる。

「どうだったんだ?」

心配そうに水蓮が問いかける。

「うん・・・・疲労が溜まってたみたい・・・・
最初私が触ったときは何とも思わなかったのに・・・・・・」

自分が見過ごしてしまった事に罪悪感を感じているんだろう。
聖は落ち込んだ様子でポツポツと話し出す。

「ここ最近は、私と水蓮ちゃんがいなかったし、
長沙の方でも反乱があったみたいで、
その対応や政務でまともに休んでなかったみたい・・・・・・」

「そうだったのね・・・・・・」

「お医者さんの話じゃ、数日休んでれば良くなるみたいだけど・・・・
・・・」

蓬梅、鈴梅が動けないとなると、確実に政務が滞る。
？姉妹の政治能力は聖たちの中でも群を抜いているのだ。

思わず悩みこむ聖と水蓮。

すると、

「聖、俺に政務を教えてくれ。」

「えっ！？」

士郎の提案に思わず驚く聖。

「私もお手伝いしますっ！」

「私も・・・・政務なら・・・手伝えます・・・・」

「玖遠・・・・援里・・・・・」

「はい、は～いっ！わたしも手伝うよ～」

「だったらちぃも手伝うわよ。」

「姉さん達よりは出来ると思うし、私も手伝うわ。」

玖遠と援里が水蓮に協力を申し出て、
張三姉妹もそれに参加する。

「みんな・・・・有難う・・・・・」

その様子を見て思わず涙ぐむ聖。

「仲間なんだから困った時に手を貸すのは当たり前だろ。」

士郎の言葉に皆が頷く。

「うん・・・・・じゃあ・・・頑張ろーーーっ。」

こうしてバタバタと忙しい政務が始まった・・・・・・

―――――数日後―――――

「うん・・・・・・・」

太陽の光に刺激され、鈴梅が目を覚ます。

「ここは・・・・・・」

キョロキョロと寝ぼけたままの頭で周りを見回す。
どうやら医務室のようだが、記憶がはっきりしていない。

すると、直ぐ横で寝ている自分の姉を見つけたので、軽く揺すって起す。

「あれ・・・どうしたんです・・・・・？」

蓬梅も妹の鈴梅と同じくぼんやりしていたが、

「・・・そう言えば・・・・あの男はどうなったんです？」

蓬梅の発言にハッとする鈴梅。
慌てて寝具から降りようとすると・・・・・

「あっ・・・・・」

丁度部屋に入ってきた聖と目が合う。

「良かったよう～～～目が覚めたんだね・・・・・・」

そのまま部屋に入ってきた聖に抱きしめられる二人。

久しぶりに嗅ぐ聖の香りに、思わず脱力する。

「ごめんね・・・・私の我が侭でこんなになっちゃって・・・・」

その体勢のまま誤る聖。

「でも・・・体調が悪いんなら無理しちゃ駄目だよ・・・・
とっても心配したんだがら・・・・・」

聖の言葉に二人は言葉を返そうとするが、
聖にさらに強く抱きしめられ、何も言えなくなる。

「ごめんなさい・・・・・」

「ごめんなさいです。」

その言葉を聞いた聖は笑みを浮かべ。

「お医者さんから食事はして良いって聞いてたから持ってきたんだ。
食べれる？」

聖が差し出したお盆の上には卵粥と飲み物が二人分乗っていた。

倒れてからまともに食事をしてなかった二人は、
それから漂ってくる匂いに逆らうことが出来なかった。

「「美味しい・・・」」

その味に思わず呟く二人。

そのまま無我夢中で食べる二人。

病み上がりの人が食べやすいように熱すぎず、
味も薄味だが、飽きないようにしっかりと味がついている。

卵も半熟に仕上がっており、消化しやすくしてある。

飲み物の方も、甘いのか塩が入っているのか分からない
不思議な味だったが、決して不味くは無かった。

食事を終え、落ち着く二人。

すると、急に鈴梅が起き上がる。

「そういえば、政務はどうなったの！？」

「どれ位寝ていたのかは分かりませんです。
けど、早くしないと、間に合わなくなるです・・・・」

それに続いて蓬梅も起き上がるが、

「大丈夫だよう。
皆が協力してくれてるから。」

「みんなって・・・・・アイツも!?」

「うん。
それでね、士郎くんたちの仕事を見て欲しいんだ。

・・・きっと分かると思うから。」

聖に言われ静かになる二人。

「・・・・わかったです。
じゃあ、早速行くです。」

そう言って、聖たちは政務室に向かって行った。

政務室のドアを開けた蓬梅と鈴梅が目にしたのは・・・・戦場だった。

山のように積まれた木簡や紙の中で援里と人和が書類に目を通しており、
それを天和と地和が運んでいた。

「ちぃ、さっきから運ぶばっかしなんだけどっ！」

「姉さん達に政務が出来るわけないでしょう。」

「適材・・・・適所です・・・・・・」

文句を言いながら運び続ける地和と、飽きた顔をしている天和。

「もう飽きたよ・・・・
・・・・そうだっ！歌って皆を応援するよ～」

「ちぃもその方がいいっ！」

天和と一緒に歌おうとする地和。
だが、

「ね・え・さ・ん」

怖い顔を浮かべた人和にじと目で睨まれる。

「「ごめんなさい・・・・」」

その後は大人しく作業を続ける二人だった・・・・

そして他の場所では、玖遠が水蓮と一緒に作業を行っていた。

「玖遠っ、兵糧の数量が間違えてるわよ。」

水蓮が玖遠に木簡を返す。

「あれっ・・・ほんとですっ・・・・・・」

玖遠は返された木簡を見ながら呟く。

「う～ん・・・よく分からないですけど、
兵糧関係の仕事は上手く出来ませんねっ？」

「確かにさっきから失敗するの兵糧関係の物ばかりね・・・・・・・
とりあえずそれは私がしておくから、他のをお願いできる？」

「はいですっ。」

もともと政治能力は高かったのだろう。
変な所はあったが、玖遠も順調に作業をこなしている。

そして、最後に残った士郎は・・・・・

「この木簡はあっちに纏めて置くといい・・・・・・

・・・それはこの箱の中に入れておけ。
後で分かりやすいように、外にも何なのか書いておけ。

・・・・そこは通路だからな。木簡を置くなよ。」

全体の様子を見て、作業しやすいように指示を出している。

未来での作業効率をあげる方法を幾つか知っている為、
士郎のおかげで文官達も、最大限に力を発揮することが出来るのだった。

「凄い・・・・・・」

それは、普段からその仕事をしている蓬梅、鈴梅2とっては
尚更凄いことだというのが分かる。

「・・・・向朗、ちょっと来てくれるです?」

蓬梅が目の前を通りかかった、おかっぱ頭で眼鏡をかけた女性を呼び止める。

「あれ~~~~蓬梅さまじゃないですか。
ちっちゃいのに無理するから倒れるんですよ。大丈夫なんですか?」

「うっさいです。
それより、あの男はどんな感じです?ちゃんと仕事してます?」

蓬梅の質問に向朗は「う~~ん」と考え、

「一緒に仕事してると、かな~~りやりやすいですね。
失敗も最初の方はともかく、慣れてからは全くありませんし。」

「そうですか・・・・・もういいです。」

向朗は蓬梅に「は～い。あんまり無茶したら駄目ですよ～」と答え、作業に戻っていった。

「「・・・・・・・・」」

蓬梅と鈴梅は何か考えている。

認めたくないが、士郎の事を評価しなくてはならないのを考えているんだろう。

そんな二人の様子を見ている聖。

「・・・・さっき蓬梅ちゃん、鈴梅ちゃんが食べた粥、士郎くんが作ったんだよ。」

「えっ!?」と驚いた顔をしている二人。

「病み上がりでも、しっかり食べれるようにって。飲み物も、体が吸収しやすいようになんか混ぜてたしね。」

二人が思い出すのは先程の食事。

そのまま二人は仕事を続ける士郎たちを見ていた・・・・・・・・

「終わったーーーーっ！」

背筋を伸ばしながら叫ぶのは地和。

それにつられて他の皆も思い思いに体を休める。

士郎も同じく作業を終わらせ、お茶に手を伸ばそうとすると、誰かが近付いて来る。

「・・・・もう体の方は大丈夫か？」

士郎の問い掛けに、近付いてきた蓬梅と鈴梅はコクリと頷く。

士郎がそのまま言葉を続けようとすると、鈴梅に遮られる。

「あんたに借りが出来たわ。

・・・・だから、しょうがないけど、聖も悲しむし・・・・・・

仲間として・・・・認めてあげる・・・・・・」

「しかたないです。本当にしかたないですけど、認めるです。」

聖はその言葉を聞いてとても嬉しそうな顔をしている。

「・・・そうか・・・ありがとう。
これから同じ仲間として宜しく頼む。」

士郎は二人に頭を下げながら答える。

「一応認めたしね・・・鈴梅よ。」

「私は蓬梅です。しかたありませんが宜しくです。」

?姉妹に認められ、正式?に劉表軍の仲間入りをした士郎だった・・・

3－2　？姉妹（後書き）

向朗はゲームで言えばモブキャラです。
なので真名も考えてません。

偶に出てくる事があるかもしれません。

3－3　方針決定（前書き）

ちょっと短めですが投稿します。

次の話は大体構成が頭の中で出来ているので、早めに投稿出来ると思います。

3－3　方針決定

前日の追い込みで、政務にも大分余裕が出来た聖たちは
次の仕事に取り掛かっていた。

「とりあえずは天和達の扱いと、人材の発掘、新野の拡張工事。
あとは、月たちとの貿易か。」

士郎がこれからしていく事を読み上げていく。

「とりあえず一個づついきましょうか。」

水蓮の発言に全員が頷く。

「一応聞くけど、天和たちは何がしたいのよ?」

鈴梅が天和たちに質問する。

「歌って、皆を幸せに出来ればいいよ～」

「ちぃも歌えればいいわ。」

「それしか無いわね。」

天和たちは当たり前と言った感じに答える。

「えっと・・・どうしようか?」

聖の言葉に全員が頭を悩ませる。

まぁ政治や戦はしたことがあるが、アイドルのプロデュースなんかした事が無い為、
こうなるのは当たり前であった。

「とりあえず、歌う場所さえ提供してもらえればあとはなんとかできます。」

この状態では、
今までマネージャー的な事をして来た人和に任せるのが妥当だろう。

「場所か・・・どこか広場みたいな所でいいのか？」

「そうですね。人が集まる所なら大丈夫です。」

そんな人和の言葉に、聖がある事を提案してくる。

「ねぇねぇ。だったら劇場を作らない？」

『劇場？』

その提案に皆が首を傾げる。

「うん。
ほら、今たくさん人が街にきてるよね？
それで環境の違いとかで、色々苦労してると思うから
天和ちゃんたちには、その人たちに為に歌って欲しいんだ。」

聖は頷きながら理由を話し出す。

「成る程。ストレス解消の場所を提供するって言うことか。」

「すとれす？」

聞きなれない言葉に首を傾げる聖。

「あ、ああ。俺の国の言葉さ。
・・・苛々したりすると、体調を崩したり、他人にきつく当たったりするだろ。」

「ああ・・・確かにそうね・・・・」

どうやら心当たりがあるのか、
水蓮は思いっきり頷いている。

「それで、私たちの歌で元気にしていけばいいの？」

「そうだね～
・・・如何かな？」

聖に言われ、人和が考えていると、

「私はそれでいいよー」

天和がそれに賛成する。

「だってその人たちがここに流れてきたのは、元々私たちのせいでしょ？
だから、私たちがその人たちを元気にすれば、少しは罪滅ぼしになるかなーって。」

「「姉さん・・・・・」」

天和の言葉に皆が静かになる。

天然な性格だが、心の中では気にしていたのだろう。

「で、どうかな。鈴梅ちゃん?」

聖は、この国の政治を取り仕切ってる鈴梅に話しかける。

基本的に大金を動かす際は、鈴梅の承認が必要になっているのだが・・・・・・

「聖さまがいいなら良いに決まってるじゃない。
直ぐに準備するね～」

鈴梅は聖に甘いので、スムーズに話が進んでいく。

まぁ幸い資金は沢山あるし、
一時的だが雇用も増えるので、長い目で見ればお得である。

そう言う事で、襄陽に大きな劇場を作る事が決定したのだった。

「とりあえず・・・・・この件はこれで・・・・終わりです?」

「そうです。担当はまた後で決めるです。」

援里の言葉に蓬梅が頷き、鈴梅が次の話題を話し出す。

「次は人材の発掘と、新野の拡張工事ね。
・・・誰か意見ある？」

「武官と文官どちらも欲しいわよ。それは。」

「あはは・・・そうだよねぇ・・・・」

水蓮の意見に、聖が苦笑いを浮かべながら頷く。

「新野に沢山人が来てますからっ、
そこから見つけるんじゃないんですかっ？」

玖遠が以前話していたことを質問してくる。

「そうよ。まぁ武官は一人心当たりが居るから、
文官を中心に探した方がいいわね。」

「そうです。で、だれが行きますです？」

蓬梅の質問に全員が静かになる。

それもそうだ。いきなり新野に行かされた挙句、
街の拡張工事と人材発掘を同時に行えというのは、最早いじめである。

それにそれだけの事をするとなると、蓬梅や鈴梅クラスの人間が行く必要が出てくる。

「先に言っとくけど私は嫌よ！

せっかく聖さまと一緒に居られるのにっ！」

「私もです。」

当然の如く聖が大好きな二人は全力で嫌がる。

「水蓮っ、アンタが行きなさいよっ！」

「わ、私だって軍の再編があるのよっ！」

「ずっと一緒に居たくせに、大根はずるいです。」

「しょうがないじゃないっ！」

三人の口げんかが始まる。

「なんだか賑やかだね～」

天和はそれを楽しそうに見ている。

「ち、ちょっと、大丈夫なの？これ。」

「なんで俺に聞くのさ・・・・・・」

「緊張感が無い人たちなんですね・・・・」

地和は慌てて士郎に聞き、人和は呆れている。

そうこうしていると・・・・・

「士郎っ！じゃあアンタが行きなさいよっ！」

鈴梅に急に呼ばれる士郎。

「そういう重大な仕事を俺にさせるのか・・・・・・」

「ええい煩いわね。つべこべ言わずに・・・・・・」

「やりなさい！」と言おうとした瞬間、

「士郎君はダメだよ～鈴梅ちゃん。」

聖がそれを止める。

「どうしてですか？聖様？」

蓬梅がその理由を聞くと、

「だって一緒に仕事がしたいんだよう。」

すごく私的な理由である。

「あっ。それなら私も一緒に訓練したいですっ！」

「私も・・・・・です・・・」

聖の発言に玖遠や援里も乗ってくる。

「・・・・・・・し～ろ～う～～～～」

「・・・・・・・・・」

聖の発言を聞いた鈴梅が凄い目で睨んで来ており、
蓬梅も無言のプレッシャーをかけてくる。

その迫力に思わず後ずさる士郎。

慌てて水蓮の方に目を向けるが、

「・・・やっぱり・・・・・・男は悪影響ね・・・・・・」

なんだかぶつぶつと呟いている。

「なんでさ・・・・・・」

またややこしい事になっている士郎だった。

このままでは埒が明かないと判断した蓬梅は、

「しょうがないです。こうなったらアイツを行かせるです。」

そう言って入り口の扉を開ける。

其処には・・・・・・

「あ、あれ？」

右手にコップを持って、きょとんとしている向朗が立っていた。

「え～～と・・・・・・・

さようなら～～～」

慌てて逃げ出すが、蓬梅に服を掴まれ止められる。

「盗み聞きしてたです。」

「そ、そんなわけないですよぉ～～～」

余りにも白々しい嘘である。

「まぁ聞いてたのなら話は早いです。

新野にさっさと行くです。」

蓬梅に言われ、ガーンと言う効果音が聞こえて来そうなくらい落ち込む向朗。

「そ、そんなあ・・・・・

私だって沢山用事があるんですよお！

・・・ほらこの書類も今まとめてますしー。」

そう言って、木簡の束を蓬梅の目の前に差し出してくる。

すると、その内の一つが転がり落ち、それを蓬梅が拾う。

「？蓬梅・鈴梅成長日記・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・』

全員が沈黙する。

「左遷決定だな。」

「うえええええぇっ！日記が書けなくなるじゃないですかぁっ！？」

士郎の一言に慌てだす向朗。

「うっさい！そんなもの処分よ処分！」

「そんなあああああ・・・・

子鬼！小悪魔！ちっちゃい人でなし！」

「全部に小さいつけるなっ！！」

鈴梅は思いっきり向朗の脛を蹴りつける。

「ぎにゃーーーー」

「まったく・・・・この変態は・・・・・」

（いやキミも大して変わらんだろ・・・・・）

「何っ！今失礼なこと考えなかったっ！？」

慌てて首を振る士郎。

「と、とりあえずこれで決定だね。」

「そ、そうですねっ。次の議題にいきますかっ！」

場の空気を入れ替えるように、聖と玖遠は次の議題を促していった。

「次は董卓さま達との貿易ね。」

鈴梅が次の議題を話す。

「うん。
まぁお互いに出す物は決まってるんだけどね。」

聖たちは長江がある為水軍が発展しているが、良い馬が居なく、騎馬軍の扱いは苦手。

月たちは広い平原を駆け抜けるため騎馬軍は得意だが、造船等の技術は皆無。

この為、聖たちは造船技術を。
月は良馬を輸出するのは既に決まっている。

「で、他に何か欲しいものあるかな？」

聖の質問に皆考え込む。

「涼州って確か大秦とも交易してたよね？
そこらの情報も欲しいわ。」

「そうですね。確かに情報が少ないです。」

鈴梅の意見に蓬梅が賛同する。

「ふむふむ。情報と・・・・」

聖は手に持っている木簡に何かを書き込んでいる。

「欲しいものって言っても、特には無いわね。」

「他のもの買うより・・・・その分・・・
馬を買った方がいいです・・・・・・」

この時代の馬は大変高価である。

基本的に馬は北の方で飼育されている為、
一騎でも多く入手しておきたい。

「それにあんまり要求すると、
霞さんあたりに「士郎さんを持って来い！」って言われそうですねっ。」

「ああ・・・確かに言われそうね・・・・・・」

玖遠の発言に水蓮も頷く。

「だったらこの男を出荷して・・・・・・

冗談！冗談です聖さまっ！？」

鈴梅が危ない発言をしだしたが、

聖がむすっとした顔をしたので、慌てて否定する。

「・・・・・・・・・」

ガツッ！！

その様子を見て、無言で士郎の脛を蹴る蓬梅。

「痛っ！なんで蹴られるのさっ！？」

「うっさいです。士郎がわるいです。」

また脱線し始める。

「と、取り敢えず、基本は馬の入手で話を進めておくわよ。」

その様子を見ていた水蓮は強引に場を閉める。

「もう決めておく事は無いのか？」

「そうだね～～

また何かあったら集まるようにするから、大丈夫だよう。」

士郎の質問にのんびりした感じで答える聖。

「じゃあ仕事に戻るか。」

簡単な方針を決定し、各人はそれぞれの仕事に戻っていった・・・・

・

３－４　神弓の射手（前書き）

これで２０話・・・・

進行状況はまだまだですけどね。

・・・・先は長い・・・・

3ー4　神弓の射手

「士郎ー次はあっちの店見てみよー」

士郎は天和に引っ張られ楽器店に連れられて行く。

「あっ!?まってよお姉ちゃん。」

「姉さん。慌てるとまた転ぶわよ。」

その二人に地和と人和も一緒に店の中に入っていった。

「なんでこうなってるのさ・・・・・」

事の発端は前日の話である・・・・・・

「えっと・・・欲しいものがあるんだけど・・・・いいかな?」

会議が終わり、皆が解散していると、
天和が聖に話しかける。

「?何かな。そんなに高いものじゃ無ければ良いよう。」

「うん。実は楽器が欲しいんだ～」

「ちぃ達、こっちに来るとき楽器を置いてきちゃったからね。」

「新しい楽器に慣れるのにも時間が掛かりますから、
出来れば早く欲しいんです。」

地和と人和もそれに続く。

「そうなんだ・・・
うん。それだったら全然大丈夫だよ。
街なら幾つかお店もあったはずだよ～」

そう言いながらいそいそと準備をし始める聖。

「・・・・・何をしてるの聖。」

その時、聖の後ろから誰かが話しかけてくる。

「うん～～～？
天和ちゃんたちが街に買い物しに行くから、
私も一緒に行こうかなって～」

後ろを振り向かず、準備をしながら答える。

「あら？仕事があったんじゃないのかしら？」

「えへへ・・・・
そうなんだよう。だから水蓮ちゃんに見つかる前にいかなきゃ・・・

・」

「そう・・・・それは大変ねぇ・・・・」

その言葉を聞いた瞬間、聖の動きがピタッと止まる。

「・・・・・・・・・え〜〜〜っと・・・・」

恐る恐る聖が振り向くと、其処にはとても清々しい笑みを浮かべた水蓮が立っていた。

・・・・・額に青筋を浮かべて・・・・・・・

「残念♪捕まっちゃったわね♪」

そのまま水蓮は聖の肩に手を置き、肩に担ぎ上げる。

「きゃあッ！す、水蓮ちゃんっ、服が捲れてるよう〜〜」

強引に担がれたため、あられもない姿になっている聖。

「駄目ですっ。こうしないと逃げるでしょうが！」

「士郎くんに見られる〜〜〜」

「ちょっ、そんなつもりは・・・・」

慌てて士郎が下に目を逸らすと、其処には何時の間にか蓬梅が立っていた。

「・・・・・・見るなです。」

思いっきり脛を蹴られる士郎。

「っ！た～～～っっっ・・・
なんで其処ばっかりなのさ・・・・」

士郎は、以前も同じ所を蹴られたことを思い出しながら抗議する。

「ここが一番蹴りやすいです。」

「・・・そう言えば鈴梅も向朗の脛蹴ってたな・・・」

そうこうしている内に聖は連れて行かれた・・・・

「あ～ん、士郎さ～ん・・・・」

「・・・・なんか凄いデジャヴが・・・・」

その光景を見て思わず呟く士郎。

「え～と、誰が道案内するのさ?」

聖が連れ去られた為、士郎がポツリと呟くと、

「士郎！アンタが行きなさいっ。」

蓬梅と一緒に来ていた鈴梅が士郎に命令してくる。

「俺?別に大丈夫だけど・・・・他の皆は?」

「私たちは政務！援里と玖遠は戦略や軍の編成の勉強中よ！
ほら、分かったらさっさと行く！」

そう言って半ば強引に行かされたのだった・・・・・・

「姉さんこれは如何かな？」

「う～～～ん・・ちょっと重いかな・・・・・・
こっちの方が軽いけど見た目が・・・・・」

「ちぃはこれにするー。」

「・・・・高いからダメ。戻して来て。」

「えーーーっ、気に入ったのにーー」

店内に入ってもキャイキャイと賑やかな三姉妹。

店員も三姉妹の可愛さと雰囲気に圧倒され、近付いて来ない。

「三人寄れば姦しいって正にこのことだな・・・・」

士郎はその様子を見てしみじみと呟く。

「しろーこれ買ってーーー」

人和から許可が出ないので士郎に集って来た地和。

購入資金は人和が預かっている為である。

「と、やっぱりそう来るよな・・・・」

「ねえねえっ、お願いっ。
ちぃはこれが欲しいのっ！」

地和は手に持っている二胡を士郎に見せながら、お願いしてくる。

「ほら、人和。」

士郎はそんな地和を見て、人和に幾らかのお金を渡す。

「いいの？」

士郎からお金を渡されて驚く人和。

「ああ。俺が持っていてもあんまり使わないしな。」

客将として幾らかの報酬は貰っているが、
士郎自信あんまりお金を使わないので、幾らかは余っていたのである。

「それにキミたちも、演奏するな気に入った道具を使いたいだろ。
これから頑張ってもらわないといけないしな。」

「・・・ありがとう・・・」

そんな士郎に人和が礼を言っていると、

「ありがとーーっ、士郎。」

「ありがとー。やっぱりしろーね！」

横合いから天和と地和が士郎に抱きついてくる。

「うわあっ！？」

慌ててバランスを崩す士郎。

「もうっ、姉さん達！何やってるの。」

「あははははっ。ごめんね士郎。」

「感謝の気持ちを表しただけよっ。
お姉ちゃん、奥の方見てみようよっ。」

そう言って士郎から離れた二人は、
より良いものが置いてある、店の奥に移動して行く。

・・・・店長が青い顔をしているが気のせいだろう。

そんな店長を尻目にドタバタと走って行く二人だった・・・・

～　人和　ｓｉｄｅ　～

「もう・・・姉さん達は・・・・・・」

人和はそんな姉たちを見て、思わずため息をつく。

そんな様子を見た士郎が声を掛けてきた。

「あれだけ元気があるんなら大丈夫さ。」

「・・・そうね・・・」

そんな士郎の言葉に少し弱々しく答える人和。

（ほんとに良いのかしら・・・・

私、こんな事してて・・・・・・）

人和は士郎に向かって、少し弱々しく答える

「ああ。これから皆を元気にしていくんだろ？

だったら、君たち自身が元気で居なくちゃな。」

「え・・・・・」

人和は士郎の言葉に呆気に取られる。

「だってそうだろ。

君たちはこれから民に、元気づけるために歌うんだから。」

（そうね・・・確かに私たちが落ち込んでいたんじゃ、

気持ちなんか絶対に伝わらない・・・・）

「は・い・・・ですよね。」

士郎の言葉に少し元気が出たのか、さっきよりかは少し力強く答える。

（そうね、先ずは一生懸命歌おう。
悩むのは其れが終わってからでも遅くは無い）

～　人和　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　～

「それにしても人が増えたな・・・・」

士郎は三姉妹に買い物にまだまだ時間が掛かりそうだったので、警邏するついでに街を散策していた。

元々人口が多かった襄陽は、中原からの移住者も増えた為、新野ほどではないが人口が密集していた。

「これは・・・危険だな・・・・」

人が密集すると、スリや誘拐などの犯罪も増えてくる。

士郎がそんな事えお考えながら、注意深く周りを見回しながら歩いていると、

道の端に座り込んでいる一人の女の子がいた・・・・

――――――襄陽城　休憩室――――――

政務が一段落着いたので、聖、水蓮、蓬梅、鈴梅の四人が休憩をとっていた。

「疲れたよう～～～」

聖が机の上に頭を乗せてだらけている。

「ほら。お茶飲んで元気出しなさい。」

水蓮が運んできたお茶を飲みながら、徐々に復活して行く。

「聖さま～
今日、来客が来るので時間を空けておいて貰えますか？」

「来客？」

鈴梅に聞き返す聖。

「はい。前に武官に心当たりがいるって言ったじゃないですか。
今日その人が来るんですよ。」

「そういえば言ってたわね・・・・
どんな人なの？」

「長沙の人よ。
ほら、聖さまたちが黄巾党討伐に行ってる時に、
反乱があったって言ったじゃない。」

黄巾の乱は主に中原や冀州、豫州あたりを中心に起きており、
あまり影響が無かった南荊州や涼州、益州では中央の目が薄くなった隙をついて、
反乱が起きていた。

元々漢室に対する不満もあったのだろう。

涼州では韓遂が反乱を起こしたが、董卓に制圧され、
益州では漢室の血縁である劉焉が独立を果たしている。

そして、南荊州の長沙でも丁度それまで太守を努めていた人が亡くなった為に、

盗賊の区星が反乱を起こし、
零陵や桂陽でも周朝、郭石が暴れだしていたのだった。

「それで急いで劉磐に兵を預けて向かわせたんだけど・・・・」

劉磐は聖の親戚の武官であり、
孫策も劉磐に対して太史慈を当たらせる程の武将である。

「亡くなった長沙太守の奥さんが鎮圧したです。」

「ほう。」

水蓮が思わず歓心する。

「劉磐さんが着く前に、軍を率いて区星、周朝、郭石全員倒しちゃったです。
それで、一度会って話してみようと思って呼んでるです。
うまく行けば武官が一人増えるです。」

「凄い人なんだね・・・・・
で、いつ頃くるのかな?」

聖に聞かれ困った顔を浮かべる二人。

「もうそろそろ着く筈なんですけど・・・・」

「まぁ気長に待つです。」

「そっか・・・早く会ってみたいな。
ね、水蓮ちゃん。」

「そうね。同じ武官としては話して見たいわね。」

一人の武人として、是非会ってみたいと思う水蓮だった。

「それで、璃々のお母さんの名前はなんて言うんだ?」

士郎は迷子になっていた女の子を見つけたので、その子の母親を探していた。

なんでもこの街に入った時、余りの人の多さに母親の手を話してしまい、

人の波に流されたらしい。

慌てて追い駆けたが、見当違いの方に走ったらしく、

途方に暮れて座り込んでいたようだ。

「お母さんは紫苑って言うの。長沙から来たんだよーーー。」

（紫苑・・・・真名の可能性もあるから迂闊に呼べないな）

「長沙っていうと南荊州か。
お母さんの特徴とか分かるかな？」

すると璃々は一瞬考えて、

「長い髪の毛してるーー」

「うーーん・・・・長い髪の毛の女性は沢山いるからなぁ・・・・・・」

（俺がいた時代と違って警察署とかが無いから、
迷子の子や落し物を預かっておく場所もないんだよな
・・・・兵士を街中に何人か駐屯させて、そういう場所を作ったほうが良さそうだ）

いろいろ改善点を見つける士郎。

「・・・・そうだ。これならお母さんを捜し易いだろ。」

そう言って士郎は璃々を持ち上げ、肩車してあげる。

「ふわっ！？・・・・あははははっ面白いーっ。
遠くまで良く見えるよーー」

どうやら好評のようだ。
士郎の上で楽しそうにはしゃいでいる。

「よしっ。頑張って璃々のお母さんを探すか。」

「うんっ。がんばろーーー」

そう言って士郎は人通りが多そうな所に向かって移動して行った。

士郎たちが人通りの多い交差点に出たとき、
士郎の上に居る璃々が遠くを指差す。

「あーーーっ!?お母さーーーーーんっっ。」

すると、遠くでキョロキョロしていた女性が此方に気付き、近寄ってくる。

「璃々っ!?大丈夫、怪我とかはしてないのね?」

「うんっ。お兄ちゃんと一緒にいたから、だいじょうぶだよーーー」

士郎から降りた璃々を抱きしめる女性。

「良かった・・・・
あっ、申し遅れました。私は黄漢升と言います。

璃々がお世話になったようで・・・・本当に有難う御座いました。」

ぺこりと頭を下げながら士郎に挨拶してくる黄忠。

（黄漢升って言うと・・・あの黄忠か。

・・・やっぱり女性なんだな・・・・）

「いえ。困ったときはお互い様ですから。

俺は衛宮　士郎と言って、劉表さまの所で客将をしています。」

下手に怪しまれないように自分の素性を話す士郎。

「あら・・・・そうなんですか・・・・・

実は私、劉表さまにに呼ばれて此処に来たんです。」

「そうだったんですか・・・・

だったら案内しましょうか？もうそろそろ戻る頃なんで。」

「そうですね・・・初めて来た所で、道に迷ってしまっていたので・・・

お言葉に甘えさせて貰いますわ。」

すると、璃々が士郎に近寄ってくる。

「お兄ちゃんも一緒に行くの？」

「ああ。」

士郎が頷くと、璃々は満面の笑みを浮かべ、

「お兄ちゃん、さっきのやってーーー」

士郎に肩車をお願いしてくる。

「こら璃々、士郎さまが困るでしょう。」

黄忠が慌てて注意するが、

「よしっ・・・・ほらっ！」

「たかーーいーーー」

「・・・・もう。」

仕方無いわねといった感じの黄忠。

「ちょっと行く所があるんで、このまま行っても大丈夫ですか？」

「はい。」

士郎は一旦天和たちと合流する為に、最初に行った店に戻る。

「あれ～～～
士郎結婚したの？」

士郎たちを見た天和に第一印象はそれである。

「なんでさ・・・・・
劉表さまに呼ばれたらしいから、道案内してるんだよ。」

「でも、傍から見ると凄いお似合いね・・・・・」

「背も高いし、顔も悪くないし。ぴったりね。」

そんな様子をみて地和と人和がヒソヒソと話している。

「まったく・・・・・

買い物は終わったんだろ?ほら、行くぞ。」

そう言って進んで行く士郎。

「ふふふ。そうですね、行きましょうか。」

何か不思議な笑みを浮かべた黄忠と一緒に、

城内に向かって移動していった。

３－４　神弓の射手（後書き）

紫苑さんが登場。

士郎に対しての誘惑要員としても活躍して貰います。

ちなみに焔耶は益州にいます。
紫苑と一緒に仲間にしても良かったんですが、
桔梗や桃香との関係を考慮しました。

三国志演技じゃ思春も最初から仲間にいますけど、
さすがにそれは恋姫と大分ずれてしまうので、無しにしてます。

3－5　崩御（前書き）

投稿ですーーー

色々キャラを増やしたいけど・・・・・

増やしたら対処しきれないのは目に見えてるのが悲しい・・・・・

3－5　崩御

――――――襄陽城　謁見の間――――――

一段高い所に椅子があり其処に聖が座っており、
目の前に片膝をついた紫苑がいた。

水蓮、蓬梅、鈴梅は聖の横に立っており、
士郎、玖遠、援里は紫苑の横に立っている。

「始めまして劉表さま。
長沙太守の妻、黄漢升と申します――」

椅子に座ったままの聖の前で、恭しく頭を下げる紫苑。

「どうぞ頭を上げてください。
此度の乱鎮圧、ご苦労さまです。
貴女のお蔭で沢山の人の命が救われました。
本当に有難う御座います。」

普段とは違う、太守としての姿を見せ、
紫苑の労をねぎらう聖。

「報酬として、何か差し上げたいのですが・・・・・
何か望みの物はありますか？」

すると紫苑は顔を上げながら答える。

「でしたら・・・・

まずは長沙を始めとする、荊州の南部四郡の統治をお願いしたいのですが。」

『・・・・・・・・・』

沈黙する聖たち。

「ええっ!?本気で言ってるのっ!?」

直ぐに気付き、思わず驚いたのは鈴梅。

彼女が驚くのも無理は無い。
南部四郡はここ数年で急激に開発されてきた土地である。

前漢時代は四郡合わせて人口７０万人だったのが、後漢では２６０万人と爆発的に人口が増えてきており、
土地もまだまだ未開発になっているので、
人材や資源など「色々」眠っている土地である。

またこの土地を入手すれば、漢水を挟んだ先にある江陵に資源や兵を送れるようになり、
防衛強化に繋がる。

そして最後に、劉表軍の将である黄祖が太守を努めている江夏の南、長沙からは北東にあたる土地には「銅緑山」と呼ばれる、中国最大の銅鉱山が存在しており、
そこの開発、発掘に着手することができるようになる。

三国が対立していた時も、曹操が統治した魏のエリアには鉱山が殆ど無く、

この銅緑山から銅製品を輸入していていた事もあり、正に宝の山である。

「うん。私は賛成です。
鈴梅ちゃんはどうかな?」

劉表軍の政務を取り仕切っている鈴梅に問いかける聖。

「当然賛成です。直ぐにでも取り掛かるべきです。」

以前から軍を率いてでも入手するべきと考えていた鈴梅からすれば、まさに棚からぼた餅である。

「軍備の面から見ても、あの土地は手に入れたほうがいいですね。」

水軍都督の水蓮もそれに賛成する。

「それでは南部四郡の統治の件、確かに承りました。」

「はい。よろしくお願いします。」

紫苑が聖に南部四郡それぞれの太守印を渡し、
南部四郡は劉表軍の土地となった。

その件が一段落したとき、聖が紫苑に話しかける。

「黄忠さん、此度の乱での活躍は聞いています。
それで・・・是非、私たちの仲間になって欲しいんですが・・・
如何でしょうか?」

それを聞いて、少し考える紫苑。

「・・・・そうですね・・・・・・
私は今までは長沙太守代行でした。
その長沙が劉表様の統治化になりましたので、臣下に加わるのが普通の流れですね。」

「よかった・・・」

「それに失礼ですが、私は劉表さまの事をよく知っておりません・・・
ですので、それを知る為にも丁度いいですしね。」

「はい。もし、私に至らない所があれば仰って下さいね。
まだまだ皆がいないと何も出来ない非才の身ですし・・・・・」

「ふふっ。
はい。よろしくお願いしますね。
黄漢升――真名は紫苑です。」

「私の真名は聖。
よろしくお願いしますね～」

その後、他のメンバーも自己紹介をして、新しく紫苑が仲間に入った。

――――――襄陽城　訓練場――――――

対峙しているのは紫苑と玖遠、
互いに得物である双剣「雲雀」と大弓「颶鵬」を構えて立っている。

紫苑の武将としての実力を見る為、
玖遠と戦う事になったのだ。

「はっ！！」

弓相手に距離を開けるのは危険と判断した玖遠が、
左手に短槍、右手に短剣を持ち、紫苑との距離を詰める。

途中、紫苑が放った数本の矢が体を掠めるが、強引に突破する。

「やあああああッ！！」

距離を詰めれば此方のもの――――

そう言わんばかりに、右手の短剣で横薙ぎに切りかかる。

ブンッ！！！

紫苑はその一撃を慌てずに、半歩下がり避ける。

体勢を崩した玖遠を見て、再度、弓に矢を番え放とうとするが、

玖遠は右手の短剣を振り切った後、
そのまま左手に持った短槍と組み合わせ、双刃槍を作る。

「もらいましたッ！」

そのまま左から横薙ぎに切りかかる。

紫苑が再度距離を開けようとするが、
攻撃範囲が先程より倍近い範囲だった為、
紫苑は目測を誤り、回避が間に合わない。

その瞬間――――紫苑は気づく。

（成る程・・・体捌きと武器の組み替えで射程を変えているのね）

玖遠の戦法を判断した紫苑は、
そのまま弓の曲部で受け、流す。

「っ・・・・・！？」

力を込めていたせいか、そのまま武器と一緒に横に流される玖遠だが、
自分を中心にくるりと半回転し、紫苑に背中を向けたまま、反対側の刃で切りかかる。

が、その刃が紫苑に届く前に、紫苑の右手が玖遠の右手を押さえる。

「くうっ・・・・」

背面で右手を取られては、身動きが取れない。

見ていた聖や水蓮もこれで終わったと思った瞬間、

ガチリと、

玖遠は双刃槍の刃を取り外し、

右手はそのままで短剣を左手に持って紫苑に切りかかって行く。

『なっ！？』

聖や水蓮が驚いている中、背面に居る紫苑に向かって

左手に逆手で持った短剣を突くが。

「あれっ！？」

玖遠の戦法を見切っていた紫苑は、予め左足を下げていたので、

玖遠は誰もいない空間を短剣で突いてしまう。

「はッ！」

一瞬止まった玖遠の隙をついて紫苑が足払いをかけ、左手を捻り、

玖遠を仰向けに倒す。

「ふふっ。これで私の勝ちですわね。」

玖遠の顔に矢を突きつけながら言い放つ。

「きゅう～～～～」

まぁ、玖遠自身は倒れたときに受身が取れなかったので目を回していたが・・・・・

「凄いわね・・・・玖遠に勝てるなんて相当物よ・・・・・」

「はい・・・・霞さんと玖遠さんが最初戦った時は・・・・・
玖遠さんが勝ちましたから・・・・・・」

最もその後、玖遠は霞に四連敗し、
結局一勝四敗という結果になっているが・・・・

「恐らく玖遠の変則二刀に気がついたんだろう。
・・・弓使いだしな・・・観察力は相当なものだろう。」

「成る程ね・・・・まぁ伊達に歳とってないって事か・・・・」

鈴梅がそう言った瞬間――――――

ダンッ!!!!

鈴梅の真横に矢が突き刺さる。

「あらあら♪手が滑ってしまいましたわ♪」

驚いて士郎に飛びついた鈴梅に、
ニコニコと黒いオーラを出しながら話しかける紫苑。

「き、きをつけなさいよっ！？」

鈴梅が紫苑に抗議するが、
怯えながら言っているので全く迫力が無い。

（やっぱり女性に歳の話は禁物だな）

そんな鈴梅を見て、以前の経験を生かしてわざと言わなかった士郎は、
ため息をつきながら安堵していたが、

「なんでため息ついてんのよ！」

鈴梅の怒りの矛先が士郎に向いてくる。

「しかも私にくっついてるしっ！！」

「いや、くっついてきたのはそっちの方・・・・」

「うるさいーーーアンタが全部悪いーーーっ」

鈴梅に理不尽に脛を蹴られている士郎を横目に、
他のメンバーは訓練場を後にした・・・・

「凄い数ね・・・・・」

思わず呟いた水蓮の目の前には、数千頭の馬がいる。

これらは月たちとの貿易で
遥か涼州から運ばれてきたので来たものである。

「お馬さん一杯いる～～～」

「ふふふっ。いたずらしちゃダメよ。」

「は～～い。お母さんっ。」

初めて馬を間近で見た璃々が興味津々に近付いて行き、
それを紫苑が見守っている。

「お兄ちゃんも一緒にいこうよっ。」

璃々にぐいぐい袖を引っ張られる士郎。

「ほら、怪我しないように気をつけるんだぞ。」

士郎も一緒に近付き、璃々を持ち上げ馬に乗せて遊んであげ、
紫苑はその様子を微笑みながら見ていた。

そうしていると、蓬梅と鈴梅がやってくる。

「数は五千頭ね・・・・・・
馬の調教師にも来てもらってるから、案内してあげて。」

鈴梅に言われ、馬が連れられていく。

するとその様子を見ていた士郎が、調教師に声をかける。

「この馬の中から、特に体格と持久力が良い馬って選べるかな?」

「それは出来ますけど・・・・・・」

「どうしたです?
何か良からぬ事考えてますです?」

直ぐ傍にいた蓬梅からあらぬ疑いをかけられる士郎。

「なんでさ・・・
ちょっとやってみたい事があってな。
うまく行けば切り札が出来るかもしれないな。」

「まぁ士郎が変態な事しなければいいです。」

「お母さん、へんたいってなに~~~」

「そうね・・・・璃々が大人になったら分かるわよ♪」

「うんーーー早くなるーーー」

何か変な会話が聞こえてきたが、
蓬梅の毒舌を耐えながら何とか了承をもらった士郎。

「ああ。有難う・・・・
そうだな・・・・五百頭は欲しいな。
身長は低くてもいいから、がっしりしていて、特に持久力が良いのを頼む。」

「十頭の中から一頭ずつ良い奴を選べば良いんですね・・・・
分かりました。
ただ持久力は走らせて見ないと分からないですし、数も数ですから。
時間は掛かりますが・・・」

「それなら大丈夫だ。
こっちの準備も時間がかかるし、焦ってもらわなくてもいい。」

そんな会話をしていると、伝令の兵が士郎たちの所にやってくる。

「士郎さまっ、劉表さまが『重要な報告があるので、全員帰ってきて欲しい』との事です。」

「分かった。
じゃ馬のことは頼んだ。」

そう言って士郎たちは城の方へ移動していった。

―――――襄陽城　会議室―――――

「これで全員集まったです。」

蓬梅が全員を見回す。

「まだグラグラするです～～っ」

玖遠は先程のダメージがまだ抜けてないのだろう。
頭をグラグラさせている。

「一名おかしいのがいますが続けますです。」

「酷いですっ！？」

玖遠の抗議を無視して話し出す蓬梅。

「皇帝の霊帝が崩御したみたです。
それで、その隙を狙って何進が十常侍を一掃しようとしたです。」

「あの～～～十常侍って何ですかっ？」

「宦官の中で特に力を持った人たちの事さ。
まぁ良い噂は聞かないけどな。」

「そうですね・・・・・暴利を民に課したり・・・・・賄賂が横行したり・・・・・
黄巾の乱が起きた・・・・・大本の原因かもしれないです。」

玖遠の疑問に士郎と援里が答える。

「話を戻します。
で、その事がばれてしまったみたいで、
逆に何進とその一族が殺されたみたいです。」

「そんな・・・・・・」

おもわず聖が呟く。

「その情報、信憑性はあるの？」

「董卓さまと交易する時に、密偵を何人か派遣して洛陽や長安を調べてたのよ。
それで、今回交易品と一緒に何人か帰ってきてもらったんだけど・・・
本当みたいね。」

蓬梅の代わりに鈴梅が水蓮に答える。

何進は良い将軍では無かったが、
霊帝の親族である何進が軍務を取り仕切って十常侍と対立していた為、
十常侍は表立って大きな動きが出来ていなかった。

その何進と現皇帝が死んでしまった以上、
十常侍の専横は悪化するのは目に見えて分かっている。
戦乱の足音は、着実に士郎たちに近付いてきていた。

3－5　崩御（後書き）

恐らく次で3章は終わる予定です。

執筆がんばらなきゃな・・・・・

早く原作武将達との絡みが書きたい・・・・・・・

3－6　揺れる中原（前書き）

歴史の進行は作者が書きやすいように、
演技と恋姫ごちゃまぜにしてますので。
ご理解の方よろしくです。

3－6　揺れる中原

秋口――――大分風も冷たくなり、
朝起きるのが億劫になる季節。

「朝か・・・・」

もぞもぞと目覚める士郎。

ゆっくりと体の感覚が戻ってくると、
誰かが布団の中に居るのを感じる。

「？」

布団を捲ると、其処には丸くなった璃々がいた。

「むぅーーーさむいーーーー」

布団が無くなり寒くなったのか、ぎゅっと士郎の脚に強く抱きついてくる。

夜中に目が覚め、トイレから帰ってくる時に部屋を間違えて入ったようだ。
士郎の横が紫苑の部屋なのも理由の一つである。

「どうするのさ・・・・・・」

ずっとこのままにしておく訳にもいかず、
士郎は朝から頭を悩ませるのだった・・・・・

「とりあえず紫苑の所に連れて行くか。」

士郎は璃々を背負い、立ち上がろうとすると、
誰かがドアをノックする。

「どうぞ。」

ドアを開け、入って来たのは、
丁度士郎が会いに行こうとしていた紫苑だった。

「朝早くにすみません。」

軽く挨拶をしながら入ってくると、士郎が背負っている璃々に気づく。

「あら・・・やっぱり士郎さまの所にお邪魔していましたか。」

にこりと柔らかな笑みを浮かべる紫苑。

「朝起きたら吃驚しましたよ・・・・・・
あ、あと「さま」なんてつけなくて良いですよ。
こっちは客将ですし。」

「ふふっ。士郎さまが敬語をやめて下さったら考えますわ。」

「・・・やっぱり違和感があるのか・・・・」

少し落ち込む士郎。

「そちらの方がいいですわ。士郎さん。」

（歳はこっちの方が上なんだが・・・・・
主導権が取れそうにない・・・・・）

その後も紫苑に軽く降りまわされながら会話を続ける士郎だった。

「そろそろ食堂に行きますか。」

士郎は璃々を背負ったまま立ち上がる。

「そうですね。でもその前に・・・・」

紫苑は士郎の後ろに回り、

「ほら璃々。そろそろ降りなさい。」

そう言って璃々を士郎の背中から降ろす。

「起きてたのか。」

全く気づかなかった士郎。

「お兄ちゃんの背中、暖かいから好きーーー」

鍛え上げており、新陳代謝が良いので、体温は高い。

その言葉を聞いて、そっと両手を士郎の背に当てる紫苑。

「あらあら。本当ね。
・・・それに・・・凄いですわね・・・・・」

そのまま背中の背筋や肩甲骨を確かめるように撫でる。

「お母さんっ。璃々もーー」

それを見た璃々も興味津々に混ざってくる。

「ふふふっ。お母さんの後でね♪」

「なんでさ・・・・」

朝から騒がしい親子であった・・・

食事が終わった後、全員が集まる。

「今日の報告は何があるんだ?」

「そうね・・・・・・」

士郎に聞かれ、考える鈴梅。

すると、援里がおもむろに手を上げる。

「朝・・・士郎さんの部屋から・・・・・・紫苑さんが出てきました・・・・・・」

『!?』

爆弾発言に全員が沈黙する。

どうやら入った時は見ていなかったようだが、出てくる所を見られていたらしい。

「ちが・・・・それは・・・・・」

慌てて否定しようとするが、

「璃々ちゃんも・・・・一緒でした・・・・・・」

・・・・・・・・ざわ・・・・ざわ・・・・・・・

「それは違うだろ・・・・・・・」

思わず突っ込む士郎。

「うっさい！この色情魔っ、黙ってなさい！」

鈴梅に怒られる。

「ね、ね、どうだったの！？」

「ど、どうだったんですかっ！？」

そんな二人を余所に、興味津々に紫苑に質問する聖と玖遠。

「うんっ。暖かかったよーー」

「逞しい背中でしたわ・・・」

意味深に答える紫苑と璃々。

「聖っ！そんな事聞いちゃ駄目よっ！？
・・・し～ろ～う～っ～～～！！」

「確かに・・・・士郎さんの背中は・・・・温かいです・・・・・」

「はぁ・・・・こうなったら聖さまに魔の手が及ぶ前に
処理したほうがいいです。」

各々が好き勝手に騒ぎ始める。

会議室は混乱の坩堝と化していった・・・・・

紫苑が皆の誤解を解いた所で会議が再開される。

「時間が無駄になったじゃないっ！！」

「俺は被害者だろ・・・」

鈴梅に当たられる士郎。
良い迷惑である。

「あははは・・・
取り敢えず問題とか報告はあるかな？」

聖が全員に質問する。

「少しいいか？」

「うん。何かな。」

士郎の提案は
街の治安向上の為の駐屯所をあちこちに作ろうという物だった。

何か問題があった際、近い位置に駐屯所があったら解決も早くなるし、
そもそも事件も起きにくくなる。

「駐屯所には待機中の兵士を置くの？」

「ああ。
兵舎にずっといるより、街の人と交流した方が兵士にとってもいいだろ。」

「そうね・・・・・
治安も少し荒れてきてるし・・・
聖、私は賛成よ。」

「蓬梅ちゃん、鈴梅ちゃんは如何かな?」
決を取る為、姉妹にも質問する。

「むぅ・・・士郎にしては良い提案です。
私は賛成です。」

「お姉さまが良いなら私もいいわ。」

「じゃあ、当番の方は水蓮ちゃんお願いね~」

「ええ。分かったわ。」

話が一段落したところで、次の話題に移る。

「あと・・・董卓さまの事なんだけど・・・・・」

鈴梅が話題に出したのは、月との貿易の話。

「その時に何人か密偵を長安や洛陽に放ったのは、前に話したわよね。」

皆が頷く。

「その報告なんだけど・・・・
洛陽に白装束の変な集団が増えてきてるらしいのよ。」

「あれ?確か弧白さんも白い服着てなかった?」

聖が水蓮に問いかける。

「そうだったけど・・・・
武将って個性的な服着てる人が多いわよ。」

「そうだよねぇ・・・・
私も最初に士郎くん見たとき思ったよ~~~」

「聖さま・・・話が・・・違う方向いってます・・・・」

「あう・・・ごめんね鈴梅ちゃん・・・」

援里に指摘され、慌てて鈴梅に謝る。

「いえいえっ!?全然大丈夫ですよっ!
・・・・こほんっ、それで張遼と話が出来たんだけど、
董卓さまも部屋に篭りっきりで殆ど姿を見せてなくて、
現状は賈駆さんが指示を出してるみたいよ。」

「黄巾の時も私たちはともかく、他の人にはあんまり会ってなかったよね。」

「どうもそういうやり方らしいです。
まだ若いですから、余り姿を見せない風にしてるです。」

人は見えないものには恐怖心を持つ。
西涼の屈強な兵を従えるには、そういうのも利用する必要があったのだろう。

（だとしたら・・・少し寂しいんだろうな・・・・）

士郎が思い出すのは月と別れる際、士郎を勧誘して来た事。
純粋に武将を求めたというのもあったとは思うが、
董卓では無く、「月」として甘えれる人を求めていたのかもしれない。

（まぁ推測に過ぎないけどな・・・・・）

士郎は軽く頭を振り、会議に意識を戻した。

「流石に張遼さんみたいな人たちとは
毎日一緒に食事したりしてたみたいだけど、それも無くなったみたいよ。」

「何か・・・病気をしている・・・・可能性は・・・・」

「無くは無いと思うけど・・・典医に聞いてもそう言う話は無かったみたい。」

援里が質問にも、困った顔で答える鈴梅。

「じゃあもしかしてっ、その白装束の人たちがお医者さんじゃないんですかっ？」

玖遠が閃いたとばかりに発言する。

「・・・・・その白装束を見た張遼さんとウチの密偵の意見なんだけど・・・・・
あれは・・・・人間じゃないって言ってたわよ・・・・・・」

おもわず寒気が走る。

「や、やめてくださいようっ～～～
季節が違いすぎますっ！？」

本気で怯えている玖遠。

他のメンバーも心なしか嫌な顔をしている。

「最初に聞いた私はもっと嫌だったわよっ！」

思わず抗議する鈴梅。

「しろうさ～～んっ・・・・
一緒に寝てもらっていい「俺の何かが無くなるからダメだ。」
ええ～～～～っ・・・・・」

何か言ってる玖遠を放置して会議は進む。

「長安や洛陽にも人の出入りが厳しくなってるです。
このままだと涼州や中原が混乱するです。」

丁度二つの地方の間にある為、このまま封鎖されると物流が滞り確実に問題となる。
宛の方から経由しようにも、宛も月の統治下にある為それも出来ない。

そして宛が封鎖されると、この荊州と中原を結ぶ経路も閉ざされる。
一応新野から許昌は繋がっているが、道が整備されておらず、非常に通行しにくい。

今、発展中の荊州からすれば、非常に由々しき事態である。

「確実な情報も入手出来ていないし、
憶測で推理するのも限界があるわね・・・・」

鈴梅が苦々しい顔を浮かべながら呟く。

「とりあえずはこれ以上は情勢が悪化しないようにしなきゃね・・・・
私の方からも手紙出してみるよ。
鈴梅ちゃんは許昌方面の交易の手配をしておいて。」

「わかりました。聖さまっ。」

慌しくなっていく士郎たち。

その後色々試したが効果は出ず、
とうとう恐れていた、月が統治している道が使えなくなる事態に陥

った・・・・・

予想通り涼州や中原の街を統治している太守も困り果て、確実に悪化して行く中、その檄文は届いた。

反董卓連合の・・・・・・・

3－6　揺れる中原（後書き）

次から新しい章に移ります。

数々の英雄たちと邂逅する士郎を楽しみにしてて下さい。

４－１　反董卓連合（前書き）

四章に突入です。

執筆はモチベーションがすべてですね・・・・

4－1　反董卓連合

反董卓連合、その檄文にはいろいろ書かれていたが、
ようするに――――

「董卓さんのせいで被害が出てるから何とかしよう。
けど自分一人では敵わないから、皆で協力しようって所ね。」

鈴梅がしょうが無いといった感じに言い放つ。

今現在、最も力を持っているのは間違いなく月の軍勢であろう。
朝廷のごたごたがあって何進が死んだ際、
その勢力もそのまま吸収してしまっている為である。

「檄文は誰が発してるんです？」

「麗羽ちゃんと陳留太守の曹操さんだよ。」

蓬梅の質問に聖が答える。

「曹操さんはわかるですけど・・・
袁紹さんはなんでですかねっ？」

陳留は洛陽の隣にある為、曹操の名前が出てくるのは分かる。

しかし、袁紹が統治する冀州は川を挟んだ北にある。
影響が無い訳では無いが、玖遠はそれが気になったのだった。

「たぶん・・・・見栄だと思うな。」

「見栄・・・ですかっ・・？」

「うん。麗羽ちゃんは名門の家系だから。
月ちゃんは西涼出身でしょ。だから認めたく無いんだと思うよ。」

「なんだか・・・・そういうのは、あんまり分かりません・・・・」

「玖遠ちゃんはそれで良いと思うよ。
確かに名は大事だけど、それに縛られるのは良くないから。」

「はいっ。」

玖遠は明るい声で頷いた。

「それで・・・私たちは如何するの、聖？」

水蓮が聖に問いかける。

「選択肢は三つあるな。
このまま連合軍に参加するか、月に協力するか、どちらにも参加しないか。」

「多数決でも取るの？」

「いや、流石にそれでは決めれないだろ。
俺たちは意見を言うだけにして、最終決定は聖がする必要があるな。」

鈴梅に答える士郎。

「基本的に侵攻はしないのが、私たちの方針になってるです。
そのままならこのまま傍観するになるです・・・・」

そう言って、蓬梅は聖の方を見る。

「うん。けど、私はこのまま月ちゃんを放っておくなんて事は、したくないんだ。」

聖たちは他の諸侯よりも月の事をよく知っている。
あの優しい少女がこんな事を望んでいる筈は無い。
自分達の理念に逆らう事になるが、如何しても無視する事は出来なかった・・・

「じゃあ、後はどちらの軍に味方するかだね・・・」

「心情的には月さまに協力したいけど、
連合に参加する人によっては厳しいわね・・・・」

「袁紹、曹操は確定として、後は南陽の袁術、月たちと同じ西涼の馬騰も参加するだろうな。」

「それに、月に味方しようにも交流が断絶されているから、
交渉も出来ないしね・・・」

(恐らく黄巾の時にいた奴らが今回も関わっているんだろう。
ここで月に味方して、聖も人質にとられたりしたらおしまいだからな・・・・
貂蝉も洛陽に潜んでいるって言ってたから、月も危険な目にはあっ

てないだろう・・・）

水蓮と話ながら、憶測だがそう結論付ける士郎。

「気になるのは・・・・・黄巾の際・・・・私たちが月さまと一緒にいた事を・・・・・・
他の諸侯も知ってます・・・・その事で・・・・・・怪しまれないでしょうか・・・・・・？」

「それは・・・多少なりともあると思う、けど・・・・」
玖遠の質問に聖が答えていると・・・

「私がさせないわっ！そんな事！」

「そうです。聖さまは私たちが守りますです。」

「鈴梅ちゃん・・・蓬梅ちゃん・・・・・・」

「聖さまが民の為に戦うのなら・・・・私たちは聖さまの為に戦うわ。
だから、聖さまは気にせず自分の道を進んで下さいね。」

「そうよ。皆聖の事を助けるために此処に居るんだから。」

「そうです。・・・・じゃまする奴は消すです。」

「あははははっ。うん。じゃあ私たちは連合軍に参加します。
けど、目的はあくまで月ちゃん達の救出だからね。」

『はいっ。』

そうして急ピッチで出陣の準備が進められていく。
連合軍や洛陽で、どんな出会いがあるのか不安と期待を織り交ぜたままで・・・・・

襄陽城門の前に集まった兵の前で、三人の女性が歌っている。

「♪～～～～♪～～～～♪～～～～～～～～」

それぞれ違う楽器を持ち、顔の前に設置しているマイクで声と音色を届けていた。

『ほわぁぁぁぁぁぁっ、ほわあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！』

それを聞いて盛り上がる兵士達。

戦の前に天和たちに歌ってもらい、士気を上げているのだった。

「これは・・・凄いわね・・・」

その光景を見て思わず呟く水蓮。

今まで何回も兵を連れてきているが、此処まで士気が高い状態なのは初めてである。

「あの黄巾の乱を起したくらいだからな。
元々彼女達にはこれくらいの魅力があったのさ。」

士気の高さは戦での強さに直結する為、
士気を上げるために武将は四苦八苦する。

それがこんなに容易く上がったことに、他の皆も吃驚しているのだった・・・・

今回連れて行く兵の数は約三万。
黄巾の時は四万五千だったのに対しては少なくなるが、これには理由がある。

まず、兵の交代である。

だれだって遠征するより、自国の守備の方が楽に決まっている。
その為、先の戦で連れた兵は休ませ、その間守備に着いていた兵を今回連れてきているのだ。

次に連合軍の存在である。

いくら月の勢力が最大といっても、連合軍の方が数が大いに決まっている。

今回の連合はある意味、民に存在を示すための戦いでもある為、戦いは他の諸侯に任せて、自分は良いとこ取りをしようとしている者も少なくない。

その中で下手に大勢の兵を連れて行こうものなら、前線ばかりを任される恐れがあるのだ。

「それじゃあ・・・出陣しますっ！」

『オオオオオオオオオッッ！！』

聖の号令に出陣する兵達。

「で、今回はアンタ達も来るのね・・・」

「当たり前じゃないっ！」

「大根の好きにはさせませんです。」

「こ・の・減らず口を・・・・」

?姉妹と水蓮はいつも通り騒いでおり、
士郎たちも直ぐ近くを移動している。

「お母さん～揺れるぅ～～」

「はいはい。手を離しちゃダメよ。」

馬に慣れていない璃々が紫苑にしがみつく。

「あの～～連れてきても大丈夫なんですかっ?」

「ええ。私が傍に居るほうが安全ね。
・・・それに、離れると璃々が悲しむでしょう?」

璃々の頭を撫でながら、玖遠の質問に答える紫苑。

「まぁ、いざとなったら玖遠や俺も居るしな。」

士郎の発言を聞いた途端、

「あら?私は助けてくれないのかしら・・・・」

「私も士郎さんと一緒がいいですっ!」

絡んでくる二人。

士郎が困っていると、

「士郎さん・・・・・早く・・・・・行きましょう・・・・・・」

士郎の前に座っている援里が話しかけてくる。

「・・・・なんで援里ちゃんがそこに居るんですかっ!?」

「手綱引いてると・・・・・作戦を考えれないので・・・・・・」

「絶対に嘘ですっ!?」

賑やか?に騒ぎながら連合軍の拠点に向かって行く劉表軍であった・・・・・

――――――連合軍　拠点――――――

既に各地の諸侯が到着しているのか、沢山の兵達でごった返している。

その中に聖達が到着すると、周りの兵が一斉に此方を見てくる。

「おい・・・・あれ、劉表軍じゃないか?」

「連合に参加するのかよ・・・・・・・」

「・・・・・後ろから攻撃されるかもな。」

ざわざわと騒ぎ出す。

どうやら黄巾の乱を月と一緒に戦っていたことは知られており、
それで良からぬ噂が出回っているようだ。

「っ・・・・・・・・・」

聖が悲しそうな顔を浮かべる。

「貴様ら・・・・・っ」

水蓮が周りの兵を怒鳴りつけようとしたとき・・・・・・

「なんですのっ!この騒ぎはっ。」

目の前に居た兵たちが二つに分かれ、その間を麗羽が進んでくる。

「麗羽ちゃんっ!」

「あら?聖さんじゃありませんか。
到着してらっしゃったんですのね。」

「うん。今着いたばかりだけどね。」

「そうですか・・・・
猪々子さん、斗詩さん、聖さんを兵舎に案内して差し上げて。」

「了解～～～」

「分かりました。」

麗羽の傍から猪々子と斗詩が出てくる。

「まずは長旅の疲れを取って下さいな。
・・・・また後で行きますわ。」

別れ際、麗羽にそう言われた聖は、
そのまま猪々子と斗詩に案内され、兵舎に向かっていった。

夜もふけてきた頃、聖たちの居る幕舎に麗羽たちの姿があった。

「まずは、今回の参加、本当に有難う御座いますわ。」

麗羽が軽く頭を下げながら礼を述べてくる。

「そんな頭なんて下げなくてもいいよう・・・・」

「聖さんは最初、董卓さんの方に付くと思ってましたが・・・・・・
やはりこの私の方が魅力的だったという事ですわね。」

「あはは・・・・・・」

自信満々に言い放つ麗羽。

「陣内で色々言っている人がいるみたいですけど、
気にしなくていいですわよ。
この連合軍の大将がこの私である以上は、好き勝手はさせませんわ
！」

「うん。ありがとう麗羽ちゃん。」

麗羽は頭は余り良く無いが変にプライドが高く、自分の軍にもそれ
を求める為、
変な噂が立つのが許せなかったのだ。

それに昔から聖の事は知っている。
彼女が裏切ったりしない人である事はよく知っているので、
励ますつもりも込めて此処に来ているのである。

「あれ、姫が総大将するの？」

猪々子が質問してくる。

「まぁ、まだ決まってませんけど・・・・・・
私以外に適任者はいませんわっ！」

「私もそれで良いと思うよう。
元々麗羽ちゃんと曹操さんが発端だし。」

「・・・華琳さんと私では家柄が違いすぎますわ。
華琳さんでは荷が重いですわね。おーっほっほっほっ！」

「麗羽さまっ・・・あの・・・夜ですし、静かにした方がいいんじゃ・・・・・」

高笑いしだした麗羽を、慌てて止めに入る斗詩。

「別に大丈夫だろーーーー
会議は明日だし、今日くらいは騒いでもーーーー」

「もうっ！文ちゃんまでっ！」

賑やかに夜は過ぎて行くーーーー

４－１　反董卓連合（後書き）

三姉妹が使っているマイクはアニメの設定を流用して、
太平要術の書を使って宝石をマイクに加工した物が残っており、
それを使用しています。

麗羽は大分あれな思考回路してますが、
基本的にはいい人な感じに書くようにしています・・・・

流石に三国志演技と恋姫での差がおおきすぎるので・・・
自意識過剰な所は一緒ですけど。

4－2　継ぎ接ぎだらけの一枚岩（前書き）

ちょっと間が空いてしまった・・・・

４－２　継ぎ接ぎだらけの一枚岩

連合軍の会議室に各諸侯が集まって、これからの事の話し合いを始められていた。

劉表軍からは聖と水蓮が其処に参加しており、
他のメンバーは天幕の直ぐ外に待機している。

「さて、皆さん集まりましたわね。
始めて顔を会わせる人もいますし、まずは私から自己紹介から始めますわ。」

場を取り仕切っている麗羽から自己紹介を始める。

「私が！名門袁家の袁本初ですわっ。」

自信満々に言い切る麗羽。

「はぁ・・・こいつはいつもこんな感じだからほっとくわよ。」

そんな麗羽の様子を見て言い放つ曹操。
とりあえず無視して話が進んで行く。

「私が陳留太守の曹孟徳よ。」

次は麗羽を挟んで曹操の反対に座っている、
軽鎧を着た女性だ。

「私は公孫？　伯珪だ。よろしくなっ。
それと・・・」

「劉玄徳です。よろしくね～～」

公孫？やその付き添いの桃香は士郎との面識はあるが、
聖と会ったのは始めてである。

聖にとっては幽州太守の公孫？より、
同じ劉性の桃香の方が気になっていた。

「やっぱり私の遠縁になるのかなぁ・・・・」

「自称してる人も多いし・・・・
判断しづらいわね。」

聖の呟きに答える水蓮。

そうしていると次の人に移って行く。

「西涼の馬騰の娘馬超だ。
母さんが体調を崩してるから、代理として来てるんだ。」

「へぇ・・・貴女があの錦馬超ね。」

「そ、そんな錦馬超なんて凄くは・・・・」

曹操に言われた瞬間、照れ始める馬超。

「華琳さんっ！誘惑するのは終わってからにしてくださいます！？」

「あら。妬いてるの麗羽？」

「な、なにを仰ってるのかしらっ！？
この小娘っ・・・・・」

「あーーもうっ、会議が進まないだろっ！？
二人ともそこまでにしとけってーー」

二人の言い合いを見かねた公孫？が止めに入る。

「仕方ありませんわね・・・・
では次の人お願いしますわ。」

次の人は赤を基調とした服を着た女性二人だ。
前に座っている方は獰猛な目付きをしており、
後ろに立っている方は静かに目を閉じている。

「袁術の代わりで来た孫策よ。」

「その軍師の周瑜だ。」

孫策と周瑜が静かに挨拶する。

「美羽さんはどうしたんですの？」

「長旅で疲れたからめんどくさいと仰っていました。」

麗羽の質問に答える周瑜。

「まぁいいですわ。
あの小娘では袁家の名は重すぎますわ。」
そんな様子を見ながら、聖と水連が周りに聞こえないように話し出す。
「あの人が孫堅さんの娘・・・・・・」
「彼女からすれば私たちは親の仇になるから、
気をつけなきゃいけないわね・・・・・・」
そうしているうちに他の諸侯も挨拶が終わり、
最後に聖たちの番が回ってくる。
「荊州牧の劉景升です。よろしくおねがいします～～」
「水軍都督の蔡徳珪です。」
聖が挨拶した瞬間、周りの諸侯の目が一斉に向けられる。
黄巾の際、月たちと一緒に行動していたのを各諸侯は知っており、
聖は「自分たちからは戦を仕掛けない」と言うのを言っているため、
疑惑の目が向けられているのだ。
「皆さん、聖さんは私の古い友人ですわ。
この度は私に協力して下さったから、ここに居るのですわっ。」
直ぐに麗羽からのフォローが入り、騒ぎにはなら無いですんだが、
まだ信用はされて無いようだ。

特に、孫策からの視線は凄まじい。
聖のことを目に焼き付けるように、
鋭い目でジロリと見てくる。

緊迫する空気の中、聖は真っ直ぐ前を見つめる。

そんな聖から孫策が目を離した所で、軍議が再開された。

「・・・・これで自己紹介が終わりましたわね。
作戦を決める前に決めておく事があります。」

「なによ一体?」

曹操が頭に?マークを浮かべて質問する。

「それは・・・・この連合軍を率いる総大将を決める事ですわっ!
!」

『・・・・・・はぁ?』

聖たちを除いた他のメンバーが皆、呆気に取られる。

「今、私達連合軍と董卓さんとではほぼ同じくらいの勢力ですわっ。
ならば後はい・か・に優秀な人がいるかで決まりますわっ!」

謎理論が発動する。
勿論他の諸侯は置いてけぼりである。

付き合いが長い聖も苦笑いを浮かべており、
曹操は「また始まった・・・」というような顔をしている。

「やっぱりそれなりの立場の人じゃ無ければいけませんわねっ」

長くなりそうな気がしてくる・・・・

「もう自分がしたいって言えよ・・・」と言う風な空気になるが、
麗羽がそんな空気を読めるはずも無い。

「・・・・あれ？袁紹さんが総大将じゃないんですか？」

そんな空気の中、桃香が発言する。

「あら？やはりそう見えてしまいます？」

白々しく言い放つ。

「もう決まってると思ってたんですよ・・・・・・
それだったら袁紹さんで良いんじゃないんですか？」

「そうですわね。
他の人はそれでいいですの？」

「別に良いわよ。」

「と、言うより代理で来てるから、決まった事連絡するだけだから
別に良いけど・・・」

「異論は無いわ。」

というよりこの面子で「総大将やりたい！」

なんていうのは麗羽くらいである。

「決まりですわね♪
ではこの名門袁本初が連合軍の総大将を努めますわ。」

陣内に麗羽の高笑いが響き渡る。

『はぁ・・・・・』

他のメンバーがため息をついた所で、
次の話に移っていった・・・・・・・

「では、私たちはまず?水関の攻略に取り掛かりますわ。」

洛陽に至る途中にある?水関、虎牢関の二つの関。
この関を越えたら洛陽は制圧したも同然になる。

まずは?水関の攻略の話からである。

「まず先陣ですが・・・・劉備さん。お願いしますわ。」

「・・・・・えええええええっっっっっ!?」

麗羽の発言に驚く桃香。

「だ、だって私たちが連れてる兵が一番少ないんですよっ!?」

「ですが、私を責任重大な総大将に推薦したのは貴女じゃないです

の？
だったら一緒に責任を負って欲しいですわ。」

無茶苦茶である。

だが、他の諸侯は口出しが出来ない、と言うよりはしない。

敵軍の情報を入手する為、誰かがを捨て石にするのは非常に効果的であるからだ。
それが連合軍の中で最も弱い勢力なら損害も最小限ですむ。
そう言う思惑があるから無言の肯定を示しているのだった・・・・

「ううっ・・・・」

言葉に詰まる桃香。

「心配なさらなくても、直ぐ後ろには私たちが控えていますわ。」

問題点は其処では無いのだが、
話が進み、決定して行く。

「じゃあお願いしますわ・・・・・・「ちょっといいかな？」
・・・どうしたんですの聖さん？」

麗羽がそう言った瞬間、
聖が間に入る。

「やっぱり劉備さんの所だけじゃ数が少ないでしょ？
だから、私たちの軍も前線に加えて欲しいんだ。」

「私としては嬉しいですけど・・・他の人はそれでいいですの？」

他の諸侯にとっても、聖が戦う事で本当に仲間になるのかを見極める事が出来る為、
特に反対する人はいなかった。

「それでは劉備さん聖さん。
前線の方よろしくお願いしますわね♪」

そうして軍議は終わり、
各諸侯は各々の陣営に戻っていった・・・・・

軍議が終わり聖と水蓮は外に出て、士郎たちと合流しようと探していると、
背後から声をかけられる。

「貴女が劉表ね。」

「っ・・・孫策さん・・・・・」

聖と水蓮が振り向くと、其処にいたのは先程視線を向けてきていた孫策と周瑜、
そして妙齢の女性の三人が立っていた。

「お母様の件では大変お世話になったわね。」

「仇討ちでもしにきたのかしら。」

水蓮が聖の前に出て牽制する。

「ここで騒ぎなんか起せるわけないでしょ。
・・・やっぱり直に話しておかないと・・・って思ったのよ。」

スッ・・・と目を細めながら続ける孫策。

「どうしてこの連合に参加したのかしら?
貴女は確か他の国には攻め込まないんじゃないかしら。」

「・・・・・・・」

聖は答えられない。

聖が参加する大きな理由は、月の安否確認である。

ここでそれを話してしてまい、広まってしまうと、
連合内に不安が広がり、
最悪、他の全諸侯から攻撃される可能性があるからだ。

「今はまだ袁術の客将だけど、
独立した時には必ず・・・・・」

「なにをしているの。アンタは。」

不意に声を掛けられ、孫策が振り向くと、
其処には聖を探していた士郎たちがいた。

「・・・誰かしら?

貴女のような子供に知り合いは居ないんだけど。」

何か嫌な予感を感じた孫策は、声を掛けてきた鈴梅に向かって警戒気味に質問する。

「成人してるわよっっ！！」

子供扱いされ怒る鈴梅。

そんな様子を見て、横にいた蓬梅が話しだす。

「・・・・貴女の本当の仇でしたら、私になりますです。」

「どういう・・・意味かしら・・・・・・」

ゾクリと殺気が広がるが、

それを物ともせずに話し続ける蓬梅。

「私が考えた策に、まんまと嵌っただけです。」

「成る程・・・・・だったら貴女が？良ね。

その顔、覚えておくわ・・・・・・」

ギロリと、憎しみが篭った目で見つめると、

「いい加減にしなさい！

アンタ、どの立場で話しかけてんのっ！」

「なによ・・・・・・」

鈴梅に怒鳴られ、不機嫌そうな目を向ける孫策。

「アンタ何様なの？
たかだか袁術の客将の分際で、劉表さまや姉さまと対等に話せるつもりなの？
袁術の狗はとっとと下がりなさいっ！！」

「つ・・・・・・・言って・・・くれるじゃない・・・・・・」

「やめなさいっ！雪蓮っ！」

孫策が思わず剣を抜きそうになるが、それを周瑜が止める。

「これは失礼しました。
私たちは主に呼ばれているので、これで失礼します。」

周瑜が強引に場を閉め、聖たちに背中を向けて去って行く。

「必ず・・・この借りは返すわっ！」

最後に孫策の叫びを残して・・・・・・

～　孫策　ｓｉｄｅ　～

「冥琳、どうして止めたのよっ！」

周瑜に攻め寄る孫策。
まだ怒りが収まってないのだろう。

「あそこで騒ぎを起せば、確実に袁術に責められるわ。
・・・そうなったら最悪、独立出来なくなるかもしれない。」

苦々しい顔を浮かべて答える周瑜。
彼女とて、親友の孫策があれだけ言われて気分がいい筈が無い。

「それにあの場で戦りあっても、
儂では後ろにいた弓使いを抑えるので精一杯じゃ。」

「あの長い髪の女性？」

黄蓋が言っているのは聖達と後から合流した紫苑のことである。
武器は持っていなかったが、同じ弓使いとして感じるものがあったのだろう。

「私と雪蓮だけじゃ、残りの五人相手にするのは時間が掛かりすぎるわ。」

あの場に居合わせたのは聖たちの方は聖、水蓮、蓬梅、鈴梅、紫苑に士郎。
黄蓋が紫苑の相手をすると残りは5対2になってしまう。

「・・・・一人いた男、アイツは厄介な感じがしたわ。」

「・・・勘か？」

「ええ。でも、だからこそ戦って見たいのもあるけど・・・・」

自身の勘に絶対の信頼を持っている孫策。
その勘が危ないと告げているからこそ、あえて戦ってみたいと思うのは
武人としての性であるかもしれない。

「まぁいいわ。今回は我慢する。」

「ああ。いずれ私たちが独立した時に思う存分に戦うといい。
私はその為なら、どんな事でも貴女の力になるから。」

「ふふっ。ええ、頼りにしてるわよ冥琳。」

気分を入れなおした孫策は、幾分か軽い足取りで自陣に戻っていった。

さまざまな思惑が交差する連合軍。
向かうな難関の?水関。
戦はまだ、始まってすらいなかった・・・・・

4－2　継ぎ接ぎだらけの一枚岩（後書き）

キャラが増えると会話のバランスが難しくなってくる。

これから更に大変に・・・・

４－３　動く者、巻き込まれる者（前書き）

このペースで書いていきたいですねぇ・・・・

4－3　動く者、巻き込まれる者

「ありがとう・・・・蓬梅ちゃん。鈴梅ちゃん。」

「聖さまに感謝されるような事じゃないですっ！
聖さまの事を悪く言う奴は私が許すわけないわっ！！」

「そうです。聖さまが他の皆を守るんだったら、
私たちが聖さまを守るです。」

「うん・・・・有難う・・・・・・」

聖が嬉しくて零れた涙を拭いていると、誰かが近付いて来る。

「すみませんっ。劉表さまを探しているんですけど・・・・
ご存知ないですか？」

話しかけてきたのは先程の会議に参加していた桃香、
そして一緒に公孫？と蛇矛を持った少女と、青龍偃月刀を持った女性が一緒にいる。

「桃香と鈴々じゃないか。
久しぶりだな。」

聖の直ぐ後ろにいた士郎が話しかける。

「士郎さんっ！？」
「兄ちゃんなのだっ！？」

桃香と鈴々が驚いていると、桃香と士郎の前に青龍偃月刀を持った女性が
立ちはだかる。

「貴様っ！桃香さまの真名を気安く呼ぶとは何事だっ！」

そのまま鋭い視線をぶつけてくる。

「む・・・関羽じゃないか。」

「なっ!?私の名前まで知っているっ・・・・
桃香さま、お下がりください！こいつは危険ですっ！」

士郎が桃香と会って話していた時、愛紗は気絶していたので事情を知らない。

その様子を見て慌てる桃香。

「ちょ、ちょっとっ、愛紗ちゃん違うよ～～～」

士郎の誤解を解くのは時間が掛かりそうである。

「恩人とは知らずに、とんでもないご無礼をしましたっ！！」

事情を聞いた愛紗は、
士郎に向かって地に頭をこすり付ける勢いで謝っている。

「別に気にしなくていい。
知らない男が自分の主に近付いてきたら警戒するのは当たり前だしな。」

「とは言っても・・・・
お咎めなしでは自分の気が済みません・・・・」

しおらしくなった愛紗。

「だったら愛紗ちゃんも士郎さんに真名預ける？」

桃香の提案に愛紗が答えようとすると、

「いや、それは遠慮しておく。」

「？」

「俺が居た国には真名の文化は無かったけど、
真名がいかに大事な物かって言うのは理解してるつもりだ。
だったら俺に負い目があるから教えて貰うより、
俺をきちんと認めて真名を預けて欲しい。
その方が俺も嬉しいしな。」

「・・・・・・・・」

士郎の言葉を聞いて沈黙する桃香と愛紗。

「どうした?」

「いえ・・・・その・・・・・・・・
己の未熟を痛感していた所です・・・・・」

士郎と目をあわせられない愛紗。

「私の事は関羽ではなく愛紗とお呼びください。
貴方に信念があるように、私にもそれはあります。」

「・・・・分かった。これからよろしく愛紗。」

「はい。よろしくお願いします士郎殿。」

二人が落ち着いた所で、士郎の肩が叩かれる。

「?」

士郎が振り向くと・・・・
其処には置いてけぼりだった聖達がいた・・・・

なぜか聖はニコニコしながら怒っているという
変な顔をしており、
紫苑以外のメンバーは純粋に怒っているのが分かる。

「なんでさ・・・・・」

その後、士郎に対する詰問が終わるまでには数刻の時間を要した・・
・・・

「あれ?私も士郎と会話した筈なんだけど・・・・・」

ちなみに約一名がそんな事を言っていたが、当然無視された。

士郎が蓬梅、鈴梅に蹴られた足をさすりながら桃香の話を聞くと、
どうやら?水関攻略の打ち合わせと、
一緒に戦ってくれる事に対するお礼を言いに来たらしい。

お礼に関しては聖も「気にしなくていいよ~~」と返事を返していた。

同じ劉性だからか何処か雰囲気も似ている所があり、
お互いに話しやすそうだった。

桃香が「お姉ちゃんって呼んでも良いですか?」と聖に聞いた時はプチ騒動に発展していたが・・・・・

一旦主要メンバーを連れて、
聖たちは桃香も一緒にいる公孫?の陣の方に集まっていた。

「はわわわっ！援里ちゃんじゃないですかっ！？」

「あわわ・・・・本当です・・・・・・」

「ひさし・・・ぶり・・・・・・」

桃香の軍師の朱里と雛里、
聖の軍師の援里の三人は知り合いだったらしく再開を喜んでいる。

「急に水鏡先生の所からいなくなって吃驚しました。」

「ごめんね・・・・・」

援里は二人より先に仕官した為である。

「またお菓子作り教えて下さいねっ。」

「うん・・・・いいよ・・・・・・」

楽しそうに話に花を咲かせる三人。

その近くでは聖と桃香が話をしていた。

「気になってたんだけど・・・・
どうして桃香ちゃんは連合軍に参加したの？」

今、桃香は白蓮の仲間として参加しており、
連合軍の中では一番小さい勢力になる。
そんな桃香がこの連合軍に参加するのはメリットが少ないのである。

「・・・・実は私、董卓さんが暴君だとは思えないんです。」

いきなり爆弾発言を発する。

他の諸侯の耳に入っていたら、確実に造反を疑われる発言である。

少なくとも今始めて話す人に言う話ではない。

だが劉備の人を見る目はかなりある。

史実を見た限りでは、少なくとも諸葛亮よりは上である。

それに加え、同じ劉性である事と、聖の人の良さを本能的に理解したのだろう。

勿論黄巾の際、聖が董卓と一緒に戦っていたことも知っている。

それらの事から、造反を疑われる事を覚悟で発したのだろう。

「なにか知ってるの？」

聖の質問にコクリと頷く。

「黄巾の時、私たちは義勇軍として参加してたんです。

それで乱が終わった後、私たちが新しく任命された平原に帰ろうとした時、

董卓さんに会ってるんです。」

「黄巾の残党と戦っていたのだーーー」

途中から鈴々が会話に参加してくる。

「私たちも加勢して倒したんですけど、

そのときに董卓さんと少し話をしたんです。」

「軍師の人は怒ってたけど、董卓は優しそうだったのだ。」

一しきり聞いた後、聖が質問する。

「それで、二人は何かおかしいって感じたんだね。」

「はい。」「うんっ。」

聖を信用して明かしてきた情報。
その信頼を裏切るわけにはいかないし、これから共に前線で戦う仲間である。
下手に疑われるよりよっぽどいいと判断した聖は自分達が知りえる情報を桃香たちに教えた。

「やっぱり、何か事件があったんだねっ！」

「ならば直ぐにでも？水関を攻略せねばっ！」

再度決意を新たにしたのか、
燃えている桃香と愛紗。

「おーーーい・・・・・
元気なのは良いけど、あんまり突っ走るなよーーっ。」

白蓮が突っ込んでるが聞く耳持たずである。

「ああ・・・また軍備に金がかかる・・・・・」

そう言いつつも、桃香達が心配だから結局助けるのであろう。
そんな様子を見て、何処か親近感を覚える士郎だった・・・・・

そのまま話題は作戦の方に移る。

「あのっ、なにか連合軍で決まってる事はあるんですか?」

「そうね。陣形は劉表、劉備、公孫?の三軍。
その後ろに曹操、袁術が続いて、最後尾に袁紹軍ね。
その他の諸侯は曹操さんたちが居る中軍の両翼と、
後方からの補給に回ってるわね。」

軍議に参加していない為、水蓮が朱里に説明する。

「あれ?白蓮ちゃんって前線だったっけ?」

「桃香たちだけじゃ大変だと思って志願してたんだよ・・・」

なんだかんだで面倒見のいい奴である。

「えっと・・・作戦の方はどうなってるんですか?」

雛里からその質問を聞いた瞬間、苦々しい顔を浮かべる桃香と白蓮。

「あわわっ・・何か不味いことだったんですかっ!?」

「だいじょうぶだよう。
えっとね・・・・確か「雄雄しく、勇ましく、華麗に前進!」だったよ。」

「作・・・・・戦・・・・・・・ですよねっ？」

「うん・・・・・作戦。」

変な顔を浮かべている玖遠に答える聖。

「それは・・・・決まってないんじゃ・・・・・」

思わず呟いた朱里に頷く雛里。
軍師たちも困惑しているようである。

「・・・要するにその作戦？を守れば、自由に戦っていいんだろ。」

「多分、麗羽ちゃんは悪い月ちゃんたちから洛陽の人を救う連合軍っていう
構図にしたいんだと思うよ。
だから、「雄雄しく、勇ましく、華麗に前進！」なんだよ・・・・・
多分。」

いまいち確信が持てない感じだがそう答える聖。

「なんか・・・・ずれてるな・・・・」

そんな士郎の言葉に、そこにいた全員がため息をつく。

「あの、じゃあ詳しい作戦はこっちで決めていいんですねっ？」

「そう言う事になるわね。
今、？水関はどうなってるのかしら？」

朱里に問いかける水蓮。

「いま星さんが偵察に行ってますから、その結果で変わってきますけど・・・
？水関を守るのは張遼さんと華雄さんだと思われます。」

「だったら・・・挑発して・・・・誘き寄せれば・・・・・・いいかと・・・」

「・・・・華雄なら簡単に出てきそうだな・・・・・」

「あのお姉ちゃん馬鹿だからなのだー？」

愛紗と鈴々が好き勝手に言っているが、
まぁしょうがないだろう・・・・

「その後は如何するんですかっ？」

「そうなったら、流石に張遼さんも出てくると思います・・・・
そうしたら中軍の人たちも巻き添えにしながら、手薄になった門を攻めればいいです・・・・」

雛里の言葉に朱里が頷く。

「・・・・城門突破なら良い案がある。試させて貰えないか？」

「あ・・・はい・・・・。
えっと、どんな案なんでしょうか？」

「ああ。袁術に動いてもらんだ。」

雛里の問い掛けに、にやりと笑いながら答える士郎だった・・・・・・

士郎の案に皆が賛成したので、
その交渉のために袁術の所に軍師三人と、護衛に士郎、水蓮がついて出て行っており、
他のメンバーは陣内で士郎の帰りを待っていた。

休憩のついでに、聖たちがお茶を飲んでいると
誰かが入ってくる。

「ここに関羽はいるのかっ！！」

いきなり入ってきたのは背の高い女性だ。
長い髪をすべて後ろに流しており、獣のような鋭い目付きをしている。

「ここは劉備軍の宿営地だぞっ！！
今すぐ去れ！」

直ぐに愛紗がその女性の前に立つ。

「我が主が関羽に用があってここに来た。
取り次いで貰おう！」

「勝手に入って来て何様のつもりだっ！」

だんだんヒートアップして行く二人。

星と紫苑は偵察に行って居るため不在で、士郎と水蓮は袁術のところに居る。
争いを止めるのに適している人がいないのだ。

すると――――

「やめなさい春蘭。
こっち勝手に会いに来てるのだから、礼儀は弁えるべきよ。」

声を発して入ってきたのはくるくる縦ロールの小柄な女性。
後ろに片目を前髪で隠した女性も一緒にいる。

「あれ、曹操さんじゃないですか。」

聖がそれを見て思わず呟く。

「あら？劉表も居るのね。
だったら丁度良いわ。」

不適な笑みを浮かべる曹操。

「何の用事なんですか？」

「ちょっとね。
まぁ正確には貴女の部下に用があるのだけれど。」

そう言って曹操は聖から視線を外す。

「関羽、それに？良、？越は居るかしら？」

「私が関羽だが・・・・・」

「なによ？」

「なんです？」

「単刀直入に言うわ。
この曹孟徳の力になりなさい！！」

『・・・・・・・・・』

曹操の爆弾発言に全員が沈黙する。

「要するに仲間になれって事？」

「そうね。」

鈴梅の質問に堂々と答える曹操。

「ふざけるなっ！！
私には劉玄徳という血よりも強い絆で繋がれた主がいるっ！！」

激昂する愛紗。
だがそんな愛紗の様子を見て、更に曹操は続ける。

「あら？だったら劉備ごと私に下れば良いわ。
私の軍に来れば、豊富な資金に屈強な兵、
ありとあらゆる物を使わせてあげる。
貴女達の理想を叶えたいのなら、このまま弱小勢力で居るより、
その方が早いんじゃないの？」

そのまま曹操は？姉妹の方にも目を向け、

「貴女達もそうよ。
確かに今は私の方が勢力としては小さいけど、
確か劉表は他の土地を攻撃しないのよね。
それじゃ折角の貴重な才能が埋もれてしまうわ。
そうなる前に私と共に来なさい。
貴女達の才を存分に発揮できる場を与えてあげる。」

自信満々に言い放つ曹操。

「ふざけないでっ！
アンタ見たいな勝手な奴の仲間になるわけ無いじゃない！！」

「そうです。
お話にもならないです。」

「私の意見は変わらん。
何処までも桃香さまと一緒に戦うだけだ！」

強く拒絶する三人。
それに続いて桃香たちが喋りだす。

「曹操さん。
確かに貴女に下れば大きな力が得られます。
けど、私たちと貴女が目指している物は違う！
私は私の力で夢を叶えます！」

「反対されるのは想定内だったけど・・・
言うじゃない劉備。」

冷たい目で桃香を見る曹操。
しかし、どこか嬉しそうにも見える。

「まぁいいわ。
いずれ誰につくのが正解だったか分からせてあげる。
いくわよ春蘭、秋蘭っ。」

『はっ。』

二人を連れて出て行く曹操。
その時、いままで黙っていた聖が曹操に話しかける。

「曹操さん。
私の仲間が欲しいのなら・・・先ずは私を倒してからにしてくれ
ませんか？
・・・まぁ、負ける要素はないですけど。」

「いずれ追いついて見せるわ。
それまで待ってなさい。」

曹操が天幕を開けて出ようとすると、
外には袁術のところに行っていた士郎たちが帰ってきていた。

「珍しい。男が居るのね。
・・・・貴方、外で話を聞いていたでしょう。」

「会話の邪魔をしたくなかったんでな。」

「私たちは帰るからさっさと入ればいいわ。」

そう言って曹操が半身をずらし、
二人がすれ違う瞬間――――

「ああ。そうさせてもらおう。
・・・・・・「自己紹介」も終わったみたいだしな。」

「ッ!!!!」

驚いた顔を浮かべた曹操が振り向くが、
すでに士郎は天幕の中に入っていた。

「あの男・・・・・注意した方がよさそうね・・・・・・」

最後にそう呟いて、曹操は其処を後にした。

「お帰り士郎くん～～
袁術ちゃんとの話は上手くいったの？」

「ああ。協力は得られたよ。
一緒に来てくれた朱里たちのお蔭だけどな。」

そう言って一緒に言っていた朱里の方を見る。

「あわわわっ・・・・そんな事ないですよう。
士郎さんがちゃんと情報を持ってたからですっ。」

真っ赤になりながら答える朱里。

「外で居たんならさっさと入って来なさいよっ！！」

「ちょっ・・・さっきも蹴られたから痛いって・・・・・」

ガスガスと鈴梅に脛を蹴られる士郎。

「うっさいです。
それより自己紹介ってなんなんです？
さっさと説明するです。」

「うん。それは私も気になったよう。」

「ああ。その事か。」

士郎は一呼吸おいて話し出す。

「もともと曹操は勧誘するのが本題じゃなかったのさ。」

「じゃあ、何が目的だったと言うんだ!?」

直接被害を受けていた愛紗が聞いてくる。

「それが自己紹介さ。
・・・・今日始めて顔を会わせた人に「仲間になってくれ」って言って、
仲間になった人を信用できるか?」

「無理だな。
そんな奴は仲間になったとしても直ぐに裏切るに決まっている。」

「そう。
普通の武将なら、いきなりそんな事言われても怒るだろうな。
でも、それが曹操の狙いなんだと思う。」

「?」

「今、皆の曹操に対する感情は最悪だと思う。
けど、この先曹操が活躍する度に思い出すのさ。
「あの時の自信は、嘘じゃなかった」って。」

『・・・・・・・・・・』

いつしか、士郎の話を皆静かに聴いていた。

「普通なら活躍を聞いても「凄い人がいるんだな」程度だと思う。
けど、今の俺たちはここで話をしてる分、
それをより強く印象付けてしまうんだ。」

「だから、自己紹介だったんですね・・・・・」

「ああ。この手は有名になってからじゃ使えない。
幸い今の連合軍には各地の有名な人が集まっている。
だから「今」それをしたんだろうな。」

「・・・そんな人とも、いずれは戦わなくちゃいけないんですね・・・」

「ああ。いずれは越えなきゃいけない壁だな。
けど桃香には人を惹き付ける力がある。
それは曹操以上だ。
自信を持っていけば良い。」

「はいっ!!」

元気に答える桃香。

桃香の仲間たちがその士郎の言葉に頷いていると、

「士郎くん♪
私はどんなとこが魅力なのかな?」

「あっ!わたしも聞きたいですっ!!」

聖と玖遠に絡まれる。

「・・・・明日も早いし、俺は部屋に戻るっ・・・・・」

咄嗟に逃げる士郎。

劉備の陣営内には、

賑やかな叫び声が響き渡っていた――――――

4－3　動く者、巻き込まれる者（後書き）

次が？水関の攻略戦になります。

久しぶりの戦場面の執筆ですから、
しっかりと書きたいですね。

４－４　？水関攻略戦（前書き）

コーエーさん、三国志１２はまだですか・・・・・・

4－4　？水関攻略戦

「お～～～
見てみい藍。中々凄い数で攻めて来とるやん。」

？水関の上に居るのは霞と藍。
そこからなら、攻め寄せてくる連合軍が良く見えるのだ。

「幾ら大人数で攻めてこようが我が武の敵では無いっ！」

ブンッと大斧を軽く振り回して答える藍。

「でもなぁ、
やっぱり聖さまが敵にまわっとるのはキツイなぁ。」

「想像はしていたが、
やはり戦いにくいのはある。」

「月が姿見せんようになって、急に軍備拡張しだして、
挙句の果てに交流の封鎖や。
おかしい事が起き過ぎや。」

この数ヶ月の事を思い出しながら呟く霞。

「ふん。
だからと言って、私がする事は変わらんッ！
ただ、打ち倒すのみッ！」

「そやな。

まぁ頑張って戦おか。」

そう言って関に駐屯する兵に指示を出す霞。

戦いの時は近付いていった・・・・・・・

「？水関を守るのは霞と藍か・・・・・」

進軍する軍の中に士郎の姿があった。

偵察に出ていた星によると、ほぼ間違いは無いそうだ。

「そろそろ見えてきたな。」

遠目に？水関が確認出来る位置まで来ると、

一旦進軍が停止する。

「方円の陣っ！！

今から？水関に攻撃を加えるッ！」

水蓮の叫び声に呼応して、陣を形成して行く。

「あわわわっ！桃香さまっ、私たちもそろそろ・・・・」

「う、うんっ、そうだねっ。
愛紗ちゃん、お願いっ。」

「はっ！
我々も方円陣を敷く。劉表軍に続けッ！」

先に数が多い聖達が先に進み、
直ぐ後ろから桃香と白蓮達が続いて行く。

本当なら三軍一緒に進軍したいのだが、
？水関への道はそれ程大きく無い為、不可能なのだ。

ゆっくりと、弓兵からの攻撃に備え、
盾を頭上に掲げたまま？水関に近付いて行くのだった。

「いよいよ始まりましたわね。」

前線からの報告を受け、呟く麗羽。

「姫ーーあたいも前で戦いたいんだけどーーー」

最近戦いが少なかったせいか、猪々子は大分うずうずしているようだ。

「危ないよう文ちゃん。」

「だいじょーぶだって♪
アタイと斗詩がいれば最強だし。」

そう言いながらじゃれつく猪々子に、
恥ずかしそうな顔をしている斗詩。

「二人とも、あんまり騒ぐんじゃありませんわ。」

そう言いながら戦況を見ていると、
麗羽に向かって誰かが近付いて来る。

「ずいぶん余裕じゃないの。麗羽。」

「華琳さん!?貴女は確か中軍にいたんじゃありませんのっ?」

麗羽がいるのは最後方。

中軍に居るはずの華琳が此処にいる筈が無いのだ。

「一緒にいた袁術が変な動きしてたから、少し下がったのよ。
指揮も任せてあるから大丈夫よ。」

「美羽さんがですの？
まぁ前線に聖さんがいますし、大丈夫ですわ。」

その言葉を聞いて、少し思案する華琳。

「随分信用しているのね。」

「ええ。当たり前ですわ。
聖さんのお母様からの知り合いですからね。」

華琳の質問に自信満々に答える麗羽。

「あの男もそうなの？」

「男？・・・・ああ。あのお茶が美味しい人ですわね。」

「えっと・・・・何それ・・・・」

全く想像していなかった答えが返ってきて困る華琳。

「以前聖さんに会いに行った時、
淹れてくれたお茶がとてもおいしかったんですわ。」

「じゃあ、その他で知ってる事は無いのかしら？」

「そう言えば、始めて会ったのは黄巾の乱が終わった後でしたわね。
それ以前は見かけた事は無かったと思いますわ。」

「そう。ありがと。」

（なら、ここ最近現れたのかしら？
まぁ表舞台に立って居る以上、情報は集まるわよね。）

二人はそのまま前線に視線を向け、戦況を見つめていた。

「盾を構えたまま一旦停止っ！」

水蓮の声に会わせて軍が停止する。
其処はギリギリ？水関からの矢が届く位置。
すると、？水関から声が聞こえてきた。

「幾ら大勢で来ようとも、この華雄が貴様らを通さんっ！」

城門の上から吼える藍。

それに、対して劉備たちが挑発を開始した。

元々気が短い藍なら、直ぐに出てくるだろうと予想したのだ。

だが、

「全く出て来ないねーーー」

「おかしいです。華雄さんなら、もう出て来ても良いはずなんですけど・・・・」

？水関からは全く反応が無く、桃香と朱里は困惑していた。、

「まずいのだ、このままじゃ兵がやられちゃうのだ。」

此方の声が届く位置まで近付くということは、

相手からの矢が届く位置でもある。

被害は殆ど出ていないが、このままではいけないのは確実であった。

その困っている様子を見て、士郎が紫苑に話しかける。

「紫苑。この矢を華雄が居るところに打ってくれないか？」

そう言いながら士郎が手渡してきたのは、

矢に紙を結んだ「矢文」だった。

「これを？華雄さんに読ませるんですか？」

「ああ。確実に出てくるから。」

「分かりました。それでは失礼します。」

そう言って矢を受け取り、
弓に番え、引き絞り、放つ。

きれいな弧を描き、それは確かに？水関の上まで届いた。

「お見事。さすが紫苑だな。」

ぱちぱちと手を叩きながら感想を述べる士郎。

「あらあら。恥ずかしいですわ。
でしたら、次は私に士郎さんの射を見せて下さいね。」

「ああ。機会があったらな。
・・・・水蓮っ！そろそろ藍が出てくるぞっ。」

矢を届けたので、水蓮に注意を促す。

「本当でしょうねっ！
・・・・全軍、迎撃準備っ！」

士郎の言葉に半信半疑ながらも、
迎撃体勢を整える水蓮。

「よし。俺は一旦下がるから、後は任せた。」

「はい。ご武運を。」

紫苑からたおやかな返事を受けた士郎は、
そのまま連合軍の中軍に向かって移動していった・・・・

「くそっ！言わせておけばっ！！！」

藍は桃香たちからの挑発に、青筋を浮かべながら怒っていた。

「落ち着きい藍！
下手に打って出てもこっちに得はないで。
此処は関を使って時間稼ぎしたほうがええ。」

そんな藍を嗜める霞。

「分かっているっ。だが、腹は立つんだっ！！」

以前の藍なら確実に出撃していたが、

士郎や玖遠たちとの交流で、多少の自制心を身に着けており、踏みとどまっていた。

「そうや。このまま此処で時間稼げば、向こうの兵糧も危なくなってくるんや。」

「ああ・・・・・・ん?」

藍が霞と話していると、藍の近くに矢が落ちてくる。

「なんだ?私を狙ったのか・・・・・・手紙が結んである・・・・・・」

そのまま矢から手紙を外し、中を見る藍。

「なんや?面白いこと書いとるん?」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

霞の質問にも答えず、しばし沈黙する藍。

「なぁ、一体どうした・・・「華雄軍っ!今すぐ出陣するぞっ!!」ええええっ!!なんでやねん!」

藍の急な変化に驚く霞。
そのまま静止も聞かずに準備に取り掛かっていた。

「一体何が書いとったんや??」

藍が投げ捨てた手紙を霞が拾って読むと、其処にはーーーー

『訓練場での事件　ばらす』

「・・・・これはしゃあ無いなぁ・・・・・・」

手紙を見た霞も、藍を失うわけにはいかないので、
渋々準備に取り掛かった。

「城門が空きましたっ！
敵は張遼、華雄ですっ！！」

物見の報告を受ける水蓮。

「ほんとに出てきた・・・・一体何したのよアイツ・・・・
まぁ良いわ。全軍進めぇっ！」

聖たちが進み、それに続くように白蓮、桃香たちも進んで行く。
前線は一気に混乱の坩堝と化していった。

勢い良く藍の部隊が飛び出してきて、それに続くように霞の部隊も出て来て、
そのまま方円陣で構えていた水蓮たちとぶつかる。

「盾構えっ！！初撃を左右に凌ぐッ！
突破されないよう耐えなさいッ！！」

藍と霞の突撃を何とか左右に凌ぎ、
敵軍を分断させる。

「ウチと藍の突撃を凌いだんか・・・・・
中々鍛えられとるやん。」

そのまま分断された状態を利用して、霞は藍と呼応して挟撃する体勢に移るが、

「あの馬鹿突っ走ってどうすんや！
・・・まさか士郎探しとるんや無いやろな・・・・・」

士郎の旗が立っているのは、連合軍の前線と中軍の間程にある。
藍がソレに目掛けて、一気に連合軍の奥に進軍して行く為、
挟撃するタイミングがずれ、霞が率いる軍も混乱し始める。

「まずっ・・・・押し込まれよるやん・・・・」

ジリジリと道の両端に追い詰められる霞。
？水関は高い壁に挟まれた道に作られているため、このままではジリ貧である。

「一旦藍を見捨てて？水関に戻った方がええなぁ・・・」

霞がそう考えていると、急に地鳴りのような振動が聞こえる。

「な、なんやっ！！！」

霞が目を向けると、其処には大量の衝車が？水関に向けて進んでいた。

「皆さ～～～ん。美羽さまの為に、死・ぬ・気・で頑張って下さいねぇ～～」

凄まじい勢いで突き進む衝車の上に立っているのは、

袁術軍大将軍の張勲。
衝車を推し進める兵たちに、情け容赦ない言葉を掛けている。

「七乃っ、大丈夫かえ？」

直ぐ近くから袁術が顔を出し、七乃に戦況を聞いてくる。

「だいじょうぶですよぉ～～～
敵兵さんたちは皆劉表さんと、公孫？さんが押し込んでくれてますし。
一応私たちの周りに孫策さんたちも一緒にいますから～～～」

美羽が周りを見てみると、
其処には馬に乗って追走する孫策たちがいた。

「おおっ！
それなら安心なのじゃ。このまま一気にいくのじゃ！」

「はいっ！りょうかいで～す。」

？水関はただでさえ堅牢な門を有していたが、
月たちが軍備拡張を始めてから、さらに堅固に補修されていた。

そこで、士郎はソレを破るために、
以前黄巾の乱の際城門を容易く破った、
七乃が率いる衝車部隊に協力を要請していたのだ。

「どっちかと云えば、私たちと劉表さんはあんまり仲は良く無いんですけどね～～」

美羽が統治する揚州と、聖が統治する荊州は隣あっている。
その為、以前から小競り合いが度々発生していたのだ。

（孫策さんが劉表さんに迷惑かけたようですし、
確かにこっちが責められてもしょうがないですしね。）

士郎が協力を申し出た際、
孫策が聖に突っかかった事件も交渉のカードとして使用していた。

美羽の客将である以上、孫策が迷惑をかけたのなら、
それは当然、美羽の責任問題にもなってくる。

七乃としても、あり得ない事とは思うが、
聖と本気で戦を行う事は避けたいのだ。

（それに、このまま攻め込めば、
？水関一番乗りは私たちの手柄になりますからね～～～）

「それにしても流石劉表さんですね。
作戦通りになってますしね～～～
・・・私たちにもあれくらい出来る将がいたら仕事しなくてよくなるのに～～」

あくまで如何に楽できるかを考えている七乃。

霞や藍みたいな厄介な将は、
前線に居た士郎たちが押さえ込んでおり、
その上、衝車が進み易いように中央に道が出来るように指揮をしている。
作戦のお蔭もあるが、各々の将がその作戦をきちんと理解できてい

るのが重要だった。

そのまま衝車部隊は、？水関への最短距離を恐るべきスピードで進んでいった。

「まずっ！このままやったら破られるやん！！」

その光景を見て、慌てて引き返そうとする霞。

いま？水関に残っている将では、あの衝車は防げそうにない。

「今すぐ反転して衝車を叩くでっ！！」

号令をかけ、衝車を攻撃しようとするが、霞の目の前に居た兵が吹き飛ぶ。

「誰やっ！！」

霞の目の前に立っていたのは、青龍偃月刀を構える愛紗だった。

「名のある将とお見受けする。
私は劉備軍一の配下、関雲長！
いざ尋常に勝負ッ！！」

「へぇ・・・ウチと同じ武器つこうとるやん。おもろいわぁ。
ウチは張文遠っ、いくでぇッ！！」

互いに名乗りを上げ戦い始める二人。

力の愛紗と速さの霞。

二人の戦いは長引きそうだった・・・・・・

「待〜ぁ〜て〜ぇ〜ッ〜！！
士郎〜〜！！」

凄まじい勢いで士郎を追っかけまわしているのは藍。
・・・気持ちは分からなくもないが・・・・・・・・

「そろそろ良いか・・・・・・」

頃合を見計らって止まる士郎。

?:水関から十分に離したので、作戦通りに事が進んでいる為だ。

「やっと追いついたぞッ！！
さあ、早速口封じさせて貰うッ！」

走ってきた勢いそのままに、振り下ろしてくる大斧を
干将・莫耶で流して横に回避する。

ギィィィンと、火花を散らしながら甲高い音を立てて擦れる刃。
士郎に避けられた大斧を、追撃するようにそのまま横に切り払う。

「はぁーーーーっ！！」

其れを飛び越えるように回避する士郎。

「落ち着けっ。まだ何も話して無いって！！」

一旦距離をとって話しかける。

「嘘をつくなっ！！
あの事件を広めて、私を笑いものにする気だろうっ！！」

それにブンブンと大斧を振り回しながら答える。

「なんでさっ！！そんな事しても俺に得が無いだろっ！」

「もしくは私を脅して、したい放題する気だなっ！！
この変態がーーーー」

その言葉を聞いて急にざわざわしだす周りの兵たち。
自軍の方から「やっぱりムッツリなのか？」という声も聞こえてくる。

「なっ・・・・そんな事するかっ！！」

「なにいっ！だったら私に興味が無いのかっ！！許さんーーーっ！！」

なぜか更にヒートアップする藍。

「おかしいだろーーっ！！」

そのまま戦い続け、
結局？水関の以上に気付いた藍の兵士達が、
強引に藍を止めるまで続いた・・・・・・・

霞と藍がもたもたしている間に、
とうとう七乃が率いる衝車部隊が？水関に到達した。

「破城槌を準備して下さ～～い。
遅かった所はお給金減らしますからね～～」

衝車は移動中は、対人用に鉄戈で引っ掛けたり、矢を射掛けたり出来るようになっており、
城門を攻撃するときは、破城槌をセットして使用するようになっている。

「準備できましたか～～～
それじゃやっちゃって下さい～～」

ドコンドコンと城門を攻撃する。

「おおおおっ・・・・
やっぱり七乃は凄いのじゃ！！」

自軍が活躍する様子を見て、はしゃぐ美羽。

「当たり前ですよ～～～
私たちの軍は最強ですから～～～」

非常に軽いノリで答えつつ、攻撃を続ける。

程なくして、城門は大きな音を立てて砕けた。

「このまま進んで、？水関一番乗りなのじゃ！！」

そのまま中に進もうとすると、？水関内に残っていた敵兵が押し寄せてくる。

「えええええっ！！
たくさん残ってるじゃ無いですか～～っ！！」

すべての衝車に破城槌をセットしており、
対人用の準備が出来ていない為慌てる七乃。

まぁ、十分予想出来た事態なのだが・・・・・・・・・・・・

敵兵はそんな事はお構いなしにワラワラと寄って来る。

「な、七乃っなんとかするのじゃっ。」

「急には無理ですよぉ～～～・・・・・
あ、そう言えば孫策さんが居たはず・・・・・
孫策さ～ん。お願いしますね～～～」

「もうやってるわよっ！！」

七乃たちとは違い、最初から予想していた孫策は、
近寄ってきた敵兵を切り伏せながら進んでいた。

孫策の兵は少ないが、衝車が道を狭くしたせいで戦える数が決まっており、
兵の質なら孫策直属の兵たちが上の為、ドンドン進んでいた。

「雪蓮っ！！このまま？水関一番乗りするわよ！！」

「ええ、当然よ冥琳っ。
祭っ！行くわよっ！！」

「了解したっ！！」

雪蓮と祭を中心に攻め込む。
途中、敵将と思われる奴が出てきたが、

「くっ！！ここは通さんっ！！」

「邪魔よ――――――」

相手の剣ごと一気に切り伏せる。

「こ、胡軫将軍がやられた・・・・・・」

「引くぞぉっ！！急いで虎牢関まで下がれえっ！！」

大将である霞、藍がおらず、
副将の胡軫までもが敗北した敵軍に、戦う気力は残っていなかった。

「？水関一番乗りはこの孫策よっ！！」

高々と？水関の上に『孫』の旗が立てられ、
？水関の戦いは連合軍の勝利で決着がついた。

４－４　？水関攻略戦（後書き）

美味しいとこ取りの雪蓮。

私としては七乃達の見せ場を書けたので、満足だったりします～～

4－5　邂逅相遇（前書き）

お待たせしましたっ！一ヶ月ぶりくらいの投稿です。

またペースを上げていける様に頑張ります。

4－5　邂逅相遇

――――――洛陽城　詠の部屋――――――

「？水関が落ちたのっ！！」

「張遼さまと、華雄さまが出陣した隙に突破された模様です。」

兵からの報告を受けた詠は苦々しい表情を浮かべる。

「霞と藍は大丈夫なのっ！？」

「はい。帰って来ていますが、
多少、怪我をされてましたので、今は治療室に。」

「そう・・・取り敢えずは無事で良かった・・・・・」

ほっと一安心する。

「ありがとう。下がって良いわよ。
また何かあったら報告の方お願い。」

「分かりましたっ。」

そう言って部屋から出て行き、
部屋には詠だけが残る。

「・・・・・はぁ・・・・・」

溜まった疲れを吐き出すようにため息を吐くと、
今まで部屋の外からざわざわと聞こえていた物音が、急に消える。

詠が部屋の隅に目を向けると、
其処には今までいなかったはずの男が立っていた。

「・・・・・もうちょっと普通に出て来れないの？アンタは。」

決して好意的では無い口調で話しかける。

「すみませんね。ですが、聞かれては不味い話ですから。
・・・お互いに。」

男は全く悪びれて無い口調で答える。

「月は無事なんでしょうね？」

「ええ。あなた方が戦って頂ければ私は構いませんから。」

「分かってるわよっ！」

「大丈夫ですよ。
しっかり戦って頂ければ董卓さんはきちんとお返ししますから。」

そう言って闇に消える男。

「月・・・・・」

今此処にいない親友を心配しながら、
詠は戦の準備に取り掛かっていった・・・・・

――――――連合軍　宴会場――――――

「流石は聖さんですわっ！！
やはり私の目に狂いはないですわねっ！」

賑やかな宴会場、
隣に座っている聖に上機嫌で話しかける麗羽がいた。

連合軍の諸侯が皆集まっており、
ここには各諸侯の大将クラスの人が集まり飲んで騒いでいるようだ。

「あはははは・・・・・・
皆のお蔭だよう・・・・」

大分酔っており、絡み付いてくる麗羽に少し困った笑みを浮かべながら答える。

「袁術ちゃんの軍が早く門を破ってくれたしね。」

「そうなのじゃ！
やっぱり妾の軍は最強なのじゃ！！」

聖に言われ、上機嫌になる美羽。

雪蓮が美羽の客将である以上、
？水関を破った最大の功労者は美羽たちになる。

「くっ・・・・・
次はっ！私の華麗な軍で虎牢関を落としますわっ！」

美羽には負けられないらしい麗羽。

「いいぞ姫ーー
これで次はあたいの出番だなっ！」

「はぁ・・・苦労しそうだよぅ・・・・」

？水関では戦えなかった為、テンションが上がっている猪々子とは対照的に、
ため息を吐いている斗詩。

「華琳さんも一緒に行きますわよっ！」

「なんで私もなのよ。
麗羽の軍がいれば十分じゃないっ。」

「ここは連合軍の威勢を見せ付けるときですわっ！
で・し・た・ら連合軍の総大将であるこの私と、
華琳さんで進めば士気も上がりますわっ！！」

「はぁ・・・・
しょうがないわね。」

麗羽からすれば、おそらくその方が目立つからなのだろう。

だが、華琳も今後の事を考えたら、ここで功を立てておく必要があるので、
渋々ながらそれを了承する。

色々と各人の思惑が交差しているのだったが、
そんな事とは関係なく、
他の武将達は気ままに交流を続けていた。

「くっ・・・あそこで逃げられなければっ・・・・」

酒も飲まずに悔しそうにしているのは愛紗。
どうやら?水関攻略の際、
霞に逃げられ、仕留められなかったのが悔しいようだ。

「そうなのだ。惜しかったのだっ。」

「幾らか手傷は負わせたのだろう?
だったら次で決着をつければ良いのでは?」

鈴々と星がそんな愛紗と話していると、
誰かが近付いて来る。

「あっ！兄ちゃんなのだ！」

「どうやら荒れてるみたいだな。」

手に幾つかの料理を持ってやって来たのは士郎。

それを見た鈴々は早速それにかぶり付く。

「ほう・・・

貴方が士郎どのですか。

私は劉備配下の将、趙子龍と申します。」

「貴女があの趙雲どのですか・・・・・」

やっぱり女性なんだよなと思いながら答える士郎。

「星で良いですよ。桃香さまも真名を許していますし。

それに・・・・士郎殿に覚えてもらえるとは、

私も有名になったものですな。」

星は黄巾の時の話を桃香から聞いていたので、士郎のことは知っている。

そんな士郎を見て、軽く笑みを浮かべていた。

「強い人のことは耳に入ってくるからな。

それで、何の話をしていたんだ?」

「愛紗が張遼に逃げられたのだーー」

当の本人が「うっ・・」と黙ってしまったので、

代わりに鈴々が、がつがつと食べながら答える。

「まぁ霞は「速さ」ならかなりのものだからな。
逃げに接されると、そう簡単には追いつけないさ。」

「確かに・・・力はともかく、速度は中々のものでした・・・・」

「それに俺も華雄に逃げられたしな。
お互い様さ。」

「士郎さんがですか!?」

思わず驚く愛紗。

自分よりも強い士郎ゆえに、その反応は当然だった。

「ふふふ。
最初から倒すつもりは無かったのでは無いですか?」

「見ていたのか!?」

星の発言に驚く士郎。

「どう言うことなのだ?」

「ちょうど士郎殿と華雄が戦っているのを見つけてな。
我武者羅に突っ込んでくる華雄の攻撃を、
完璧に捌いてたな。」

「見てたのか・・・・・」

士郎は軽くため息を吐き、

「黄巾の時、一緒に戦っていただろ？
藍が悪い奴じゃないのは知ってるからな。
出来れば捕獲するつもりだったのさ。」

ばつが悪そうに答える士郎。
勿論こんな事は同じ目的の桃香達にしか話せない内容である。

「それに、愛紗と違って士郎殿は殆ど怪我も負って無いようだ。」

「くっ・・・まだまだ未熟というわけか・・・・・」

悔しそうにしている愛紗。

「士郎どのっ！
次に機会があったときは、手ほどきの方宜しくお願いしますっ！！」

ばっと凄まじい勢いで頼んでくる愛紗。

「あんまり人に教えるのは得意じゃ無いんだが・・・・・」

士郎が其れを断ろうとすると・・・・・

「だったら鈴々も一緒にお願いするのだ！！」
「ほう・・・ならば私もお願いしようかな。」

その後、結局三人に押し切られ、結局約束してしまう士郎だった・・
・・

「おにーーーちゃーーーーんーーー」

そのまま四人で談笑していると誰かの声が聞こえてきた。

「この声は・・・・璃々っ！？」

近付いてきた璃々はそのまま士郎に飛び込んでくる。

それを落とさないようにキャッチする。

「お母さんは如何したんだ？」

「もう来ると思うよ～～」

璃々が走ってきた方向に目を向けると、

ちょうど紫苑ともう一人誰かが歩いてきていた。

「ふふふっ。士郎さん、今日はお疲れ様でした。

私たちも混ぜてもらってもいいかしら？」

「ああ。紫苑もお疲れ。
混ざるのはむしろ歓迎する位なんだけど・・・その人は？」

士郎は紫苑の横に立つ女性に目を向けながら答える。

「ああ。あたしは西涼の馬孟起だ。
よろしくなっ。」

にこやかに答える馬超。

「貴女が馬超殿ですか。
私は劉表軍の衛宮士郎です、宜しくお願いします。
・・・・・・今大将たちはあっちで集まっていますが・・・・・・」

士郎が指差した方向には、
ワイワイと大声で騒いでいる麗羽達がいる。

各軍の総大将は同じ場所に集まっており、
馬騰の代理である以上、馬超は本来なら其処に居るはずなのだ。

「いや、最初はいたんだけど・・・・・
・・・・どうも場違いな感じがして・・・・・・・」

あれだけ個性豊かな中にいれば、
確実に巻き込まれて事故るだろう・・・・・・・
正しくは無いが、賢い判断である。

「あと、敬語は止めてくれよ。
歳もあたしの方が下だし、代理ってだけなんだからさ！」

「了解した。」

苦笑しながら答える士郎。

その後、他のメンバーも互いに自己紹介を始める。

その間、士郎は抱っこした璃々に食事をあげながら
その様子を見ている。

（これってよく考えたら蜀の五虎大将軍が揃ってるんだよな・・・・・）

士郎のいた世界なら、確実に英霊として座にいるはずの武将たち。

（宝具も持ってないし、性別も違うけど、
どこか感慨深いものがあるよなぁ・・・・・）

酒に口をつけながら、思わずそう考える士郎だった。

その後も賑やかに盛り上がる五人。

どうやら?水関の話で盛り上がっているようだ。
・・・女性が五人も集まって、
戦の話で盛り上がるのも如何かと思うが、
決して口には出さない士郎。

「で、やっぱり張遼って強かったのか?」

興味津々に愛紗に聞く馬超。
どちらかと言えば戦い大好きな性格なので、気になるようだ。

「はぁ・・・・・
あたしも戦いたいんだけどな・・・・・」

?水関、虎牢関と関での戦いが続いている為、
邪魔になる騎馬兵の出番は殆ど少ない。
馬超の軍は殆どがその騎馬で構成されている為、
戦いに飢えているのだ。

「次も出番は無いし・・・・・
あたしを戦わせろーーーっ!!」

大分酔っているようだ。

「ふふふっ。
虎牢関を突破すれば、洛陽攻略時に出番があるじゃない。」

「まぁ騎馬兵なら其処しか出番は無いですな。」

紫苑の意見に同意する星。

そんな二人を見て、更に落ち込む馬超。

「恐らくその時には呂布が出てくるだろう。
その時近くにいれば変わってあげるから。」

「そうなのだーーー
それまでは鈴々たちに任せるのだ。」

「はぁ・・・・・
其れまで我慢しなきゃいけないんだな・・・・・・・」

何処かやりきれない感じの馬超。

士郎がそんな光景をゆっくり見ていると、
誰かが後ろから抱きついてくる。

「士郎さ～～～ん～～～～
何してるんですか～～～～～～」

ぐでんぐでんに酔っている玖遠。
・・・・・・関わったらいけないオーラがもの凄い。

「・・・・・・酔ってるのか・・・・・・」

「酔ってませんよ～～～っ」

「・・・・酔っ払いのその意見は全く信用出来ないんだよ・・・・・・
」

「だったら～～～酔って無いから信用して～～～～」

「下さい～～～っ。」と言い切る前に、力尽きて更により掛かってくる。

「・・・・・援里と水蓮は何処行ったのさ・・・・・」

「援里ちゃんは～～～昔の友達ろ～～～ぉ話してます～～～っ・・・・・水蓮さんは・・・・・・・・すぅ・・・・・・・・・」

途中で力尽きる。

・・・・・多分二人とも逃げたんだろう。

「結局こうなるのか・・・・・・」

これからの事と、明日の朝の事を考えて頭が痛くなる士郎だった・・・

4－5　邂逅相遇（後書き）

次は虎牢関の戦いになります。

4－6　虎牢関突破戦（前書き）

最後はちょっと急ピッチですが、
とりあえず投稿ですーーー

4－6　虎牢関突破戦

――――――洛陽城　軍議室――――――

「詠っ！！虎牢関はどうなっとるんやっ！！」

慌てた様子で駆け込んできたのは霞。
まだ体のあちこちに包帯を巻いており、
傷は完治してないようだ。

「霞っ！？もう大丈夫なの！？」

「ウチがあれ位で寝込む訳無いやん。
それより、虎牢関はどないなったんや！？」

？水関が破られた後、急いで洛陽まで撤退した為、
現状がつかめてないのだ。

「まだ大丈夫よ。
一応、恋と音々音。後は楊奉の軍がいるわ。」

「やったら弧白もおるんか・・・・
なら大丈夫そうやな。」

月の軍は幾つかの部隊に分かれており、
月直属の恋、音々音、霞、藍の他に、最も力を持つ李？，郭？の二
軍や楊奉，張済の部隊がある。

李？，郭？の二軍は月の後ろを守るため、長安の守備についており、

今回の戦には従軍しておらず、
楊奉，張済の部隊は共に来ており、楊奉の軍には弧白が所属している。
黄巾の際は、弧白の副官としての能力を期待して恋と一緒に行動してもらっていたのだ。

「流石に直ぐには破られないと思うから大丈夫よ。」

兵の数や関自体の頑丈さと攻め難さ、武将の数と質総てにおいて？水関を上回っている。

？水関を突破されても、この虎牢関の万全の状態を見れば自ずと連合軍の士気は低下する。
詠は、そこまで考えて配置していたのだった。

（まぁ、ここまで早く？水関を突破されるとは思わなかったけど・・・）

その？水関を破られた遠因は詠にあるのだが、
彼女は知る由も無かった・・・・・

――――――洛陽　　？――――――

洛陽を一望出来る丘の上に一人の男が立っている。

「そろそろ溜まりましたね・・・・・」

手に持つ本を見ながら呟く。

「とりあえずは予定通りですし、
十分ですね。」

洛陽を見渡した後、そう言って丘から降りていると、

「もうよろしいのかな?」

別の男が近付いて来る。

「貴方ですか。
とりあえず此処での用事は終わりました。」

「ふむ。後は如何するのか?」

その質問に対して一泊の間をおいた後、

「使い終わった物はゴミです。
ゴミは燃やしてしまうのが一番ですね。」

口の端を僅かに持ち上げて答える。

「好きにすればよい。
それで、私は如何すればよいのだ。」

「左慈が言っていた「異物」を除去してもらえますか?
如何やらかなりのやり手の様子ですから・・・・・貴方なら丁度い

いでしょう?」

何処か見下したように言い放つ。

「ふっ・・・・「異物」の相手は同じ「異物」という事かな。・・・・私が楽しめる相手ならばよいのだが・・・・」

そんな態度にも、どこか飄々とした感じで答える。

「ええ。しっかり頼みましたよ。」

そう言って二人の男はぼやける様に姿を消した・・・・・

「全軍っ!!突撃ですわっ!!」

輿の上に座っている麗羽の号令に従い、

袁紹軍が虎牢関に突撃を仕掛ける。

『ウオオオオオオオオオッッッッ！！！』

数万に及ぶ兵士達の怒号は、
正に地を揺るがすような衝撃。
その勢いごと突っ込んで行く。

が、皇帝が居る洛陽を守る虎牢関は、そう簡単には破れない。
守っている月の軍勢も、呂布直属の精鋭たちがいる為、正に難攻不落である。

それに・・・・・

「おいっ！！どけよっ！！」

「なんでオメェらがこの隊に混じってんだよ！！」

「いてぇッ！！槍刺さってるんだよ！！」

袁紹軍のあちこちで起こる悲鳴。
無理もない、まともに陣形も組まずに数万に及ぶ兵が突っ込んだのだ。
まだ虎牢関に到達してないのに、早くも混乱してしまっている。

しかもその後ろには前線が混乱したせいで、攻城兵器たちが詰まっており、
攻城兵器からすれば、前線の兵が邪魔で進めず、
前線の兵からすれば、攻上兵器が邪魔で下がれずと、
もう如何しようもない事態になっていた・・・・・

「ち、ちょっとっ！！
猪々子さん、斗詩さんなんとかしなさいな！！」

「あーーあ
姫ーーーこうなったらもう無理だってーーー」

「お手上げ」といった感じに答える猪々子。

「そもそも、「全軍で突っ込む」って言い出したのは猪々子さんでしょう！？」

「姫だって乗り気だったじゃんかーー」

「て言うか、何で全軍で一気に突っ込んだのよう・・・・」

言い争ってる二人を見て、猪々子に問いかける斗詩。

「え？だってそっちの方が盛り上がるだろーー」
「そっちの方が派手だからに決まってますわっ！！」

二人から似たような答えが帰って来て、落ち込む斗詩だった・・・・

「なんか袁紹の所が混乱してないか？」

前方を進んでいる袁紹軍を見ながら呟く春蘭。

同じ先鋒として曹操と袁紹が共に出陣したが、
いきなり袁紹軍が突っ込んでいったので、曹操軍は置いていかれたのだ。

どうやらその混戦に参加したいらしく、ソワソワしていると、

「姉者、今行ったら私たちの兵も被害をうけるぞ。」

近付いてきた秋蘭に窘められる。

「や、やっぱり駄目なのか・・・・」

「ああなったら誰が敵か味方か分からなくなるからな。
流石に危険だからな。」

「別に行くのはいいけど、
行くんならアンタ一人で行きなさいよねっ！！」

残念そうに袁紹軍を見つめる春蘭を見て、
桂花が突っかかって行く。

「どう言う意味だ、それはっ！」

「どうも何も、そのままじゃない。
アンタがどうなろうと構わないけど、
華琳さまの大事な兵を傷つけさせる訳にはいかないのよ！」

「ふん。我が隊の兵にあの程度で傷を負うような者はいないっ！」

「・・・脳みそまで筋肉なアンタと一緒にするんじゃないわよっ！」

「なんだとっ！」

「何よっ！！」

傍で見ている秋蘭が止める間も無く
一気にヒートアップする二人。

曹操軍の武と知のトップ同士が悪いのは、結構重大な問題なのだが・・・

「二人とも、其処までにしなさい。」

愛馬の「爪黄飛電」に跨った華琳が近付いてくると、
二人の言い合いが瞬時に止まる。

本質的に仲が悪く、言い争いが耐えない二人だが、
華琳に対しての忠誠心の方が其れに勝る。

そう考えると、やはり華琳のカリスマ性は相当なものである。

「春蘭。あと少しすれば董卓軍に動きがあるわ。
その時に存分に活躍して貰うから、力を蓄えておきなさい。」

「はい。分かりました華琳さまっ！」

「桂花は敵軍がどんな風に動いても、迅速に行動できるように構えておきなさい。
案は任せるわよ。」

「はいっ！了解しました。」

さっきまでの光景が嘘の様にテキパキ動き出す春蘭たち。

その後、華琳の推測通りに、
恋を先頭にした董卓軍が虎牢関から出陣して来る。

「敵は呂布が先頭にいます。
今が虎牢を落とす絶好の機会です。」

「よしっ！
呂布の軍は麗羽に任せるわ。
全軍っ、虎牢関に進軍せよっ！」

桂花からの報告を聞いて、
華琳達は進軍を開始したのだった・・・・・・

「敵軍が迫って来てますわよっ！！
早く迎撃なさい！」

凄まじい勢いで迫ってくる恋を見て、
慌てる麗羽。

「今が好機です！
敵軍総大将の袁紹の首を取るのですぞっ！！」

「・・・・貰う。」

音々音と一緒に突っ込んでくる恋。
まるでモーゼのように道を切り開いてくる。

「くっ・・・
挟み込んでしまいなさい！！」

銅鑼の音が鳴り響き、袁紹軍が左右に分かれ、
突っ込んでくる恋を挟み討ちにする。

「恋どのっ、拙いのですぞっ！！」

幾ら恋でも、左右同時に攻めて来られては手傷は負いかねない。
慌てる音々音だが、当の本人である恋は落ち着いていた。

「・・・・音々音、左の敵軍は任せる・・・・
魏越，成廉。付いて来て。」

「れ、恋どのっ！！
何処へ行くのですかっ！」

軍の指揮を一旦音々音に預け左の軍の相手を任せ、
恋は二人の将だけを連れて右の軍へ突っ込んで行く。

元々恋の部隊は精鋭ぞろいな為、恋が抜けても勢いはそう変わらない。
そして恋が連れて行った武将の魏越，成廉は、
共に勇将，猛将を意味する「健将」の二人。
そこらの兵では相手にならないほどの強さを誇る。

「はあっ！！」
「やあっ！！」

左右対称な動きで剣を振るい、
恋の直ぐ後ろについて行く二人。

恋が獅子だとすれば、彼女達は翼。
翼持つ獅子に、袁紹軍は一気に破られて行き、
瞬く間に鶴翼陣に展開していた袁紹軍は破られていった。

「姫ーーっ、
大丈夫かーっ！！」

「麗羽さまっ！
後は任せて下がって下さいっ。」

だが、袁紹軍の必死の抵抗のお蔭で、
他の部隊の沈静に向かっていた猪々子と斗詩が
救援に間に合った。

馬から下りて対峙する三人。

「全くっ！
遅いですわっ。」

「ごめんな姫ーーー
さてっと、アイツがあの呂布かーーーー」

どこか、わくわくしながら恋と対峙する猪々子、
斗詩はそんな猪々子を心配そうに見ている。

「・・・・・邪魔。」

そう言って一気に距離を詰め、猪々子に向かって上段から戟を振り
下ろし、
猪々子は其れを斬山刀で受ける。

「くうっ・・・・・！！」

ギィンッ！！と鋼同士が交差する音が響く。

力だけなら、恋より猪々子の方が少し劣るだけなので、
じりじりと押し込まれていく猪々子。

が、その隙を斗詩が見逃すはずが無い。

「やあああああああッ！！」

恋に向かって振り下ろされる金光鉄槌。
攻撃の破壊力には、武器自体の重さがかなりのアドバンテージを占めており、
幾ら恋でも、全力で振り下ろされる斗詩の金光鉄槌は受け止めれない。

「ち・・・・・・」

咄嗟に横に跳ぶ恋。

ゴウッと、音を閉てて空振る斗詩。

「きゃあっ！！」

そのままフラフラとバランスを崩している間に、
恋と猪々子も体勢を立て直す。

「惜しかったな斗詩っ。」

「うん・・・もうちょっとだったね・・・・・」

残念そうな二人。

「よーしっ。このままあたいと斗詩の愛の力で呂布を倒すぞーーー」

「わ、私はそう言うんじゃないーーっ」

再度武器を構えて対峙する三人、
今度も同じく恋が切り込んでくる。

「ふっ・・・・・・」

横薙ぎの一閃。
並んで立っている猪々子と斗詩を同時に切りつける。

「くうっ・・・・・・」
「きゃっ・・・・・・」

突進する力も加えられているため、一瞬後ろに体勢が崩れる。

「はっ・・」

左から右に振り切った後、
そのまま流れるよう袈裟斬り、突き、払いと攻めて行く。

猪々子と斗詩の武器は共に重さがある為、手数を増やした方がいいと判断したのだ。

手数を増やした一撃でも、威力は二人の全力と同等の破壊力がある為、
猪々子と斗詩は防戦一方だ。

捌ききれなかった斬撃が、二人の体に切り傷をつけていっており、
このままではジリ貧である。

「・・・・・・・っ！！」

二人が困っていると、攻撃していた恋が飛び退き、
恋がいた所を高速で飛来した矢が通過する。

猪々子と斗詩が矢が飛んできた方に目を向けると、
そこには双剣を持つ士郎が立っていた。

「士郎・・・・・決着つける・・・・・・」

もう猪々子と斗詩には興味が無くなったのか。

互いに獲物を持ち、対峙する。

「ああ。許昌の続きだな。」
（強化（トレース）・開始（オン）っ）

「本気・・・・だす・・・・・・」

それは士郎に言ったのか、恋自身の事なのか、
互いに強く武器を握り締める。

「ふっ・・・・・！！！！」

裂帛の気合と共に、恋は斬りかかっていった・・・・・・

恋と麗羽，士郎が戦っている間に、
華琳たちはもう直ぐで虎牢関に到着する所まで来ていた。

無論、途中で敵兵の攻撃はあったが、最大の脅威である恋がいない以上、
華琳たちの敵ではなかったが。

「このまま虎牢関一番乗りは私が貰うっ。」

そう言って春蘭が先走って進んで行くと、
虎牢関が開門し、出陣した敵の部隊が近付いて来る。

「春蘭。蹴散らしなさい。」

華琳に言われるまま、一気に攻め込む。

狙いは敵将ただ一人。
裂帛の気合と共に斬りかかる。

が――――

「ここは通せませんよ～～～」

ギィイインッッッ！！！

敵将に止められる。

「何者だッ！！」

「始めまして～～
董卓軍，楊奉隊の将、徐公明です。」

大斧をブオンッ！！と振りかざし、構えながら答える。

「まさか私の一撃を止めるとは・・・
華琳さまッ！」

「いいわ。存分に戦いなさい。」

華琳から一騎打ちの許可を貰い、対峙する。

「曹操軍が一の剣、夏侯元譲ッ！
行くぞッ！！」

二人の戦いが始まった・・・・・・

「ふッ・・・・・・！！」

「ちッ！」

いつしか、戦っている士郎と恋の周りには大きな空間が出来ていた。
皆巻き込まれるのを恐れて、離れているのだ。

力任せに叩きつけ、自らの直感で回避する恋。
相手の隙に攻撃し、攻撃を誘導して防ぐ士郎。
全く別の方向に極めた二人の戦いは、見るものを魅了した。

最初は互角に戦いを繰り広げていたが、
だんだんと差がつき始める。

ペース配分を考えない恋と相手の力を利用する士郎。

少しずつだが、確実に恋の勢いが無くなってくる。

「はぁ・・・・・・ッ・・・・・・！！」

疲れる体に鞭打ち、戟を振りぬくが、
士郎は最小限の動きで交わし、距離を詰めてくる。

「・・・・・くっ・・・・・・！！」

それを強引に弾き飛ばす。

「ぐぅッ！！
・・・まだ余力は残っているのか・・・・流石だな。」

「まだ・・・これから・・・・・ッ」

再度武器を構える恋。
それに対して、士郎が攻撃しようと体勢を屈め、恋も身構えると・・
・・・

「ッ・・・！！」

途中で手に持っていた剣を投げてくる。

咄嗟に弾く恋。
が、

前後に重なるようにして、二本目も飛んで来ていた。

もはや士郎の事が意識から無くなり、目の前から飛んで来る二本目

の剣に集中する。

「避け・・・・・るッ・・・・・・・・・」

なんとか強引に体をねじって回避する。

すると、

「あッ・・・・・・・!!」

手に持っていた方天画戟の感触が無くなる。

もはや握力は残っておらず、

最後の気力も、投擲された二本の剣に持っていかれた。

そのまま方天画戟を突きつけられる。

「・・・・・・・・私の・・・・・・負け?」

「ああ・・・・・・そして、俺の勝ちだ。」

ここに士郎と恋の戦いの決着がついた。

もはや恋に戦う意思は無いと判断した士郎は、

恋に方天画戟を返す。

「やっぱり・・・・強い・・・・・・・・」

どこか嬉しそうな恋。

最強の座に居るのが自分だけというのは、何か寂しいものがあったのだろう。

始めて自分より強い人を見たのが嬉しいのだ。

「士郎・・・・・月を、助けて欲しい。」

他の人たちには聞こえないように話す。

「何かあったんだな。」

「うん・・・・・・最近、姿が見えない。」

「そうか・・・・洛陽まで行く必要があるな・・・・・・」

二人がそう話していると、
伝令の兵が近付いて来る。

「士郎様ッ！
物見の報告によると、洛陽から火が上がったとの事ですッ！！」

「何ッ！？」

どうやら他の兵たちにも連絡があったようで、
戦場全体がざわついている。

「ッ・・・・・・！！」

恋は咄嗟に赤兎馬に跨り、洛陽方面に向かって駆けて行く。

「我々も洛陽に向かう！
劉表様に連絡急げっ！！」

事態は一刻を争う事態になっていった・・・・・・

4－6　虎牢関突破戦（後書き）

だんだん色んな人が出てきます。

次もこのペースを維持したいですね。

４－７　燃える虚都（前書き）

少し物語りが進んで行きます。

キャラが多いと、動きを考えるのが大変です・・・・

4－7　燃える虚都

突如発生した火災により燃える洛陽。
尋常ではない速度で、火の手は広がっていった。

「士郎さんっ！！」

「玖遠か！
他の皆は如何した？」

洛陽に向けて移動しようとしていると、
後方に控えていた玖遠がやって来た。

「今、水蓮さんが軍を纏めて洛陽への移動準備を進めてますっ！
・・・・あと、桃香さん達が白蓮さんの白馬を借りて、
先に進んで行っちゃったみたいですっ・・・」

「桃香が！？
と言う事は、愛紗や鈴々，星も一緒にか・・・・・・」

「はいっ・・・・・」

緊急事態な今、聖や麗羽のような大軍を率いている軍は咄嗟の行動が取れない。

桃香たちは、連合軍の中では最も勢力が小さいため、先に進んでいけたのだろう。

「ならば今から俺も移動する！」

「はいっ。お供しますっ！」

そう言って馬首を洛陽に向けた二人は共に馬を走らせ、洛陽に疾駆して行く。

「一体何があったんですかねっ？」

「あれはどう見てもただの火災じゃないのは確かだな。火の広がり方が早すぎる。」

木造建築が基本のこの時代、火災は下手をすると町全体を焼き滅ぼしかねない。

その為、洛陽クラスの大都市なら何らかの手は打っているのが普通なのだが・・・・・

「月さまも無事だといいんですけどっ・・・・」

「そうだな・・・・・・・」

そのまま進んでいると、目の前に何処かの部隊が居るのが見えてくる。

「？・・・何処の軍ですかねっ。」

「あれは・・・・・霞っ！？」

視力を「強化」した士郎が見た旗には、「張」の文字が刺繍されており、

先頭に、偃月刀を持った霞が立っていた。

「士郎っ！
ここは通さへんでっ！！」

ブンッ！！と武器を振り回しながら言い放つ霞。

「俺たちは月を助けに行く途中なんだっ。」

「それにっ、火災も消火しないと大変ですっ！！」

必死に停戦を申し出る士郎たち。

「今、詠が探しに行って、藍が消火の方に向かっとる！
ウチは、外から来る連合軍を止めてくれって頼まれたんやっ。」

距離を詰めてくる霞。

「洛陽に行くなら、ウチを倒してからやっ！！」

本当は自分も助けに行きたいのだろう。
しかし、仲間である詠や藍を信じて、ここに立っている。

「・・・・士郎さんっ、ここは私が相手をしますっ。
先に行って下さいっ。」

「玖遠・・・・・」

玖遠の申し出に困った顔を浮かべる士郎。

「大丈夫ですっ。

霞さんとは何回も戦ってますしっ、一回だけなら勝ってますからっ。」

そんな士郎にニコッと笑いながら答える。

「・・・・私を信じてくださいっ。
数刻の遅れも惜しい状況ですっ。
私が洛陽に行くより、士郎さんが行った方が良いに決まってますっ。」

「・・・・・任せたっ。
・・・・・・借りが出来たな・・・・・」

「はいっ。
後で、絶対に返して貰いますからっ♪」

そう言って、霞に向かって行く玖遠。

「玖遠がウチの相手するんか?」

「はいっ。・・・・一勝四敗、此処で勝っておかないと、差が開き過ぎますからっ。」

双剣を持って構える。

「ぷっ、あはははははははっ。
そうやなっ。・・・・・ほな、いくでぇッ!!」

ともに疾駆していく。

互いに武器を打ち付け、戦いが始まった・・・・・・

「お～～～いっ！！士郎っ！！」

「馬超かっ！」

洛陽に向けて移動中の士郎に馬超が追いついて来た。

「もう此処まで来たのか？」

「ああ。あたしの軍は騎馬が中心だからな。
それに、兵の数もそんなに多くはないしな。」

平地の移動速度なら騎馬に勝るものはいない。
桃香たちも、白蓮の騎馬を借りて、先に洛陽進んでいっているのだ。

「馬超も洛陽の様子が気になるのか？」

「まぁ・・・あれだけの火災だし・・・・・
あたし達でも出来る事はあるかなって・・・・」

恥ずかしそうに答える馬超。
それを見た士郎は思わず笑みをこぼす。

「な、なんだよっ！！」

「いや。いい所あるんだなってな。」

「っ～～～～！！う、煩いっ！！」

共に並走する二人。

「・・・・やっぱり距離があるな。」

虎牢関から洛陽までは、そんなに距離はないのだが、
焦る気持ちが、気を急かしていた。

「大分馬も疲れてるみたいだな。」

馬超が士郎の馬を見ながら言う。

士郎が以前乗っていた「的盧」は黄巾の時、月に貸したままになっており、
今は別の馬を使用していた。

「大分無理させてきたからな・・・・・」

武器や鎧を装備した人を乗せた馬は、想像以上に消耗が激しいのだ。

「・・・・なら、馬貸してやるよ。
けど、後で絶対返してくれよな。」

そう言った馬超は後ろから一体の馬を呼んでくる。

「「紫燕」っていうんだ。
そこらの馬よりは全然言いと思う。」

「これは・・・・いい馬だな。
けど・・・本当にいいのか？」

馬というのは、飼い主がしっかりと愛情も持って育てれば、それに答えてくれる。
この馬を見てみると、馬超がいかに丁寧に育てているのかがよく分かるのだ。

「ああ。乗り換えように幾つか連れてきてるしな。
・・・・けど、怪我とかはさせないでくれよ。」

かのチンギス・ハーンは、広大なアジア大陸を移動する際、自分が乗る馬のほかにも、7～8体の馬を一緒に走らせ、自分が乗っている馬が疲れてくると、他の馬に乗り換えて走るというのを繰り返し、移動速度と距離をかせいでいた。

だが、この時代の騎馬は非常に高価な為、実行できないが、西涼は騎馬の生産が非常に盛んな為、馬超クラスの人なら其れが可能なのだ。

「よしっ！一気に洛陽に行くぞっ！！」

「ああっ！」

目標の洛陽はもう直ぐで着く所まで来ていた・・・・・・

士郎たちが洛陽に移動している頃、
玖遠と霞の戦いはまだ続いていた。

「やあああああっ！！」

玖遠は右手に持った短槍で切り込んで行き、
それを偃月刀で受け止める霞。

偃月刀と短槍が鍔迫り合って止まった隙に、

玖遠は左足を踏み込んで霞の懐に滑り込み、左逆手に持った短剣で切り込んでいく。

「甘いでっ！！」

だがそれも、偃月刀の柄で受け止められる。

そのまま強引に弾き飛ばされる玖遠。

「くっ・・・・ふぅッ！！」

再度半身に構え、左逆手に持った短剣で突く。

「ちッ！！」

吹き飛ばした直後の隙を狙われた為、受けが間に合わないのでそれを避ける霞。

玖遠は突いたままの左逆手に持った短剣の柄尻に、右手に持った短槍を連結させ双刃槍を作り、
そのまま回りながら右手側の刃で切り込むが――

「それもッ・・・・予想済みやッ！！」

力一杯に振り下ろされる偃月刀。

「きゃあッ！！」

不十分な体勢で受けた為、先程よりも強く吹き飛ばされる玖遠。

再度、互いに距離をとって対峙する。

「諦めぇな玖遠！
そっちの手は大体分かっとるでっ！！」

「そう・・・・ですねっ。
けどっ、ここで頑張らないとっ、士郎さんに借りが作れませんからっ！！」

気力を振り絞るように立ち上がり、
くるりと双刃槍を振るい、構える。

「・・・・それは中々面白そうやんか。
けど、ウチも詠との約束があるけん、負けてやれんのや。」

そんな玖遠の前に、堂々と立ちふさがる霞。
玖遠からすれば、それま正に壁であった。

（ここで勝たなきゃ・・・・・士郎さんに追いつけなくなりますっ）

自身の遥か遠くいる士郎。
体調が万全ならともかく、手負いの霞にここで勝てないようでは絶対に追いつけない。

「行きますっ！！」

「ええでッ！！そっちが力尽きるまで捌いたるわ！！」

玖遠の変則二刀は、すべて霞に読まれている。
それは黄巾の際、共に戦ったり、模擬戦を繰り返したせいでもある。

同じ相手と戦えば戦うほど、勝率が下がっていくのだ。

（けどっ・・・・士郎さんは違いますっ！）

士郎も玖遠と似たように奇策を用いる事があるが、
それを戦いながら相手のスタイルに合わせて、その都度全く違う対処をしているから読まれないのだ。

（まだっ・・・全然及ばないけどっ・・・士郎さんのようにっ！！）

霞が受けの構えに入る。
玖遠の攻撃を見切っている霞からすれば、無理に攻撃するより、防御に徹して玖遠の体力を削る方が安全と判断したのだろう。
そんな霞を見た玖遠は、霞の目前でいきなり背中を向ける。

「なッ！！」

予想外すぎる玖遠の行動に、一瞬思考停止する霞。
もちろん、その隙を玖遠が逃すはずが無かった。

「たあっ！！」

左に反転しながら切り込む。
霞が持っている偃月刀の刃は、向かって左に構えていたので、これならがら空きの方を攻撃できるからだ。

しかし――――――

「させんでッ！！」

それを防ぐ霞。

その衝撃で、玖遠の双刃槍の片方の短剣が外れる。

「えっ！？」

先程連結させた時、きちんと繋がっていなかったのか――

玖遠に外れて飛ばされる短剣を、拾う余裕がある筈も無かった。

「貰ったッ！！」

一気に攻め込んでくる霞。

下から、偃月刀の刃が襲い掛かる。

「くっ！！」

残った片方の刃で防ぐが、弾き飛ばされる。

その瞬間――――玖遠の手から『武器』が無くなる。

「これで！終わりやッ！！」

思いっきり振りかぶる霞。

正にその刃が振り下ろされる瞬間――

「え？」

霞が吹き飛ばされる。

（なん・・でやッ・・・・・・）

水月に走る鈍い痛み。

意識を失う瞬間に見たのは、

右手に『棒』を持って突いたままの姿勢でいる玖遠だった。

・・・・・・・・・

玖遠の武器は短剣二本と、連結用の棒で構成されている。

霞に二本目を弾き飛ばされる前に、棒を外して右手に持っていたのだった。

「はぁっ・・・・はぁっ・・・・・・

なんとか・・・・・・勝てましたっ・・・・・・」

体のあちこちを怪我しており体力も殆ど残っておらず、

正に満身創痍だが、何とか勝ちをおさめた。

「皆さんっ・・・・霞さんを拘束して、陣に連れて行って下さいっ・・・・」

玖遠の命令を聞き、動き始める兵たち。

「少し休んだら・・・・・直ぐに洛陽に行かないとっ・・・・・・」

心配そうに、洛陽を見つめながら思わず呟く玖遠だった・・・・・

「これは・・・・・・・」

士郎と馬超が見たのは、まるで蛇のように蠢く炎だった。

凄まじい勢いで火勢が広がり、もはや洛陽全体を覆いつくしている。

「士郎っ！お前も来てたのか。」

そんな士郎に近付いて来たのは白蓮。

どうやら兵を連れて消火作業に当たっているようだ。

「白蓮っ・・・・・桃香たちは何処に行ったんだ？」

「あ、ああ。桃香なら政庁の方に向かって行ったけど、愛紗や星も一緒だから大丈夫だろ。」

「そうか・・・・・俺も少し用があるから、行って来るよ。

・・・・・馬超、馬を返しておくよ。有難う。」

少し名残惜しそうにしている「紫燕」から降りる士郎。

「別にいいけど・・・・・
士郎、この火には気をつけろよっ。
燃え広がった所は消えるんだけど、うねうね動いてる火が消えないんだ。」

「了解した。
馬超は如何するんだ?」

「あたし?
・・・そうだな、他の所に行って消火に参加するよ。
士郎・・・・気を付けろよ。」

「ああ、行ってくる。」

そう言って駆けて行く士郎。

火を避けながら、ドンドン奥に進んで行く。

(この火は魔術で生み出された火だな・・・・・・・
・・・・・・ ネフシュタン、炎の蛇か・・・・・・・)

蠢いてい火を『解析』する士郎。
確かにこの火は普通には消せない。

(だったら・・・・・・ッ・・・・・・・)

周りに人が居ないのを確認して、自身の魔術回路に魔力を流す。

「――――投影（トレース）　開始（オン）」

創造の理念を鑑定し
基本となる骨子を想定し
構成された材質を複製し
製作に及ぶ技術を模倣し
成長に至る経験に共感し
蓄積された年月を再現するッ・・・・・

「――――投影（トレース）・・・完了（オフ）・・・・・」

『霧露乾坤網（むろけんこんもう）「仙女護りし満つる水珠」』

士郎の周りに浮かぶ数十個の水泡。
大きさは大小さまざまで、
バスケットボールほどの大きさの物もあれば、ソフトボール位のものも存在する。

士郎の言葉と同時に、周りに待機している水泡が蜘蛛の巣のように広がって行き、
そのまま洛陽を覆い、一気に消火していく。

洛陽のあちこちに居る炎の蛇たちは、のた打ち回りながら消えていった。

そのまま洛陽に蠢く炎の蛇を消し終えると、
霧露乾坤網は再度水泡に戻り、士郎の周りで待機する。

「投影破棄（トレース・オフ）」

待機状態の霧露乾坤網を破棄する。

霧露乾坤網は一度発動してしまえば、待機状態にしているだけでも
魔力を消費してしまので、
ただでさえ魔力が少ない士郎からすれば非常に困る。

それに周りに水泡が浮いている状態で他の兵に会おうものなら、確
実に怪しまれる為だ。

「よし。これで火は何とかなったか・・・・・・」

周辺の鎮火を確認した後、
士郎は桃香たちを探して、さらに進んでいった・・・・

「大分遅れを取ったわね。」

士郎たちが洛陽に着いて大分たった頃、華琳たちの軍勢も
やっと洛陽に到着していた。
虎牢関でずっと徐晃に足止めされていたせいで、到着が遅れてしま

ったのだ。

だが、その徐晃も洛陽の火災の報告を聞くと直ぐに向かって言ったのだが。

「それにしてもあの水はなんだったのかしら？」

洛陽に移動している途中、遠目だが、何か水の網の様なものが洛陽を覆い、
一気に消火したのを見たのだ。

「それも含めて調査した方が言いと思います。」

「それもそうね。」

桂花の提案に頷く華琳。
そのまま華琳が命令を下そうとすると、

「誰だ貴様はっ！！」

詠や月を探してウロウロしていた藍とかち合わせる。
今まで消火作業をしていたのだが、急に水が降りてきて一気に消火した為、
洛陽をウロウロしていたのだった。

「おい！士郎を見なかったか！！」

どうやら士郎を探しているらしい。
・・・・色々やられたので、恨みが溜まっているのか。

「知るわけないだろうっ！！
お前の相手は私がしてやるッ！！」

藍と対峙する春蘭。
弧白との戦いが途中で中断された為、不完全燃焼なのである。

「いいわ。好きにやりなさい。」

華琳から許可を貰う春蘭。

「なんだ、私と戦う気か！？」

「ああ。いくぞッ！！」

その言葉と共に互いに切り込みあう。

互いに好戦的な性格をしている為、
激しい剣戟の音が鳴り響く。

見た感じでは、力，技術は同等。
速度では春蘭が優勢といった所か。

それに、藍は？水関の際、士郎に負わされた傷が完治していない。
それでも強引に春蘭のスピードについていった為、
直ぐに息が上がり・・・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・・っ・・・・・・・」

ドサッと、途中で地面に倒れる。

「え、えええっ！
おい起きろ貴様っ！これからがいい所だろうッ！！」

またもや中断された春蘭。
なんとか藍に起きてもらおうと必死である。

「華琳さま・・・・・如何しますか？」

困った様子で話しかける秋蘭。

「・・・・とりあえず拘束しておきなさい・・・・・・・・・
一応それなりに強いみたいだし、使い所はあるでしょう・・・・・・・・
・」

華琳も、まさか急に倒れるとは思っておらず、
とりあえず拘束して自軍に連れて行ったのだった。

・・・・倒れた藍は「士郎・・・・・ッ・・・・許さん・・・・・・・」
と寝言を呟いていたが・・・・・・・・

洛陽城門で士郎と分かれた馬超は、洛陽の中心まで進んでいた。

洛陽には先に到着した白蓮軍の他に、華琳，美羽の軍と続々と到着しており、

まだ到着していないのは麗羽と聖の軍だけで、聖はもう直ぐで付きそうだが、

麗羽の所はまだまだかかりそうだった。

暫くすると、先に進んでいた桃香たちの姿が見えてくる。

「お～い！！」

「貴女は・・・・馬超さん！？」

会議で自己紹介はしたが、面と向かって話すのは始めてである。

「馬超殿、何故ここまで来られたのかな？」

「ああ。士郎と一緒に洛陽に来たんだ。

まぁ士郎とは洛陽の城門で分かれたけどな。」

星の質問に答える馬超。

馬超は桃香たちの本当の目的を知らないから、

少し警戒しているのだろう。

「お兄ちゃんも来てるのだ！？」

「ああ。他の軍も到着してたから、
あたしは奥のほうの様子を見に来たのさ。」

簡単に状況を説明すると、
考え込む桃香。

「早くしないと拙いね・・・・・」

「はい。急いだ方がよろしいかと。」

桃香と愛紗が話しているのは月の事だろう。
他の軍が集まってくると、見つけ出すのが困難になってくる。

「何が拙いんだ?」

一人だけ状況をつかめてない馬超。

「えっとね。その・・・・・・」

「董卓どのを探しているのですよ。」

上手く答えられない桃香に変わって答える星。

「董卓どのは余り他人と会った事がないので顔が知られていません。
けど、私は勿論会った事がありませんが、桃香さまは以前お会いしているのですよ。
それで、他の軍の人が間違えて逃がしたりしまわぬよう、先に探しているのです。」

上手く言い逃れする星。

「だったら特徴を伝えておいたらいいんじゃないか？」

「服装は変わりますし、顔の特徴を口で説明しようとしても、会った事があるのが桃香さま，愛紗と鈴々では説明が出来ないでしょう。
下手に先入観を持たせて勘違いされて、責任問題になっても困りますしな。」

「それもそうだな・・・・・」

余り頭がいい方ではない馬超は上手く言いくるめられる。

「やはりこのまま政庁の方に進んで行った方がいいと思います。」

愛紗の提案に皆頷く。

そのまま進んで行こうとすると、

「おや？劉備じゃありませんか。」

急に現れた二人の男が近付いて来る。

「だれだ貴様はッ！！」

警戒する愛紗。
他のメンバーも各々の得物を構えている。

「始めまして。私は于吉と言います。

黄巾の時は左慈がお世話になりましたねぇ。
・・・・ここで何人か殺した方が後々いいでしょうか？」

「あの男の仲間かっ！」

互いの間に緊張が走る。

「愛紗よ。
ここは私と馬超どのに任せて先に行け。」

「あ、あたしもっ！？」

「星っ！？」

星の提案に驚く二人。

「今は一刻を争うのだろう？
ならば董卓どのの顔を知っている三人は先に進んだほうがいい。
私と馬超どのならば、そう簡単には負けはせぬよ。」

「・・・・大丈夫なの星ちゃん・・・・・？」

心配そうな桃香。

「ふふっ。大丈夫ですよ。
さあお行きなされ！」

「あたしがの残るのは決定してるんだな・・・・・」

星に促され、進んで行く三人。

「おや?あの三人は逃げましたか・・・・・
・・・・どうやら董卓を探しに行ったようですね。」

三人が駆けて行くのを見ながら話す于吉。

「私はあの三人を追いかけます。
ここは任せましたよ。」

「ふむ。了解した。」

そう言うと于吉は袖から出した札を燃やし、姿を眩ます。

「「なッ!!」」

それを見て驚く二人。
無理もない。目の前で妖術を見たら驚くのは仕方ないだろう。

「さて。そなたらの相手は私が努めるようになったのだが・・・・・
」

ゆるりと近付いて来る男。

長髪を後ろでくくっており、見た感じでは鎧を着けておらず、手に
持つ細身の剣は凄まじく長い。

どこか優雅さを感じさせる雰囲気を出しており、
炎が燻り、瓦礫と死体が蹲る此処とは、
全く異質な空気を発していた。

「先ずは名乗ろう。
アサシン・・・・ではないな。我が名は佐々木小次郎。
勝負願おうッ！！」

燕切る剣士との死闘が始まった・・・・・・

4－7　燃える虚都（後書き）

霧露乾坤網（むろけんこんもう）
宝具ランク　B
対人宝具

真名解放は「仙女護りし満つる水珠」

使用者の周りに、「混ざらない」「蒸発しない」純水で出来た水泡が数十個待機する。

真名解放すると、発動した者の意思にあわせて動き、
「水槍」による攻撃
「水膜」による防御（術者には常時発動。他人にも張る事が可能ただし、水膜自体の防御力は非常に低い）を行い、
他にも水による消火、人を乗せての移動など色々な用途に使用出来る。

また純水で出来ており、他の物が混ざらない特性の為、電気を完全にシャットアウト出来る。

封神演義での竜吉公主の宝貝ですね。
元々は雨を降らすだけでしたが、フジリュー版の方を採用しました。

どこで士郎は見たのかですが、聖杯戦争が終わった後、
世界をウロウロしている時に、どっかで見たんでしょう。
もしくははギルの『王の財宝』発動時、見かけたのかも知れません。
（特に決めてないのです・・・・）

炎の蛇（ネフシュタン）

モーゼがエジプトから民を連れて移動している途中、
神の怒りを買った為、神が送った蛇。
これに噛まれた民から死者が出た。
その為、その炎の蛇を模してモーゼが青銅で像を作り（ネフシュタンはその像の名前）、
炎の蛇に噛まれても、その像に祈れば生きながらえたと言う。

于吉が『太平要術の書』で召還した蛇。
一気に焼き尽くそうとした為、
普通の水では消えないように使用しました。

ですが、さすがに宝具の力を無効化できるわけも無く、
霧露乾坤網によって消火されました。

名前が無かったので、モーゼの像の方を使用しました。
もともとこの像も炎の蛇がベースですし・・・・

佐々木小次郎が何故此処いるのかは次話位で説明が入ります。

４－８　雛落とす刃（前書き）

そろそろ夏コミの時期。

・・・・お金があったら絶対いくのに・・・・（泣）

4－8　雛落とす刃

光届かぬ牢獄。

地上の騒音すら聞こえないここに響くのは、
滴り落ちる水滴の音だけである。

「・・・・・・・・・・」

その牢獄の一番奥、静かに祈っているのは月。

左右上下と後ろは石畳に囲まれ、前は頑丈な鉄格子が塞ぐ。

「詠ちゃん・・・・・・恋さん、霞さん、藍さん、弧白さんっ・・・・・」

仲間の無事を祈る月。

そのままギュッと、手に持つネックレスに付いた剣を強く握り、

「・・・・・士郎さん・・・・・・・・」

最後にもう一度、強く祈りを捧げた・・・・・・

炎が燻る洛陽の街。
瓦礫の合間を縫うように疾駆して行く士郎。
目指しているのは政庁。

「こっちの方か・・・・」

手に持っている、小さい「陽剣・干将」がついているネックレスを見ながら呟く。

そのまま進んで行くと、

「桃香っ！！」

「あっ！士郎くんっーー」

たたたっと小走りに近付いて来る。

「月を探してるのか？」

「はい。けど、一体何処にいるのか全く分からなくて・・・」

「瓦礫が一杯で進みにくいのだー」

困った顔を浮かべている愛紗と鈴々。

「そうか・・・・・

そういえば星は一緒じゃないのか？」

星の姿が見えないので疑問に思った士郎が聞いてくる。

「うん・・・・

実はさっき、馬超さんとも合流したんだけど、」

「そうか・・・馬超も無事なんだな・・・・」

洛陽に入ってから分かれたため心配していたのだが、

桃香の話を聞いてホッと胸を撫で下ろす。

「でもっ、変な人たちが出てきてっ、二人が足止めしてくれてるのっ！！」

「二人組？・・・・一人は背が低い白装束を来た男だったか？」

士郎が聞いている男は左慈のことだろう。

「ううん。二人とも背が高かったよ。」

「その内の片方の男が、尋常じゃない殺気を放っていました・・・・」

話しながら思わず身震いする愛紗。

「・・・・どんな奴だったんだ？」

「・・・服は群青のゆったりとした服、紙は長髪を頭の後ろで纏めてました。

細い片刃の、身の丈ほどの長刀を持っていて、どこか飄々とした感じです・・・・」

「・・・・まさか・・・いや、此処には来れないはずだ・・・・」

該当する人物が一人いる。
普通ならあり得ない筈だが、自分と言うイレギュラーもあるし、あの仙人も存在する。

それに、もし「アイツ」だった場合、どうやった来たのか情報を集める必要が出てくる。
最悪、他の連中も来る可能性が出てくる。

少し考えた後、士郎は手に持っているネックレスを桃香に差し出す。

「これは・・・・・・？」

「この首飾りに付いている剣が、月の方向を指してるんだ。
これに従って進んでいけば、多分月にたどり着くと思う。」

士郎が使用する魔術には「変化」が存在する。
アーチャーはこれで、カラドボルクを矢に改造して使用したりしていた。

今回も、互いに引き寄せあう「干将・莫耶」の性質だけを残した、小さい「干将・莫耶」を作成し、片割れを月に渡していたのだ。

ミニチュアし、互いに引き寄せあう性質しか残っていないとはいえ、仮にも「宝具」である以上、敵の仙人に気付かれてしまう可能性もあったが、

この時代、月ほどの身分であれば、何かしら魔術的な力を持つ装飾品を持つのは、
それほど不自然では無い。

月自身が、これを持っていない可能性もあったが、
渡したとき非常に気に入っていたようなので、それは心配はしていなかった。

「きれいなのだ～～～」

宝石の研磨技術が未熟なこの時代、
光を受け、黒光する「干将」はとても美しかった。

「け、けどっ、
こんな綺麗な物貰ってもいいんですかっ!?」

「あ、ああ。
月を探すのに必要だし、やっぱり装飾類は女性がつけた方が似合うしな。」

「えへへへっ。大事にしますねっ。」

イソイソと首につける桃香。

「俺は星と馬超の援護に行ってくるから、月は任せるっ。」

「ハイっ。頑張って下さい～～っ!!」

駆けて行く士郎を、桃香たちは手を振りながら見送る。

「さて、星たちの所へ行くか。」

とは言っても、詳しい場所が分からない。

とりあえず桃香たちが来た方向へ進もうとすると、

「うっふ～～～ん。久しぶりねご主人様♪」

瓦礫が吹っ飛んで、筋肉だるまが近寄ってくる。

「・・・・・そう言えば洛陽に行ってるって言ってたな・・・・・・」

其れを見て急に疲れた顔を見せる士郎。

「あらん?ご主人様元気がないようね。
だったら私のこの熱い口付けで元気を分けて・・・・・・」

「なんでさっ!!
逆に元気が吸い取られそうだろっ!!」

「それは残念ねん・・・・・・」

一向に話が進まない。

「・・・・貂蝉は星達の居場所が分かるのか?」

「さっきまで于吉が居たみたいだから、
多分大丈夫なのねん♪」

クネクネしながら答える。

「・・・・・案内、頼めるか・・・・・・・」

「分かったのねん。じゃあ、ついて来るのよ！！」

そう言って駆けて行く二人だった・・・・・・

「む・・・？誰か近付いて来てるのかぇ？」

桃香たちからは遅れたが、聖たちよりも少し早く洛陽に着いた美羽たち。

のんびりと残敵を掃討している途中、誰かが近付いてくるのが見えた。

「誰でしょうね～～～
敵兵じゃなかったらいいんですけど～～」

危機感を感じさせない口調で答える七乃。
相変わらずの二人である。

そうこうしていると、だんだん姿が分かってくる。

「あら・・・・・・

確かその旗は袁術さんですねぇ～～～
でしたら・・・一勝負と行きましょうかっ！！」

近付いてきていたのは、先程春蘭と激闘を繰り広げていた弧白だった。

ブオンッ！！と風切音をたてながら斧を振りかぶる。

春蘭と戦ったときの傷なのか、体に纏うローブは彼方此方に切れ込みが入っている。

自身の血と浴びた返り血、燻る炎の色が白いローブを赤く染め、
頭に被るウィンプルからは琥珀色の髪の毛が零れ出ており、光を受けて輝く。

弧白自身の武力も相俟ったせいか、言葉に言い表せない雰囲気を発しており、
対峙する二人からすれば、恐怖以外の何者でもない。

「な、ななのっ・・・・・
なんとかするのじゃっ！！！」

「む、無理ですよう美羽さま～～
あの斧持ってるって事は徐晃さんですよ～～・・・・
私が敵うわけないじゃないですかぁ～～～」

「孫策はどこに行ったのじゃ！！」

「美羽さまが、「洛陽は妾が一番乗りするのじゃ～」って言って、
置いてきたんじゃないですか～～～」

二人が慌てている間も、ドンドン近付いて来る弧白。

「な、なんで私たちが狙われてるんですか～～っ」

「え？だって、連合軍の兵糧は貴女の軍が管理してるじゃない～～
だから貴女たちの軍を破って、食料を入手しようと思って～～」

きちんと斥候を放ち、兵糧の所在を掴んでいる弧白。
のんびりしているが、きちんと仕事をこなしている。
・・・藍とは大違いである。

「貴女たちの兵糧をすべて入手出来れば、
連合軍の進行は止まるし、奪った兵糧はこれからの復興に使えますしね～～～」

正に一石二鳥。

「ま、待ってくださいっ！！
私たちを殺したら、兵糧が何処にあるかが分からなくなりますよっ！！」

苦し紛れだが説得する七乃。

「それもそうだけど～～
けど、少なくても貴女たちの進軍は止まるわね～～」

弧白のその言葉に閃く七乃。

「だ、だったら私たちの軍に投降しませんかっ？

もし投降してくれれば、もう進軍は止めて街の人を救助しますし、兵糧も余っている分なら上げますから～・・・・・・」

「そ、そうなのじゃ！！
もう何人か妾たちに降伏してる者もおるのじゃ！！」

「？誰なんですか～～」

「確か楊奉って名前でしたねぇ～～」

考え込む弧白。

「では、先程の条件に追加して貰ってもいいですか。
もし董卓さまを見つけた場合は、殺さないっていうのをです～～」

「ど、どうなのじゃ七乃っ！？」

「そうですねぇ・・・・・・
今回の大本の人物ですから、他の諸侯に見つかると無理かもしれませんが、
私たちが見つけて、こっそり逃がすのなら問題ないと思います～～」

「うん。
でしたら、投降しますね～～」

自身と引き換えに、洛陽の民と月を救う選択肢を選んだ弧白。

（月さま・・・・・どうかご無事で・・・・・・・）

月の安否を祈りながら、救助作業を行い始めた袁術軍に合流したの

だった・・・・・・・・・

煌きながら振るわれる刀。
風を切り裂いて、星に襲い掛かる。

「くっ！！」

刃は眼前を掠め、前髪が数本持っていかれる。

「たあああああっ！！」

攻撃後の隙を付いて、小次郎の後ろに回った馬超が刺突を放つが、
小次郎は振るった刀の勢いを利用して回転し、それを避ける。

そして、そのまま後ろにいる馬超を薙ぐ。

「うわっ！！」

武器を弾かれ、切っ先が腕を掠め血が滲んでくる。

よく見てみれば、星も馬超も全身彼方此方に小さい切り傷をつけており、
所々、服が血で滲んでいた。

「ほう・・・女子かと思い油断していたが、
中々楽しめる。」

刀を霞の構えに持つ小次郎。
切っ先を相手に向けて構える其れは、
対峙している相手を威圧する。

「これは少し拙いな・・・・・・」

「ああ・・・・まるで葉っぱに斬りつけてるみたいだな・・・・・・」

ゆらりゆらりと、最小限の動きで避ける小次郎を捉えきれない二人。

「・・・ならば、同時に行きませぬか?」

「奇遇だな。あたしも其れしか無いと思っていたんだ。」

互いに武器を構えなおし、小次郎と対峙する。

「・・・・・・・・」

直後、疾駆する二人。
小次郎まで、一直線に駆けて行く。

「疾っ！！」

霞構えから放たれる突き。

其れを二人は寸前で左右に別れ、回避する。

既に、小次郎の攻撃範囲は見切っていた。

突いたままの小次郎の左右から、同時に切り込む。

右から馬超の袈裟切り、左から星の突き上げ。

打ち合わせした訳でもないのに完璧なタイミング。

だが、二人がその刹那に見た小次郎の顔は、薄く笑ったままだった。

「・・・・悪くない。」

二人が避け、再度攻撃に移っている瞬間に構えなおしている小次郎。

背を向け、刀を顔の横一文字に構える。

『はあああああっ！！』

一瞬頭によぎった不安を掻き消すように突っ込んで行く二人。

だが、それでも小次郎には届かなかった。

「受けてみよ。

秘剣――燕返し――――――」

同時に奔る三つの軌跡

一の太刀で上から振り下ろす馬超の槍を弾き飛ばし、
二の太刀で下から突き上げる星の槍を叩き伏せさせ、
三の太刀で体勢を崩した星と馬超を同時に払い斬る。

「くぅっっっっ！！」
「きゃあああっ！！」

同時に弾き飛ばされる二人、
体からは夥しい血が出てきており、正に死んでいるかと錯覚しそうだが、

「ふむ・・・少し浅かったか・・・・・・」

二人の攻撃が想像よりも重かった為小次郎の体制が崩れ、
三の太刀が完全には入らなかったのである。

「だがまぁ、決着はついたな。」

刀を振るい血糊を払う。

「一体・・・・・何が・・・・・・・・」

力を振り絞って体を起す二人。
だが、もはや立てるだけの体力は残っていない。

「説明しても納得はせぬよ。
なに、私自身もよく分かってないからな。」

笑いながら話す小次郎。

「このまま止めを刺してもいいのだが、
次の相手が来たようだ。」

小次郎が目を向けると、そこには干将・莫耶を持って立つ士郎がいた。

「貂蝉、二人の治療を頼む。」

このまま放っておけば、取り返しがつかなくなってしまう。
しかし、こいつを相手に、そんな余裕は無い。

「分かったわん。気をつけてねご主人様。」

二人を担いで離れて行く貂蝉。
それを見届けた後、互いに視線を交わす。

「やっぱりお前だったのか・・・・」

「ほう。誰かと思えばセイバーのマスターではないか。
・・・・成る程。異物とはそなたの事か。」

「どうして、お前が此処に居るんだっ!?」

士郎が此処に来る際も、宝石剣と銅鏡を使用してなんとか来れている。
もし、その他の方法で此処に来れるのなら、
世界や協会、教会に追われる士郎としては、非常に拙い自体になってしまうのだ。

「それが私も詳しくは分からん。
何、まじゅつには疎いものだからな。
セイバーに敗れた後、座に行けるわけでもなく漂っていると、
急に道が出来て来れただけよ。」

恐らく士郎が来た際に、一緒に来てしまったのだろう。
だが、小次郎の答えに疑問が一つ浮かび上がる。

「セイバー?お前を倒したのはギルカメッシュじゃないのか?」

士郎が柳洞寺に向かった際、
既に小次郎はギルガメッシュの『王の財宝』で敗北した後らしきものしか確認していない。
確かに一度セイバーと戦ったが、その時は引き分けで終わった筈だ。
もし、ありえるとするのなら、

「宝石剣を使った時、別の平行世界の道が出来てたのか？」

平行世界というのは酷く曖昧である。
何がきっかけで分岐するのか分からないため為、
近いのか遠いのかがよく分からないのだ。

「ふっ。大事なのは私が今ここにいることだろう。」

その通りである。
此処に存在し、敵対している以上戦わなければならない。

「ただ、私はサーヴァントとして此処に召還されているようだがな。」

「あの仙人がマスターなのか？」

「いや。今のマスターはあの男たちが持っている『本』だ。
全く、今までのマスターは山門にメガネに本。
まともなマスターに出会いたいものだ。
・・・・まぁ正規の英霊では無いからしかたないよのう。」

何処か楽しそうに笑っている小次郎。

「セイバーに折られた刀も、于吉が別のものを用意してくれたしのう。」

軽く刀を振るう。
士郎はそれを聞いて、咄嗟に解析を行う。

（あれは・・・・備中青江（びっちゅうあおえ）じゃない。大包平（おおかねひら）かっ！！）

日本刀の中でも童子切安綱と並んで最強の刀とされている一品。
宝具としてならＡランク相当の武器である。

現存する物は刃渡り約９０?だが、
小次郎が持っている物は以前使用していたものと同じ位の長さがある。

元々長大な為、『大』という名前がついたと言う話もあり、
おそらく『太平要術の書』を悪用したのだろう。

小次郎の『燕返し』は宝具ではなく自身の技である為、
武器は選ばない。

「さて・・・これよりは互いに剣で話そうではないか」

構える小次郎。
剣の技量だけならセイバーをも凌駕した小次郎の剣。
あまりにも、相手が悪すぎる。

「ふっ！！」

風に揺れる柳のような動きから繰り出される刃。
すべてが必殺の一撃。

「くぅっっ！！」

それを干将・莫耶で捌くが、正に防戦一方。

士郎の剣が届かない位置から、士郎を上回る剣技が繰り出されてく

る。

唯一戦いの経験だけが小次郎を上回るが、
それだけではその差を埋める事が出来ない。

たが、それでも紙一重で捌き続ける。
幾つか体を掠めるが、致命傷には至らない。

「ほう・・・・あの少年が此処までになるとは。
・・・・やはりあの時のアーチャーはそなただったか。」

「気付いたのか・・・・・」

「武器と太刀筋を見ればわかるものよ。
・・・・さて、余り時間をかけるのも無粋。
これにて終わらせよう。」

星と馬超の時と同じように、「燕返し」の構えをとる。
あのセイバーでさえ、万全の状態のこれは回避できない。

同じ技を士郎が使用しようにも、
士郎が使用する場合、投影するのは「備中青江」
たしかに名刀だが、大包平には遠く及ばない。

簡易宝具では、大包平に切り払われるし、
何より、発動までの間に切り殺される。

（だったら・・・っ！！）

「投影開始（トレース オン）」

士郎が投影したのは一本の刀、銘は「加州清光（かしゅうきよみつ）」

「いくぞ・・・・っ！！」

平正眼の構えをとる士郎。

互いの技と技がぶつかり合った・・・・・・・

４－８　雛落とす刃（後書き）

小次郎召還はかなり強引なこじつけです。

どうか大目に見てもらえれば・・・・・・

細かい設定まで詰めだしたらちょっと手に負えないので・・・・

ちなみに小次郎が違うルートから来ているのは、
理由があるのでーー

刀を変更したのも、折れ曲がったら困るし、
そもそもセイバーに折れ曲げられていたせいです。

4－9　重なる刹那（前書き）

お盆中は更新が遅くなるかもしれません……

4－9　重なる刹那

「月ーーーっ！！何処に居るのーーーっ！！」

月を探す詠の声が厩舎に響く。

連合軍は既に洛陽の街に進入してしまっている。
もし、連合軍に月が捕まろうものなら、
この事件の責任を負わされて処刑されてしまうのは目に見えて分かっている。

なんとしてもそれを避ける為、詠は月を探し回っているのだ。

「もうっ！！一体何処に幽閉したのよっ！！
……あと探してないのは政庁くらいだけど……」

直属の兵を使って彼方此方を探しているが、全く姿が見つからない。
まさか常日頃から政務を行っていた政庁に居るとは考えにくいし、
隠し部屋があれば気付かない筈が無いのだが……

「あの仙人ならやりかねないわね……」

おかしな術を使うアイツの相手なら、常識は通用しない。

そうと決まれば直ぐに向かいたいのだが、

「馬が全く居ないじゃないっ！！」

この騒ぎである。
逃げ出すか、馬は貴重な為窃盗されたのだろう
僅かな希望を元に、奥のほうまで進んで行くと、

「あれ……士郎の馬が居るじゃない。」

縄が外されており、手綱と鞍がなぜかついたままだが、
其処には士郎から借りたままの『的盧』が大人しく佇んでいた。

「脚も速いし丁度いいわ。」

脚を掛け、詠が馬に乗った瞬間、
急に走り出す!!

「きゃあああっ!!何でよ〜〜〜っ!!」

わけも分からないまま必死にしがみつく詠。
そのまま政庁に向かって駆けて行く的盧であった……

建屋の柱が燻るなか、桃香たちは『陽剣・干将』を頼りに奥に進んで行く。

「はぁっ！！」

「たぁっ！！」

時折崩れ、倒れてくる柱を愛紗と鈴々が弾き飛ばしてくれているが、
この建物もそう長くは持たないだろう。

「また行き止まりだよ…」

桃香の眼前に塞がるのは瓦礫に塞がれた道。
「干将」が指し示しているのは、月までの最短距離な為、
所々で迂回する必要があるのだ。
…最も、干将（これ）があると無いとでは大きな差がでるが。

そうして迂回しながら進んでいると、またつきあたりに到着する。

「また回り道するのだー？」

「うん。この壁の向こうを指してるねーー」

「干将」が向いているのは壁の向こう。
確かに今までどおり、迂回して道を探す必要があるのだが、

「ですが桃香さま、こっち方向はこの道しかありませんでしたよ？」

部屋が並ぶ一本道のつきあたりな為、
迂回するとなると大分遠回りになってしまう。

「う～～～ん……どうしよう……」

「だったら壁を壊して進めばいいのだ！！」

そういうと蛇矛を振りかぶる鈴々。

「ちょ……っ」

「うりゃりゃりゃりゃ～～っ！！！」

愛紗の静止が聞こえる前に叩きつける。

すると壁にひびが入り、その先に地下へと続く階段が現れる。

「鈴々っ！せめて私たちが離れてからにしろっ！！」

「ごめんなのだ……」

「あはは……大丈夫だよ愛紗ちゃん。
ちょうどこの下に続いてるみたいだし。」

桃香たちが進む先に現れた地下へ続く階段。

「干将」もその先を指し示しており、どうやらこの先に月がいるようだ。

松明が照らす長い階段を下りると、
其処には鉄格子で作られた幾つもの牢屋が並んでいた。

「桃香さま！私の後ろに……」

「うん。気をつけてね。」

「鈴々が後ろに行くのだ。」

薄暗い牢獄を警戒しながら進んで行く。
すると、突き当たりにある牢屋に誰がが居るのが分かる。

「月ちゃんっ！！」

「その声は……桃香さん！？」

鉄格子越しに近寄ってくる月。

「よかった……無事だったんだね……」

「はい……でも、どうして皆さんが此処に？」

ずっと閉じ込められていたので、外の状況が掴めて居ないのだ。

桃香たちから説明される月。

「そうなんですか……」

自分のせいでこんな騒ぎになってしまったのだと落ち込む月。

「月さまのせいではありません！あの男がすべての原因ですっ！！」

「そうなのだーー
ほんとの事知ってる人は、皆助けに来てるのだーー」

「私をですか？」

キョトンとしている月。

「此処を見つけれたのも、士郎くんのお蔭なんだよう。」

首飾りに付いている『干将』を見せながら話す桃香。

「わ、わたしも同じもの持ってますっ！！」

「うん。なんかねーこれとそれが惹き寄せ合ってるんだ。
最初は士郎くんがこれ使ってたんだけど、
強い敵が出てきたから、代わりに私が使ってるんだよ。」

「そうなのですか……」

胸に光る『莫耶』を見つめ、そのまま握り締める。

（士郎さん……やっぱり護っててくれたんだ……）

牢獄に閉じ込められても、この首飾りを見ていたらなんとか耐える事が出来た。
それは宝具としての加護なのかどうなのかは分からないが、
月は確かに、この首飾りに救われたのだ。

「うん！だったら早く此処から逃げようっ。」

「ですが桃香さま……この鉄格子は如何しますか？」

ガシャガシャと軽くゆする愛紗。

「これを壊すのは大変なのだ……」

「鍵もあの仙人さんが持ってるだろうし……どうしよう？」

そう言って途方にくれていると、

「下がって。」

「恋さんっ！！」

いつの間にか、桃香たちの後ろに恋が立っていた。
おそらく桃香たちの後ろをついて来ていたのだろう。

「今助ける。」

そう言うと、方点画戟を振りかぶり、

「はぁあああっ！！」

そのまま鉄格子を斬りつける！！

すると激しい音を立てて、数本の柱が中ほどから斬れ落ちていた。

「す、凄い……」

呆気に取られる桃香たち。

「月、大丈夫だった？」

「はいッ！！恋さん……有難う御座います……」

飛びついてきた月を抱きしめる恋。

「よかった……
直ぐに此処から逃げる。」

モタモタしている時間は無い。
直ぐに身を隠さなければ、他の連合軍に見つかる可能性も高くなる。

「うん。だったら私たちと一緒に行こうっ！！
白蓮ちゃんにも話はしてるから、匿ってくれるとから。」

そう言って踵を返し、来た道を帰ろうとすると、

「おやおや、帰られるんですか。」

桃香たちの後ろ、先程まで月が居た牢屋の中に男が現れる。

「なッ！こいつ何処から！！」

「貴方は……于吉さん！！」

武器を構え、警戒する桃香たちをよそに、
微笑を浮かべている于吉。

「名前を覚えてもらって光栄です。
まぁ……ここで死んで貰いますから、余り意味はありませんですが。」

そう言って于吉が懐から札を出す。

「退路なき兵よ、集いて駆逐せよッ！！」

札が燃え、于吉の周りに白装束に覆われた兵が幾人も出現する。

「さあ、この牢獄が貴女たちの墓場です。
……行きなさいッ！」

于吉の号令と共に、剣を構えて襲い掛かってくる白装束たち。

だが、動きは確かにそこらの兵よりかはマシだが、
愛紗たちには全然及ばない。

「その程度で……我らを舐めるなッ！！」

振るってくる剣を避け、青龍偃月刀を叩き込む。

「次っ！！」

そのまま一気に于吉も斬りつけようとするが、
異変に気付く。

「数が……増えている！？」

愛紗が見ている見の前で、虚空から次々と白装束の兵が現れていた。

「ふふふ。どうしました？
まだまだこれからですよ。」

ただでさえ狭い牢獄。
このまま増え続けえられると、行動範囲が狭くなり、

どんどん不利になって行く。

こっちも愛紗、鈴々、恋がどんどん倒していっているが、
それよりも増えるほうが速い。

「くっ……桃香さまっ！！私たちが時間を稼ぎますから、
先に月さまを連れてお逃げくださいっ！！」

「でも……っ……皆はっ！！」

「だいじょうぶなのだっ！！」

「少しだけ粘ったら……直ぐに逃げる。」

心配する桃香に答える。
先に桃香と月に逃げて貰った方が、
三人からすれば戦いやすいし、逃げやすい。

月の手を握って、降りてきた階段に向かって奔る桃香。

「させませんよ！！」

再度札を出して、それが燃えると于吉の姿が虚空に消える。

急いで階段を上りきると二人。
すると、そこには下に居たはずの于吉がいた。

「そう簡単には逃がしませんよ。
こんな好機は滅多にありませんからね。」

元々突き当たりの道に階段があった為、
退路が塞がれてしまう。

前は于吉、後ろは白装束。
どうしようかと桃香が悩んでいると、

「月ーーーっ！！」

「詠ちゃんっ！！」

『的盧』に乗った詠が突っ込んでくる。

「くっ！！」

慌ててそれを避ける于吉。
こんなに急に来られては、札を使う時間が無い。

「月っ！！早く乗って！！」

「うんっ！！」

于吉が倒れている間に、的盧に乗る桃香と月。

馬に三人騎乗するのは少し無理があるが、
月と詠が小柄な為、どうにかなっていた。

「させませんっ！！」

再度、白装束を召還する于吉。
が、急に柱が倒れてきて、召還した白装束たちがそれに巻き込まれ

る。

「なっ！！」

その隙に逃げる三人。

慌てて召還しなおそうとするが、
三人が通過した後、通った道の壁が爆発し、
砂煙で三人の姿を見失う。

「くっ……これでは召還しても無意味ですね……」

姿を見失っては召還しても意味が無い。

「下にいる三人もそろそろ上って来るでしょうし……」

階段の上に召還して、挟みうちにしてもいいのだが、
あの三人相手では恐らく突破されてしまうだろう。

「左慈か小次郎がいれば……
まぁいいでしょう。ここは一旦小次郎と合流しましょう。」

そう言い残し、于吉は虚空に消えた……

その頃、士郎と小次郎の戦いも決着が付きそうになっていた。

互いに刀を構え、対峙する。

士郎は平正眼、小次郎は顔の横に一文字に構える。

「さて……セイバーですら回避しきれなかった一撃……
その刀でどう捌くか見ものよな。」

ゆらりと刀がぶれる。
瞬間――――――

「秘剣――燕返し――――――」

士郎に襲い掛かる三つの剣閃。
すべてが必殺である為、一太刀でも受ければそれで終わり。

唯一つを愚直に繰り返した男がたどり着いた究極の一。
魔法にも届きうる神技。

英霊にギリギリ届くだけの士郎では、それを放たれてしまえば終わり。

だが、
士郎は刀を構えたまま一歩踏み込む。
士郎が持つ刀――『加州清光（かしゅうきよみつ）』
この刀の本来の持ち主も、肺病を患いながらも、只一つを極めた。
士郎はこの刀から、その持ち主の技術を模倣する。
「三段――突きっ――――――！！」
迫る三つの剣閃に対して、響く士郎の踏み込み音。
放たれるのは同時に発生する三つの刺突。
それぞれの突きが燕返しの剣閃と交差し、剣筋を逸らした。
「ぐぅううううっ！！」
剣筋は逸らし、体を抉る三つの刃を強引に突破しながら、
一気に切り込んで行く。
「なっ！？」
小次郎は咄嗟の事に対応が出来ない。
技を放った後のことを考えていたかどうかの差が、明暗を分けた。
そのまま士郎が放った袈裟切りを体に受ける小次郎。
「くっ……やるな……

だが、そちらも無事ではあるまい。」

小次郎が言い終わるや否や地面に膝をつく士郎。
剣筋を逸らしたとはいえ、
それは急所を狙っていたものを多少逸らしただけなので、
体には三つの切り傷が出来ている。

「この方法しか……お前にダメージを与えれなかったからな……」

小次郎もまた、決して浅くない傷を負ってしまっている。
士郎とは違い切られたのは一箇所だが、
元々傷を負う事に慣れている士郎相手では、小次郎が優勢とも言いきれない。

「おや……どうやら苦戦しているようですね。」

小次郎の後ろに現れる于吉。

対して士郎の方にも、貂蝉が応援に駆けつける。

「ご主人さまっ！！大丈夫なの！？」

「ああ……怪我するのは慣れているからな……」

気力を振り絞って立ち上がる士郎。

「ここは一端引いたほうがよさそうですね……
そちらも貴重な手駒を失いたくないでしょう。」

「そうねん。ご主人様みたいな良い男を失うのは重大な損失だわん♪」

本気かどうなのか分からない言葉を言い放つ貂蝉。

「ふん……小次郎もいいですね？」

「ああ。これでは戦いを続けれそうにもない……
……士郎。次に相見えるのを楽しみにしているぞ。」

そう言い残し、姿を消す二人。

「行ったのか……」

「ええ。とりあえず危機は去ったのね。」

宝具の発動と憑依経験。
止めとばかりに自身が負った傷によるダメージは思いのほか大きく、
安全を確認し、気が抜けた士郎はそのまま意識を手放した……

4－9　重なる刹那（後書き）

三段突き

天然理心流の奥義。
踏み込み音が一つ鳴る間に三度の突きを放つ。

こちらも小次郎の燕返しと同じく、
「多重次元屈折現象」による一撃であり、
宝具の域に達した秘剣に分類される。

小次郎の燕返しが三つの剣閃を繰り出すのに対して、
こちらは三つの突きを放つ。

三十歳にも満たずにこの世を去った、
新選組一番組組長、沖田総司が使用した技。

的盧

「白点四白（はくてんしはく）」

騎乗する者との相性により、
騎乗者の幸運値に対して最大±2ランクまでの補正が掛かる。

ちなみに
士郎、詠は＋1ランク、
桃香は＋2ランク、雛里は－2ランクの補正が掛かります。

４－１０　洛陽での終結（前書き）

お盆に用事が色々ありましたので、遅れてしまいました。

申し訳ないですー

4－10　洛陽での終結

まどろむ意識。
今自分が立っているのか、横たわっているのかも分からない。
体の感覚も鈍く、すべての感覚がまともに機能していない中、
ただ、頭の下にある柔らかい感触だけは、感じることが出来た……

「っ……」

ゆっくりと目を覚ます士郎。

「あ……っ。
士郎くんが気付いたよっ！！」

士郎の上から聞こえてきたのは聖の声。
そのまま体を起そうとするが……

「ぐ……っ……」

瞬間――体に奔る鋭い痛み。

「駄目っ！！まだ傷口がちゃんと塞がってないんだよう！！」

慌てる聖に窘められ、再度頭を下ろされる。

「っ……聖……いつ此処に……？」

「ほんの少し前だよう。
急いで軍を進めたんだけど、中々統制が取れなくて……

此処に着いた時、血だらけの士郎くん見て吃驚したんだからっ！！」

そう言いながら士郎の顔に暖かいものが降ってくる。

「ごめん……」

「誤っても駄目だからね！！

次は絶対無茶しないでよう！私、本当に死ぬかと思ったんだから！！」

そのままポタポタと暖かい雫が顔に落ちつづける。

（ああ……これがイリヤとの約束か……）

自分自身に対する周りの人の思い。それは士郎に欠けている大事なピースの一つ。

自らの死を楔にし、嘗ての切嗣のようにイリヤが士郎にかけた呪縛。

だが――

（少し、気付くのが遅かったか……

けどイリヤ、これで分かったよ。これからは決して間違えないから）

そう決意を新たにする士郎。

「そういえば……桃香たちと月はどうなったんだ！？」

「大丈夫だよう。

怪我も無いし、全員無事だったから。」

「そうか……良かったぁ……」

心の底から安堵する士郎。
そうこうしていると、先程の声を聞いた玖遠と援里が近付いて来る。

「士郎さんっ！！大丈夫なんですかっ！！」

士郎の顔の直ぐ傍に座る玖遠。
援里も一緒に寄ってくる。

「ああ。心配かけた。」

「ほんとですよっ！わたしが着いた時はもういなかったですしっ！
何とか見つけたら大怪我してますしっ！！」

涙を浮かべながら士郎に怒る玖遠。

「怪我してるから……あんまり騒ぐと……よくないかと……」

こっちも大分ヒートアップしているが、援里が止めてくれる。

「あっ……ごめんなさい士郎さん。
けど、心配したんですよっ……」

「ああ……ごめんな。」

すると、援里が近付いて、士郎の手を握ってくる。

「どうした？」

「……ごめんなさい……私の策が上手くなかったから……

士郎さんが怪我してしまいました……次は……必ず成功させます……っ。」

ギュッと強く手を握る。

「い、いや今回は俺が勝手に行った事だから、
俺の自業自得だろ。」

「いえ……戦の責任は……すべて軍師にあります……」

「だがっ……」

そう言って互いに譲らない二人。

「おーーなんか楽しそうやなあ。」

「霞っ!?なんで此処にいるんだっ?」

「ああ。玖遠と戦って負けてしもてな。
この軍に降ったんや。」

「はい。今日から私たちの仲間になったんですよっ!!」

嬉しそうな玖遠。

「あそこで負けてしもたけんなぁ……
まぁええけどな。
此処なら玖遠も士郎もおるし、いつでも再戦できるし。
よろしくな。」

「ま、また戦うんですかっ……」

賑やかにしていると、他のメンバーも集まってきたのだった……

「次、聖を悲しませたら吊るすわよ！！」

「むしろ切りますです。……アレを。」

後から合流した水蓮、蓬梅、鈴梅の三人――――

特に蓬梅と鈴梅にたっぷりと嫌味を言われる士郎。

まぁ、しょうがないのだが。

「ついでに士郎、何時までその体勢でいるのよ？」

水蓮に指摘される。

士郎は聖に膝枕されたままの体勢だからだ。

「い、いやっ、体が痛いから動けないんだよ！！」

「だったら聖さまが下がるです。」

蓬梅が聖に問いかける。

「なんか士郎くんが苦しそうだったんだよう！
今回も頑張ってくれたしっ。」

「く……士郎……っ……」

そんな様子を見て悔しがる鈴梅。

心底羨ましそうな三人。
……それでいいのか？この軍。

「あ。だったら私が変わりますっ！！」

「く、玖遠ちゃんはこの機会に勉強するといいよう。
戦後処理とかっ！！」

玖遠も加わってさらに騒がしくなる。

「これはウチも参加した方がええんかなぁ。」

そんな様子を見てニヤニヤと士郎に目を向ける霞。

「……俺は何時になったら休めるんだ……」

士郎の呟きに答える者はいなかった……

瓦礫の山の中、中央に出来た空間に幾人かの人が立っている。

「あっという間に洛陽まで制圧してしまいましたわ。
やはり総大将が立派だと早いですわね。」

「おーっほっほっほっ！」と高笑いしている麗羽。

「ここに来たのは貴女が一番最後だったじゃない。
しかもまともに戦ったのは虎牢関だけだったし……」

そんな麗羽に傍に居る華琳が突っ込む。

「そうですけど、連合軍が勝った以上は、
総大将である私の名前が天下に響き渡りますわっ！！」

「まぁそれは間違いないでしょうね。」

テンションが高い麗羽に対して、
どこか投げやりに答える華琳。
少し考え事をしているせいだった。

（結局董卓は確認出来なかったけど行方不明だから、生きてるとは

考えにくいわね……
華雄を捕らえれたのはよかったけど……春蘭以上に猪なのよね……
それより収穫だったのは……）

「華琳さん。洛陽に入った時の損害はどれほどだったんですの？
私、戦が終わりかけてから到着しましたから、よく把握してませんの。」

「そうね……桂花。報告お願い。」

「はいっ。被害の方は火災や瓦礫が崩れたせいで、
いち早く到着した公孫？や馬騰の軍に多少の被害がありましたが、
それ以外は特にはありません。
将の方の被害は……馬騰軍の馬超、公孫？軍客将の劉備配下の趙雲、劉表軍客将の衛宮が
手傷を負ったようです。」

「馬超と趙雲が！？一体誰にやられたんだっ！！」

桂花の報告を聞いて驚く春蘭。
二人の実力は目にした事があり、自分と引けをとらない程の実力者である事を知っている。
その二人が大怪我をしたのに驚いたのだ。

「長刀持った、鎧を着てない長髪の男相手に二人で挑んで負けたみたいよ。
けどその後、助けに来た衛宮が怪我しながら追い返したらしいけど……
白装束の別の男が合流して消えたって報告が来てるわ。」

「ふむ……恐らく白装束の男は道士の類だろう。
洛陽の火災を消した水もそいつの仕業かもしれないな。」

冷静に考察する秋蘭。
火を消したのは士郎だが、道士の類という点はあっている。

「という事はその衛宮と言う男はあの二人よりも強いのか……そんな奴いたか？」

「たしか……劉備殿の天幕から出る時、男とすれ違ったが……」

首を傾げる春蘭を見て、秋蘭も自信なさげに答える。

「ええ。確かにいたわ。」
（私の挑発を見破った男ね……）

「虎牢関の時も呂布倒したよなーーー」

「うん……綺麗な戦い方だったね……」

流石に窮地を助けて貰った猪々子と斗詩は鮮明に覚えていた。

「おやー？なんかおかしいぞ斗詩ー？」

「な、なんでも無いようっ……」

猪々子に突っ込まれて焦る斗詩。
士郎の剣技は完成された美しさがあるから、気持ちが分からない事も無い。

「あの給仕さんかしら……」

麗羽は麗羽で変な覚え方をしている。

だんだんと知名度が上がって行く士郎。

まぁ活躍している以上、仕方が無いのだが……

そのまま雑談していると、伝令兵が走って来て、

華琳の前に跪く。

何故総大将の麗羽では無く華琳にしている所を見ると、

伝令兵も麗羽に大分慣れてきているようである

「報告いたします。」

「何かあったの？」

「はっ。洛陽の復興に向けて各軍が瓦礫の整理に当たっているのですが……

連合軍の兵糧を管理している袁術さまが、独断で余った兵糧をすべて配布したようです。」

「な、な、なにしてるんですのっ！！美羽さんはっ！！」

報告を横で聞いていた麗羽が怒り出す。

麗羽の予定では、このまま洛陽にしばらく駐屯したのち一気に長安に攻め込み、

皇帝を確保して天下に名乗りを上げる予定だったのだが、

兵糧が無くなってしまってはそうも行かなくなってしまう為、
その予定が一気に崩れたのだった。

「わ、私の華麗な計画が台無しですわ……」

一気に落ち込む麗羽。
流石に一度民に配った兵糧を再度、回収する訳にもいかない。

「はぁ……しょうがないわよ麗羽。
こうなったらさっさと切り上げましょう。」

仕方が無いと言った感じの華琳だが、
華琳も内心では麗羽と同じように、隙があれば皇帝を確保するつもりだったのだが、
そんな態度は全く見せない。

弧白がした事が、この二人の野望を遠まわしに防いだのだった……

「士郎さん……って、何してるんですか？」

麗羽たちが騒いでいる間、
士郎がぐったりとしていると、桃香たちがやって来ていた。

「色々あったのさ……」

どこか哀愁を感じる士郎。
まぁ無理も無い。

「だいじょうぶなのだーー？」

「鈴々か……そっちは大丈夫だったのか？」

「数が多かったけど、弱かったのだ。」

戦続きだったのに元気な鈴々である。

「確かに強くはなかったが、
空間から次々と兵を出していました……
あれは妖術師の類かもしれません。」

「あの眼鏡をかけた男の方か。」

「はい。」

こくりと頷く愛紗。
やはり召還に長けた者なのだろう。

「そう言えば月たちや星は大丈夫なのか？」

「うん。
月ちゃんは見つかるといけないから来れなくて、
星ちゃんと翠ちゃんも怪我が治ってないから～～」

「そうか……よかった……」

何とか無事に助かったようだ。
それに恐らく翠と言うのは馬超の真名だろう。
桃香も三国志通りの交友関係を構築出来ているようだ。

「いつかお礼を言いに行くって言ってたよ～～～。」

「ああ。次会える時を楽しみにしとくと伝えてくれ。」

「うんっ！」

穏やかな空気が流れる。
士郎や聖たちも会話を聞いて落ち着いていると――――――

「あっ！そう言えば士郎さんっ、この首飾りありがとうっ。
お蔭で助かったよ～～」

首に飾られているネックレスを見せながら言ってくる。

「気に入ったのなら桃香が持ってるといい。
大事にしてくれよ。」

「ほんとうにっ！？
ありがとう～大事にするねっ！！」

にこにこと嬉しそうな桃香。

「いいのだ～～」

そんな桃香を羨ましそうに見ている鈴々。

「簡単な物だったら作れるけど……」

「欲しいのだっ！！」

「だったら次会った時までに用意しておくよ。」

「よかったね鈴々ちゃん～～
愛紗ちゃんは？」

「わ、私はその……」

桃香に言われて急にあたふたしだす愛紗。

「そ…その……私みたいな者が、
身に着けても似合っているのでしょうか……」

周りからすれば「何言ってんだこいつ？」という感じなのだが、
本人は大真面目である。

「美人なんだから着飾っても大丈夫だと思うぞ？
愛紗自身に負けない位の物を作っておくよ。」

「……はい……よろしくお願いします……」

顔を真っ赤にして答える愛紗。

「じゃあ士郎さん。
私たちは帰りますね～～
また会いましょう。」

「またなのだ～～」

そう言って去っていく。
士郎がこれで休めると思い気を抜くと……

「士郎くんっ♪私のは？」

にこやかな笑みを浮かべた聖がそこにいた……なんかちょっと黒い。

無論、他のメンバーもその話を聞き逃す訳も無く、
私もと言いながら寄ってくる。

「わ、私も欲しいですっ！！」

「あの……出来れば……私も……」

「やったらウチのもなんか作ってや♪」

戦が終わった洛陽の街に、士郎の叫びがこだました……

４－１０　洛陽での終結（後書き）

そろそろ現時点でのキャラや状況の一覧を作りたい……

次は荊州に帰還します。

ちなみにネックレスに付いていた「干将・莫耶」の能力はすでに消去しており、只の飾りになっています。

登場人物　1（反董卓連合終了時）（前書き）

二つ同時投稿（片方は登場人物一覧ですけど）

こうやって見てみたら武将の数凄い……

しかもまだまだ増えるし……

登場人物　1（反董卓連合終了時）

現時点での武将一覧（括弧の中が真名です）

※注意※

時点での各軍の所属武将一覧です。
原作で登場していて此処に載っていない人は、まだ仲間になっていません。

劉表軍

劉表　景升（聖）　のんびりマイペース。包容力が凄まじい。自分からは基本攻め込まないスタンス。

蔡瑁　徳珪（水蓮）　聖大好き一号。海戦Ａ。男は余り好きではないが、下にいる双子程ではない。

？良　子柔（蓬梅）　聖大好き二号。毒舌。知力Ｂ＋。聖に近付く奴の脛を執拗に狙う（士郎の事である）

？越　異度（鈴梅）　聖大好き三号。強気。政治Ａ。聖に近付く奴の脛を執拗に狙う（士郎のｒｙ）

李厳　正方（玖遠）　元気。士郎に懐いている。犬属性。まだまだ伸び白が十分にある。

徐庶　元直（援里）　知力Ａ。人見知り。心を許した相手には懐く。

話し方に特徴有。実はそこそこ強い。

張角（天和）　数え役萬☆姉妹長女。琵琶を演奏。我儘で天然。結局付き合わされるのは士郎。

張梁（地和）　数え役萬☆姉妹次女。二胡を演奏。生意気で元気。結局付き合わされるのはｒｙ

張宝（人和）　数え役萬☆姉妹三女。太鼓を演奏。冷静な眼鏡っ娘。士郎のサポートが上手い。

黄忠　漢升（紫苑）　元長沙太守代行。未亡人。士郎をロックオン中。娘も士郎をロックオン中。

張遼　文遠（霞）　士郎と玖遠へのリベンジ。士郎をからかったり、からかわれたり……悪友？

士郎　ご存知みんなの人気者。相変わらず苦労人してます（傍から似ればハーレムです）

サブキャラ（真名がありません。偶に出てきます。一応全員女性です。）

向朗　新野に左遷中。蓬梅，鈴梅Ｌｏｖｅな変態眼鏡。人材発掘中。

黄祖　水蓮の部下その１。江夏太守。海戦時補正Ｂ。海戦なら孫堅が相手でも持ち堪える。

張允　水蓮の部下その２。海戦時補正Ｃ。海戦時は兵の指揮に定評

あり。

文聘　水蓮の部下その3。海戦時補正C。海戦時は守備に定評あり。

霍峻　新野守備中。守戦が得意……守戦が得意な奴ばっかだな……

劉磐　聖の親族。荊南の統治中。賊を退治したり統治したりと苦労人。

劉備軍

劉備　玄徳（桃香）　天然巨乳＝頭に栄養いってない。性格は原作ほど酷くはないです。作者補正？

関羽　雲長（愛紗）　桃香大好き。武士！猪突猛進。後世で神になっちゃった人。

張飛　益徳（鈴々）　ちびっ子。大食漢。演技で武力だけで見ると五虎大将軍中最強なんだけど……

趙雲　子龍（星）　飄々としてる。神槍。メンマ。仮面の人……掴み所が無い。

諸葛亮　孔明（朱里）　はわわ。中国人が切れるのも仕方ないと思う。中国三賢者の一人。

？統　士元（雛里）　あわわ。中国人がｒｙ。朱里、雛里、援里の三人は親友。

董卓　仲穎（月）　薄幸の少女。士郎に救われた為、いつか恩返しがしたい。実は甘えたいお年頃。

賈？　文和（詠）　月大好きな人。挟撃が得意。口が悪いが、なんだかんだでいい子である。

曹操軍

曹操　孟徳（華琳）　乱世の奸雄。原作ほど天才では無いです（原作でのカリスマっぷりは異常）。

夏侯惇　元譲（春蘭）　華琳さまＬｏｖｅ。脳筋。思い込んだら一直線。

夏侯淵　妙才（秋蘭）　華琳さまＬｏｖｅ。冷静沈着。立場は士郎と非常に近い役割をこなす。

荀？　文若（桂花）　華琳さまｒｙ。暴走軍師。ドＭ。男嫌い。……どいつもこいつも百合ばっか……

楽進　文謙（凪）　グラップラー。真面目で堅物。真桜と沙和に振り回される。

李典　曼成（真桜）　発明王。天元突破な人。関西弁。魔改造しだすと止まらない。

于禁　文則（沙和）　二刀流。女子力が凄い。ただし新兵訓練時は罵詈雑言を吐き散らす。

華雄（藍）　曹操に捕獲される。説得（調教）中。士郎に色々と恨み有り（例の件をばらされたから）

袁術軍

袁術　公路（美羽）　蜂蜜。見方を変えれば純粋。人気。いつかは士郎に懐く日が来るだろう……

張勲（七乃）　美羽の為に行動する（良い悪い関係なく）。天然腹黒。でも悪人に成りきれない。

徐晃　公明（弧白）　のんびり。力持ち。降る際の条件で、麗羽と華琳がマジ迷惑。

孫策　伯符（雪蓮）　美羽の客将。第六感凄い。母を死ぬ原因である聖たちを恨んでいる。

周瑜　公瑾（冥琳）　雪蓮の女房役。火計。冷静で現実的。ユーモアセンス有り。雪蓮の敵は自分の敵。

黄蓋　公覆（祭）　歳ｒｙ。酒好きで自由人。雪蓮と冥琳の親（姉）化わり。実は一番まともかも……

陸遜　伯言（穏）　副軍師。おっぱい。中間管理職。書物に興奮する立派な変態。

袁紹軍

袁紹　本初（麗羽）　金髪縦ロール。高飛車。悪運Ａ。原作ほど酷くは無いが、やっぱり馬鹿。

文醜（猪々子）　無鉄砲。強引にＭｙ　Ｗａｙ。本音ダダ漏れ。麗羽と合わさると被害が二倍。

顔良（斗詩）　苦労人。本当に苦労人（大事な事なので二回言いました）。士郎が気になる様子。

馬騰軍

馬超　孟起（翠）　猪突猛進。恥かしがりや。女の子扱いするとパニックに。……士郎に狙われるな。

その他

公孫？　伯珪（白蓮）　普通。白馬陣。面倒見が良い人。騎兵の扱いは馬超クラス。

呂布　奉先（恋）　絶賛放浪中。三国志最強。戦時は鬼神。それ以外はぽやぁやんとした天然。人気◎。

陳宮　公台（音々音）　恋を尊敬。直情軍師。いつか士郎も「ちんきゅーきっく」をくらうだろう……

魏越　サブキャラ。恋の部下その１。右翼を担当。武力は真桜、沙和に少し劣る程度。

成廉　サブキャラ。恋の部下その2。左翼を担当。魏越と全く同じ位の実力。

登場人物　1（反董卓連合終了時）（後書き）

解説文は作者が色々暴走してます。
とりあえずごめんなさい　m（＿＿）m

もし「コイツが居ない！！」って言うのがあれば
教えてもらうと幸いです（汗）

5－1　新野改修（前書き）

全部のキャラに出番を持たせるようにするのが難しい……

オリキャラは基本、
キャラクターが固まってる原作キャラに食われ易いですからね。

5－1　新野改修

「ご主人様ん♪大丈夫かしら？」

「貂蝉か……何とかな……」

聖たちが帰還の準備の為、いなくなった隙に貂蝉が近寄ってくる。

「まさか小次郎が居るとは思わなかった……
アイツを何とかしないと拙いな。」

「あの人も英霊なのよねん？」

「ああ。そうだ。
厳流島で武蔵と戦った、佐々木小次郎っていう剣士だけど……」

それを聞いて少し考える貂蝉。

「確かご主人様は武器を作れたわよねん……
此処は私が対策を見つけてくるわん♪
それまでは頑張ってねん。」

「ああ。何とか倒せるように頑張ってみるさ。
それで、そっちは何かあったのか？」

「ええ。今回の戦、左慈の姿が見えなかったのねん。」

「そう言えばそうだな……」

恋を凌駕する武力の持ち主であるアイツがもしいたのなら、
確実に誰かが死んでいただろう。
無論、士郎や貂蝉も只では済んでいない。

「恐らく何処かで別行動をしてるんだと思うわん♪
主要な人々の関心がこの戦に集まってたから、暗躍するには丁度いいしねん。」

「なら、早い内に手を打った方が良さそうだな。」

「そうなのねん。
だから私は、これから左慈を追ってみるのねん。」

「……大丈夫なのか？」

「いざとなったら逃げる事くらいは出来るわん♪
それじゃあ行ってくるのねん。」

そう言って去って行く貂蝉。

「まぁ貂蝉なら多分大丈夫だろう……」

特に根拠も無いが、そう思う士郎だった……

「さあーーて、新野に出発ーー！！」

聖の声に合わせ、洛陽から一番近い自領土である新野に向かって移動して行く。

ちなみに董卓軍は壊滅したが、長安には李？，郭？が残っている。
洛陽は復興の為、しばらくは隣接している諸侯が互いに協力して統治し、
残った宛は張済が統治する事となった。

「はぁ……新野には向朗（アイツ）が居るのよね……」

「流石に放っとく訳にはいかないです。
気乗りはしませんですけど。」

ため息を吐きながら話す鈴梅に、蓬梅が答える。

「どんな奴なんや？」

会った事の無い霞は、隣に居る士郎に話しかける。

「そうだな……一言で言うなら百合な変態だな。」

「なんや。鈴梅たちと一緒やんか。」

あまりにも身も蓋もない霞の意見。

「如何言う意味よっ！！」

「鈴梅が聖大好きなんと一緒やん。」

「わ、私たちのはもっと崇高なのよっ！！」

「そうです。あんな変態眼鏡とは違うのです。」

全力で否定する姉妹。

「まぁウチも玖遠がちょっと気になっとるけど。」

「えええっ！！こ、困りますよっ！！」

いきなり爆弾発言をされて焦る玖遠。

「わ。私は士郎さんが……」

「あら？だったら私と一緒ね。」

紫苑も参戦してくる。

人物相関図が無茶苦茶である。

「……だれか突っ込んでくれ……」

思わず呟く士郎。

聖達は賑やかに騒ぎながら新野への道を進んで行った。

「蓬梅さまに鈴梅さま～～～っ！！ご無事でしたか～～っ！！」

聖達が新野に着くや否や、向朗が凄まじい勢いで近寄ってくる。

……お前文官じゃないのかよ……

「げっ……やっぱり来た……」

「会いたかったんですよぉ～～～」

そのまま二人を一緒に抱きしめる。

「うざいです。さっさと離れるです。」

蓬梅にガスガスと脛を蹴られてるが気にしていない。

筋金入りの変態である。

「もうちょっと待って下さいよ～～～」

そう言って抱きしめ続ける。

「ちょっ……どこ触ってるのよ！！」

「むぅ……っ……」

ゴソゴソ暴れる二人。

「うん。もういいですよ～～」

そう言って離れて、懐から出した木簡に何やら書き出す。

「身長……体重……胸は……」

どうやら抱きついた時、二人の身体を測定したようだ。

「何書いてんのよお！！」

怒った鈴梅に取り上げられるが、

「ふっ。もう私の頭の中に記録されてます！！」

「威張るなあっ！！」

「士郎……アイツの頭しばいて記憶消すです。」

「無理言うなよ……」

賑やかに騒ぎながら、新野城に移動していった。

「で、新野の様子はどうなのかな？」

城に着くや否や、直ぐに様子を聞かれる。

「そうですね～～治安は安定してますし、賊もあんまりいないから平和ですよ～～」

賊は黄巾の乱の影響で弱くなっており、
近隣の諸侯も今回の戦に出ている為、平和な時が続いていた。

「そう……でも、今回の戦のせいで漢王朝の権威は失墜したと見てもいいでしょうね。
だから多分、新野（ここ）が中原から攻めてくる敵を止める最前線になると思うわ。」

新野は首都襄陽と長江を挟んでいる為、
いざという時援軍を送りにくい。
故に、新野事自体の防備を固めておく必要が出てくるのだ。

しかも、東に黄祖が統治する江夏がある為、連携が取れるうちはいいが、
もしどちらかが落ちてしまったら、もう片方も危なくなる。

「ま、とりあえずこのまま城壁補修したり、防衛施設を固めていく

のよ。
方法はまた明日詳しく決めましょう。」

「了解です～～」

ビシッと敬礼をする向朗。

「で、人材の方は如何なってるのよ?」

「大丈夫ですよ～～何人か良い娘見つけてますって。」

鈴梅の質問に軽く答える。

「とりあえずどんなのがいるのです?」

「まずは政治が抜群な蒋?ちゃんです。将来有望ですね、いろんな意味で!
で、後は私の友達の伊籍ちゃんに紹介してもらった馬氏の五常です。
長女から順に馬順ちゃん、馬統ちゃん、馬安仁ちゃん、馬良ちゃん、馬謖ちゃんの五姉妹です。」

それを聞いて蓬梅と鈴梅が話し合う。

「馬氏の五常は聞いた事があるです。」

「だったらその五人は新野に置いといて、蒋?を襄陽に連れて行きましょう。」

「あの～～私はまだ此処に残らないといけないんでしょうか……」

恐る恐る向朗が聞いて来る。

「あたりまえでしょうが。
アンタが一番新野の事把握してるんでしょ！！」

「そ、そんなぁ……聖さま～～～」

向朗は聖に助けを求めるが、

「が、頑張って！！
後で必ず呼び戻してあげるから！！」

「ううっ……約束ですよ……
……蒋？ちゃん～～」

とりあえず向朗が蒋？を呼ぶと、女の子が入って来る。

「呼びました？向朗さま？」

「うん。此処に居る劉表さま達と一緒に襄陽に行って欲しいんだ。」

「ボクがですが？分かりました。」

「よろしくね～～蒋？ちゃん。」

「はい。よろしくお願いします。」

ペコリと頭を下げ、蒋？が政治官として仲間に加わった。

会議が終わった聖たちは、戦の疲れも残っているので一旦翌日まで休息する事にした。

夜中、向朗が蓬梅、鈴梅の部屋に突撃しようとして、失敗していたが。

士郎の部屋には、恐らくトイレの帰りだと思われる璃々が間違って入って来てしまい、
流石に深夜の女性の部屋を訪れるのはマナー違反だと思ったので、
一緒に寝ていたが――

翌朝

「くーーーっ、すーーーーっ」

士郎の服を握り締め、抱き枕状態の璃々。

「なんか前にも同じ事があったような……」

デジャヴを感じながら士郎が目を覚ますと、

「あら、起きたのですね。
お早う御座います。」

にこにこと椅子に座って二人を見ていた紫苑が其処にいた。

「えっと……なんでここに……」

寝起きでまともに動かない脳をフル回転させる士郎。

「朝起きたら娘がいなかったので……もしかしたらと思ったら正解でしたわ。」

穏やかな笑みを浮かべながら答える。

「そうか……」

窓からは朝日が差し込み、とてものんびりしている朝である。
もし何も知らない他人が見ると、どう見ても親子にしか見えない光景だ。

「って！違うだろ！！」

「あらあら。どうしたんですか？」

危うく雰囲気に飲まれそうになった士郎が慌てて起床する。

「んぅ……あさ～～～？」

そんな士郎に反応して、璃々も起床する。

「おはよう璃々。」

「あれ～～～お母さんなんでここにいるの～～～」

寝ぼけ眼の璃々。

「璃々がいなくなったから探してたのよ。
さあ、お部屋に戻って着替えましょうね。」

「うん～～～
お兄ちゃんありがとーー」

そう言って二人は部屋を出て行く。

「はぁ……とりあえず余計な火種にならなかっただけでも良いと思うか……」

朝も色々と罠が待ち構えている士郎だった。

朝食を全員で食べた後、そのまま会議を始める。

「で、新野の防衛強化だけど……何か案はあるかしら？」

鈴梅が進行役を努める。

「先ずは……兵を……集めた方がいいかと……」

現状新野には一万の兵が駐屯している。

賊の襲来などはどうにかなるが、

近隣諸侯が大軍を押し寄せてくるとなったら、流石に心もとない。

それに……

「今ちょっと新野に人が集まり過ぎますーー

今もドンドン中原の方から人が流れてきてますしーー」

他人事見たいに話す向朗。

だが、黄巾の乱の後に今回の戦である。

しかも中原には今、いろんな諸侯が居るため、

このままでは戦に巻き込まれるのは、火を見るより明らかである。

しかも移民してきた民が増えると治安の悪化にも繋がる。

幸い今は何とかなっているが、そろそろ手を打たなければ拙い。

「だったら街を広げたらいいんじゃないんですかっ？」

「流石に城壁は動かせないわよ玖遠ちゃん……」

「ですよねっ……」

紫苑に突っ込まれて落ち込む玖遠。

しかし、士郎はそれを聞いてある事を思いつく。

「だったら、今の城壁の外にもう一周城壁を作ったらどうだ？」

「城壁を二重にするですか？」

「ああ。」

蓬梅に聞かれて頷く士郎。

「幸い、民が増えてきたお蔭で資金には余裕があるんだろ。
それに城壁を作るとなったら仕事が増えるし、土地も増える。
しかも城壁が二重になれば防衛力も上がるだろ。」

「確かに、せっかく城門破ったのに、
もう一個あったりしたらやる気なくすわ。」

「だったら、兵舎とかは外周側に作った方が、
咄嗟のときに動きやすいわね……」

霞と水蓮の発言に皆が頷く。

「士郎くんありがとう～～
資金の方は何とかなるかな？」

聖に聞かれた向朗は、横にいる蒋？に目を向ける。

「ボクの計算では大丈夫ですね。
行うのなら、速い方が良いかと。」

パチパチと算盤を弾きながら答える。

「じゃあ士郎の案を採用するわよ。
他に何かあった？」

鈴梅がぐるりと皆を見渡す。

「だったら今回の会議はここまで！！
さっそく襄陽へ帰る準備を始めてね～～」

聖の号令を受けて、
各々は襄陽へ帰る準備を始めた。

5－1　新野改修（後書き）

ここからは内政パートとイベントが続きます。

誰か攻めて来るまで戦がないですー

5－2　女難の相（前書き）

できた……

よし、寝よう！！

5－2　女難の相

新野を発った聖たちは、
翌日には襄陽に到着していた。

「やっと帰って来た～～」

「聖、休むのはいいけど、政務溜まってるわよ。」

「……えっと……遠慮したいな～～なんて……」

「ダ・メ・で・す！
休憩したら早速始めるからね！！」

そう言ってズルズルと引き摺られていく。

「ちょっと！抜け駆けしないでよっ！！
……姉さまっ！」

「はいです。行きましょう鈴梅ちゃん」

「え～～と……ボクもついて行きます。」

二人を追いかけるようにして？姉妹と蒋？もついて行く。

「ウチはどうすればええんや？」

来たばっかりで何をすればいいのか困る霞。

「そうだな……たしか霞は襄陽に来たのは始めてなんだよな？」

「そうやで。」

「だったら街の見学に行ったらどうだ？
何かあった時、街中で迷う訳にもいかないし、ついでに街の皆にも顔見せ出来るしな。」

「ええやんか。それ。
で、誰が案内してくれるんや？」

「俺が一緒に行ってもいいんだけど、張三姉妹の所にも行かないといけないしな……」

一応士郎は張三姉妹の面倒を任されている。このままほっとくのは、士郎の経験上アウトである。
そう士郎が思案していると、

「士郎さんっ、私と援里ちゃんが手空いてますから、一緒に行きましょうかっ？」

「そうか。だったら途中までは一緒に行くか。」

「はいっ！！」

「よーーしっ！じゃ、早速行こうでっ！！」

そう言って玖遠に絡んで行く霞。

「なんで私が狙われるんですかぁっ！」

「んふふーー別にええやんーーー」

「何やってるんだよ……」

士郎がそんな二人の様子を見ていると、
横にいた援里に袖を引っ張られる。

「ん、どうしたんだ？」

「……ん。」

両手を差し出してくる。

「えっと……俺に如何しろと……」

「……しゃがんで……ください……」

注文どおりに士郎がしゃがむと背中によじ登ってくる。

「……うん……行きましょう……」

「……了解。」

多分戦の疲れが残ってるんだろうなーと自己解釈して歩き出す士郎。
……何か後ろから「ああっ！！わたしもっ！！」という声が聞こえたが、気のせいだろう。

士郎たちが部屋を出て廊下を歩いていると、
中庭の方で紫苑と誰かが話をしている。

「何してるんでしょうねっ？」

「うーーん、此処からじゃ分からへんなぁ……
……おーーーいっ！紫苑ーーーっ！！」

霞の声に反応した紫苑が此方に近付いて来る。

「あらあら皆さん、これからお出かけですか？」

「ウチに街の紹介してもらおう思てな。
紫苑はなにしよったんや？」

「ふふふ。それは完成してからのお楽しみです♪」

「まぁええわ。出来たら直ぐ教えてな。」

「はい。お気をつけて。」

そう言って再度、紫苑は中庭の方に戻っていった。

「やっぱり西涼や中原の方とは街の雰囲気が全然違うなーー」

物珍しそうにキョロキョロする霞を先頭に、
大通りを進んで行く士郎たち。

「水場が近いからな。
必然的に販売しているものそれに関係したものが多いな。」

周りの店並みを見ると漁や釣りに関係した物を売っている店や、
魚介類を販売している店が多く目に付く。

「南船北馬……南の方は……漁が盛んですから……」

士郎の背中にいる援里が補足する。

「にしても……霞は玖遠がやけに気に入ってるな。」

「うん？だって強いし、かわええし、育てがいもあるし、最高やん。
」

そう言って玖遠をこねくりまわす。

「あうううっ……私は士郎さんのほうがっ……」

「もちろん士郎も好きやで。
宛で一緒に戦った時は最高やったわーー」

戦に快楽を見出す霞らしい意見である。
相性が良いということなんだろう。

深く考える事を止めた士郎は、そのまま張三姉妹がいるであろう劇場に向かっていった。

襄陽の街の中央、一番人が集まる所に劇場は立っていた。

大きさは周りの建物を軽く凌駕しており、
とても綺麗な作りになっている。

その前に、士郎が立っていた。

玖遠たちと別れた士郎は、そのまま劇場の方に進んでいた。

もちろん、霞も行きたがったのだが、時間の余裕が無くなる恐れが

あったので、
やむなく断念している。

「もうそろそろ終わるはずだよな……」

丁度今、張三姉妹が公演を行っており、
間も無く終わる時間である。
最も、この時代には時計が無いので正確には分からないが。

とりあえず中に進んで行く士郎。

受付の人は士郎の事を知っているので、
そのまま奥に進む。

会場のドアを開けると、真っ暗な中、スポットライトに照らされている張三姉妹がいた。
周りは観客で埋め尽くされ、異様な熱気に包まれている。

「どうやら上手くいってるみたいだな。」

この劇場を設計する際、士郎も参加している。
劇場内の別の部屋で松明を焚き、その光を銅板で反射させて収束させ、
スポットライト代わりにしているのだ。もちろん安全には注意を払っている。

これは昔の灯台で使われていた方法である。
今と違い、昔はこの劇場と同じように炎の明かりを銅板で収束させて、
遠くまで光を届け、灯台の役割を果たしていたのだ。

資金は「銅緑山」の銅鉱山のお蔭で十分余裕がある。

「みんなーー今日は来てくれてありがとーーー」

『ほわぁぁぁぁぁっ、ほわあぁぁぁぁぁぁぁっ!!』

どうやら歌が終わり、最後の挨拶をしているようだ。

この時代の人からすれば、スポットライトに照らされる張三姉妹はとても神秘的に写る。

盛り上がりは最高潮に達していた。

観客達に挨拶を述べ、特に問題もなく進んで行く。

士郎がそんな三人を観客席から見ていると、

おしゃべりな姉二人がメインで話しているから、

手持ち無沙汰にしている人和と目が合う。

「……ふふっ。」

軽く、しかし綺麗な笑みを浮かべて士郎に手を振ってくる。

以前人和から受けた「このままでいいのか」という悩み。

内に溜め込みやすい性格に見えたので、士郎は心配していたのだがーーー

「よかった……どうやら吹っ切れたようだな。」

あれだけ綺麗な笑みが出来るのなら大丈夫だろうと、士郎も笑みを

返す。

二人がそうしていると、観客へのファンサービスに集中していた地和が人和の異変に気付く。

「あれ、どうしたの人和ーー？」

そのまま人和の視線の先を見るとーーー

「あーーーっ！！士郎ーーーーっ！！」

マイクで拡張された声が会場に響く。

音が響きやすいように設計している為、それはそれは大きく響いた。

「ほんとだーーーー。おーーーーーい。」

天和も一緒に手を振ってくる。

「……？……なんだ……」

だんだんと士郎の周りの観客の空気がおかしくなっていく。

無言のプレッシャー。

観客達の、「お前は俺達の天和ちゃんたちのなんなんだ」という。

「何ヶ月もちぃ達ほっといてなにしてたのよーーーー」

「後で絶対埋め合わせしてねーーーー」

そんな観客の様子に気付かない二人。

もちろん人和は気付いているようで苦笑いを浮かべている。

「……これはもしかして……」

穂群原で凛、桜と一緒に登校した時も同じような空気になった事がある。

あの時は確か……

「……拙いっ！！」

咄嗟に駆け出す士郎。目標は出口。

その士郎を追いかける観客達。

劇場は阿鼻叫喚の渦に包まれた……

「本当にひどい目に遭った……」

何処かボロボロになっている士郎。

一緒に歩いている天和と地和もぐったりとしている。

騒動の後、士郎と人和にこってりと絞られたのだ。

「こいつがちぃ達をほっとくのがいけないのよーー」

「そうそう。料理作って貰ったり、按摩してもらったり、荷物持ってもらったりして欲しかったのにーー」

全く士郎のことを考えていない地和と天和。

「姉さん達……」

人和も何処か疲れた顔を浮かべている。

「大変だったんだな……」

「はい……ここ最近は急に忙しくなりましたから。」

「これからは俺も手伝えるから。」

「助かります……本当に……」

どうやら色々あったようだ。

「こらーーっ。れんほーばっかと喋ってないでちぃの話を聞きなさいよっ！」

「ああ。りょうかい。」

賑やかに騒ぎながら街を歩いていると、
丁度同じように街を散策していた玖遠達とも合流する。

「あれっ。もう天和さんたちと合流したんですかっ？」

「ああ。……一騒動あったけどな。」

「そう言えば、なんか劇場の方が騒がしかったなぁ。」

「まぁ色々あったんだよ。」

どこか疲れた様子の士郎を見て、
余り強く追求できない霞。

「まぁええわ。で、はよウチに紹介してーな。」

「ああ。」

そう言って天和たちに前に来るように促す。

「始めましてーー数え役萬☆姉妹の長女、天和ですーー」

「あたしは次女の地和よ。」

「三女の人和です。宜しくお願いします。」

各々の性格が一発で分かる自己紹介である。

「あれ、確か数え役萬☆姉妹って黄巾の時の大将じゃなかったん？」

「……彼女たちは月と同じように、仙人達に利用されてたんだ。」

「そうやったんか……それやったらしゃあないな。
ウチは新しく軍に入った張遼　文遠。真名は霞や。よろしくな。」

張角たちを追求せずに、好意的に話しかけて行く霞。

「……一瞬……どうなるかと……思いました……」

士郎の背中にいる援里が話しかけてくる。

「ああ。確かに黄巾党との戦いは大規模なものだったからな。けど、月と同じように、仙人たちに利用されてたからな。」

もちろん、あの仙人に感謝するつもりは全く無い。
そもそもあいつらが何もしなかったら、こんな大きな騒ぎにはなって居ないからだ。

「でもまぁ。これはこれで良かったよ。」

「……はい……」

くすりと笑う援里。

「援里ちゃん良いなあ……しろーー私もーーー」

「天和姉さん、士郎さんに迷惑でしょう!!」

皆とても良い笑顔を浮かべている。

この笑顔を護る為に戦うのは、絶対に悪い事じゃないよなと、
そう思う士郎だった。

5－2　女難の相（後書き）

のんびりパートです。
次ものんびりです。

勢いのまま一気に書き上げたので、
誤字等があればよろしくです……m（＿）m

5－3　群雄割拠（前書き）

三国志12発表キターーー

ダークソウルも楽しみです。

5－3　群雄割拠

聖たちが襄陽に帰ってから数日後、
各々政務をしたり軍を編成したり、
個人的に何かしたりと色々な事をして日々を過ごしている間に、
他の勢力では色々な動きがあった。

「まず……行方不明だった恋さんが……濮陽にいました……」

「濮陽って、確か曹操が統治してたわよね？」

「はい……どうやら……曹操さんが……長安に攻めて行った隙に……」

「たぶん音々音の悪知恵だろうな。」

士郎の発言に全員が頷く。

「桃香さまたちも徐州に居るし、
丁度良かったじゃない。」

徐州の前太守陶謙は戦が上手くは無く、統治自体も賊のせいで悪化する一方だった。
その為領内は賊が多数存在し、勢力を急激に広げる曹操軍の対処にも困った為、
援軍要請を出した所、白蓮の所で居候していた桃香たちが要請に応じたのだ。

その後、陶謙が亡くなった為、そのまま桃香たちが徐州の統治を行

っている。

「あれ？確か白蓮さんって、確か袁紹さんに負けませんでしたっ？」

「桃香さまたちが出て行って直ぐです。
愛紗，鈴々，星さんに、軍師が二人も急に抜けたら負けるに決まってるです。」

玖遠の疑問に蓬梅が答える。

まぁ確かにあのメンバーが抜けたら、一気に戦力ダウンするだろう。

「冀州を制圧した袁紹さんの、次の目標は確実に中原でしょう。
曹操さんと桃香さんたちも色々と忙しくなりますわね。」

「袁術がどう動くかで変わってくるのよね……」

鈴梅が思わずため息を吐く。

荊州西にある揚州を統治する袁術。
いまいち考えが分からない為行動が読めず、
こっちに攻めてくるのか、揚州の北にある徐州に攻めるのか全く分からないのだ。

……最近、旧孫家メンバーを招集しているから、何らかの動きはあるとは思うが。

「とりあえず江夏にいる黄祖には注意するように言っておくわ。
あの子なら孫策が攻めて来ても、多少は持ちこたえれるし。」

「お願いね水蓮ちゃん。」
ばたばたと仕事が減らない聖たちであった。

「はぁぁぁぁぁっ！！」
裂帛の気合と共に突きを放ち、声が訓練場に響く。
そのまま一気に薙ぎ、流れるように袈裟切りに移る。
「だれかと思ったら霞か。」
「士郎やん。どしたん？」
片に偃月刀を担ぎ、袖で汗を軽く拭う。
「あれだけ大きな声がしてればな。」
「ウチ、そんなに大きな出しとったん？」
「ああ。それはもう。」
「大分集中しとったけんなぁ……」

ばつが悪そうにする霞。

「士郎さーんっ。待ってくださーーいっ。」

「玖遠、静かに入りなさい。」

二人が話していると、訓練場に玖遠と水蓮が入ってくる。

「おっ。玖遠やん。
ええ相手が来たわーーー」

「やっぱり此処にいたんですかっ……」

対戦相手が出来て嬉しそうな霞。相変わらずである。

「そう言えば紫苑って強いんやろ?ウチいっぺん戦ってみたいんやけど……」

演技では関羽と黄忠は引き分けるほどの実力があり、弓使いである紫苑とは、ぜひ一度戦ってみたいと霞は思っていたのだ。

「相変わらず中庭で何かしてたわよ。
ま、終わったら声掛けて見たらいいじゃない。」

「そやな。
けど、水蓮が訓練場に来るん珍しいな。どしたん?」

「……たまにはね。一応私も武将だし、もっと強くなりたいのよ。」

どちらかと言えば軍の指揮を執る事が多い水蓮。
指揮能力は高いが、武力は玖遠に劣る為、
常々鍛えなおしたいと思っていたのだ。

「早速だけど士郎。お願いしても良いかしら。」

フリウリスピア「波及」を構える水蓮。

「ああ。俺でよければ相手しよう。」

対する士郎も干将・莫耶を持ち、だらりと両手を下げ構える。

「あの……私の相手は霞さんに決定ですかっ……」

「当たり前やん。ほら、こっちもいくでっ！」

「待って下さいーーっ」

約一名不満があるようだが、訓練が開始された――

「はぁっ……はぁっ……」

荒々しい息を吐く水蓮。

対する士郎は、軽く汗を滲んでいる程度しか疲労していない。

「二人とも頑張りますねっ。」

「そやなあ。けど、あのままじゃその内倒れるで。」

先に休憩をとっている二人は、並んで士郎と水蓮の戦いを観察していた。

状況は今の所、士郎の全勝である。

序盤は水蓮ばかり攻撃を仕掛けているが、すべて捌かれ、疲れたところを士郎にやられる。

先程から、同じ事の繰り返しである。

「……少し休憩をいれよう。
あまり体を酷使しても意味が無い。」

「はぁっ……どうして……届かないのッ……」

「波及」が手から滑り落ち、悔しそうに膝をつく水蓮。

(聖を護るのは私の役目なのに……これじゃ……私の居る意味がないじゃない……)

自らの力量の低さに落ち込む。

「……水蓮。キミは少し力に頼りすぎている。」

そう言いながら、水蓮が落とした波及を拾う士郎。

「……士郎？」

士郎も同じく、才能に恵まれなかった。

故に、水蓮の苦しみはよく分かる。

「この槍は力任せに振るんじゃなく、梃子の力をするんだ。」

「？梃子……」

始めて聞く言葉にキョトンとする水蓮。

「そうだな……玖遠！ここに武器を構えて立ってくれないか。」

「私ですかっ？分かりましたっ。」

双剣「雲雀」を構えて士郎の前に立つ。

「突くから防いでくれよっ。」

そう言って突きを放つ士郎。

「くぅっ……」

ギャリィン！！と、玖遠は双剣を交差させてそれを防ぐ。

「ふっ！！」

その瞬間、士郎は波及をくるりと回転させる。

「あっ！！」

刃の横から飛び出している鉤爪に双剣が引っかかり、
回転と梃子の力により弾き飛ばされる。

「こうすれば敵の武器を無くす事が出来るし、
相手の足を突いて、鉤爪を引っ掛ければ転倒させる事も出来る。
こういう細かい技を磨けばそうそう遅れをとらないさ。」

重量のある武器を、不安定な船の上で振るう事が多かった水蓮は、
力はあるが、こういう細かい技術は全然習得できていない。

「……練習に付き合ってくれるのよね。」

「ああ。納得いくまで相手をさせて貰おう。」

その日は訓練場からの音が途絶えなかった……

士郎が頼まれた政務を行っていると、

他の国からの使者が訪問してきたとの連絡が入る。
直ぐに全員に連絡がいき、玉座がある謁見の間に集合する。

「で、一体なんのようだったんだ？」

「交州からの友好の使者だったみたいですっ！
なんか変わったものが沢山ありましたよっ。」

交州は南荊州のさらに南に広がる地域、
今で言う東南アジアやインドとの道を繋いでいる所である。

その為、未開の地で人口も少なく、多くの異民族が居るため反乱も起きやすい土地だが、
真珠、瑠璃、翡翠、葛布、象牙、龍目、バナナ、椰子といった珍品が揃っており、
貿易での収益が凄まじいのである。

今は士燮と言う人が統治しており、
交州は南荊州の都市の桂陽と繋がっている為、友好関係を結びに来たのだろう。

三国志では交州の貿易利益を求めて、劉焉や劉備、孫権と行った太守が欲しがる土地である。
しかし、交州は西は南蛮、南は山越といった異民族が存在している為、非常に統治が難しい。

なので、聖達は下手に統治するよりも、
友好を結んでおいて異民族の対策を任せた方が良いと判断している。
まぁそもそも聖は攻め込む気が無いのだが……

それに、そうしたら南荊州の兵力も他にまわせるし、貴重な品物も手に入るのだ。

「変わったものが一杯あるね～～」

貢物を見た聖が圧巻される。

南国の果物や宝石、珍しいものばかりである。

一応貢物の他にも、南蛮や山越の情報もくれたのだが、やはり物珍しいほうに目がいってしまう。

「すごい良いにおい～～。どんな味がするんだろう？」

「お茶に会うのかしら？」

果物を見繕っている聖と水蓮。

「この宝石私が貰ってもいいかな～」

「ちぃ、これが良いっ！！」

「この宝石武器につけたら目立つやろなぁ……」

宝石を見ている天和、地和と霞。

他のメンバーも色々なものを見ている。

その中、士郎はあるものに目を引かれる。

「これは……」

士郎の前にあるのは鉱石が一杯はいった葛。
その中から一欠けらを手に取る。
どうやら何かしら加工された物のようだ。

「南蛮の更に西にある国の物らしいよ～
結構貴重な物だって～～」

聖の話を聞いて「解析」を行う。

「……これは……ウーツ鋼か！！」

今は製造方法が失われた、ダマスカス鋼の元になる鉱石。
元々は確かインドで作られていた筈である。

この時代ではまだ刀剣にする技術は無いようだが、
製法自体は確立されていたのだろう。

「これは掘り出し物だな。」

これがあれば、かなりの業物が作れる。

士郎が眺めていると、聖から声が掛けられる。

「士郎くんっ。
宝物庫に持って行くから、手を貸してくれないかなっ？」

「ああ。案内してくれ。」

士郎は葛を担ぎ、聖の後に続いた。

薄暗い部屋の中にはいろんな物が置かれていた。

「なんか凄いな……」

武器，陶器，書物，織物……高価なものと思われる物があちらこちらに転がっている。

「あ、あははははっ……
ほら、私とか水蓮ちゃんって、あんまりよく分からないから。」

そう言いながら持ってきたものを置いて行く。

士郎も聖に続き、ウーツ鋼が入った葛を置いて周りを見てみると、一つだけ綺麗な長方形の木製の箱が目に入る。

「聖、この中って何が入ってるんだ?」

「あっ、それは……開けたら分かるよ～～」

士郎が箱を開けると、中には一本の剣が入っていた。
片刃で先の方少し曲がっている。
豪華な作りではないが、何処か目を引かれる不思議な魅力を持った剣であり、
幾度も使用されていたようだ。
……しかしその刀身は、中ほどからきれいに折れてしまっている。

「それって孫堅さんの剣なんだよ。」

「孫堅の？と言う事は、これがあの古錠刀か。」

江東の虎の異名を誇った孫堅が愛用していた剣。
孫呉の王が代々引き継ぐべき剣である。

「だけど、どうしてこれが此処に？」

本来ならば後継者である孫策が持っている筈。

「孫堅さんを落石の計で倒したのは知ってるよね。」

「ああ。前に水蓮たちから聞いたな。」

怒涛の勢いで聖たちに攻めてきた孫堅。

水軍は水蓮たちが足止めし、
蓬梅の策で討ち取った話は、以前に水蓮から玖遠、援里と一緒に聞いていた。

「その時に後から見つかったんだよ。

返そうと思ったんだけど真っ二つに折れてたし、
その時はもう、孫策さんは袁術さんの所にいたから。」

袁術が自分のものにする恐れもあるだろう。
仮に孫策の手に渡ったとしても、折れてしまっていては更に余計な怒りを買いかねない。
故に、この宝物庫に眠っていたのだろう。

「けど……これなら直せるかもしれないな。」

「えっ！？」

「一度柔らかくして再度接合はできると思う。」

「士郎くん……そういう技術持ってたの？」

「ああ。武器に関してはそこそこの知恵は持ってるからな。」

「剣」に関しては恐らくこの時代では最高の刀鍛冶だろう。

「このウーツ鋼を少し使わせて貰わないといけないけど。」

一度折れた以上、そこの強度は必然的に脆くなる。
そこを補強する為に必要なのだ。

「全然いいよ～
私たちが持っててても使い道が無いし～」

せっかくの貢物なのに酷い扱いである。

「とりあえずこの鋼で、一本剣を作ってみるよ。特性を掴んでおきたいし。」

「うん。よろしくね～～」

ウーツ鋼を手に取りじっくりと眺める。

「作るもの」としての創作意欲が沸いてくる士郎だった。

5－3　群雄割拠（後書き）

聖たちが国を固めてる間に色々動いてます。

大きな動きがあるのはもう少し後くらいですね。

5－4　危険な「罠」（前書き）

大分涼しくなってきました。

風邪を引かないように気をつけて下さい～

5－4　危険な「罠」

「袁術の所の孫策が動いたわ。
目標は揚州の江南よ。」

注目していた孫策の動きが、政務を統括している鈴梅から報告される。

「江南ってどこら辺なんや？」

「新野の東にあるのが江夏。で、さらに東にいくと盧江があって、
ここは袁術が統治してるわ。
江南はその盧江と長江を挟んで南にある土地よ。
ちなみに袁術の本拠地は盧江の北にある寿春よ。」

土地勘が無い霞に水蓮が説明する。

「孫策の所には確か周喩がいたよな。」

「いましたけど……それがとうかしたんですかっ？」

？マークを頭に浮かべる玖遠。

「ああ。元々盧江は「周家」の本拠地だったのさ。
なんでわざわざ江南に行ったのかなと思ってな。」

地元の影響力がある方が支配も統治もしやすい。

今孫策の所には、以前からいた周喩，黄蓋，陸遜の他に、

孫権，孫尚香，甘寧，呂蒙，周泰といった有名な将が集まっている為、
反乱を起しても容易く成功するだろう。

ちなみに荊州での有力な豪族は蔡家。
蔡家の長である水蓮が聖と仲が非常によろしい為、
荊州の統治は非常に上手くいっているのだ。

「成功しても……そのままでは……曹操さん、桃香さんと都市が隣接します……
先に江南を取って……戦力を整える為だと……」

「それに江南なら、迂闊に袁術もちょっかい出せないです。
あそこは山越が沢山いるですし、袁術とも仲悪いです。」

「なるほどな。」

江南で力を持っているのは「顧・陸・朱・張」の四豪族。
元々孫家も江南の小豪族であり、
孫策の母孫堅が台頭した際も、この四豪族が多大な力を貸している。
今孫策軍にいる陸遜は陸家の一員でもある為、
支配するのはそれほど苦労しないだろう。

「このまま孫策さんが江南を統治すれば、
次の目標は袁術。
その次は私たちになるのでしょうか？」

「曹操と桃香さまたちの状況にもよるけど……
このままだとその可能性が一番大きいわ。」

紫苑の推測に頷く鈴梅。

「軍備の拡張はこのまま進めていくわ。
他に何かする事はあるかしら？」

「とりあえずは今の所はないです。
また曹操や桃香さまの動きを見て決めるです。」

その日の軍議はそのまま終了した。

以前、刀剣技術を教えた店で場所を借り、
ウーツ鋼の特性を理解する為に刀を打っていた士郎。

休憩を挟むついでに、みんなの様子を見ようと城内を散策していると……

「あら？士郎さん。どうされたんですか。」

白い肌をほんのりと朱に染めた紫苑に声を掛けられる。

「紫苑か。以前世話になってた鍛冶屋に用があって、少し休憩しに帰って来たんだ。」

「鍛冶屋にですか？」

「ああ。炉を使わせてもらったり、馬用の鎧を開発したりな。」

「なるほど……でしたら今、お疲れなんですよね。
でしたら丁度良いものがありますわ。」

すっと近寄って来ると、ほんのり香る花の香りにおもわずくらっとしそうになる。

「うふふふっ。どうされたんですか、赤い顔をして。」

「い、いやっ。なんでもない。
それより、何なのさそれ。」

首を振り、邪念を吹き飛ばす士郎。
……色仕掛けに弱いのは相変わらずである。

「はい。中庭に温泉が出来たんです。」

「温泉って……前から中庭で作業してたあれか？」

「丁度、温泉が流れていたのが分かりましたので、
聖様にお願いして作らせて貰ったんです。」

――ダウジングか何かしたんだろうか？
士郎の疑問をよそに、紫苑は話し続ける。

「見たところお疲れのようですし、良かったらどうですか？」

「それは嬉しいけど、大丈夫なのか？」

水質が人体に会うものかどうかが分かるまでは、
気軽に入る訳には行かない。

日本にもアルカリ性のお湯があるが、
アルカリは濃度が強いと、人間くらいなら軽く溶かしてしまう。

「大丈夫ですよ。
魚を泳がせて確認しましたし、私が入っても何も影響は無いですし。」

「無茶するな……
だったら俺も入らせてもらうよ。」

とりあえず解析だけはしておくかと考えながら歩き出す士郎だったが、

「……一応確認したいんだけど、今他の人って入ったりして無いよな」

「今は士郎さん以外には話していませんから。
……私で良ければお背中流しますけど。」

「他の誰かが聞いたら不幸な事になるから……行ってくる。」

「ふふふっ。はい、ごゆっくり。」

紫苑に見送られ、士郎は温泉に向かって行った。

……

「これは……凄いな……」

士郎の目の前に広がるのは、石造りの露天風呂。
湯には花を浮かべており、甘い香りを漂わせている。

「なるほど。あれはこの花の香りだったのか。」

先程紫苑と話したとき、漂ってきた香りを思い出す。

「にしても、まさかこの時代に温泉に入れるなんてな……」

風呂文化は古く、遡れば紀元前のメソポタミアが始まりである。
この時代でもヨーロッパの方は、週に1~2程度入浴を行っていたらしい。

日本で湯に入る風呂が庶民に広がったのは江戸時代。
それまではサウナのような物や行水が主流で、
湯に入っていたのは上級の公家や武家の人だけだった。

そのことを考えると、今この時代で自由に湯に浸かれるのは非常に贅沢なのである。

「まぁ健康の事を考えたら、体温は高い方がいいからな。」

そう言いながら思いっきり体を伸ばす士郎。

湯に浸かる久しぶりの感触を、心行くまで楽しんだのだった。

湯を出た士郎は、紫苑に礼を述べようと政務室に入っていった。

「あれ？水蓮たちも来てたのか。」

報告することがあったのか、軍務を行っていたメンバーもおり、
丁度全員が揃っていた。

早速、士郎は紫苑に声を掛ける。

「紫苑、とても気持ちよかったよ。」

「それは良かったですわ。またいつでもご自由にお使い下さいね。」

「ああ。また――」

お願いするよ。と言いかけた時、
璃々が士郎の脚にくっついて来る。

「？」

「お兄ちゃん、お母さんと同じ匂いがするー」

キョトンとしている士郎をよそに、
璃々が危険な発言をする。

『！！！！！』

さっきの会話と璃々の言葉を聞いて、
一気に空気が重くなる。

「って、どうしたのさ！！」

意味が分からない士郎は慌てて周りを見るが、
にこやかに笑う紫苑以外、全員様子がおかしい。

これは拙い。と、士郎の直感が危険信号を発信する。

「ち、ちょっと待て。温泉に入っただけだっ！」

「い、一緒に入ったんですかっ！！」

「ふふふっ。それは秘密よ。」

玖遠に向かって薄く笑みを返す紫苑。

「なんでそうなるのさ……」

紫苑が不自然にごまかす為、
全員に説明するのに、かなりの労力を使う士郎だった……

「全く！！一人で温泉に入っただけならそう言いなさいよっ！！」

「なんで俺が怒られるのさ……」

「うっさいです。
とりあえず士郎が全部悪いです。」

理不尽な鈴梅と蓬梅の怒りをくらう士郎。

そんな士郎たちを余所に、
他のメンバーは温泉の話題で盛り上がっていた。

「あそこに温泉があるのは吃驚したよう。」

「私と聖は長年此処に住んでるんだけどね。」

「せっかくあるのですから、これからは有効に使えば良いと思いますわ。
肌も綺麗になりますし。」

『！！！』

紫苑の言葉に真っ先に反応する三姉妹。

「中庭にあるんだよねっ！

早速入ってくるね～～」

「あっ！ちぃも行くっ！！」

いきなり立ち上がって駆け出して行く天和と、それを追いかける地和。

そう言って、残った人和も出て行く。

「はぁ……全く姉さんたちは……
何かしたら困るし、私も行ってきます。」

「……凄い勢いで出て行きましたねっ……」

「仕事柄……美容には……敏感なんだと……」

呆気に取られる玖遠に説明する援里。
まぁ、アイドルをしているあの三姉妹は仕方ないだろう。

「でも、男湯と女湯は分けてませんから、
気をつけて下さいね。」

『ええっ！！』

残ったメンバーは一斉に士郎の方に目を向ける。
……話に参加していない士郎は、急に視線が注目したので戸惑う。

「まだ何かあったのか……」

「ふふっ。何でもありません。」

焦る士郎を上手くはぐらかす紫苑。

「で、何で分けて無いのよっ！！」

「そうです。このままじゃ士郎に覗かれるです。」

いつの間にか鈴梅と蓬梅も話しに参加している。

「あんまり大きくすると中庭が狭くなりますし、
湯量の問題もあったので。
でも大丈夫ですわ。
此処で温泉に入る男の人は士郎さんだけですし、掛札も作ってあります。」

「ううっ……士郎さんだから問題なんだよう……」

「はいっ……そうですっ……」

頭を悩ませる聖と玖遠。
色々大変である。

「う～～ん……ウチも恥ずかしいけど、まぁ士郎やったらええわ。」

「ええっ！何でよ！！」

霞の発言に驚く水蓮。

「純粋に興味があるんや。

どんな体つきしろるんやろ～～って。
勿論異性としてもあるけどな。」

「まったくアンタは……」

霞らしい考えに頭を悩ませる水蓮。

「璃々もお兄ちゃんと一緒に入る～～」

「ふふっ。頑張るのよ璃々。」

「うんっ。」

何をだ。

「て言うか、何で俺が覗くのが前提で話しるのさ……」

誰も「士郎は入らなくていい」と言わないあたりが、
彼女達の優しさなのだが、残念ながら士郎は気付かない。

まだまだ騒ぎは続いていくのであった。

5－4　危険な「罠」（後書き）

動き始める雪蓮。

華琳や桃香もそろそろかな。

5－5　小覇王（前書き）

一年終わるの早い……

5－5　小覇王

――――――寿春城――――――

煙が充満し、火が燃え盛る城内を、
荒い息を吐きながら走る二人の人物がいた。

「つ、つかれたのじゃ七乃っ。」

「私もですよ美羽さま～
けど、急がないと追いつかれちゃいますよ～～」

城内にはすでに敵の軍勢が攻め入っており、
二人を全力で捜索しているだろう。

「……つかまったらどうなるのかぇ？」

「ばっさり切られちゃいますよ～」

その光景を想像して思わず頭を振る美羽。

「そ、それはイヤなのじゃ！！」

「でしたら急ぎましょうよ～
外には馬を待機させてますし～」

息を切らせながら走り続ける二人は
そのまま外に飛び出す。

そこには、彼方此方に「孫」の旗が立っている街並みが広がっていた……

孫策たちが江南に攻め込んだ後、
美羽たちは「寿春」の北に位置する、桃香たちが統治する「小沛」に攻め込んだ。

小沛の更に北には「濮陽」という街があり、
そこは恋が曹操から奪った所だ。

そこで恋と呼応して「小沛」に攻め込んだのだが、
ご存知の通り恋は月たちを探していた為、そもそも桃香たちを攻撃するわけがなく、
その寝返り事態が罠であり、逆に待ち伏せされ、大きな損失を被ったのだ。

そこで一旦「寿春」に」戻って体勢を整えようとしたが、
その時既に「寿春」は曹操たちの攻撃を受けていたのだ。

それを何とか耐え凌いだ直後、
止めといわんばかりに江南を平定した孫策が攻めてきたのだ。
平定するのには兵や金、食料が多大に必要になってくるので、
攻め込んできた兵の数は五千程だったが、
精鋭たる孫呉の兵士達に加え、孫策、周喩、黄蓋、甘寧、周泰といった、
武力重視の将が集まったせいもあり、とうとう陥落させられてしまったのだ。

「たしか馬はここら辺に……」

七乃が周りを見回し、馬を探していると……

「見つけましたっ！！大人しく投降して下さい！！」

後ろから追って来る二つの人影。

「あれは……甘寧さんと周泰さんじゃないですか～～」

既に二人とも武器を手に持っており、
いつでも切りかかれる状態にある。

「私たちから逃げれるとは思わない事だ……」

孫呉の中でも、特に素早さに秀でている二人。

この状態では、逃げても追いつかれてしまうだろう。

「な、七乃ぉ～……」

七乃の後ろに隠れて、服にしがみ付く美羽。

七乃は、それを見て自身も剣を抜く。

「大丈夫ですよ～
美羽さまは私がお護りしますから。」

美羽に向かってにっこりと笑みを浮かべる。

「さあ。今のうちにお逃げください美羽さま。
これでも私は美羽さまの側近です。
手は出させませんよ。」

「いやなのじゃっ！！七乃も一緒にいくのじゃ……」

服を握った手を決して離さない美羽。

「そうか……ならば命の保障はせんぞッ！！」

リィン…と鈴の音が鳴ったと同時に、

逆手に持った曲刀「鈴音」で切りかかる甘寧。

それは到底七乃が受けきれる速さではない。

せめて一太刀だけでもっ……！！

そう思い、死を覚悟して剣を突き出す七乃。

二人の姿が交錯する瞬間――――――

「そこまでですよーーー」

横合いから大きな斧が差し込まれ、

二人の刃が阻まれる。

「なッ！！貴様は……」

「「弧白」さんっ！！」

驚く甘寧を他所に、弧白は美羽と七乃を庇える位置に移動する。

「どこにいってたのじゃっ！！！」

目に涙を浮かべた美羽が抱きついてくる。

「すみません美羽さま……
外の敵を倒して、逃げ道を確保してたんですよ～～」

「そうだったんですか。
だから傷だらけなんですねぇ。」

見れば、弧白の白いローブは彼方此方が切り裂かれ、
血が滲んで赤く染まっている。
此処まで来るのに、如何に無茶をしていたのかがわかる。

「私は孫呉の甘寧。
貴様……名を名乗れッ！！」

「わ、わたしは周泰ですっ！」

隠密としての仕事が多い甘寧と周泰。
弧白の力量を一目で見抜き、油断できない相手と判断したのだろう。

「名乗られた以上は答えないといけませんね～
……私は徐公明。お相手いたします。」

「ッ！！……董卓の所にいた、あの夏侯惇と引き分けた将か！！
……成る程。相手に不足はないッ！！」

斧の刃を地面に付け下段に構える弧白と、
体勢を低くし、一息で切りかかれるよう大腿筋に力を込める甘寧。

「か、甘寧さまっ！！私も……」

「いらんっ！！まずは奴の出方を判断してからだッ！！」

相手の技を見切る為、二人同時に切りかかって対処できずにやられては意味が無い。

「美羽さま、今のうちに……」

「いやなのじゃっ！！家族は一緒に逃げるのじゃっ！！」

「！！……ふふっ。そうですね。」

互いの空気が緊張して行く。

「疾ッ！！」

軸足で蹴った地面が爆ぜた瞬間、
右逆手に持った剣で一気に切り込む甘寧。

自身の体重と使用する武器の軽さ故に、
加速力ならこの時代の将で甘寧に勝るものは居ない。

士郎や小次郎でさえ、スタートの早さのみなら甘寧に劣るのに、
只でさえ重量のある武器を使用し、傷を負っている今の弧白では到底反応できない。

「もらったッ！！」

斧を構えたまま、全く反応できない弧白の左わき腹に剣を叩き込む。

本当は首や心臓を狙いたいのだが、
斧の柄が上半身を守るように構えており、
下手に突いて、抜けなくなったら困るからだ。

刃が弧白に入った瞬間、ガリッと鋼が擦れる音が鳴る。

「ッ！！これは！！」

切り裂いた白いローブの下からは、鎖がチラリと見え、
そのせいで刃が通らない。

「いいんですか～
……そこで止まって？」

上から聞こえる弧白の声。
いつもと変わらぬのんびりとした口調だが、
甘寧の背中にはぞくりと冷たいものが流れる。

……近距離。ここは、弧白の射程内。

攻撃直後の大きな隙。
それを弧白が見逃す筈が無く、
ブンッと力強く振られた斧が甘寧に襲い掛かる。

「くぅッ！！」

剣で受けるが、力が違いすぎる。
そのまま一気に飛ばされていく。

「甘寧さまっ！！」

咄嗟に飛び込んだ周泰が受け止めた為、大怪我は無かったが、
受け止めた手がジィンと痺れていた。

「成る程……徹底した後の後……
服の下にある鎖とその切り傷はそのせいか！！」

「はい～～
この服は鎖帷子って言うもので、西涼から更に西にある国で使われ
ているんですよ～」

ローブを捲り、下にある鎖帷子を見せる。
ゆったりとしたローブのせいで、多少斬られていても見えなかった
のだ。

「わざと攻撃を受け、その隙を取る……
そんな戦い方をしていたら死ぬぞッ！！」

幾ら帷子があると言っても、まともに斬られたら多少の傷は残る。
夏侯惇や張遼と同等の強さがあるのに、傷が多いのはその為である。

「いいんですよ～
生きている以上、いつかは死にます。
……でしたら、私は私の出来る戦い方で大事な人を護りたい。」

「弧白……」

余りにも強い決意に、思わず言葉が漏れる美羽。

「甘寧さま、ここは二人でいかないと拙いですっ。」

「ああ。気をつけてな。
最初から傷を負う覚悟の相手は……厄介だぞ。」

互いに武器を構えたまま、ジリジリと距離を詰めて行く。
迂闊に攻撃しようものなら、逆にやられてしまう。

「警戒されてますね～～
……でしたら、こちらからッ！！」

轟ッと風を巻き込みながら、大斧を下から上に切り上げてくる。
甘寧と周泰は咄嗟に後ろに下がり、城内の中に入り
出入り口を挟んで互いに対峙する。

「ここなら、そう易々と大斧（それ）を振るえません。」

出入り口周辺は周りに壁があるため、
振り回す系の武器は扱いにくい。

日本でも、刀同士が屋内で対峙するときは梁の下で待ち構えると、
相手が切り下ろしが出来なくなる為、有利になるのだ。

「確かに攻撃はしにくいですね～～」

そんな二人を見て、斧を上段に構え……

「……でも、私たちの目的は勝つことじゃないんですよ～」

思いっきり振り下ろす！！

「なッ！！！」

斧は木製で出来ている出入り口の天井を破壊し、
落ちてきた瓦礫や木片で其処が塞がれる。

「さて～逃げましょうか～～」

いつもの口調で話しかけられた二人は、
なんとなく頼もしい感じを覚えたのだった……

「さてっ、行きますよっ！！
しっかり捕まっててくださいね～～」

「わ、分かったのじゃっ……」

ギュッとしがみ付く美羽を乗せたまま、
七乃と弧白は並走して城門に向かって馬を走らせる。

途中の敵は、すべて弧白が露払いしていたので殆ど残っていない。

「このままだと、なんとか逃げれそうですねぇ。」

「そうですね～
けど、やっぱりそうはいかないみたいです。」

三人の目の前には、閉められた城門が立ちふさがる。

寿春は非常に大きな都市なので
嵌められている閂は非常に大きく、一人二人では簡単に外せない。

「ど、どうするのじゃっ？」

「足止めしましたけど、
直ぐ後ろには孫策さんたちが迫ってますしね～
……門を大きくしすぎましたねぇ。」

慌てる美羽に、困っているのか分かりにくい七乃。
窮地を脱した為、多少余裕が出てきたのだろう。

「もう一頑張りしましょうか～
……美羽さま、七乃さん、下がってくれますか～？」

そう言って門の前に立ち、腰貯めに大斧を構える弧白。

その様子を見て下がる二人。

弧白の眼前にあるのは木製の大きな門。
大都市の門だけあり、大きく、分厚い。

その門を軽く一瞥した後、
自身を中心にぐるんと反時計回りに半周くらい回し、

そのままの勢いで斧を振りかぶる。

「ふっ！！」と、浅く息を吸い込むと同時に、
その振りかぶった斧を、門に向かって一気に叩き込む！！

振り回す際に起きる遠心力、
重心が先端にある斧の重量、
振り下ろす際に加わる重力、
鍛錬し続け鍛えぬいた腕力、
全てが刃に集中した一撃は、

衝車の攻撃すら耐え凌ぐ城門に、大きな風穴を開けた。

「すごいのじゃ……」

「凄いですねぇ……」

呆気に取られる二人を尻目に、
軽く斧を振り、歪みや刃毀れを確認する弧白。

かつて許昌を攻めた際も、
同様の方法で突破した事があり、
その時は恋と一緒に攻撃したからだ。

「ふぅっーーー
さて、行きましょうか～？」

振り返った弧白に呼びかけられた二人は、
急いで気を取り戻し、
慌てて弧白について行き、寿春を脱出した。

「このまま何処にいくのかぇ？」

「う～～ん……

北は劉備さんがいますし、西は曹操さん、

南の盧江も多分ダメでしょうね～」

元々「周家」の本拠地である盧江、

寿春がこの様子では、もう陥落してしまっていてもおかしく無いだろう。

「東には海がありますけど……泳ぎます？」

「海に蜂蜜はあるのかぇ？」

「絶対に無いですね～」

「そ、それはいやなのじゃ！！」

弧白の答えに思いっきり首を振る美羽。

「あ！だったら南西の江夏の方に行きませんか？

あそこは劉表さんの土地ですから、入るのは楽ですし、

劉表さんなら孫策さんも、曹操さんもそう簡単には手がだせませんよ～」

「さすが七乃じゃっ。

早速向かうのじゃ。」

「は～い。

じゃあ弧白さん、行きましょうか。」
そう言って三人は江夏の方に向かって歩を進めていった。

「そう。袁術には逃げられたのね。」
制圧した寿春城太守の間で、
先行した甘寧と周泰から報告を受ける孫策、黄蓋の二人。

「まあ仕方ないのう。
あの徐晃に足止めされては、そう易々とは抜けん。」

「私も戦いたかったわ～～
この私の一撃も受け止めるのかしら？」
腰に差している「南海覇王」を軽く撫でながら答える孫策。

「冥琳は盧江の方に行ったのじゃから、
一人で追いかけるでないぞ策どの。」

「分かってるわよ祭。流石に強行軍だったしね。

西の曹操と、北の劉備に備えないといけないし。」

戦後の統治も行わなくてはならない為、暫くは動けないだろう。

「けど、袁術に貸した玉璽が帰ってこないのは痛いわね。」

江南を攻める際、兵を借りる為孫策は玉璽を質にしている。

皇帝の証である玉璽、有れば色々な策略に利用できるのだが。

「……それに南西にはあの劉表がおる。」

少し、思い口調で話す黄蓋。

「そうね……「借り」は返さないとね……

ここらの統治が出来次第、直ぐに攻め込むわ。」

そう言って強い目をして、上を見上げる。

「待ってなさいよ劉表ッ！！」

孫策の叫びは、寿春城内に響き渡った……

――――――襄陽城――――――

いつもと変わらぬ日常を過ごしている士郎の元に、一通の手紙が届く。

「伝書鳩か……誰だろう？」

鳩の脚にくくり付けられた筒の中から、丸められた手紙を取り出すと、鳩は飛び去って行く。

（返信は要らないという事か？）

そう思いながら手紙を開く。

どうやら貂蝉からの手紙のようだ。

内容を簡単にまとめると、

どうやら徐州で于吉と左慈、それに小次郎の姿が見えたらしい。

……文章の詳しい内容は記載しないほうがいいだろう。

「あそこに何かあったのか？

……それを探る意味でも、一度向かった方がよさそうだな。」

流石に貂蝉一人では、あの三人相手は無理だ。

もし此処で貂蝉を失うと、あいつらの行動を探る事が出来る奴がいなくなる。

于吉や小次郎はともかく、転移系の術を使用する左慈は一度見失うと厄介だ。

「聖にお願いして、少し時間を貰うか……」

袁術が滅んだ徐州。

各諸侯の思惑が交錯し始めていた。

5－5　小覇王（後書き）

次からは徐州で少しだけ頑張ってもらいます。

そんなに長くはなりませんけど……

6－1　珍道中（前書き）

仕事が忙しかった……

なんとか執筆できました。

大変遅くなって申し訳ないです。

6－1　珍道中

ガタガタと荒れた道を馬車が進んで行く。

「まだまだかかりそうだな……」

荷台には天幕が付いており、引っ張っている馬は二頭もいる上等なもの。

馬車の手綱を握っているのは士郎。

なぜ馬車に乗っているのかというと……

「私も行きたい～～……」

「駄・目・で・す！！

太守がフラフラしてどうするの！！」

「やっぱりこうなった……」

相変わらずの聖。

そして水蓮。

「どうせ行くなら、お土産も持ってくです。

その方がお城にも入りやすいです。」

「まぁ食料持って行くことも考えたら、
馬車の方がいいか……」

徐州まではかなりの距離がある。
無理をして急ぐよりは、
日程をかけて慌てずに進んだ方が、
体力も温存出来るから、もしもの時にも対処しやすいだろう。

「蒋？。適当に見繕って準備しておいて。
……士郎は蒋？から説明受けておいて。」

「は～い。
了解です鈴梅さまっ。
士郎さん、ボクについてきて下さいね。」

両手一杯に木簡を抱えたまま、
パタパタと足音を鳴らしながら部屋を出て行く蒋？について行く士郎。

「……玖遠さんは……一緒に行くって……言わないんですか……？」

「勿論行きたいですようっ！！
けど、行かせてくれるわけないじゃないですか～……」

「よく分かってるじゃない。」

苦悩する玖遠に対して、冷静に答える水蓮。

どうやら大分この展開にも慣れてきたようだ。

「ですからっ！
士郎さんが帰って来たときに吃驚する位強くなりますっ！！」

「よう言うたっ！！ウチも協力するでっ。」

「ええっ！！」

「なんで其処で驚くんやっ！！」

色々騒がしかったが、
そうして数日分の食料と幾つかの貢物を乗せた馬車を使い、
徐州に向かって出発したのだった。

今、丁度士郎は新野から江夏に向かっている所である。

「そろそろ休憩にするか……」

襄陽から長江を船で渡る際も休憩を挟んでおり、
これで二回目の休憩になる。

「確か水と食料はこの辺りに……」

後ろの馬車の中へ入り、食料関係が入っている壷の中を見てみる。

「……何でこんなに減ってるのさ……」

船の上でしか休憩した時、残りの漁を確認していたが、
かなりの量が減っている。

「……賊が奪ったんなら貢物が無事なわけ無いし……」

減っているのは食料のみで、後は何も手を付けていない。
士郎がそのまま荷台の中を見渡している時、

ぐぅ～～～っ……

端に置てある三つの樽の一つから音が鳴る。

「……うう～～～っ……」

何やらうめき声も聞こえてくる。

……中に誰かが居るのは確定のようだ。

「……」

士郎が無言で近寄り、勢い良く樽の蓋を開けると、

其処には顔を真っ赤にした天和がいた……

「もうっ！何で音だすのよっ！」

「だってお腹が空いたんだもん～～」

どうやら隠れていた天和のお腹の音だったらしい。
地和に怒られている。

「って何でいるのさっ！！」

「前の時お留守番だったから、
今度は来てみたかったんだよ～～」

お気楽に答える天和。

「はぁ……違うでしょ姉さん。
……士郎さん、私が説明するわ。」

スッと士郎の前に移動する人和。

「前々から私たちも宣伝しようと思ってたのよ。
その時、士郎さんが徐州に行くって聞いたから便乗させてもらったの。」

「……徐州はもう直ぐ曹操と桃香たちとの戦いがおこる。
とても危険だ。」

「大丈夫です。
元々私たちは冀州や徐州で活動してましたから、
呼びかければ沢山仲間が集まります。」

「お願いしろう～～～」

懇願してくる天和。

「……はぁ……勝手に行動しない事。」

「やったっ！！ありがとう～～」

「早くご飯食べようよ。
ちぃお腹すいた～～」

天和と地和はささっと荷台から出て行く。

「……ここまで来たら、下手に帰った方が危ないしな……
……そう言えば劇場の方は大丈夫なのか？」

「ここ最近はずっと活動してたから、
まとめた休暇を取るって事にしてるわ。」

「早く～～ご飯作ってよ～～～」

話し込む士郎と人和を呼ぶ天和。

士郎は早速、料理作りに取り掛かっていった。

馬車はどんどん徐州に向かって進んで行く。

「いい天気ーーー」

手綱を握る士郎の横に座った天和は、
気持ちよさそうに背中を伸ばし、気持ちよさそうにしている。

「随分機嫌が良さそうだな。」

「うんっ！
だって樽の中って狭いし暗いし熱かったし、
……外の風が気持ちいいよ～～」

「私はいつ地和姉さんが暴れだすか心配だったわ。」

前に座れるのは二人だけになっており、
後ろの荷台の中に居る人和が話しに参加してくる。

「そ、そんな事しないわよ！！」

「……途中、何回もうめき声が聞こえてたけど。」

「……お姉ちゃんっ！私と場所代わってよ！！」

「え～～っ、外の方が涼しいからいや～～」

「姉さん、途中で話逸らさないで。」

「……全然元気じゃないか……」

女性が三人寄ると姦しい。

賑やかに騒ぎつつ馬車は江夏に到着した……

「衛宮さまですか？」

士郎たちの馬車が江夏に入ると一人の女性が近付いて来る。

「そうだが……キミは？」

「江夏太守の黄祖です。

姉さまから連絡を貰っていたので、出迎えに来ました。」

露出が多い装備を着ており、日に焼けた健康そうな肌を惜しげもなく晒している。

短い髪も相俟って、元気な少年のような印象を覚える。

「姉さま……？えっともしかして……」

「水蓮姉さまに決まってるじゃないですか！！

江夏（ここ）の太守してますから中々会えないんですよね……

……元気にしてましたか！！」

急に顔を寄せながら聞いてくる。

「あ、ああ。最近は人が増えたから、

自分自身の武の鍛錬に励む事が多くなってるな。」

以前、十字槍の指導をした事を思い出しながら答える。

「だったら！私が帰れるのもそう遠く無いはずっ！

よーし。まだまだ頑張ろうーー」

急に元気になる黄祖。

士郎は置いてけぼりである。

「確か徐州まで行く予定なんですよね？

とりあえず江夏と寿春の国境までは安全だと思いますけど、

寿春は今、孫策の奴が袁術倒して新しい太守になったばっかりですから、

ひじょーに荒れてますよ？」

太守が変わった直後はその混乱を狙って賊が横行しやすい。
特に今回は、袁術軍自体も壊滅している為、
生き残った敗残兵も略奪等を行い、非常に荒れているのである。

実際に江夏も何度か賊に狙われている。

「とりあえず国境までは護衛しますけど……
人数って一人……だったですよね……？」

「……うん。俺もそのつもりだったんだけど……」

二人の視線の先には、
兵士達の前で歌っている三姉妹がいる。

もう既に大半の兵は三人の魅力にやられているようだ……

「……えっと……襄陽に送ります？」

「……後でややこしい事になるのが分かるからなぁ……
ここまで来たし、一緒に連れてくよ。」

江夏で食料等を補充した士郎たちは、
寿春に向けて移動を開始した。

江夏を出て、川沿いを東に進めば「盧江」があり、
その北には「寿春」がある。

この二つの国は今、孫策が統治しているが、
まだ賊も多数存在しており、非常に危険である。

幸い、「江夏」の北にある間道を通れば、
直ぐに「寿春」に向かう事ができ、
そのまま北に進めば、桃香が統治している徐州の「小沛」はすぐ近くになる。

その為、山賊や元袁術兵との戦いを避けるため、
士郎たちは、多少進軍しにくい間道を通る道を進んでいるのだった
……

夜、草木も眠る深夜に、
静かに鳴り響く二胡の旋律が聞こえてくる。

「ん……？」

浅い仮眠を取りながら、回りを警戒していた士郎がそれに気付く。

周りで寝ている天和たちを起さぬよう、

静かに立ち上がると音の発生元に向かって進んで行く。

そこで士郎が目にしたのは、

月明かりの元、静かに二胡を演奏する地和の姿があった。

静かに、しかし確実に届くような強さで二胡を奏でる。

普段見る強気な姿と異なる優しい音色を奏でる姿は――

月の光も相俟って、触れた瞬間に消えてしまいそうな、儚さを感じた――

「……ふぅ……」

気が付くと演奏を終え、弦に挟んでいた弓を下ろしている地和。

「もう、演奏は終わったのかな？」

「っ！！」

演奏に集中していた地和は、

急に士郎の姿に気付き、驚く。

「な、なによ……寝てたんじゃなかったの……」

夜という事を考えているのか、いつもの元気さが無い。

……しかし、見た目ほど慌てているようではなさそうだ。

「一応見張りも兼ねてるからな。

浅く眠るだけにしてたのさ。」

元々一人で戦ってきていた士郎。

睡眠時も、直ぐに反応出来るような癖が付くのも仕方が無い。

「変な特技持ってる……

って！さっきの演奏聞いてたのっ！？」

「ああ。とても美しい音色だった。

……演奏してる姿を見たときは、思わず見とれたよ。」

「ふ、ふん。当然よ。

ちぃはこの大陸一番の旅芸人なんだから。」

赤くなった顔を見られないよう、士郎から顔を背けながら答える。

「一つ聞きたいんだが……あの演奏は誰に向かっての物だったんだ？

練習にしては……余りにも感情が入り過ぎていた。」

先程演奏していた地和の顔を思い出す士郎。

……まるで、今にも泣き出しそうに見えた顔を。

「……私たちが起した騒ぎで亡くなった人に向かって、よ。」

「……そうか。」

それを聞いて、静かに頷く士郎。

「ここら辺でも戦があったのよ。
……ちぃたちが歌ってるのは、皆を元気付ける為だから、
ここにくれば、ここで亡くなった人たちの為に歌えるんじゃないかって……」

「だから馬車に乗り込んだのか。」

「……そうよ。」

（……天和と人和も、以前同じことで悩んでいたな……
そう振り切る事はできないか……だったらいっそ……）

一瞬の沈黙。
士郎は、地和に背を向ける。

「この先でも歌い続けるんだろう？
邪魔が入らないよう、俺が地和たちを守るから、
精一杯歌うと良い。」

「っ……うん！」

地和の方法では素性がばれる恐れがあるし、恨みで命を狙われる可能性も少なからずある。
だが彼女の思いは決して間違っていない。

……正義の味方を目指し続ける士郎だからこそ、
誰よりも、その思いが尊いものと感じることが出来た。

「ただし、余り勝手な行動は取らないでくれよ。」

「わ、わかってるわよ！！」

いつもの地和に戻って行く。
ゆっくりと、夜は過ぎていった……

「ここから先が寿春の領土です。
……私たちも護衛したいのですが、この先は孫家の領土になるので……」

「ああ。分かってるさ。」

「自分からは攻め込まない」のが劉表軍の方針。
劉表軍の将である黄祖軍がこの先に進むのは、それに反してしまう。

「俺も無駄な戦いは避けたいしな。
上手くするさ。」

士郎は客将なので、その方針が適応されない。
反董卓連合の時も、直接声を交わした訳では無いので、
目立つ行動さえしなければ、なんとか抜けられるだろう。

「……頼むから大人しくしててくれよ……」

「は～～い」

士郎は馬車の中にいる三姉妹に声を掛ける。
……大丈夫だろうか……

「ご、後武運をお祈りしますっ！」

「ああ。ありがとう。
それじゃあ、出発するか。」

そうして、多少不安要素を抱えたまま、
士郎たちの馬車は「寿春」領内に入っていった……

6－1　珍道中（後書き）

ここから新しい章になります。

章の最後と、ざっとしたと内容しか決めていませんので、
作者自身も途中がどういう流れになるのかは未定だったり……

6－2　江賊討伐（1）（前書き）

４０話到達～～

更新速度落として、
一話あたりの量増やした方が良いんだろうか……
悩む……

6－2　江賊討伐（1）

――――――寿春　郊外――――――

「孫」の旗を掲げた軍勢が待機しており、
その先頭に、何人かの女性の姿が見える。

「蓮華さま。斥候によると、
賊の数は三千。此処より南の方で陣を築いているようです。」

「ありがとう思春。」

統治したばかりで、まだまだ賊や敗残兵に悩まされている寿春。
勉強がてらにこの街を任された蓮華は、
今から寿春南にある、江賊の拠点を叩きにいく所であった。

「え～～それだけしかいないの？
だったらシャオだけでも大丈夫だよ。」

「流石に小蓮さま一人だけと言うわけには……」

「そうよ。賊は何するか分からないから、
何かあった時困るのよ。」

「……は～～い。」

少し機嫌悪そうにする小蓮。

「……全く、姉さまは大事なときに居なくなるんだから……」

こういう事には率先して参加したがる、
姉の雪蓮の姿は此処にはなく、
冥琳や祭、穏といった孫呉の主要メンバーの姿は全く見えない。

「国が大きくなりましたから、
雪蓮さまは色々とする事が増えてるんですよ。」

地方豪族の代表である以上、
有力な豪族には今回の戦の説明や役人人事など、
いろいろな戦後処理が絡んでくる。

その事を直ぐ傍に居る、片眼鏡をかけた女性がフォローするが……

「い～え。絶対冥琳を振り回して遊んでるわ。
……亞莎くらいに真面目に働いてくれればいいんだけど。」

「そ、そんな私なんて……まだまだですよぉ……」

亞莎と呼ばれた少女は、全力で首を左右に振る。

「まぁ、それが姉さまの良い所にも繋がってるんだけどね……」

ため息を吐きながら、どこかしょうがないといった感じの蓮華。

「蓮華さま。軍の準備が整いました。」

「分かったわ。」

思春に促され、蓮華は整列する五千の兵の前に立つ。

「孫呉の勇者達よっ！！
我らの民を脅かす、賊どもを駆逐するっ！
進軍し、賊どもに我らの力を見せ付けろっ！！」

『オオオオオオオオオッ！！！！』

剣を高く掲げた、蓮華の激励に兵士達が咆哮にて答える。

賊掃討戦が始まろうとしていた。

「ん？あれは……」

遥か前方を見ていた士郎が、
おもむろに手綱を引いて馬車を止める。

「きゃっ！！」

「なにっ！？」

急に止まったせいか、後ろの荷台から姉妹達の悲鳴が聞こえてくる。

「士郎さん、どうかしたんですか？」

士郎の後ろにある荷台の幕が空き、
人和が顔を出してくる。

「前方に兵の姿が見えるんだ。」

「前方……って何も見えませんが……」

「ああ。視力はかなり良いほうだからな。」

勿論、士郎は視力を強化しているからみえている。

「まだぼんやりとしか見えないが……
此方を狙ってるわけじゃ無さそうだな。」

持っている物やぼんやりと見えている色の割合を見れば、
兵が此方を向いているかどうか位は判断できる。
南から進んで来ている士郎に対し、
兵の集団は北の方を向いている為、
恐らく其方からの相手を警戒しているのだろう。

「賊なのかしら……」

「そこまでは判断できないが、
もし賊なら確実に狙われるな。」

馬車に積んでいるのは食料や貴重な物ばかり。
しかもアイドルである張三姉妹もいるとなると、
賊からすれば格好の得物である。

「如何しましょうか？士郎さん。」

「……一旦近くの森に馬車を隠そう。」

そう言って西に見える森に向かって移動を開始する士郎たち。

森の中の安全を確認した後、
適当な水場の近くで様子を伺う事にした。

「ちょっとおねえちゃん！！私の取らないでよ！！」

「あれ～余ってたんじゃないの？」

「姉さんたち。食事中は静かにして。」

夜、焚火の周りに集まって、
士郎が作った食事を食べている。

馬車には腐りにくい乾物が多く入っていた為、
今夜のメニューは鍋と近くの川で取れた焼き魚だ。

「……凄い勢いだな。」

姉二人はともかく、
その二人を抑えている人和も皿は決して手放さない。

「しろーくんに見つかるまで、
まともに食事できなかったんだよ～」

「乾物ばっかりで口が痛くなるし、味は濃いし……
散々だったんだから！」

「いや、それを俺に怒られても……」

完全に八つ当たりである。

「だから今のうちにしっかり食べるのっ！
ちぃ達は体力が無いと駄目なんだから。」

確かにあれだけ歌ったり、楽器を演奏していたら体力も直ぐになくなるだろう。
馬車での移動中も、新曲の作成に四苦八苦しているようだし。

「私たちの事より、これから如何するんですか士郎さん？」

いつの間にか食事を一足先に終え、
食後のお茶を飲んでいる人和に話しかけられる。

「ああ。その事なんだけど……
まずは、あの賊を如何にかしないと進めない。」

「そうですね……
もし見つかってしまったら、此方の馬車では逃げても追いつかれます。」

「昼間の様子を見たところ、奴らは北のほうを警戒していた。
北にあるのは寿春。
恐らく奴らは、寿春からくる討伐軍を警戒しているんだろう。」

「そうなの？」

会話に天和が参加してくる。

「ちょうど寿春は太守が変わったばかりだし、
まずは、その隙に暴れる賊や敗残兵を討伐してるだろう。
……そのままにしておくと、治安が悪化して町の運営が成り立たないからな。」

治安の低下は民の不安を招き、
不安は人々の心を揺るがし、やがて反乱を起こす。
そうなってしまったら、町の運営どころではない。

「とりあえず俺一人で近寄って、様子を伺ってくるよ。
最悪見つかっても、俺一人なら逃げ切れるからな。」

「そんな……危ないよう……」

「大丈夫。引き際は心得てるさ。」

心配そうな目を向けてくる天和の頭を軽く撫でながら答える士郎。

「気をつけて下さいね。」

「……無茶したら駄目だからね！」

「ああ。行ってくるよ。
……念のため、ここら周辺に罠を仕掛けておくから、
あまり動き回らないようにしてくれよ。」

そう言って馬に跨り、
賊が居るであろう方角に向かって駆け出していった。

孫権の軍と賊が戦い始めたのは夜が明けてからだった。

バラバラと徒党を組み、群れている賊に向かって、
錐行陣で突撃しいて行く孫権の軍勢。

偽退誘敵等の策を使う様子は全く見えない。

兵力自体が賊の三千に対し、孫権軍が五千と上回っている事は大きな要因であるが、
そもそもこの戦は寿春の民に示威を見せ付ける意味もあった為、
策を弄するより、強引に攻め込む方が好ましいのだ。

それに、この方針を決定したのは他でもない、蓮華自身である。

軍師である亞莎兵力の優位を見せ付けながら、
降伏させる策を献上したのだが、
兵糧の消費や、相手が賊である事も考え、一気に攻めることにしたのだ。

まぁ、蓮華の性格が大分影響しているのもあるが――――

戦況は、将自体の力も相俟って、
賊は押され気味になっており、真っ二つに陣を割られていく。

「やぁあああーーーっ！！」

先頭を率いるのは小蓮。
小さい体を目一杯動かし、

両手に持った乾坤圏を振り回して進んで行く。

攻撃的な性格の小蓮。

まともな装備を満たない賊では、

小蓮と彼女が率いる兵士達を止める事は出来なかった。

どんどん息絶えていき、敗走を始める者もだんだん増えて行く。

「このまま一気にシャオが！」

もう直ぐで敵の本陣が見える――

この突撃で決めてしまおうと、突撃して行く。

しかし、彼女達は失念していた。

賊の中には、「敗残兵」も混じっていたことに。

「雷薄。敵さんは突っ込んできたみたいだぜ。」

「そうか。やっぱり俺達を賊だと思って舐めてやがったな。」

賊の本陣で会話しているのは雷薄と陳蘭。
二人とも今は賊の頭だが、
元々は袁術軍で一軍を率いた将である。

「ああ。賊は賊なりの戦い方ってのを見せてやろうぜ。」

「そういうこった。
……おいってめえ等っ！！姫さんをお出迎えして差し上げろっ！！」

『へいっ！！！』

雷薄の言葉で動き出す賊軍。
どこか、不穏な空気が戦場に流れ始めていた……

「なんなのよこいつら！！」

あと少しで本陣という所まで迫った小蓮の目の前に立ちふさがるのは、
大きな盾を構え、がっちりと鎧を着込んだ兵士たち。
重量がある装備を着ているせいか、小蓮の突撃にもびくともしない。

装備は充実していた袁術軍の残党が混じっていた為、
雷薄と陳蘭が選りすぐった兵士に持たせていたのだった。

「もうーーーっ！！シャオの邪魔しないでよっ！」

舞うように切り込む小蓮。
しかし、小蓮の攻撃は速さがあるが重さは無い。

守備のみに身を固めた兵士を倒すのには少々時間が掛かる。

たった数百の重装歩兵に、
軍全体の進軍が完全に止まってしまったのだ。

「おかしい……軍の進軍速度が落ちている？」

陣の最後尾に居る蓮華が異変に気付く。

「ま、拙いです。蓮華さま！」

「亞莎。何があったの？」

慌てた様子の亞莎に理由を尋ねる蓮華。

「このままだと、小蓮さまが！」

錐行陣は△の形に陣を組む。
この陣は、進軍速度、突破力に優れており、
なだれ込むように後ろの兵が攻撃でき、連携しやすいメリットがある。
ただし、当然の如くデメリットも存在する。

槍のような錐行陣。
先端は薄く鋭利な故に強力な突破力を有するが、
非常に脆く、折れやすい。
今の孫権軍のように進軍を止められると、メリットが殆ど失われてしまうのだ。

「っ！早く援軍を！！」

「もう、中軍の思春さまが向かっています。」

この作戦を立案したのは蓮華だが、
亞莎も特には反対はしていない。
つまり、この事態を予想出来ていなかった。

孫家を継ぐ予定の蓮華と、軍師としてまだ新しい亞莎。
未熟な二人を成長させる為の戦だったが、
その未熟な隙を衝かれてしまった。

「そう……なら、私たちも急ぐわよっ！」

間に合わないかもしれないが、
大事な妹をここで失う訳には行かない。

しかし、急ぐ蓮華たちの前に賊が立ちふさがる。

「うおおおおおおっ！！」

形振り構わず襲い掛かってくる賊の群れ。
まるで、命を捨てているかのように。

「くっ！邪魔よっ！！」

手に持つ剣を振るい、賊を切り伏せる。
しかし、倒れた賊は尚も、足にしがみ付いてくる。

「っ！！……はぁっ！！」

紫電一閃。
今度こそ事切れ、ぱたりと地面に落ちる賊の手。
見渡せば似たような状況が繰り広げられている。
まるで亡者のよう。

「これは一体……」

小蓮が倒していった筈の賊も、まるでこの時を待っていたかの用に動き出す。

周りは、混戦と化していった……

「頑張るねぇ、嬢ちゃん。」

前線で戦う小蓮の元に、二人の男が近付いて来る。

共に血糊がべっとりとついた剣を持ち、装備も軽装だが、まともな鎧を着ている。

「誰っ！？」

「俺が雷薄でこっちの奴が陳蘭。あんた等にやられた元袁術軍さ。」

「袁術軍？……って事は重装歩兵（こいつら）はアンタたちのねっ！！」

「そうさ。敵が弱くて進み易かっただろう？
まんまと誘われやがった。」

大笑いする陳蘭。

雷薄と陳蘭が立てた作戦は、
まず、まともな装備が無い賊を戦わせ、
調子に乗って進んできた奴を、
数少ないまともな装備をしている兵士で囲むというものだった。

自分の味方である賊たちを犠牲にする作戦。
まさか数に劣る賊が、そんな事をしてくるとは簡単には見抜けなかった。
しかも、最初に進んできた将が大して有名じゃなければ、あまり意味が無い。
正にギャンブルのような作戦。
だが、雷薄と陳蘭はそれに勝った。

「くっ……けど、もうそっちは殆ど兵が残って無いじゃない！
直ぐに姉さま達が助けに来てくれるわよっ！」

小蓮が言うとおり、死傷者を除いたら賊の残りは千いるか居ないか。
対して、孫権軍はまだ四千以上は残っている。

「けっ！こっちハナから戦って勝つ気はないんだよぉ。」

「まんまと策に引っかかった奴を捕まえて、
孫家の奴らを苦しめるのが目的だしな！

今頃、てめえの姉は死体の振りしてる賊の連中に足止めくらってるぜ。」

賊は敗北したら、明日は無い。
仲間の死体に隠れている賊もいるが、
多少の傷はおろか、片腕を失っても戦い続けるように命令をしてある。
……あたかも、亡者の群れが襲い掛かってくるように見せかけ、
進軍を遅らせる為に。

「そ、それだけの為にこんな事したのっ！！」

「俺達は手前ら孫家の連中に滅ぼされたんだぜ！
恨みを持つのは当然だろうが。」

「そうそう。
大人しく死んでくれやっ！！」

言い終わるや否や、同時に切りかかってくる雷薄と陳蘭。
蓮華と亞莎は動けず、思春はあと少し。

小蓮は絶体絶命の危機に陥ってしまった……

6－2　江賊討伐（1）（後書き）

江賊討伐は次で終わり。
それから徐州入りになります。

ちょっと説明文が多かったので、
読みにくかった所や、分かりにくい所があればお教え下さい。
勉強になりますのでｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7352k/

真・恋姫無双～正義の味方～

2011年11月11日01時24分発行